

“く”の字に曲った拇指の表情

塚本鉄三・撮影

股間縛り哀感



△矢島靖子▽



昭和四十九年 十一月号目次

〈第二十八卷第二十一号〉
〈通刊第三百二十一号〉

フォト「憧れの〃愛の奴隷妻〃へ」

△モデル・笠井奈保子△

久御山 武……(29)

〔S研〕Ⅱ勉強会ⅡSMプレイ会顛末記

△河本光三氏と一緒に矢島靖子を責めた経緯△

〃〃〃の字に反った拇指の表情

塚本 鉄三……(30)

女子学生拷問事件

織田 無朔……(64)

真昼の太陽の下で

丈山 潔……(66)

連載M派交友録(56)『ポルノ女優』

鬼山 絢策……(78)

体験記『夜の見世物小屋』

紀平 竜夫……(93)

連載小説『大噴火』△第七十三回△

千葉 青鬼……(98)

連載Mグループ作品『女の虜囚』(9)

佐治 麻造……(106)

落書にみるサディズム

村中森太郎……(120)

告白『妻の純子と燃えた日』

三浦 敬一……(128)

愛奴〃ペロ〃行状記

謝 伝三郎……(132)

忘れがたきアヌス遍歴

竹迫 誠也……(141)

連載時代S小説『紫蘭の門』(38)

風流極道軒……(144)

論評『さるぐつわ』(1)

新川 裕夫……(156)

女相撲ノート(1)

雄松比良彦……(171)

ネラトuncaterによる鼻責め

佐藤真津男……(176)

「カメラ」と「ペン」のSMルポルタージュ △渡部好美△

雷雨の中、ゴム合羽の麗人を責める

塚本 鉄三……(186)

読者通信

編集部選……(260)

カラー・フォト・セクシオン (十三態)

矢島靖子・玉木章子・堀 貴代子・藤田佳子
渡部好美・高村浩子・三浦純子・笠井奈保子

「く」の字に曲った拇指の表情(塚本鉄三・撮影)

股間縛り哀感○汚辱にまみれた女○光と影
の差らい○SMプレイの一コマ○八月号雑

感○燃える緊縛の情熱……………矢島 靖子

ゴムの僧衣で緊縛○犬の首輪とゴム長○ゴ

ムの臭気プンプン○ゴムの雨合羽の麗人○

ゴム衣責め……………渡部 好美

責められた脚線美……………前田真知子

はちきれそうな乳房……………堀 貴代子

妊婦の吊り責め……………小妻容子・画

イメージギャラリ―

「絞め殺してあげよう

か!」「か弱き男性よ

奮起せよ!」「毒婦

百景」……春日田春夫

◎「未練の朝」恋人

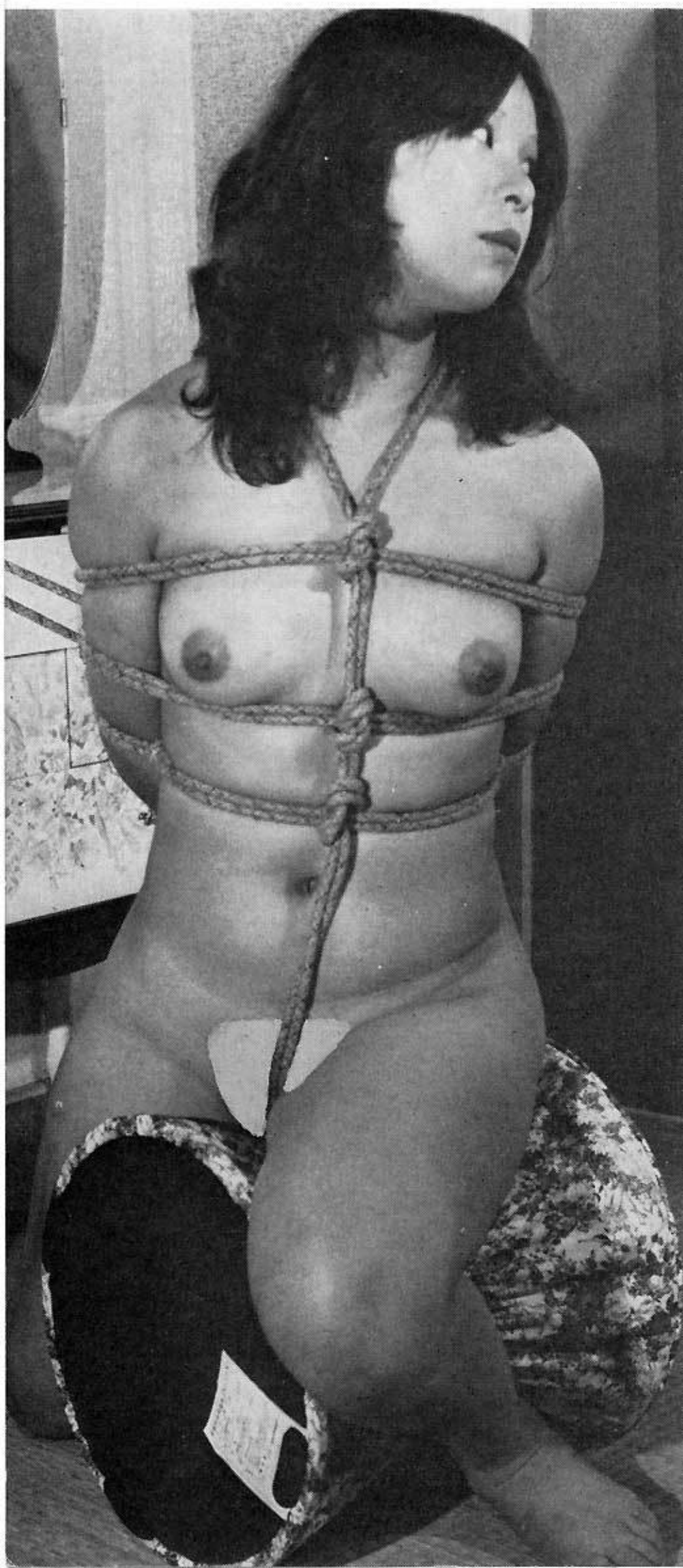
とパトロン」「穴」

……岡たかし

目次フォト

矢島 靖子

堀 貴代子



奇 ク サ ロ ン (212)

「ミス・ジョーンズの悪魔」

脇毛の礼讃……………三島 竜明

被虐の映像―甲斐千恵子……………大槻 春男

「日本俠花伝」……………高原 三佳

M資料「跨がる女性」……………近藤 ミネ男

「愛姦会」に賛同……………砂川 麻曾夫

あなたのためのスケッチ帳……………宮田 信正

童貞破りの相手を求む……………小松 圭太

続・縛り雑考……………喜多 初雄

ドレイメスの感想……………河西 逸雄

ジュニアの提案……………北川 まりこ

羞恥に悶えたい私……………三瀬 川 忠

森田芙美子を想うの記……………広田 玲子

我が奴隷―一号、二号……………柏木 はじめ

断想 中村美恵子……………土田 純一

SM研究会の着想より……………島 悠治

一年を迎えて……………塚本 鉄三

ビール浣腸自演について……………出雲 弥太郎

奇クサロンに寄せて……………弾 六夫

九月号を手にして……………嵐 竜児

我がマゾの妄想 チリ紙代用……………高浜 豚六

奴隷妻「奈保子」偶感……………小沢 繁三

奇譚クラブに淫した私の読者評……………林 繁三

浩子、私からのメッセーじだ……………江戸 川 豪

SM8ミリ映画の提唱……………島中 扇峰

編集部だより……………編 集 部

貴女と同じケダモノの男より……………田中 毛田物

驚きと感動のこと……………向井 一也

画集「殉死」……………桐原 紫門

真面目な雑誌に真面目な意見……………赤面 葉地夫

縛りの美学……………ロマン 派生

奇クモデル・ベストテン……………きく かおる

奴隷三号の自虐……………エム・マゾ男

猿轡と浣腸と排泄……………東町 三郎

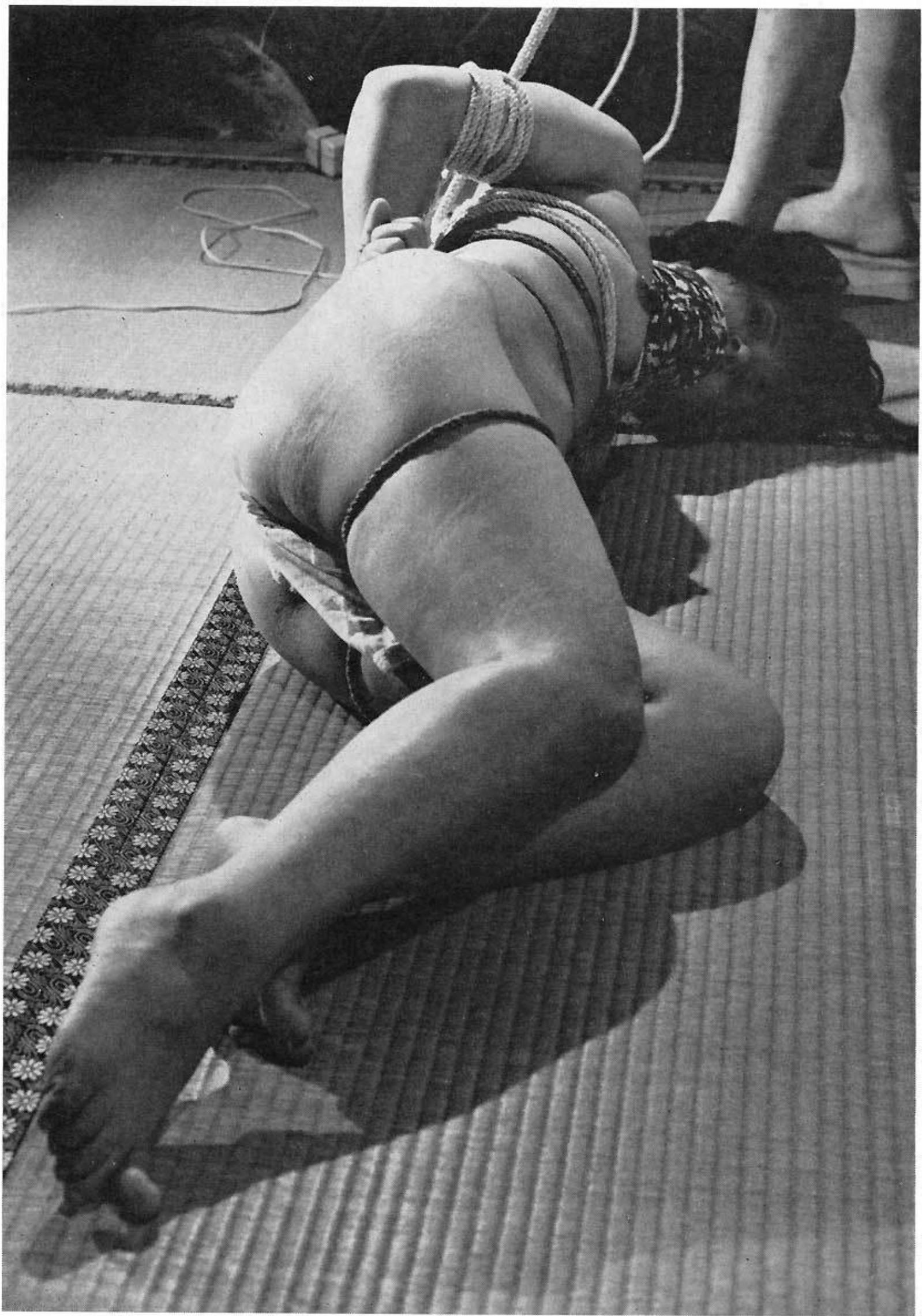
矢島靖子さんを想う……………毛利 雪男



ゴムの僧衣で緊縛

〈渡部好美〉





汚辱にまみれた女

〈矢島靖子〉



犬の首輪とゴム長

生ゴムの臭気プンポン

＜渡部好美＞



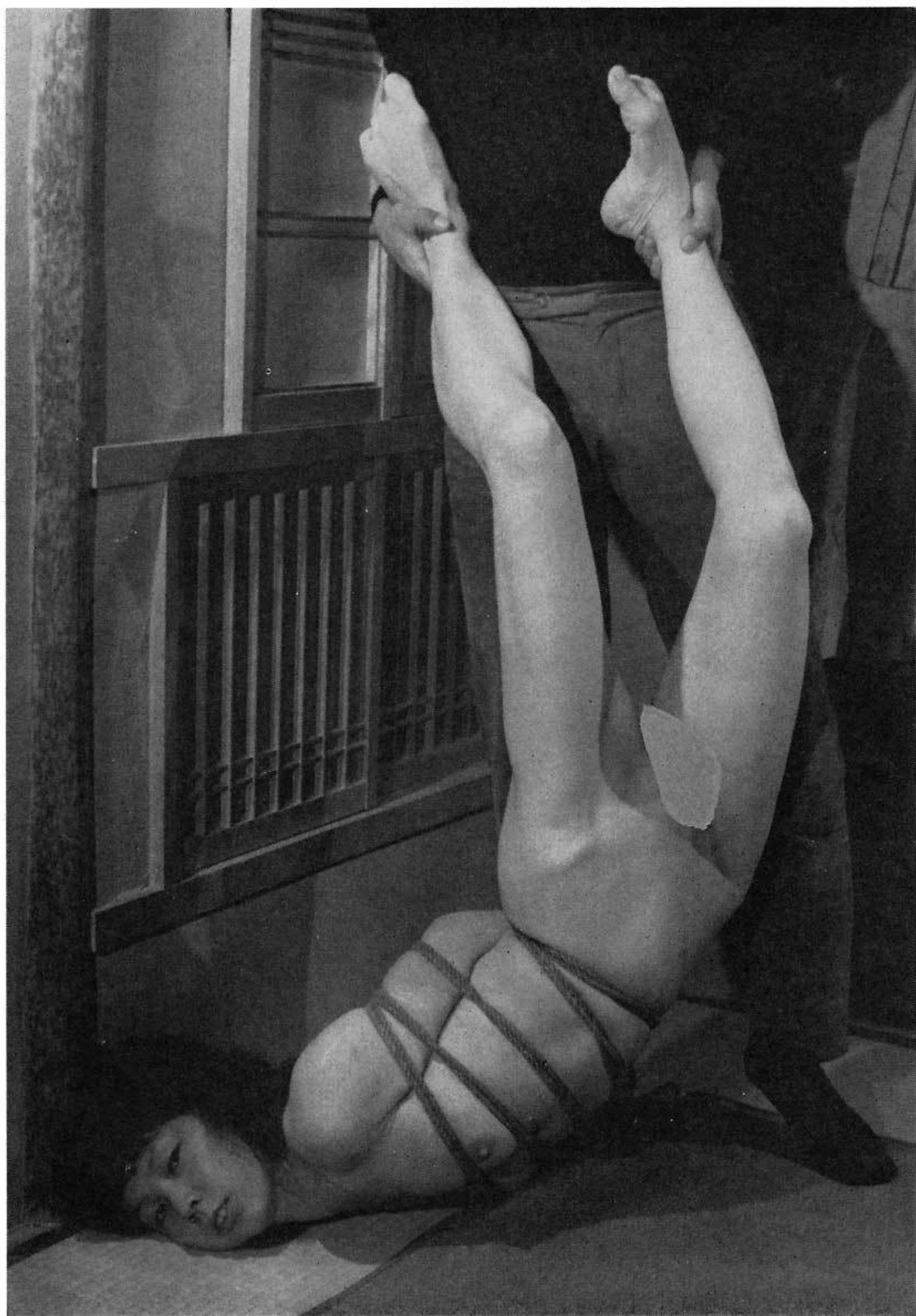


光と影の差らい

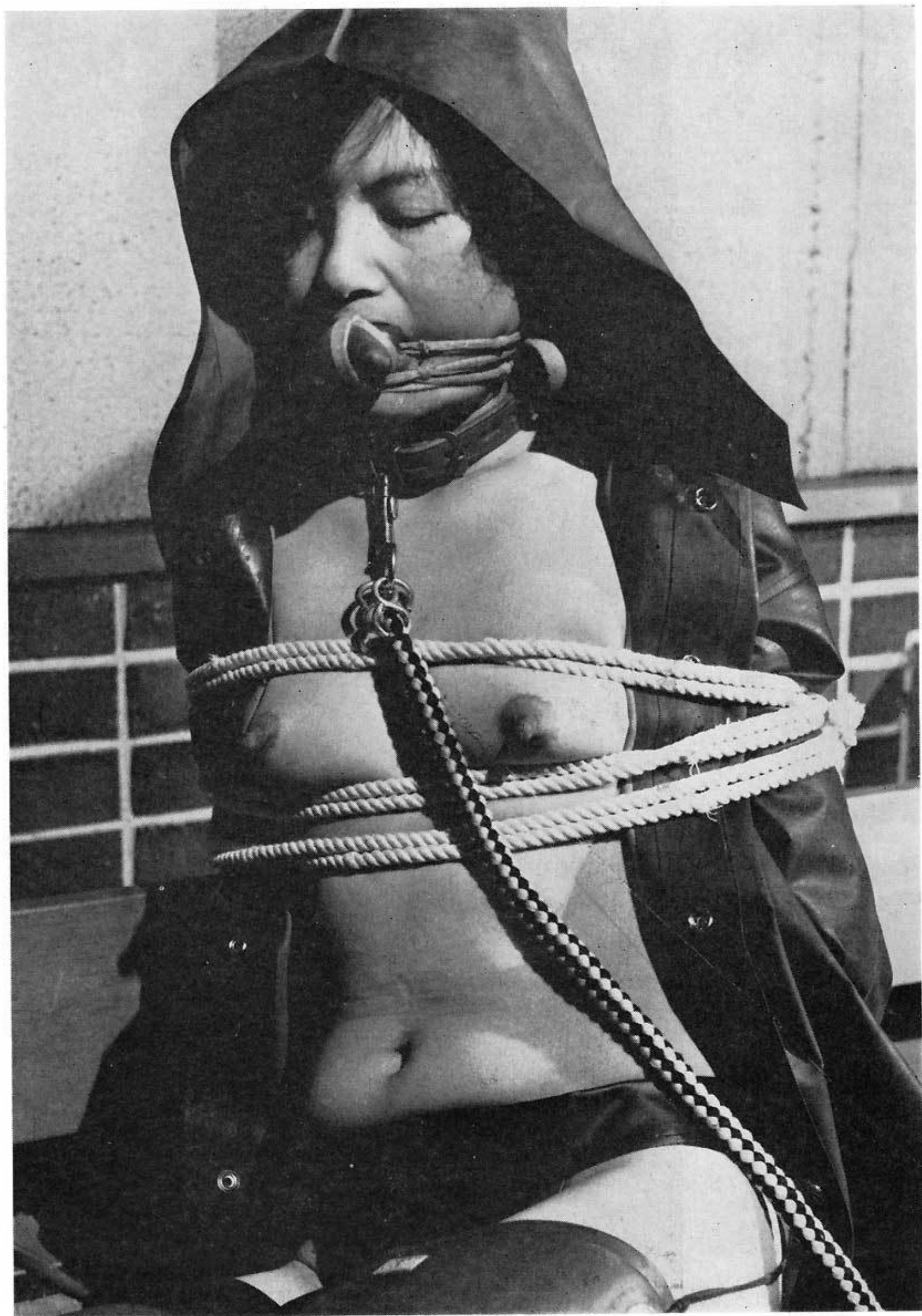
＜矢島靖子＞

責められた脚線美

＜前田真知子＞







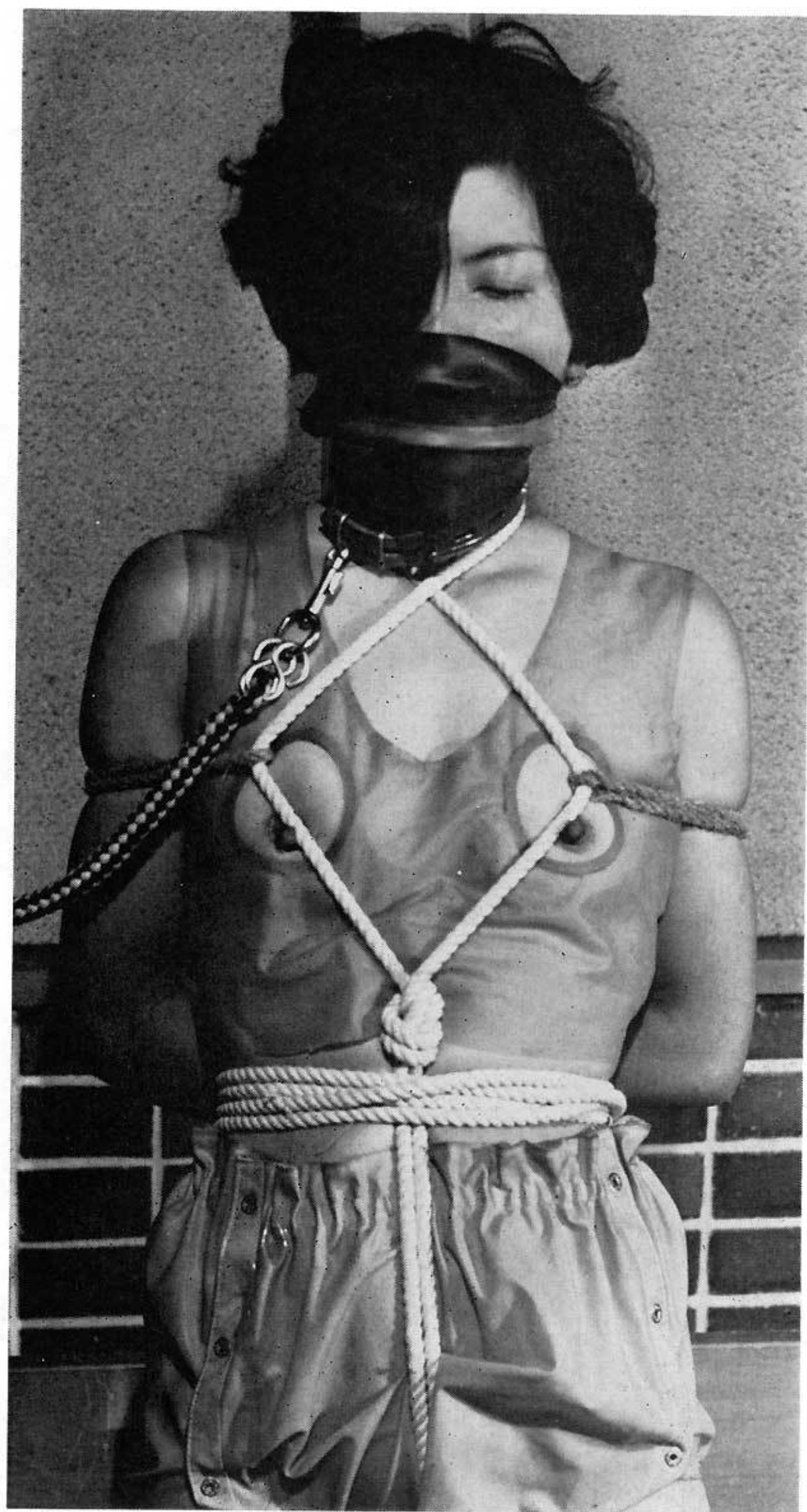
ゴム雨合羽の麗人

＜渡部好美＞

八月号の雑誌

△矢島靖子▽

はちきれそうな乳房

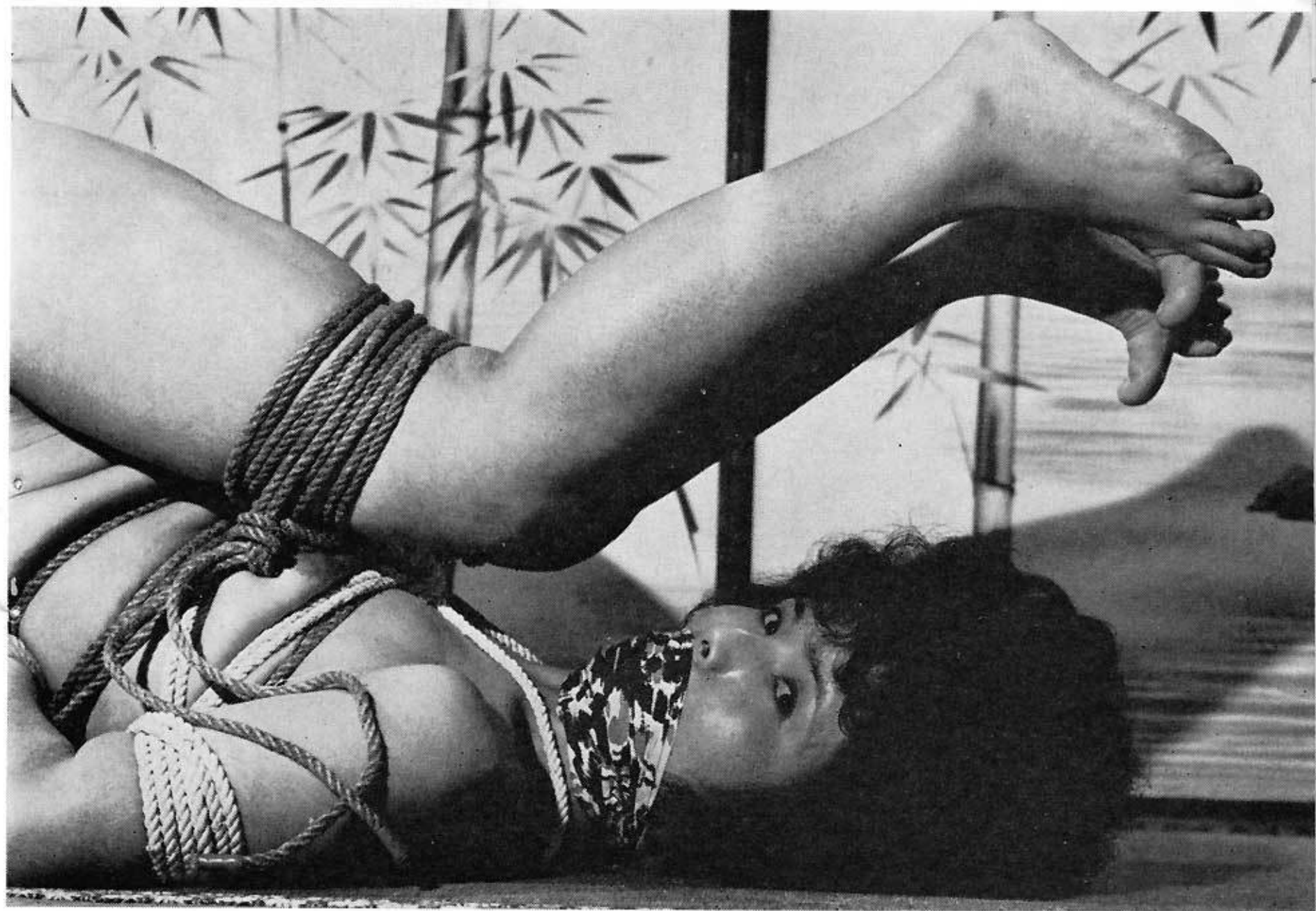


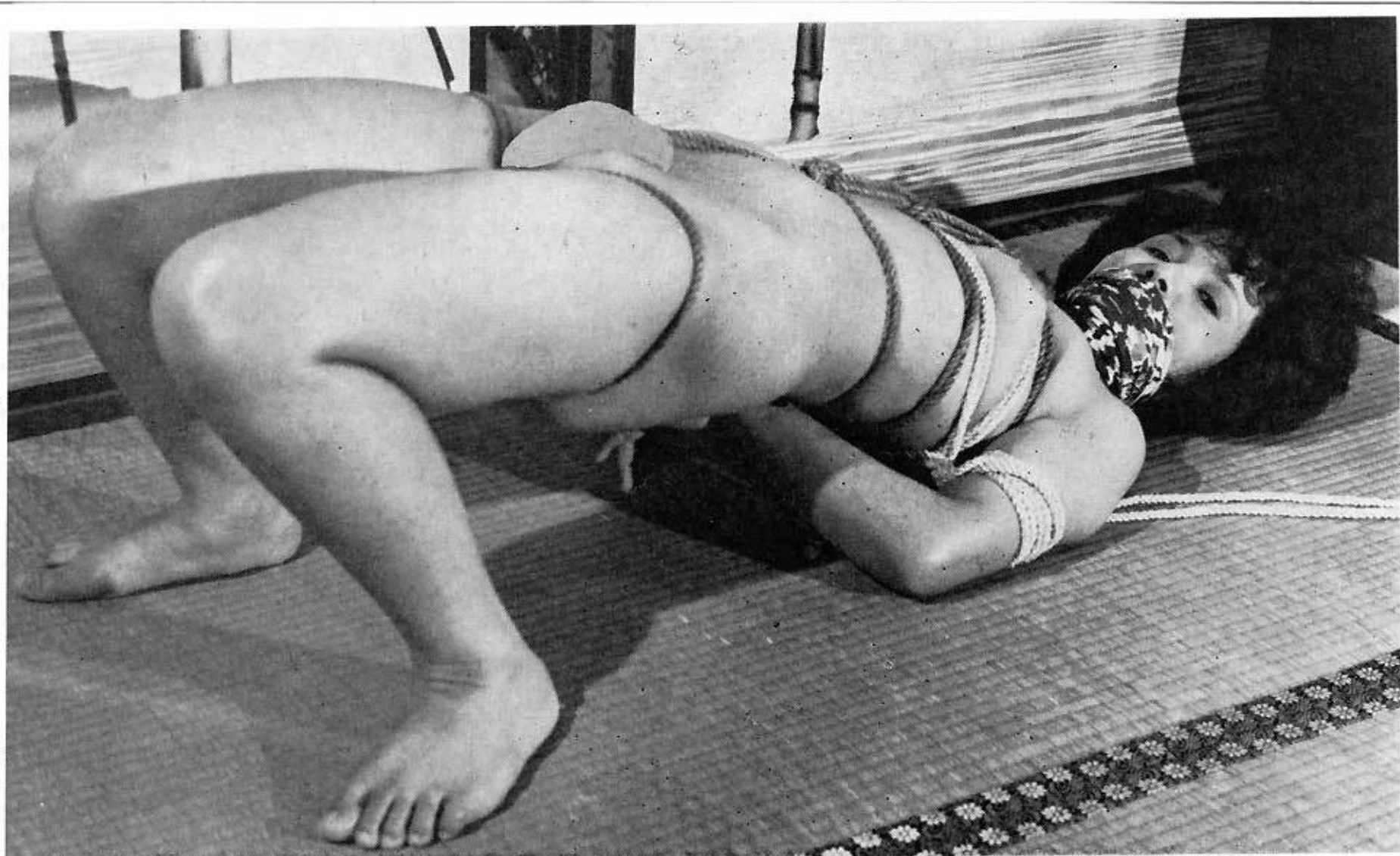
ゴム衣責め

＜渡部好美＞

＜堀貴代子＞







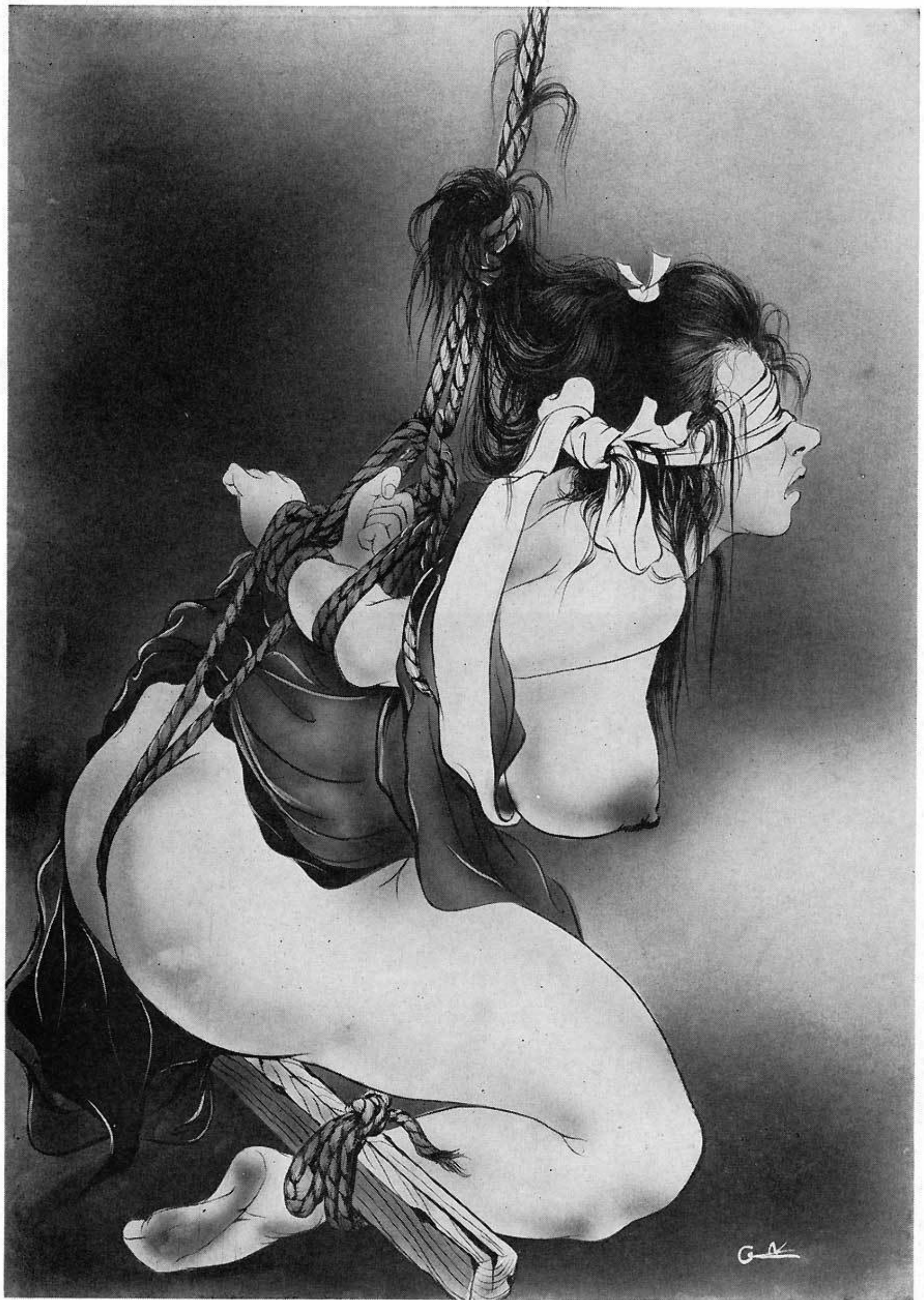
燃える緊縛の情熱

＜矢島靖子＞



妊婦の吊り責め

＜小妻容子・画＞

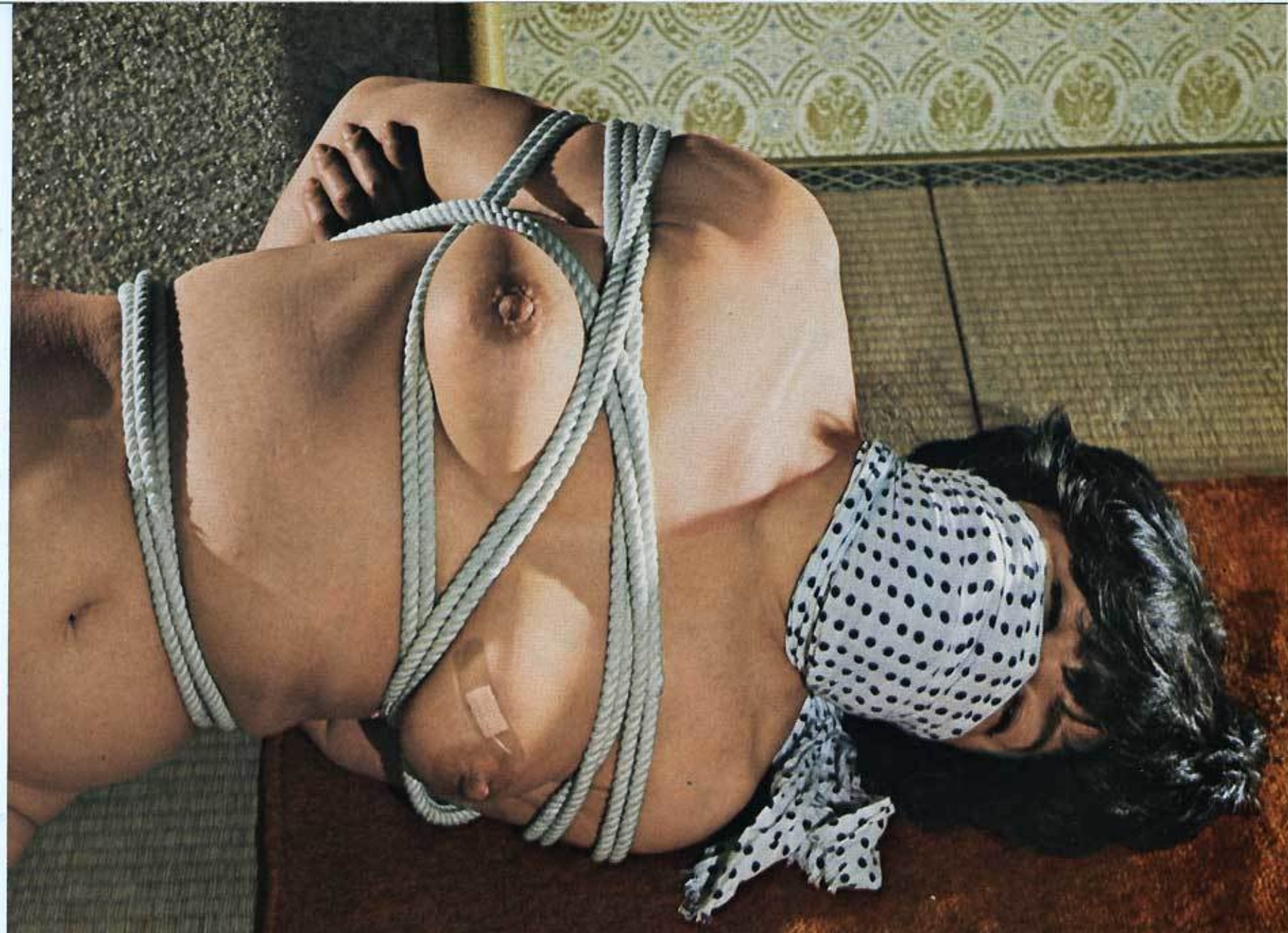


















奇

譚

ク

ラ

ブ

1974

11月号

<第28巻第11号・通刊第321号>

憧れの△愛の奴隷妻▽

「奴隷妻になりたい」という貴女の8月号の手記を読んで興味を示さない読者は少なかつたと思います。遊びたい盛りの青春を投げ棄てて病気の父の看病に専念している貴女に、憐憫のような共感を持ったことでしょう。広い家で一人働いている貴女に逢って、慰めてあげたいという気持を抱いたのは、僕一人ではないと思います。それというのも、貴女が勇気を出して自分の手記を度々、誌上に発表し且つ、その美しい縛られた裸身で誌上

……モデル……笠井奈保子……

を飾っているからに他ならないでしょう。貴女の優しくも女らしい「奴隷妻になりたい」という心根が僕のS心の琴線をいたくふるわせたのは事実です。でも、それだけだったでしょうか。もしも、縄で縛られた貴女の美しい裸身が、誌上を通じて僕の目に触れることがなかったなら、これほどまでに、僕は心を動かされることはなかったでしょう。

(久御山武・記)



「S研」……勉強会……S Mプレイ会顛末記……

くゝの字に反った拇指の表情

△河本光三氏と一緒に矢島靖子を責めた経緯▽

塚つか

本もと

鉄てつ

三ぞう

愈々マゾが昂進してきた矢島靖子を河本光三氏と一緒に縛りまくり、脂ぎった裸身がメロメロになってしまいうまで、責めたてたら、満開の薔薇のように開ききった女体は、被虐の陶醉境の中で喘ぎ、激しく慟哭した上で雲の彼方へ昇天してしまった。



☆
九月号で矢島靖子をヒロインとしたカメラ
ルポ『浜名湖畔の一夜』を発表したところ、
早速、数人の方から、次回、△矢島靖子を囲
むS Mプレイ会▽を催すときは、是非、自分
も参加させてくれーと言ってきた。

八月号の△奇クサロン▽では、小岩草一郎
氏が「矢島靖子をいじめる会結成試案」を書
かれて、数人のS男性の手に依って彼女を責
めることに興味を示された。

更に同じ八月号で幸村美記氏は、☆私の感
想☆△矢島靖子について▽で、彼女に対する
並々ならぬ関心の深さを示された。

また、私に対する私信では、六月号に『プ

レイにおける「目隠しの効用」について」という論稿を書かれた今井弘氏も、矢島靖子には、多大の執心を持つ意味の記述があった。

私も急速にマゾ化してくるように思える矢島靖子を見ていると、彼女をS研の会合に出席させて、そのあられもない悦虐姿態を、S人士の前に思いきり派手に、晒さしてみたいという嗜虐的な気持が、しきりにした。

そうしたS人士のなかでも殊に強引に私に対して、矢島靖子とプレイさせろ——と迫ってきたのは、河本光三であった。

彼は、五月号の「奇クサロ」に、『女性下着とハプニングの体験』という女性の下着に関する一文を物している女性の下着に対する研究者である。昨年の十月号には『貞操帯の妖しい魅力』四月号には『SM女性下着について』という風に自ら写した写真と文章を発表している。「女性の下着」については極めて造

詣が深い。

私は「女性の下着」に関して従来、彼に教えられることが多かった。

河本光三は私に言った。

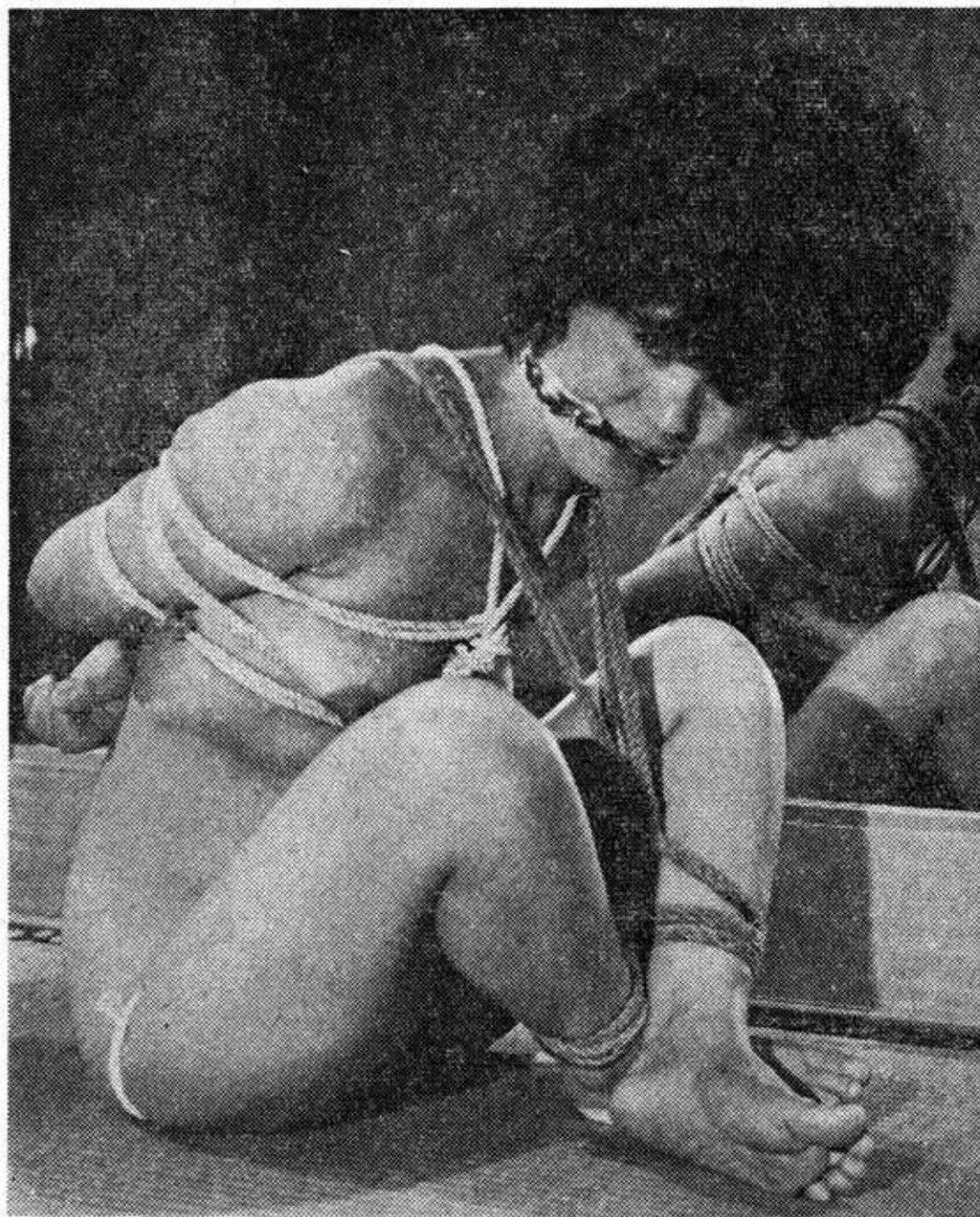
「俺は、矢島靖子に、ぞっこん、参ってしまっているんだ。あの彼女が縛られた写真を見ていると、もう、たまらなくなってくる。九

月号の口絵で、柱に縛られて片足を挙げさせられ、その挙げさせられた左足の拇指が、きゅっと、く、の字に曲っているのなんか見ると、自分のこの手で、がむしゃらに縛りたくなってくる。それに、ゴムのパンティを自分で持ってきて穿くなんて、女の下着に興味のある俺にとって、こたえられないな。是非俺に彼女を縛らせてくれよ。

それも、他の人は混じえずにたった一人だな……」

S研会員の人達のなかでも多人数で、がやがや、べちゃくちゃ、SMについて、陽気に話し合うのが楽しみだという人もあれば、余人を混じえずに、しつぽりとSMプレイをやりたいという人もある。なかには、段どりだけは全部私にさせておいて、いよいよとなれば、私を邪魔者扱いにして、女と二人っきりで、プレイに耽りたいという人もある。

その心情は、私にも痛いほどよくわかる。だから私も、



時には、その望みを、かなえてやることもある。そして、多くの場合、その人達はレポートを書くということをしないから、奇クの誌上には情報が載らなくなり、やがて読者の耳目からも忘れられていってしまう。

人間の身体にも世の中にも、新陳代謝というものがあってこそ、生長も進歩も、それによつてあるというものだから、それもまた、それでいいのかも知れない。

とにかく、河本光三は、執拗に、しかも熱心に、矢島靖子に逢わせると迫ってきた。

☆

私は今、私にいいじてほしいという一人の年若い奇クの女性愛読者と文通している。

「私は文章が下手というよりも、手紙というものを、どう書いていいのかわからなくて、恥かしいのだけど……」と謙遜しながらも、せつせと、手紙を書いて寄越してくる。

そして、時には、思い出したように、数百キロ離れた、その土地から、私に電話を掛けてくるのだった。

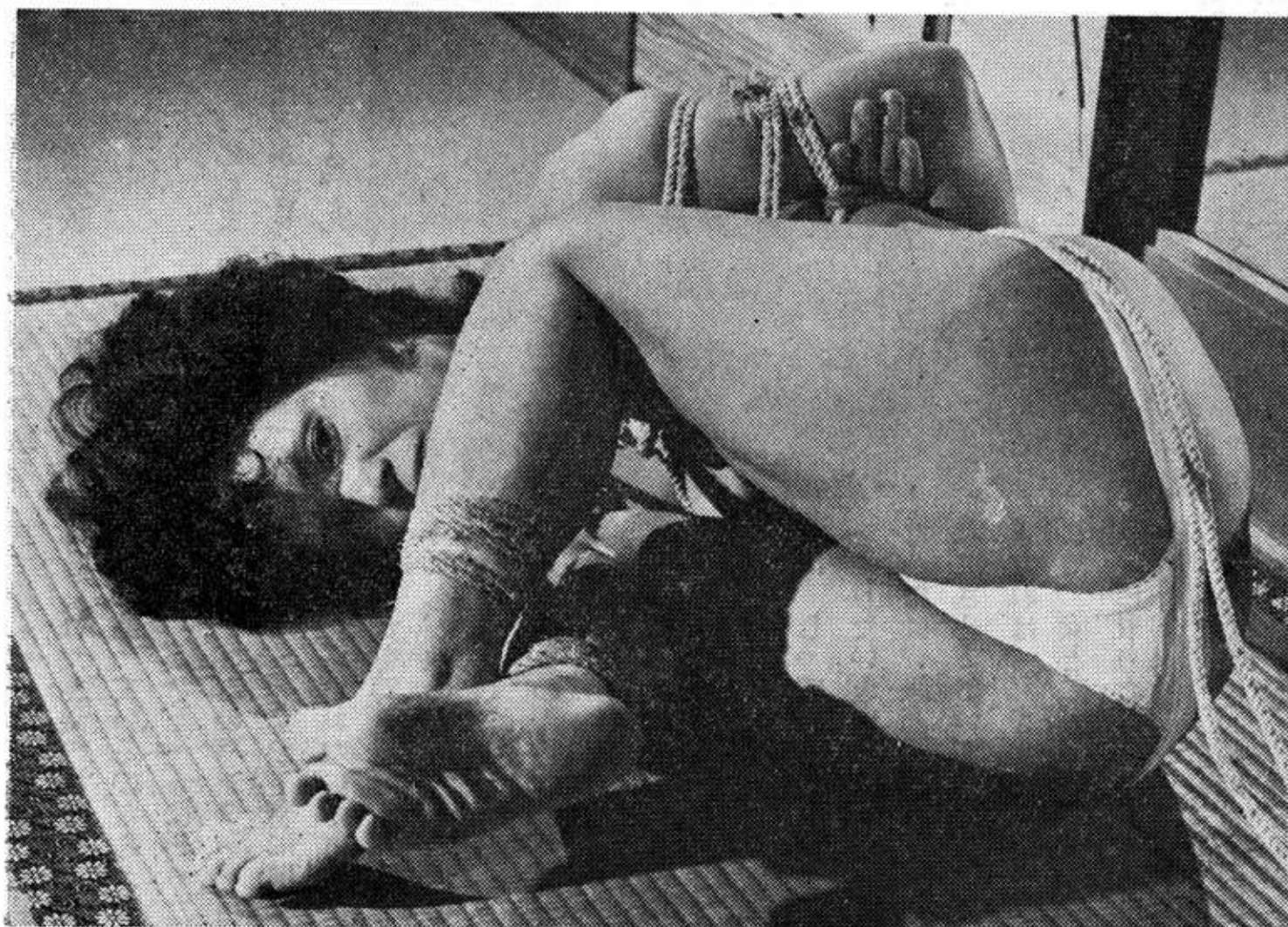
私も、その山口艶子という女性からの便りが来るたびに返事を書いていたが、私が、そんなことを要求しないにも拘らず、カラーのスナップ写真一枚を送ってきた。

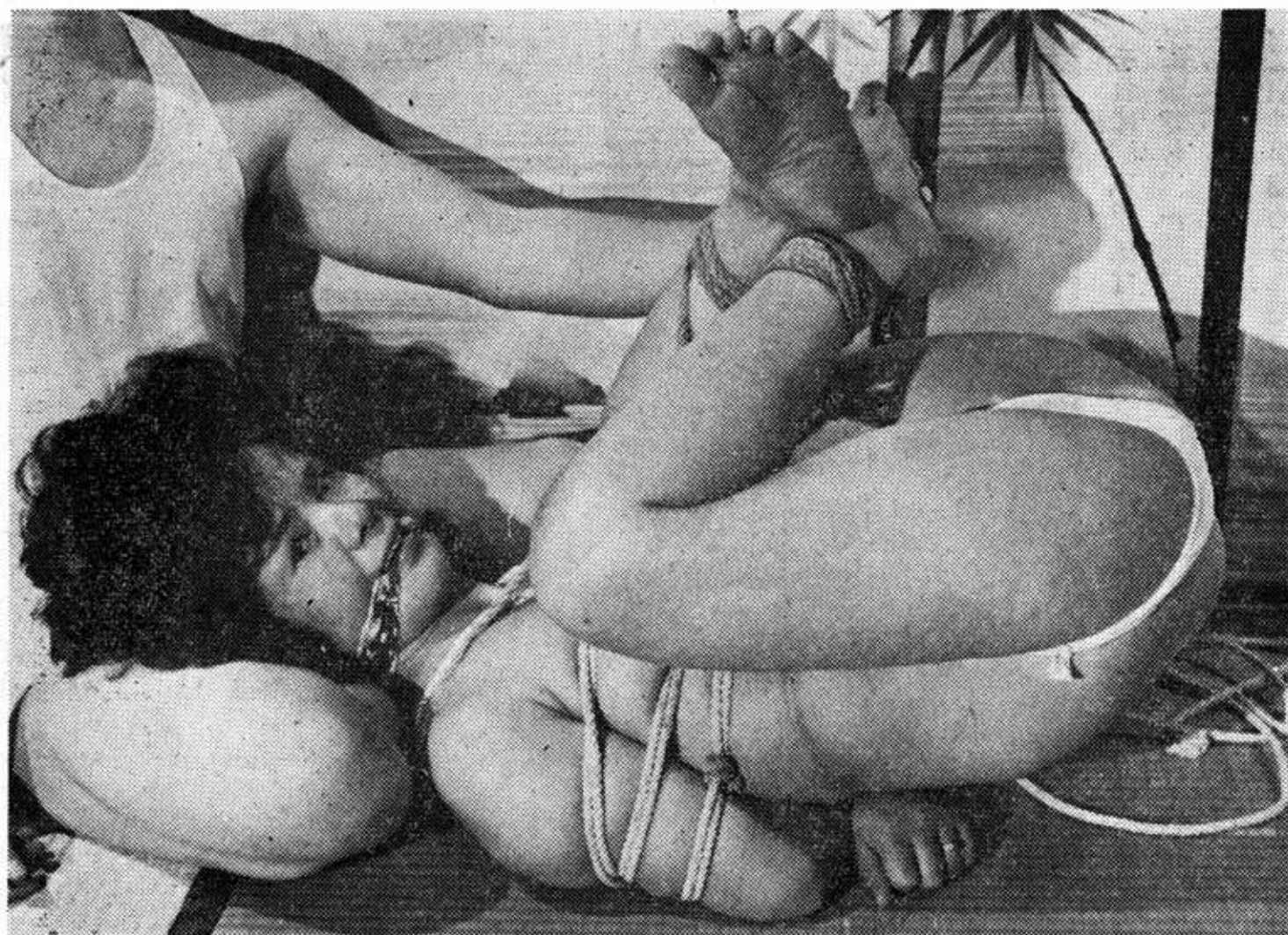
「美人でなくて悪いんですけど……」と、但書きした彼女の写真を見ていて、私は急速に親しみが持てた。そして、この女だったら、責めてみたいと思った。

「貴方に責められるということを考えるだけでも、怖ろしくて恐いんだけど、それでいて貴方に責められてみたいという気持ちがしきりにしますの」と、彼女が書いていたが、私は別に、彼女をそのかすようなことは、手紙には、いささかも書かなかった。

それなのに、数度の手紙の往復で、山口艶子が酔ったようになって、心が私の方へ傾きかけているのは、やはり、私が奇クの毎月号に、ハカメラ・ルポVを連載している虚名のなせるわざなのだろうか。

九月号なんか、矢島靖子





と渡部好美、それに森田芙美子と、三人のM女を書き分けて、相当枚数の原稿を書いた。書き分けたといっても、自分が実際にやったプレイ乃至会合をありのままレポートするのだから、そう大した苦勞はない。

原稿用紙とエンピツ一本さえあれば、電車の中でも公園の芝生の上でも、何処だって書けるから容易なものだ。しかも、下書きなんて一切しないからスピードも至って早い。

だが、しかし、八月号の「S研ニュース特報」へ白豚志願の女Vのところ、森田芙美子について詳しく書いたように、SMプレイをするに至るまでの手間というものは、これは、なかなか容易ならぬものだ。

その森田芙美子のことだが、この前に逢ってから、

ずっと、何の音沙汰もないと思っていたら、洞爺湖の絵葉書で、「夏の都会は暑いので、パパと一緒に北海道へ来ています」という簡単な便りがきた。

ブルジョアは違う。暑い間は涼しい道南の温泉めぐりでもやっているというのか。

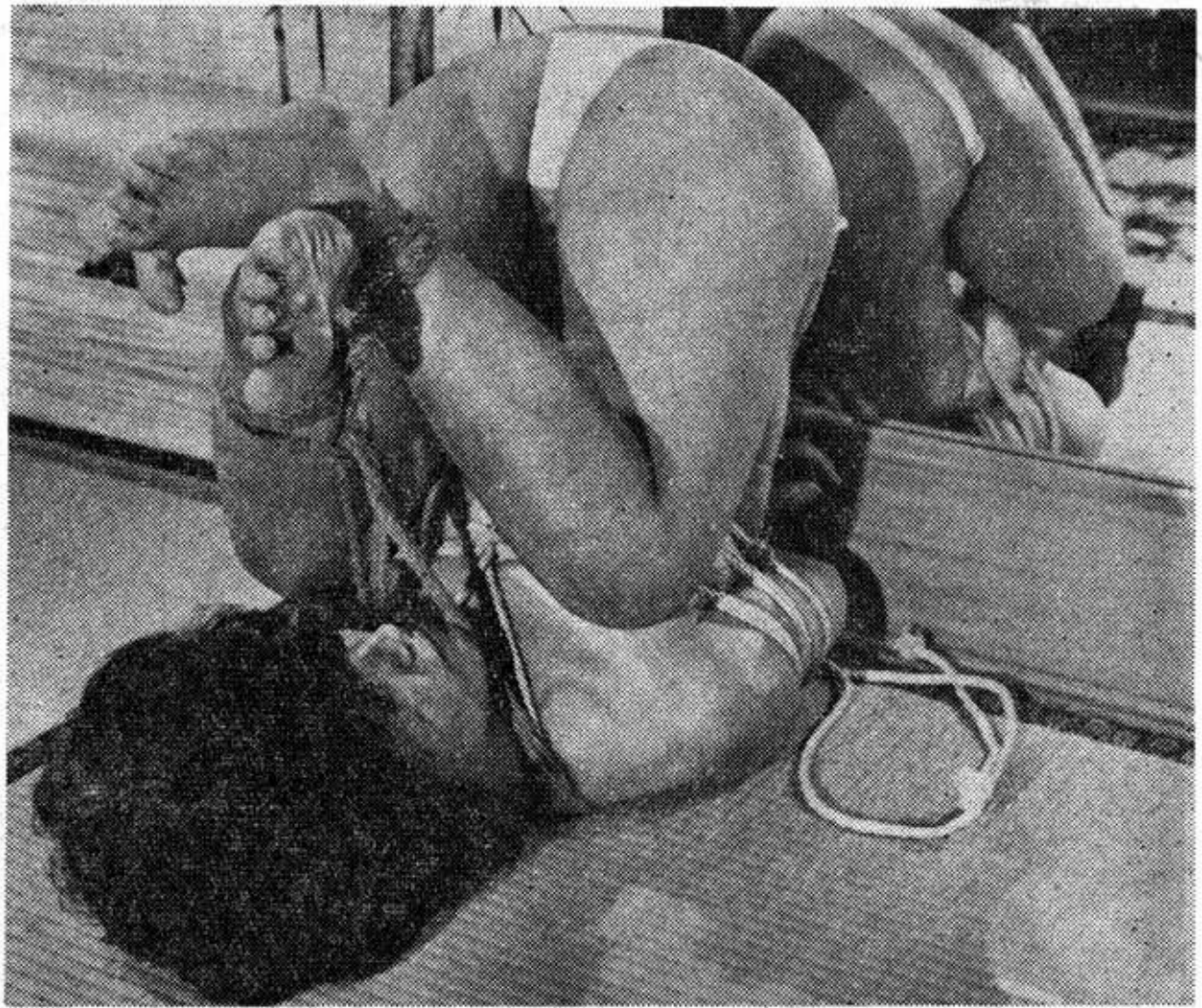
そういえば、八月に入ってからの大都会のアスファルト・ジャングルも、めっきり車の数が減ってきたようだ。

それは、それとして、私は、この山口艶子という女性を、責めてみたいという気持ちが、しきりにした。たとえ彼我の距離が数百キロ離れているにしても、私は、なんとしても、山口艶子を縛ってみたいくなった。

「自分から縛られたらいつ言ってくる女なんて、この世の中にいるもんか」

そんな気持を抱く読者の方も決して少なくはないと思う。

そりゃ、そうだろう。こちらから、何も水を向けないのに、誰彼なしに縛ってくれと叫ぶ若い女がいたとしたら、それは氣狂いだろ。だが、水前寺清子の歌にもあるじゃないか。『押してもダメなら引いてみな』という風に、この「ゆさぶり戦法」には、女は弱いものだ。へ努力なき所に成功なしVだ。



それに、不思議なことに、如何に難攻不落の堅城でも、一旦、陥落してしまうと、その後は、風に靡く稲穂のように、この女に、こんなM性が秘められていたのかと、驚かされ

てしまうほど、こちらの仕込み加減によってはマゾの華が咲き狂うのだ。

山口艶子からの便りではムチで叩くような痛いことはイヤ、針を刺すような血を見るのは怖い。肌に傷アトが残るような責めは勿論ダメと言ってきている。

好きなのは縛りと流腸。そして、そんな経験は一度もないんだけど、襲われて犯されてみたいだなんて物騒なことを書いている。

距離が離れているのと、彼女が仕事を持っているという都合から、まだ、今のところ逢う機会はないのだが、私の奇クに連載しているハカメラ・ルポV特に四月号の『淫らな指の秘密』

で、苗木陽子を責めている場面を読んで、自分も、ああいう風にいじめてほしいと思ったそう。

毎月の奇ク誌上でスペースを貰って、雑文

を書いているお蔭で、そういった女性からの便りは、奇ク編集部気付、塚本鉄三宛で結構手に入るのだ。

もっとも、山口艶子とは、当分の間、手紙と電話だけの交際が続きそう。

☆

田端勢以子のように、『塚本鉄三に挑戦』という勇ましい女性も現われてくる。

四月号の奇クサロンで、私に対して「SMプレイをしませんか?」という通信が載っていたらしいのだが、私が返信を出さないままでいたところ更に六月号で、塚本さんに再度挑戦「SMプレイをしましょう」という田端勢以子の文章が載っていた。

田端勢以子が他の男性読者と逢ったというその話も聞きたくて、私は彼女に逢ってみようと思ったのは、六月の長雨の頃だった。

住んでいる都市も知られたくない、名前も知られたくない。勿論、写真を撮るのも禁物というのだから、いやはや、これはミステリーじみている、面白いのを通り越して、その用心ぶりが、おかしいくらいのものだが、御本人が、そう希望するのだから仕方がない。

一流ホテル(ロイヤルホテル級)のロビーで落ち合って、食事をした上で更に、そこか

らタクシーで行きずりのホテルへ向うという用心深さ。彼女との会話や年格好、服装などを詳しく書くと、ペンにはしないという約束違反になるから書けないが、莫然としたイメージだけなら許して貰えるだろう。

住所も年令も、名前も職業も一切わからなくとも、田端勢以子という仮名で登場した女性を素裸にして責めるということは、現に彼女が目の前にいるということだけで、私は大いに興味を持った。

彼女は、自分では三十才台と言っていたが服装のせいか、未婚のためか、二十七、八才ぐらいにしか見えなかった。独立して事業を営んでいるというだけあって、男勝りの、しっかりした気性の持主のようにみえる。世間話をしていても経済事情にも極めて関心を持っていて、至って視野が広いようだった。

SMについては最近になって凄く関心を持つようになったが経験は一度もないというのとだが、それは機会がなかったというのが理由だそう。奇くは比較的よく読んでいて、SM的な話題は豊富だった。

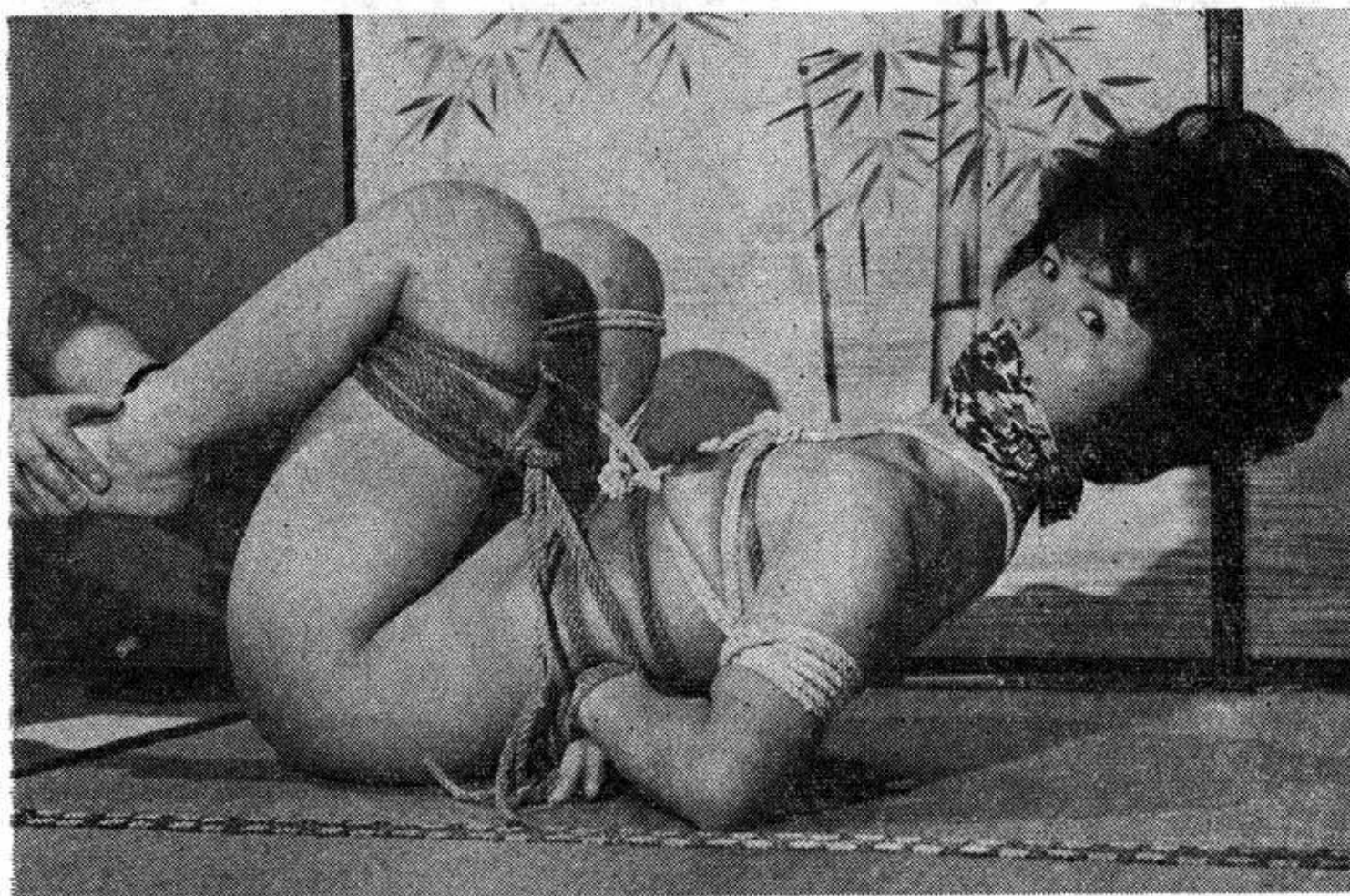
話し合っていて非常に愉快だったし、極めて好感は持てたが、カメラは持って来てはいけないという約束だったので、勿論のこと、

カメラ・ルポは書くことが出来ない。

豪華なホテルのWベッドの上で、彼女の身ぐるみを脱がしてわかったことは、自ら男性遍歴が豊富だというだけあって、大変テクニックは巧みな上に極めて積極的だった。

これでは、経験不足の男性が相手だったら忽ちダウンして、彼女の軍門に降り、その不興を買うこと必至ではないかと、思った。

私はカメラは持参しなかったが、手提げ鞆の底に、柔らかな紐を三本、秘かに忍ばせておいた。その紐で痛くないように、彼女の自尊心を傷つけないように細心の注意を払いながら、極く自然のように両手を、うしろで拘束し、前戯的な責めによって、次第に彼女が昂揚してきたところで、別の紐を用いて足を開かざるを得ないような縛り方をした。



その後での玩弄が小一時間ばかり続いたろうか。しかし、結局のところ、彼女は紐を解いて欲しいと要求し、いよいよとなったときには、手足の自由を奪っていた紐は、その役目を果さないようになっていた。

その代り、紐の拘束から解放してからは、一層、激しいいたぶりを彼女の裸身に加え、遂には、私の足の指舐めから始まって、私の身体のあるゆる個所に対する彼女の口による奉仕をさせた。お臍を舐められるということなんか、私にとって、そう愉快なことではなかったが、彼女は、そんな行為が殊の外、好きのように見受けられた。

後で彼女は、男の人に、こんなことをしたのは生まれて初めてだわ——と言った。今までも、強要されながら、そうした行為をしたとは思ったが、そんな相手はいなかったし自分から求めたら変態だと言われそうで出来なかった——とも言った。

そこまで彼女が燃え上ってしまうと、私にしても、彼女に汚辱的な責めを、それ以上、加えるという気分的な余裕はなくなった。時間にしても、この部屋へ二人で入ってきてから三時間以上は充分、経っている。

それからは、もう、普通の男女がすること

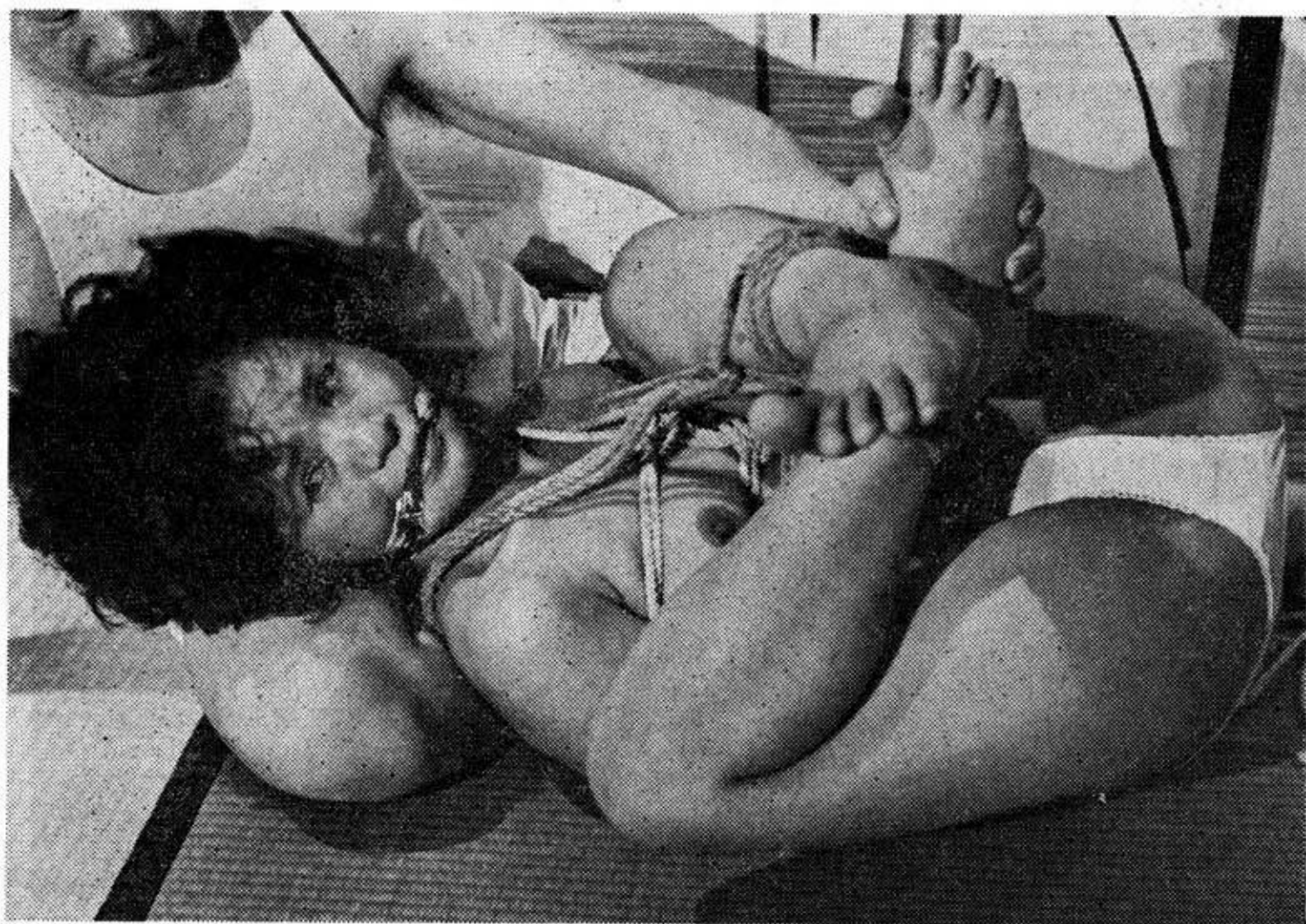
と同じなのだが、彼女のテクニクが、ずば抜けて素晴らしいことと、次から次へ湧いてくる、疲れを知らぬ精力の旺盛なこと——。

これには、流石の私も、びっくりした。

いろんなタイプの男性に鍛え抜かれた経験が、彼女の身体の上にも、よくあらわれていて、私の研究心をいたく喜ばせてくれた。

私は時計を見て、余りにも時間の経つのが早いのに驚いた。昨日、夕食を共にしてからタクシーで、このホテルへ来たというのに、今、ふと気がついたら、窓の外が、ほの明るくなっていた。

それから風呂へ入って、一つベッドの中で仲よく、うとうとしたのも、ほんの二時間ばかり、陽がかなり高くなってから外へ出た。





「私、こんなのって、初めてだわ」

田端勢以子はペープメン
トに立って、眩しうに空
を見上げながら言った。

彼女は、まだなんとなく
別れたくないといった素振
りであったが、男という者
は生理的にも薄情なもので
早く次の行動に移りたいと
いう気持が強くするものな
のだ。

タクシーを拾って駅前ま
で飛ばし、そこで再会を期
して別れた。私は『接して
洩さず』の鉄則を守ってい
たので、爽快な満足感があ
ったが、疲労感、いささ
かもなかった。まして、朝
帰りといった滅入った気持
は、さらさらない。

どこの誰ともわからない
——いや、わかってはいけ
ない田端勢以子のために、
逢った場所は明らかに出来

ないが、私の方の連絡場所は彼女に知らせて
あるから、いずれ、次の機会に、愉快的邂逅
が出来るかも知れない。

デイトの費用一切は、男性の私が払うと言
ったのだが、彼女が自分で払うと言ってきた
ないので、その日は彼女に負担して貰った。
ファイティ・ファイティという取りきめで
次回は私が負担するという約束なのだが、今
日までのところ、まだ連絡はない。

☆

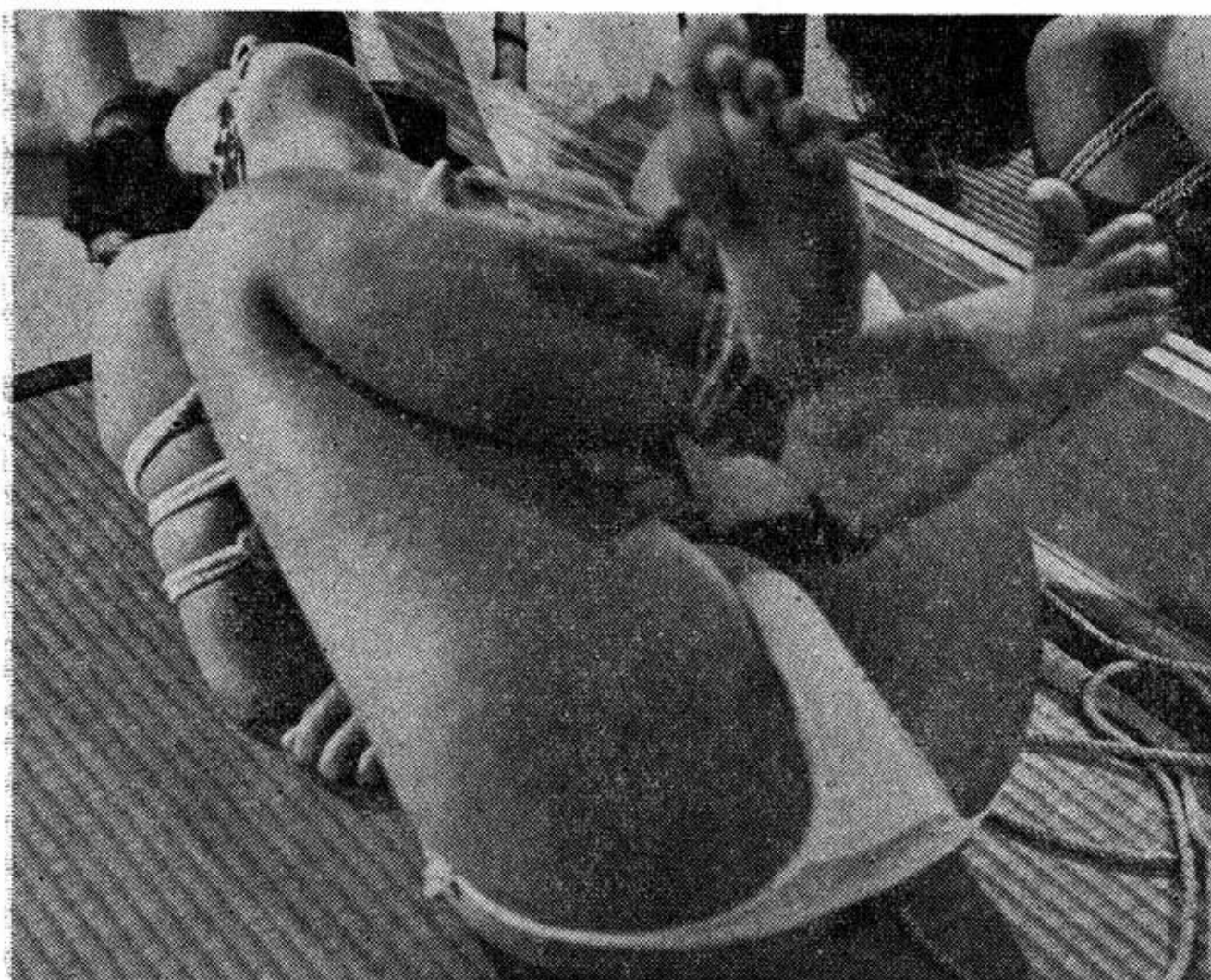
余計なお喋りが少し過ぎたようだ。
ここで話を本筋の矢島靖子と河本光三の方
へ移そう。

河本光三からの熱心な依頼を受けてはいた
が、相手の矢島靖子は東京在住の、しかも、
職業を持っている女性だ。呼んだからと言っ
て、そうた易く、すぐに来てくれるか、どう
か、大いに疑問である。

こちらから上京して逢うということは、彼
女の方が敬遠していることだし、逢うとすれ
ば、こちらへ来て貰わなくてはならない。

そのことを話すと、河本光三は強引に自分
の考えを提案してきた。

「彼女の往復の航空運賃は俺が負担しますさ
かい、日航か全日空で、羽田から伊丹まで来



て貰ったら、ええやおまへんか」
 そう言えば、矢島靖子の勤め先は浜松町の
 近くだからモノレールに乗れば、すぐ

に羽田空港に出れると言っていた。となれば
 羽田を飛び立てば、もう一時間足らずで伊丹
 空港に着けるわけだ。

河本光三にしたら、自分
 が伊丹空港まで車で三十分
 とはかからない処に住居を
 持っているのだから、これ
 は好都合というわけだ。

そこで私は、矢島靖子が
 家に帰っていきそうな時間
 を見はからって電話をした。

「ええ、そりゃ、この前、
 浜名湖でお逢いしましたと
 きは、次にS研の方達と一
 緒に、お逢いしますって、
 お約束しましたけれど、そ
 の河本さんって方、どんな
 方なの？」

彼女にとっては、そのこ
 とが、至極、気にかかるこ
 とのようだった。それも当
 然のことだ。見ず知らずの
 男に、素裸にされて縛られ
 るのだから……。

それで私は、河本光三の

ことについて、如何に真面目で大人しくて、
 紳士であるかというのを強調し、更に奇ク
 の熱心なファンで△奇クサロン▽に執筆して
 いることも忘れずに付け加えた。

「それじゃ、伊丹空港まで行かして頂きます
 わ。八月は仕事の方が暇なものですから、お
 休みは、いつでも取れると思いますの。御都
 合のよい日をおっしゃって下さったら、座席
 を予約しておきますから……」

これで話は決まった。

私は早速、河本光三に一報する。

「おい、矢島靖子が来ると言ったぞ」

「そうか、それは、よかった」

彼の欣喜雀躍ぶりが目に見えるようだ。

そうと決まれば、遠来の客、矢島靖子を迎
 えるための打合わせをやろうと、その翌日、
 中国縦貫道路、宝塚インタ近くのレストラン
 で河本光三と落合った。

☆

矢島靖子の魅力――。

それは一言にして言えば、ネバネバと濡れ
 たような肌に依って代表される、こってりと
 濃厚な被虐の味であろうか。

浜名湖畔の宿に於いて、一夜を共にして遊
 んだ数々の思い出が、今では遠い彼方の忘却

の淵へ追いやられたように思えてならない。

河本光三は、それがテキストでもあるかのように、奇ク九月号を後生大事に持ってきてトップの八浜名湖畔の一夜Vという私の書いたルポのところを開いた。

正直いって、私は書きなぐったようにペンを走らせた自分の文章が活字になっているのを見るのは好かない。十二分に推敲した上での文章ならいいのだが、新聞記者をしていた頃からの習慣で、どうせ整理係が直してくれるだろうという気持ちで、勢いにまかせて書いた結末が、それだからだ。

読み返して、自分で訂正したらいいのだがどうも、それが大の苦手で、原稿用紙にぶつつけ書きちらかして、そのまま渡してしまうのだ。だから、活字になった自分の文章を目の前へ出されると余り愉快ではない。

河本光三は、そんな私の気持ちも、お構いなしに、ルポの文章を読んでは、矢島靖子に対する彼なりのイメージを描いては、こういう縛り方をしよう、こんな責め方をしようと、私に提案してくる。そんなことを喋っているときの彼って、至極、楽しそうだ。

「縛り方も、責め方も、一切、君にまかすから、好きなようにやったら、どうだい」

「俺が、矢島さんを、好きなように責めまくったって、いいのですかい？」

「いいとも、存分にやり給えよ。僕はオブザーバーとして君の腕前を見せて貰うよ」

「そうか、それだったら、別に打合せもいらないうってわけだナ」

それからの二人は、とりとめもないSM談

義に花を咲かせて時間の経つのも忘れた。

彼は女性の下着を売りに行った先の未亡人のアパートで起った奇妙なハプニングについて、面白おかしく喋った。

☆

その日、気温は高かったが、適度に風があつて凌ぎ易かった。



空港ビル内はエアーコディショナーが効いていて快適だった。彼女は機内食を済ましてきたというので軽い飲物を摂り、私と河本光三はランチを注文した。

この前、四名のS研会員と共に、総勢六名で此所に会合したときに比べて、なんと矢島靖子の生長したことよ。

顔を合わすなり、満面に、こぼれんばかりの笑みをたたえて、私の胸に飛び込まんといった勢いで近寄ってきた。

二カ月前の浜名湖畔での一夜が、かくも彼女の身も心も、変貌させたのであろうか。

喜怒哀楽――。

それは、もう、こうした若い女性の場合、隠そうとしても隠しきれないで、外部に、自然と現われてくるものだ。

電話一つにしたって、その弾むような語調から、すぐにして、わかるものだ。まして、今の彼女は、東京から大阪まで、着いたばかりだ。もう、待ちきれないという風が、彼女のうきうきした素振りから、よくわかる。

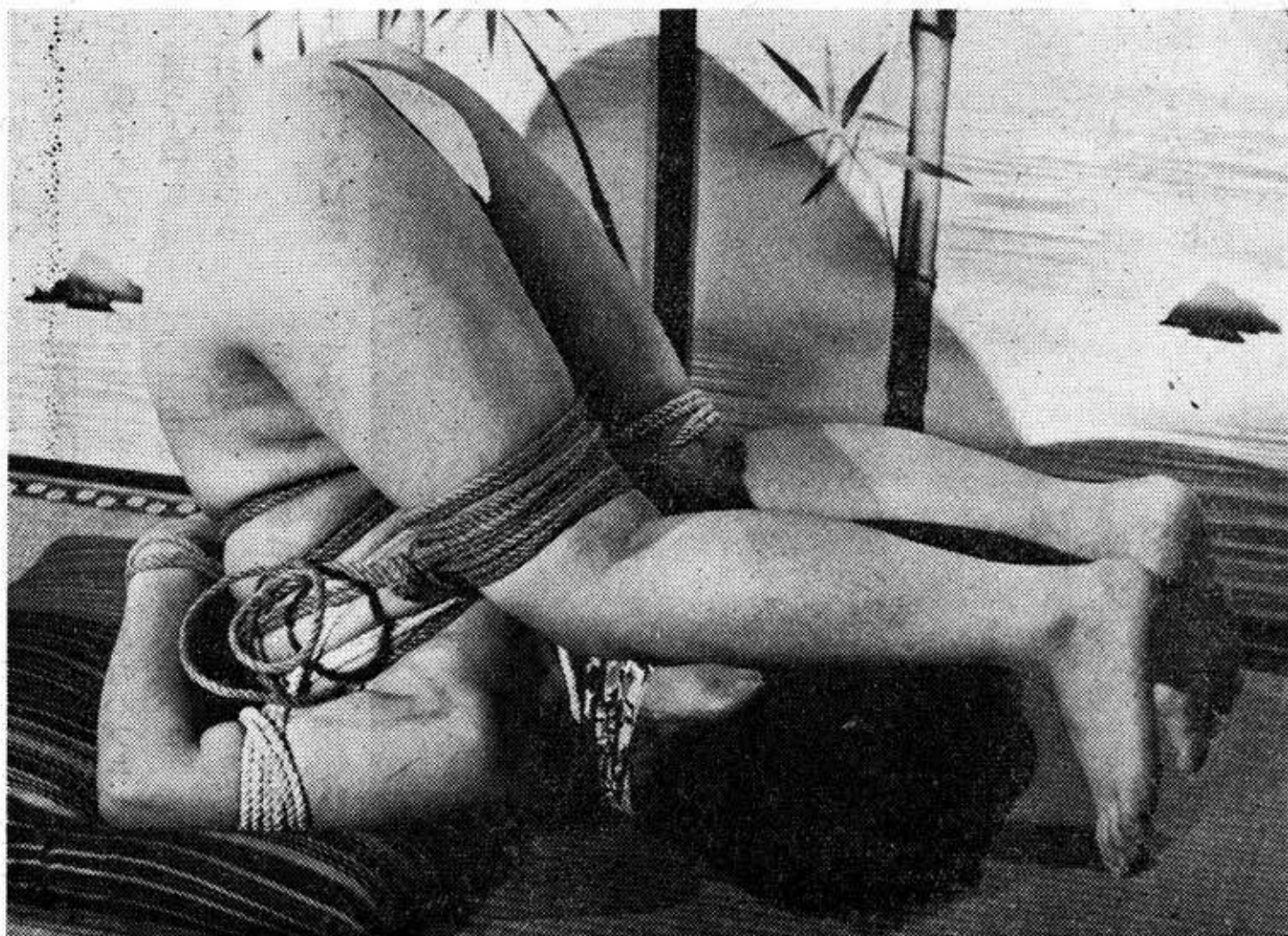
私にしたら、東京から大阪まで、わざわざ彼女がやってきてくれるか、どうか、疑問だったのだが、彼女にしたら、何故、もっと早く誘って呉れなかったのだ――という風に考

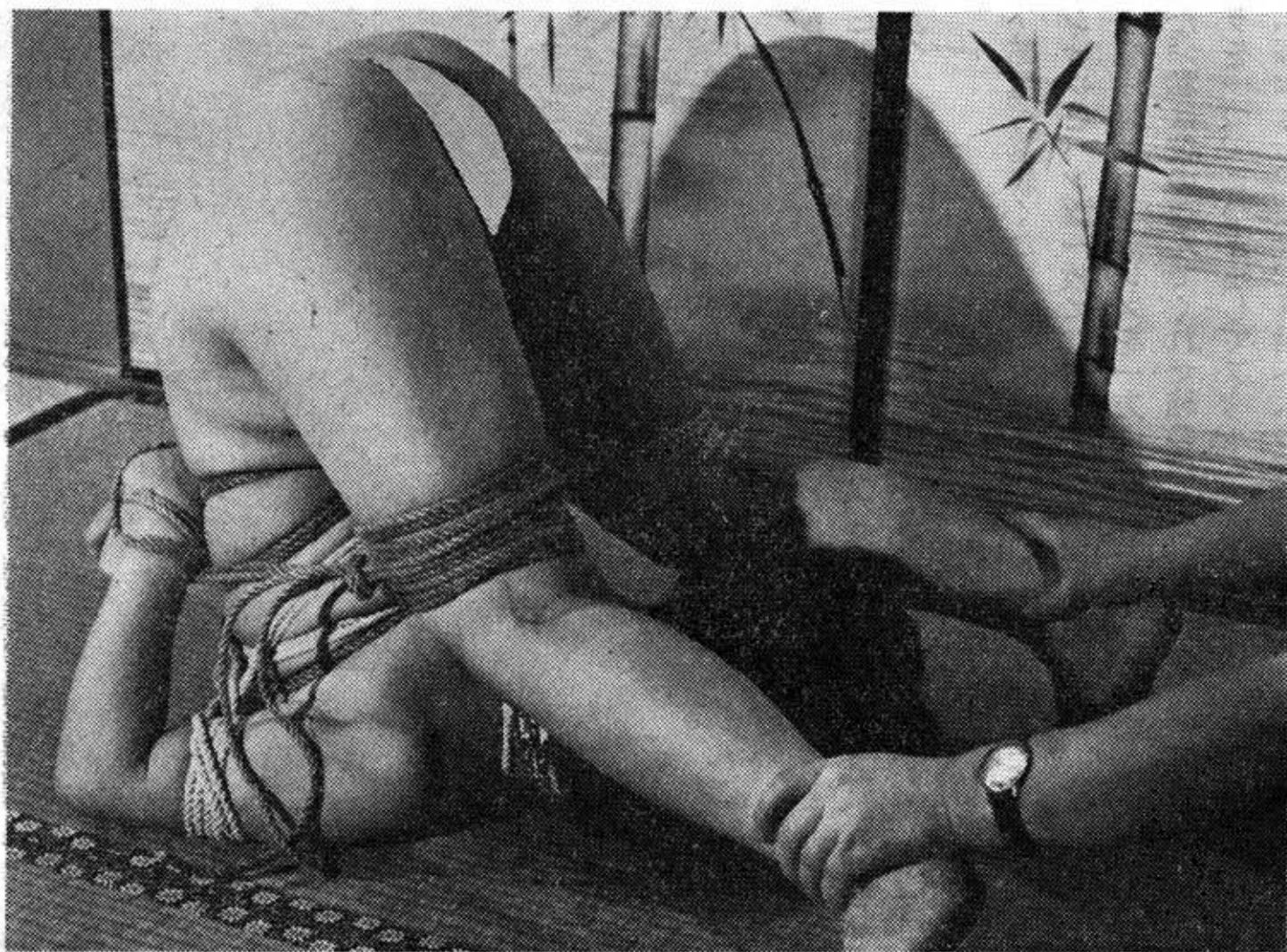
えていたのかも知れない。それとも、彼女の性格で一度、こうと決心したら、努めて愉快にふるまおうとしているためののか。

それにしても、素人の女性性が、そんな芸能人や水商売の女のような、見えすいた演技をする筈もないし、出来る筈もない。

私は暫しの間、河本光三と矢島靖子の二人を静かに観察していた。河本光三も自分の望みがかなったことで、わくわくとする心中を押えきれないといった風だった。

矢島靖子も河本光三も、私の目の前にいる二人が、それぞれ満悦至極といった顔をしているので、それを見ている私も、自然と気持が、なごんできた。第一、矢島靖子が初対面の河本光三に対して、好感を持ちは





じてきていることにホッとした私だ。

この調子だったら、今日の「S研勉強会」は、うまくゆきそうだぞ——と思った。

第一、各々遠く離れた三人が、こうして、約束した時間かきりに、うまく逢えたということが、幸先がよい。つい最近のことだが森田芙美子が先月の二十三日に、一人か二人のS研の方を呼んで欲しいと、自分から言い出したので、私は二人の友に連絡しておいたのに、これは彼女の一方的な都合で、お流れになってしまった。

勿論、各人各様の自分の生活というものがあるのだから、予定が変更になるということは致し方のないことだ。そうしたことは、従前から私は幾度となく経験

している。でも、そうした例が多いだけに、こうして、約束通り、ぴったりと三人が落合うことが出来たということは気持がよい。

「俺の知っているところで、至って気のおけないところがあるから、そこへ行こう」

河本光三が、そう言い出した。彼にしたらずく、プレイの場へ行きたくて、うずうずしているのだ。こんなところで時間を潰しているのが惜しくてたまらないのだろう。奇ク誌上で焉然と笑みを湛えて縛られていた矢島靖子が、今こうして、目の前で着痩せした、ほっそりと見える全身を晒しているのだから、もう、逸りきって待てないといった風だ。

「じゃ、ぼつぼつ行くとするか」

私は、ゆっくりと腰をあげた。

今年は暑さの訪れるのが遅れたようだ。

七月中は、雨また雨で、一年中で一番、暑い頃が「冷夏」と言われて案外、涼しかったのだが、八月になってから急に暑くなったようだ。しかし、この位の暑さで意欲が減退する吾々ではない。矢島靖子は、いきいきとした目を輝かせ、富士額を光らせているし、河本光三も彼女に、ぴたりと寄り添うようにして、人混みの中を掻き分けてゆく。

私は二人の後を歩きながら、この調子だっ



たら、今日は河本光三に彼女の責めを任せておく方がよいなあ——と考えていた。

☆

部屋へ落着くなり、河本光三は、アンダーシャツとパンツ一枚になると、大車輪であたりを片付けマットレスを一方の壁に立てかけた。私は彼の運んでくれた鞆の中から、カメラを一つ、二つと出してフィルムを詰める。

「塚本さん、彼女、風呂へ入って行きました

ぜ。いい身体しとるなあ」

「なんだ、覗いていたのか？」

「いや、わざわざ覗いたって、わけじゃないんだが、洗面所が脱衣場になっているさかいに、顔を洗うふりして、後姿を拝ましてもろたってわけや。それに、あのカーテン、めくってみなはれ、風呂へ入ってるとこ、丸見えや。こりゃ、こたえられんわ」

「おいおい、そんな覗きみたいな下品なこと

は止めて、こっちへ来て手伝わんか」

「覗きが下品だなんて、殺生な。塚本さんは彼女の身体の隅々まで見てるさかいに、そんなこと言いはるけど、俺にしたら、珍しゅうて仕様ないんや」

河本光三は急に関西弁になりだした。

「まあ、いいじゃないか。今日はネ、君に、こつてりと彼女を責めさせてやるよ。そう、あわてなくなつて、彼女、逃げやせんよ」

「それじゃ、俺の好きなように責めさせてくれるんかいナ。そりゃ、ついてるなあ。その参考のため思うて、こんなもん、持ってきたんや。どうやろうなあ」

彼は書類鞆から緊縛写真の切り抜きを挟んだ奇譚クラブを取り出してきた。

「俺、こんな縛り方が大好きなんや」

彼は、そう言つて私の前に、それを広げて見せる。それは雑誌からの切り抜きで、股間縛りあり、開股縛りあり、菱縄縛りありといった風で、どれもこれも、女性にとっては、羞恥に顔を赤らめそうな、しかも肌に、がっかり縄の喰い込んだ縛り方ばかりだった。

「ふーん、こんな縛り方が好きだと言うんだな。今の矢島靖子だったら、悦びこそすれ、嫌とは言わんだろうから、早速、君が、こん

な縛り方をやってみたら、いいだろう」

「今日が初めてだから、うまく縛れるやろうか。それが心配なんや」

「その切り抜きを見ながら、やったら、いいじゃないか。それはそうと、カーテンの陰から、覗きみたいなのをやらないで、彼女と一緒に風呂へ入ってきたら、どうだ？ 彼女だったら、背中の一つも流してくれるゾ」

「本当かいナ？」

「そうさ、優しい心根の女だから、絶対に、男を粗末になんかしらないよ」

「うーん、そんなものかいナア」

私がそそのかしても、河本光三は浴室へ入って行こうとはしない。それでも、気になるとみえて、二面総ガラス張りの浴室のカーテンを、そっとめくってみて、その隙間から内を覗いている。一緒に入浴するよりも「覗き」そのものに興味を持っているようだ。

「塚本さん、塚本さん」

彼が私を呼ぶ。

私は配光を装置していた手を止めて、彼の方へ近づく。

「あのお尻、凄いポリウムやないか。俺よりも、塚本さん、一緒に入ったら、いいやないか。俺は、ここから見させて貰うわ」

「それより河本さん。ちっ

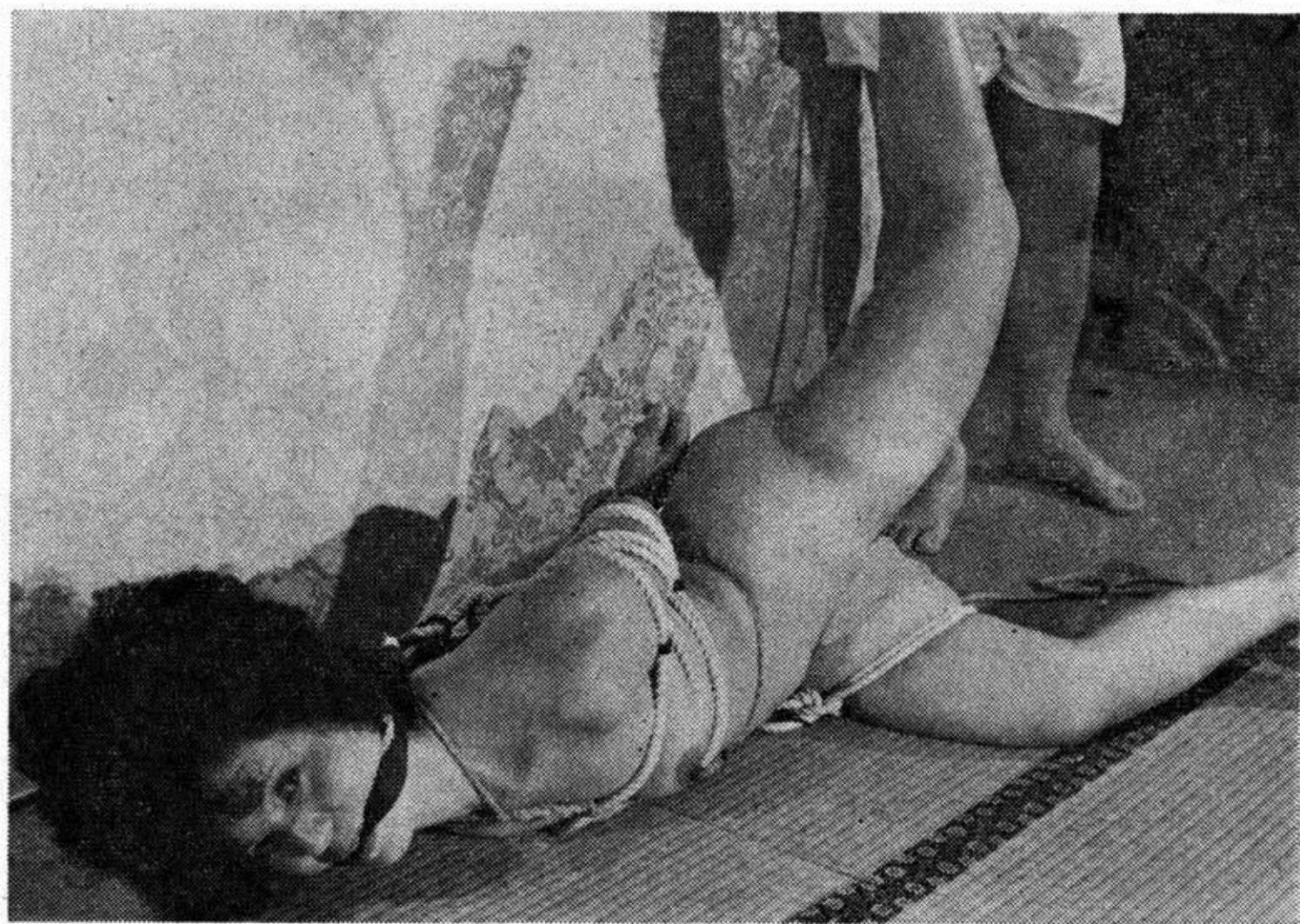
たあ、彼女を、どうして縛るか、その方を研究したらどうだ。矢島靖子は、わざわざ、東京から来てくれるんだから、単なる遊びじゃなしに、彼女も喜び、君も満足するような本格的な縛り方をやらなきゃ、つまらんよ。今日の縛り役は、君にまかすからね」

「そりゃ大変だ。こんなこと、しておれん」

河本光三は、畳の上にちらばっている切り抜きを、あわてて掻き集めて、それを奇譚クラブ八月号と九月号の二冊を重ねた上へ、揃えてのせた。

そこへ矢島靖子が脱衣室から出てきた。

浴衣の襟を、きちんと合わせて、隣の部屋の卓の前に、膝を合わせて正座している。



女という者は行儀のよいものだ。風呂から上って、さぞ暑いだろうと思うのに、浴衣の襟を合わせているところなんか、この矢島靖子という女の性格をあらわしているようだ。

今日は初対面の河本光三がいるから、殊に控え目しているのかもしれないが、彼女は大体が、家庭的な女性だ。

これから、河本光三という初めて会った男性に、自分の肌を見せ、そして、縛られるのだという恐怖と期待に、身をおののかせていることも十分に察しられる。

この分だったら、彼女、浴衣の下には何も下着はつけていないだろう。とすれば、彼女に抱きついて頬ずりをしながら、なんだかんだと言いながら、浴衣を引き剥がしてしまい小麦色のピチピチとした肌を、むきだしにしてしまう——といったパターンの妄想が、私の胸のなかに兆してきた。

そうだ。彼女と二人っきりの私だったら、きっと、そんなにしていたかもしれない。だが、河本光三が、そんな私の心のなかも知らぬげに、冷蔵庫からサイダーをとりだしてきて、コップに注いで彼女の前に差し出した。

「あの、私はいいんです」

彼女は、そんなところにも行儀がよい。目の

前に置いたコップを手にしようにもしない。

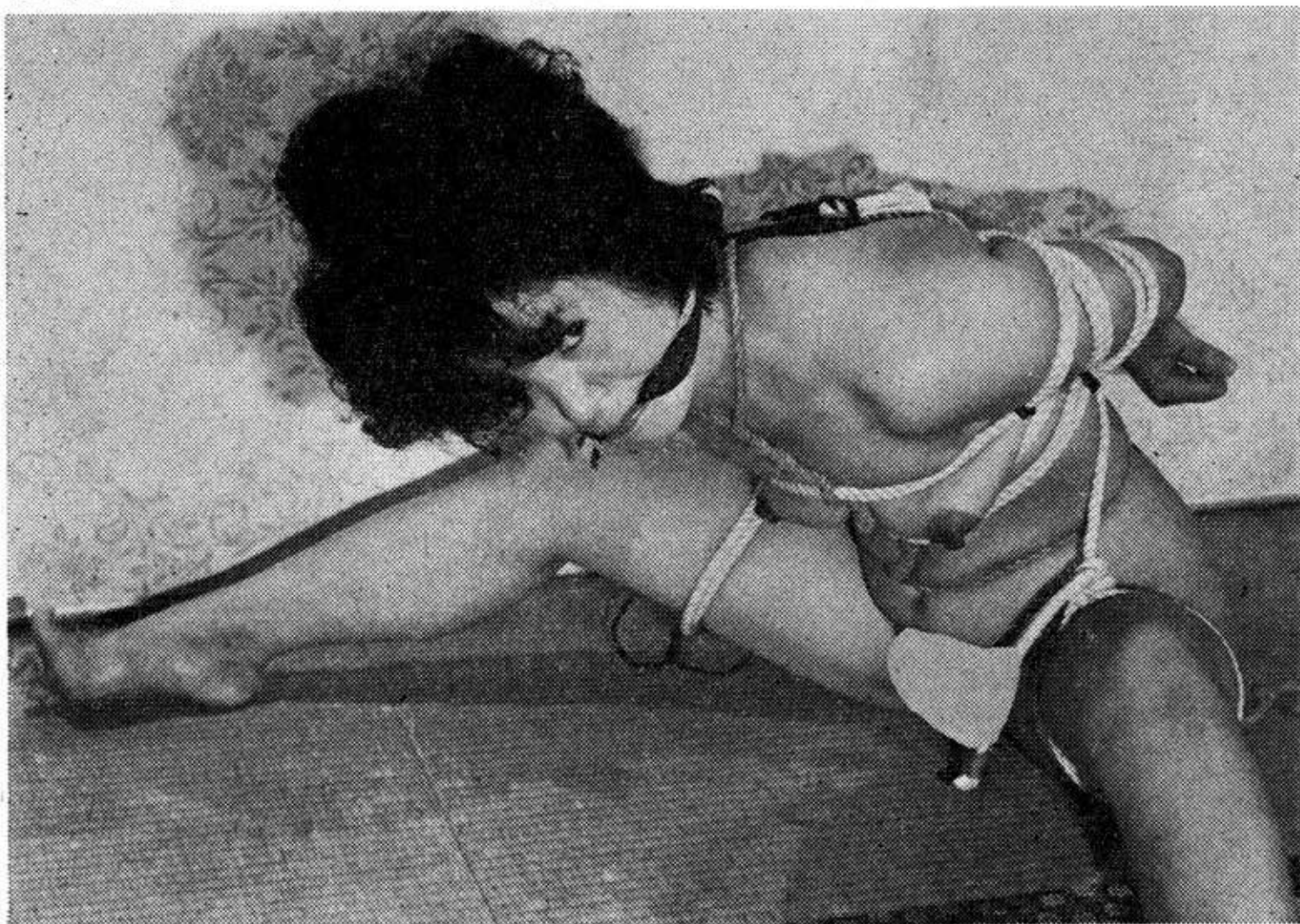
その代り、河本光三が切り抜きを挟んで卓の上に置いた奇譚クラブに手を伸ばして、何気なく表紙を開いた。その第一頁には、彼女が右足を頭上高く挙げて縛られた、あられもない格好の縛り写真が目に入った。

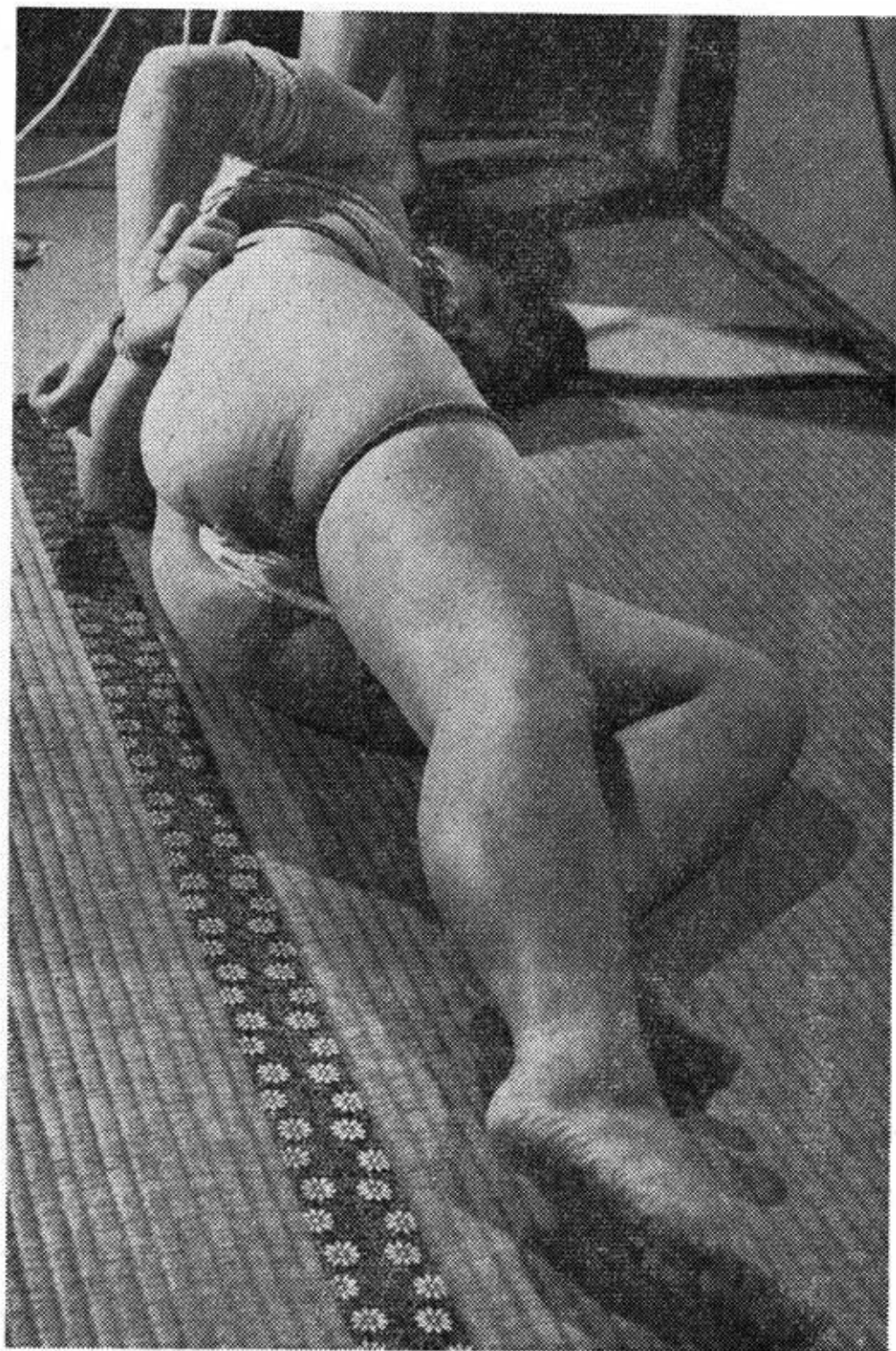
あつ

矢島靖子は、あわててペー지를めくる。すると、そこには柱の前で立ったまま左足を挙げて縛られた自分のカラーフォトがあった。

彼女は、おかしくくらい慌てて本文を開くと、そこには、八浜名湖畔の一夜という自分自身を主人公にしたルポ記事があった。

傍から見ていると、彼女が自分の写真が載っているところばかりを、選りに選って開いているように見え





る。

「どう？ 矢島さん、このルポの記事を読んで、どんな気持がしました？」

河本光三が、彼女の顔を覗き込むようにして訊ねる。

「ええ、本当に、この通りですわ。あまり上手に書いておられるので、びっくりしてますの。私、なんの気なしに喋ったり、したりし

てたことが、こんな風に文章に書かれてみますと、なんだか晴れがましくって、これが自分なのかと思ってしまいましたわ。それにしても、塚本さんって、文章、お上手なのね」

「そりゃ、そうだよ。彼の文章の迫力には定評があるからなあ。今や、人気抜群だよ」

「とんでもない。只、ありのまま、飾らずに書いていますよ。でも、浜名湖へ行っ

た、あのときは楽しかったナ。今度は箱根の芦の湖へでも行ってみるかな？」

「湖めぐりか、それだったら、日本最大の湖琵琶湖も、つけ加えておいて下さいな」

「あそこは湖西線の開通で大変な人出だとうじゃないか。プレイには不向きだろう」

「琵琶湖がいけないんやったら、他でもいいんやけど、俺も連れて行ってほしいんや。なあ、塚本さん、次に行くときは一緒に俺も頼んまっせ」

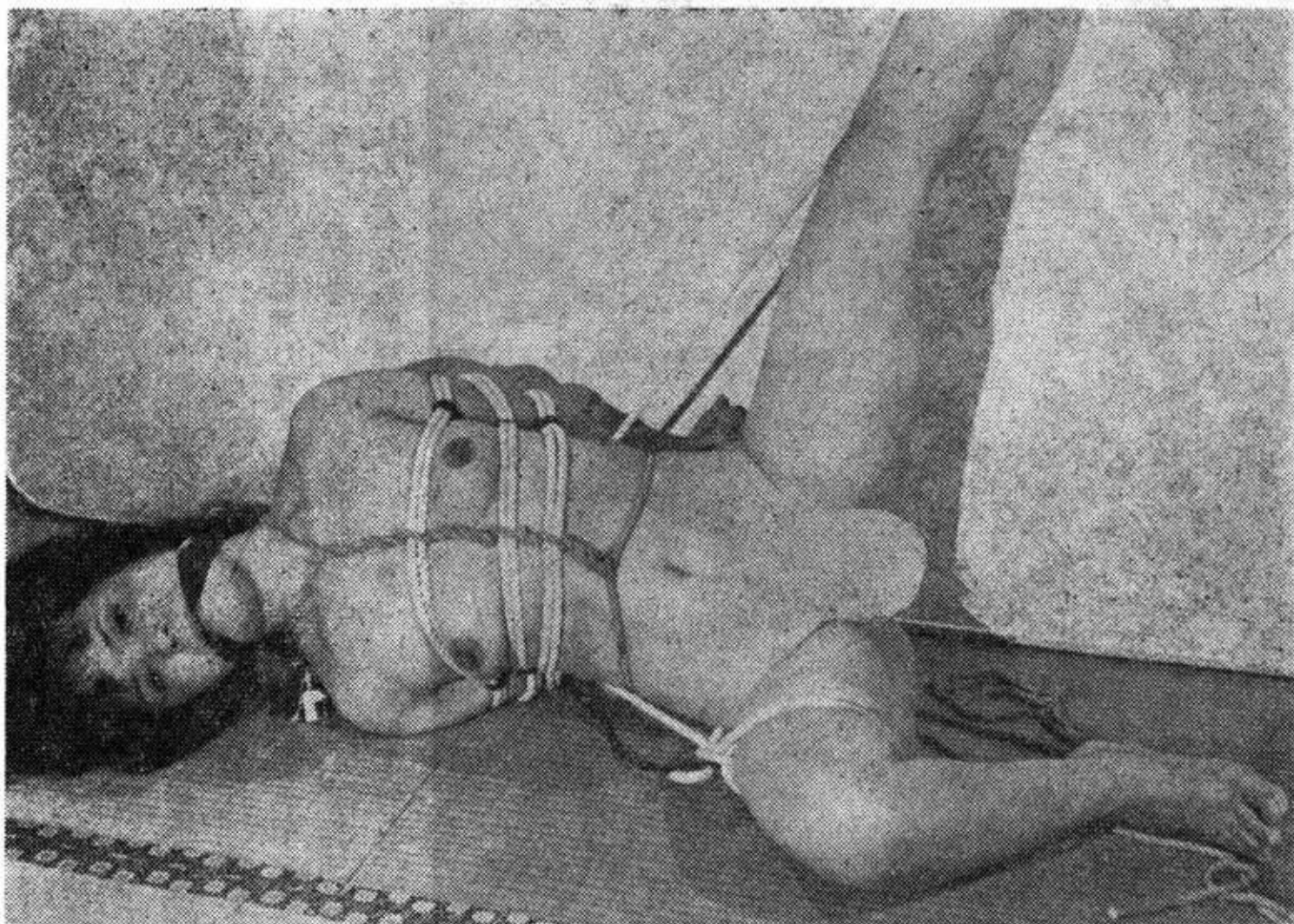
「そうだね。旅に出るとしたら、三人じゃ、まずいから、もう一人、女性を調達して、四人で行こうじゃないか」

「ううん、調達してね。うん、うん」

「心当りがあったら、ぐっと豪華に、北海道の洞爺湖あたりまで、一つ飛び、四人でプレイ旅行と、しゃれ込もうじゃないか」

パパと一緒に北海道へ避暑旅行をしていると言って、洞爺湖の絵ハガキを寄こした森田芙美子のことがチラッと私の頭をかすめた。

男二人女二人、男女二組の気心の知れたカップルで、気尽なSMプレイ旅行——これは確かに楽しい遊びに違いない。そんな旅だったら、私も、一週間でも十日でも、ゆっくり行きたいものだと思う。



私の言葉に河本光三は、じっと、考え込んでいる風だ。聞くところに依ると、彼は先年、最愛の夫人を亡くしているとのことだから現在は、身軽な一人身の筈だ。

「それはそうと、河本さんその切り抜きの通りやってみますか？ 私は今日は純粹の傍觀者の立場でカメラだけを持ちますからね。ホレ、縄は、ここにありますよ」

私は鞆の中から種々雑多な縄を取り出して畳の上にとさっと投げだす。

手のこんだ本格的な縛りのなかで矢島靖子が、どのように悶え、呻くか、それを見たいという彼の希望であることは、事前の打合せで、私にはよくわかっていた。

ようやくマゾに目覚めだ

してきた矢島靖子が、どのような美しい緊縛姿態のなかで河本光三に責められて汗と脂をしぼりだすか、そこに私は興味があった。

私が立ち、河本光三が立つと、矢島靖子もそれにつれて立ちあがった。

そのときは、まだ、私は矢島靖子が、あんなに大粒の涙を流して泣くに至る仕儀に相成るとは、夢にも思ってもいなかった。

いやはや、SMプレイの成行きだなんて、どのように変化するものやら、それはもう、10分先は、わからないものだ。

☆

部屋の四隅の天井に開いている噴気孔からは、シューシューと冷えた空気が間断なく吹きつけているので、部屋の中は、高原の涼しさとまではゆかないにしても、まあ、汗ばまない位の温度を保っている。

私はパンツ一つになり、汗が目に入らないように、タオルで鉢巻をした。

「さあ、やってみるか！」

私は河本光三に声を掛けた。先ず、お手並拝見というところだ。金で雇った助手でもなし、やり気充分の奇巧の愛読者なんだから、私も、けしかけるのに至って気が楽だ。

「靖子さん。この河本さんだったら、責めら

れてみたいって気がするでしょう？」

「ええ、そりゃ、大変、感じがいい方ですから、河本さんさえ、私が気にいって下さるんなら、私は、もう……」

「縛られても、いいって言うんだね」

「ええ」

矢島靖子は、消え入りたげだ。

「よし、それじゃ話はきまった。河本さん、聞いての通りだ。好きなように、その切り抜きのように、靖子を縛ってみなさいよ」

私は手頃なロープを拾って彼に手渡す。

河本光三は、縄を受取りながらも、急に行動を起すこともなく、もじもじしている。

「河本さんに浴衣を脱がして貰いなさいナ」

私の言葉に、彼はやっと、彼女の浴衣の前で結んでいる紐を解いた。パタリと浴衣を足もとに落すと、靖子の股のつけ根に喰い込むように、新しい真白いパンツが目に入った。

小麦色のムチムチとした湯上りの肌が、匂うが如く、目の前にあった。河本光三は、じっと海老縛りにした切り抜き写真の一枚を見てから、手にした縄を彼女の裸身にからませていった。彼女にしたら、縄で縛られるということは、今日が初めてではない。既に、縛られることの快味を、身を以て充分に体験し

ているのだから、河本光三が縄を手にして背後に迫っただけで、全身を紅潮させて、何かを期待している風だった。

若い女性というものは、相手を選ぶ敏感な嗅覚を持っている。いわば、好き嫌い——というものが、はっきりしているのだ。

ましてや、若い女性が男に縛られるというのであるから、得体の知れない相手であつたら、気味悪がるのも無理はない。

この人にだったら、どんなにされても、悔いはない——という信頼感を持ちたいのは当然のことだろう。

私は河本光三のことを彼女に、彼の奇ク誌上に発表した作品を挙げて、信頼の持てる誠実な紳士であることを吹き込んでおいたが、言葉少なな彼の態度のなか



から、彼の性格を、す早く、読みとっていたのだろう。

私が彼とつき合っている間の観察でも、彼の誠実さ——というものはよく分っている。

今、矢島靖子は、河本光三に縛られたがっている。それは、私の目にも、はっきりと分っていた。女が相手の男が信頼の持てる、好感の持てる人であるか、どうかを鋭敏に好悪の判断をするのと同様に、男である私は、女性性の心の動きは、いち早く、読みとった。

それなのに、一向に、河本光三の手が動かないのである。再び、切り抜き海老縛りの写真に目をやった。矢島靖子は、両手をうしろへ回して組んだまま立っている。

「塚本さん。あんた、縛って下さいな。俺、どうして、縛っていいか、分らないんや」

「だって、そんなに何枚もの切り抜きを準備して、研究したんでしょ。とにかく、思い通りに、縛ってみなさいよ」

「うん、そない思ってるんやけど、こう、頭に血が、かあっと昇ってしもうて、どないしていいんや、分らうなあってしもうた」

「どれどれ、これはエビ縛りにしてるんだから、先ず最初には、後手高手小手縛りにしておいてから、両方の足首を揃えて縛って引き

つけるようにしないと駄目だな。それを一遍にやろうとするから、むつかしいんだよ」

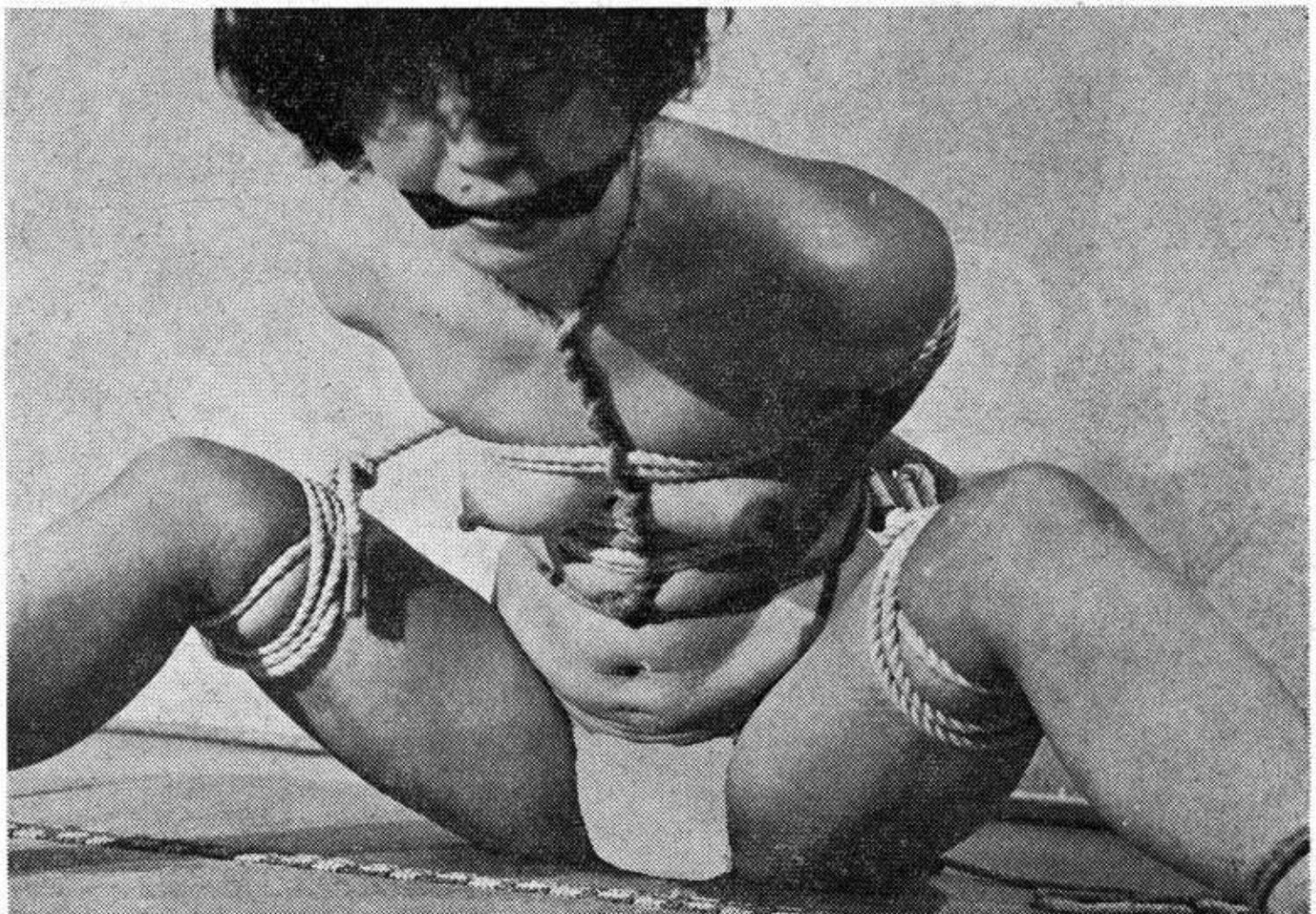
「気ばかり焦りよって、どこから手をつけていいんやら、さっぱり分りやらん」

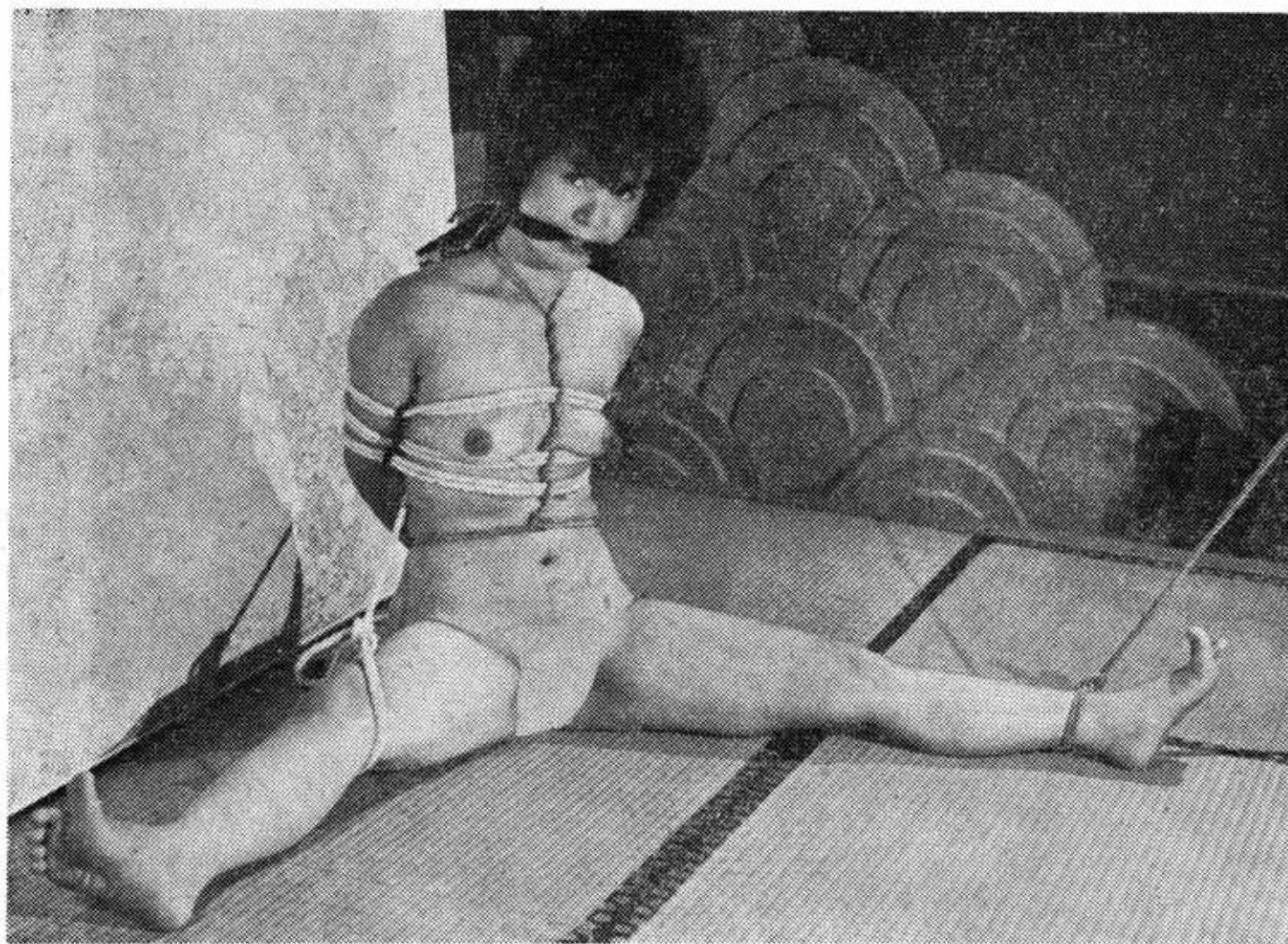
「じゃあ、先ず、後手首を縛るところから、こうして縛ってゆくとするか。ここを第一番に縛ると、あとで物凄く締まってきて苦痛を与えることになるんだが、まあ、彼女だったら、それくらい、辛抱してくれるだろう」

ねっとり、粘りつくような靖子の指や掌の感触が縛り上げられる前から燃えている彼女の心情を如実に現わしているようだ。

「次は胸へ回して締めつけて……」

私の指示に従って河本光三は、額に大粒の汗を浮べ





ながらロープと格闘している。

言われるがままに縄を捌いてゆく彼。その切り抜き写真に、出来るだけ近いように、私は彼と相談しながらアドバイスする。彼がその写真の縛り方が気に入っているというのだから、矢島靖子という女性を試験台として縛ってみるのも面白からう。

とにかく、河本光三は、こうしたことにかけては熱心だ。私に、いろんなSM界の情報をもたらせて呉れるばかりじゃなしに、自分の意見も積極的に参考にして呉れる。

私が彼と一緒に矢島靖子責めてみようと思いついたというのも、彼の無類の熱心さに、あふりたてられたといってもよい。

今日の八矢島靖子緊縛

行Vについても、彼は自分で女が縛れる——ということから、雑誌を調べ、切り抜きを集めて、彼なりに、縛り方を、研究したのだらう。私が、ここはこうした方がいい、ここはこちらが先だ——と、アドバイスし、緩んだ縄があると、別の短い縄で締めつけるなどすると、靖子の裸身が忽ちにして緊縛感溢れる縄に依って飾り立てられていった。

「ひゃー、やっぱり、塚本さんは女を縛るところにかけては慣れてるもんやなあ。俺ひとりやったら、とても、こないに手際ようは、いかなやろなあ」

河本光三は自分で縛った矢島靖子を見て、感心したように呟いた。彼女は私と彼とを見比べながら、なごやかな視線を二人に注いでいる。縛られていながらも、信じきったという、その温い視線は、三人の間に、目に見えない心のつながりというものがあつた。

さて、いよいよ、海老縛りだ。

矢島靖子の、あの天下一品、綺麗な足が、どのようにピンと、そり反って変化するか。両足首を揃えて縛り、その縄を背中の中の手首の縄と連結して締めつけ、女体を二つ折りにしてしまうのだから、こりゃ責め甲斐があるというものだ。



彼女は柔軟な肢体の持主だから、単に海老縛りに、瞬間的にするのであったら、そう大

して苦痛を伴うこともないであろう。ただ、
「海老責め」として長時間、放置しておいたら、その苦痛は、全身から脂汗を流すほどの強烈なものになることに、違いないのだ。

そして、その激甚な苦痛のなかで、矢島靖子の裸身が、どのように呻き、喘ぎ悶え、とどのつまり、恥かしさも打ち忘れて、泣き喚くという狂態を見せることだろうか。

だが、実際は、両方の足を揃えて縛り、両膝が左右に開ききるようにして引きつけるだけで、白いスキヤンティを穿いているのにも拘らず、彼女は羞かしがって膝を開くことを激しく拒否した。

「海老縛りにするんだから両膝を、もっと左右に一直線になるよう開かないか」
足首を縛った縄を両肩を

通して背中中の縄に連結して締めつけようとするが、両膝をすばめているものだから、膝頭が胸につかえて引き寄せることが出来ない。そのうち、畳の上に支えている両肘が痛いと言いつ出した。

「座布団を敷こうか」

河本光三は、座布団を二つ、持ってきて、仰向けに寝ている矢島靖子の背中へ敷いてやるというフェミニストぶりだ。

「座布団を敷いたら写真にしたとき、責めの感じが出ないじゃないか」

河本光三は座布団を引き抜くと、彼女を自分の膝の上にのせた。

私は矢島靖子の両膝をひろげさせて押えつけ、河本光三は彼女の背中を持ちあげて女体を二つ折りにし、たるんだ縄を締めつけた。

「おお、曲った、曲った。よく曲ったぞ」

彼女の背中は河本光三の膝の上で支えられているので肘も後手も痛くはない。引きつけられた両手首が、きゅっと顔面に近くあがってくる。その足の指が、ぐっと曲っている。

拇指が外へピンと反りかえり、他の四本の指が内側へ、きゅっと、もうこれ以上、曲らないというくらい、きゅく曲っている。

美しい足の指だ。

それが足首を揃えて、海老縛りに引きつけられて曲っているのだからエロチックだ。

「曲った、曲った。よう曲った」

河本光三も、抱きかかえた彼女の足首が目の前に引きつけられて迫ってくるにつれて、思わず感嘆の吐息を洩らした。

「どうだ、まだ、辛抱できるか？」

私は更に縄を締めつける。

彼女の足首が一層、近づいてくる。

「足の指が、よう曲ったな。靖子、どんな感じだ。言ってみんか？」

「ああ、足の指が気持ちいいの」

「足の指の、どこがいいの？」

「足の指の先が、とっても気持ちいいのよ」

「指の先が、どんなにいいんだ？」

「しびれるようなの。曲げるだけ曲げたら、とっても気持ちがよくって、たまらないの」

「ほほう、曲った。よく曲ったナ。こんなに曲るんだったら、そりゃ、いいだろうな」

「パンツを脱がそうか——」

河本光三が私を顧る。

彼の右手が、さっと靖子の臀部の方へ伸びる。その手が、どのような動きを示したか。

「ああ、足の指が、とっても気持ちいいのよ」
彼女の足の指が、更にぐっと力が入る。

喰い込んでいる足首の縄目の痛さも、今や矢島靖子にとっては、快感そのものなのだろう。「責め」が、耐えきれないような虐待感を女体に与えた一瞬だ。

後手首、二の腕、胸——に喰い込んでいる縄も、疼痛というよりも、快味なのだ。

河本光三は、彼女のパンツを、くると、お尻からめくってしまった。めくってから彼の右手が更に、つと妖しく伸びた。

「ああ、足の指が、足の指が、いい……」

河本光三の膝の上で靖子の全身がブルブルと、ふるえた。

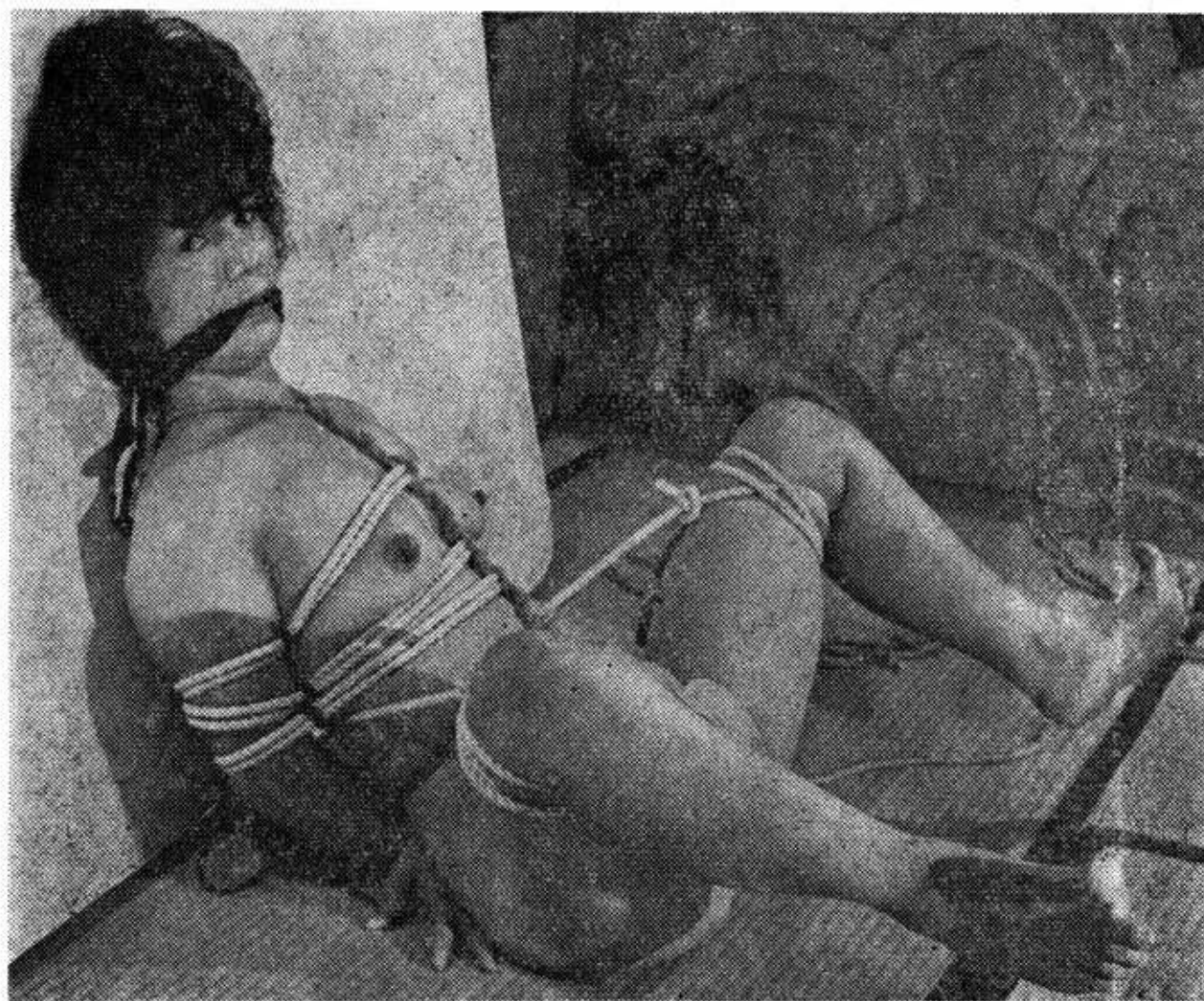
と、途端に、靖子の目から、大粒の涙がポロリと、こぼれた。

「おお、おお……」

矢島靖子は慟哭している海老縛りにされたまま、足の指をぐっと、く、の

字に曲げて、身体の奥底から、こみあげてくる快味に耐えきれなくなっている。

河本光三と私とは、矢島靖子の、そんな姿



を、じっと眺めていた。彼女は彼の膝の上で悶えぬいている。

彼女の目じりの横を、大粒の涙が次々に目のなかを溢れて、つたって流れた。

私は責められて泣く女の顔を初めて見た。

時間が経つにつれて、二つ折りにされた女体は苦痛が次第に加わってきた。苦痛即快感とすり変えて感得することのできるマゾの性格なればこそ、彼女は、この海老縛りの責めを耐えていられるのだろうか。

「おお、おお……」

矢島靖子の足の指は、もう、ぐっと曲りきったままだ。化石のように静止している。

全身の力が指先に集中しているみたいだ。

河本光三の右手だけが、せわしく動く。

私は口のなかが生唾で、いっぱいになり、思わず、それを飲みこんだ。

足首を引きつけている縄が、触れたら切れそうになるくらいピンと緊張している。

凄いい海老縛りだ。

彼女は両足を伸ばしたくって、伸ばしたくって仕方がないのだろうが、二本の縄で引きつけられているばかりに、伸ばすことが出来ないのだ。そして、折角、穿いてきた白いスキャンティが、肉づきのよい尻を、くる



りと、めくられて、今や、最も隠しておかなければならない個所が、私の視線のなかに、すっぽりと入ってしまったているのだ。

「おお、おお……」

矢島靖子は大粒の涙を流して泣いている。

河本光三は膝をずらして、彼女の背中を更に深く抱え込むようにしたかと思うと、空い

た左手の指で目尻の涙を拭いてやっている。奇妙な音が連続的にした……。

縛り方で、まごついた河本光三であるが、やはり、女に対する羞恥責めについては、そのツボを心得ているようだ。

あれほど控え目な矢島靖子が、前後の見さかしくもなく悶え泣きしているのだ。海老縛り

にされるということが、これほどまでに、いいのだろうか。

河本光三が膝を割ると、彼女の足とお尻とが、更に一段と高くなったような気がした。

「風呂へ入ってくるからナ」

私はカメラをテレビの上に置いてから隣の部屋へ駆け込んでいった。パンツを脱いで脱



衣箆の中へほりこむと、鉢巻のタオルを首に巻いてから浴槽につかった。

☆

矢島靖子——。

なんと責め甲斐のある女だろうか。

この前、ダベリ会
のとき、四人の男たち
にいたぶられて、結構、満足したよう
だったが、あのとき
の、まだ、なんとな
く硬い表情から比べ
ると、今日の彼女は
責められることに溺
れきったという素振

りが見えている。

第一回、第二回、第三回——と、回を重ねる毎に、彼女の固い殻が次第次第に、解けはぐれてゆくように感じられる。

私は石鹸の泡をたてて全身を洗った。顔がすぐ脂が浮いて、ぬるぬるになるので、石鹸をつけたタオルで丹念に洗った。

バスタオルを腰に巻いて部屋に戻ると、矢島靖子を縛っていた縄は既に解かれていて、河本光三に、しっかりと抱かれていた。

投げだした彼女の足首には、くっきりと、それとわかる皮膚の窪みがついている。

脱がされた真新しいスキャンティが、裏返しになったまま、彼女の足もとにころがっていて、彼女は顔を河本光三の腕のなかに埋めていた。

「どうだ、すぐに出来そうか？」

私は立ったまま、声を掛けた。

「えっ？」

私の声に靖子が、びくくりしたように顔を挙げて急に起き上ろうとしてから、自分が素裸なのに気づき、羞らいに身をすくめる。

私は腰に巻いたバスタオルをとって彼女に掛けてやり、手にさげてきたパンツを、ゆっくりと穿いた。

暑い、湯上りだから、凄く暑い。だが、この場の熱気は、あながち、私が湯上りだという、せいばかりじゃなさそうだ。

河本光三も、アンダーシャツ一枚で、パンツの方は既に脱いでしまっている。

「切り抜き写真の次は、股間縛りだったナ。それを、これから、やるかい？」

「いや、塚本さん。俺りゃ、もう、その気力もないから、あんた、縛って下さいよ」

「打合せのときは、いろんな本格的な縛り方を実際に勉強するんだと言って、あれだけ、張り切っていたじゃないか」

「それがね、塚本さん。彼女が……」

そこまで言ってから河本光三は、彼女を離

して立ちあがって私の耳に口を寄せた。

「凄いですよ。俺、すっかりグロッキーになってしまつて。

もう、これ以上、縛る気力も、のうなりました。あとは塚本さん、やってみて下さいな。頼んまっさ」

彼はフラフラと浴室の方へ向う。

「靖子も、お風呂へ入ってきたら、どうだ」

「いいえ、私は、いいんです」私に気兼ねしてか、彼女はバスタオルを腰に巻いて、しゃんと立った。

私は彼の持ってきた切り抜き写真を一瞥してから、つと、彼

女の背後へ回った。

両の手首にも、二の腕にも、背中にも、縄の喰い込んだアトが赤く残っている。

彼女の腕をとる。心なしか、だらりとして力がないようだ。私は鞆から取り出した新しいロープで彼女を縛っていった。

股間縛りだ。

もう、こうなったら、情容赦なく、思いつ

きり、きつく縛ってやろう——と思った。

縄を掛けると、彼女の身体は急に、しゃんとした。

バスタオルを剥いで部屋の隅へ投げる。

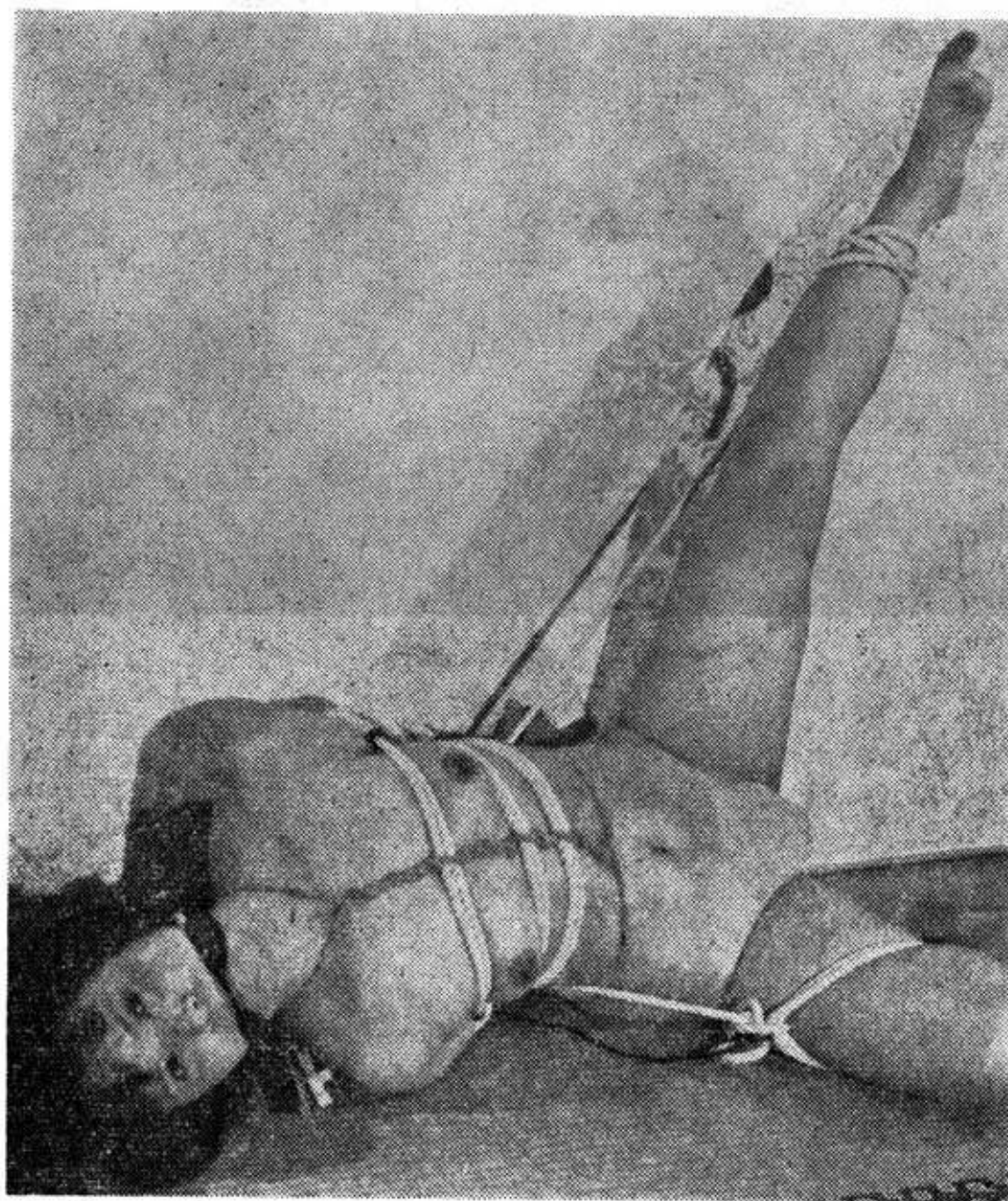
おぞましい縄が、靖子の裸身を縦に二つに割っている。

今の今だから、彼女は私の目の前で消え入りたげに羞かしがっている。そこに縄を通されるということは、彼女にとって、どんなに、うとましいことだろう。

だが、マゾの性格の女は違っている。汚辱にまみれば、まみれるほど、その汚辱の洩のなかで、新しい昇進を示すものなのだ。

靖子の裸身を縛ってゆく私の縄が、彼女の身の置きどころのないバツの悪さを徐々に救っていったばかりか、次第に、新しい感興へと燃えはじめてきたのだ。

さっきの羞かしさが大きけれ



ば大きい程、それが薄皮を剥ぐように、めくられてくると、次への期待も、一入、大きいのだ。矢島靖子の裸身に、忽ちにして生気が漲ってきた。

その点、女性の身体は、男性とは違っていた。私の施す縄によって、靖子の裸身が、みるみる紅潮してきたのだ。ということは、男性たるもの、自分がワンラウンド満足しただけで事足れり——としては、いけないということなのだ。

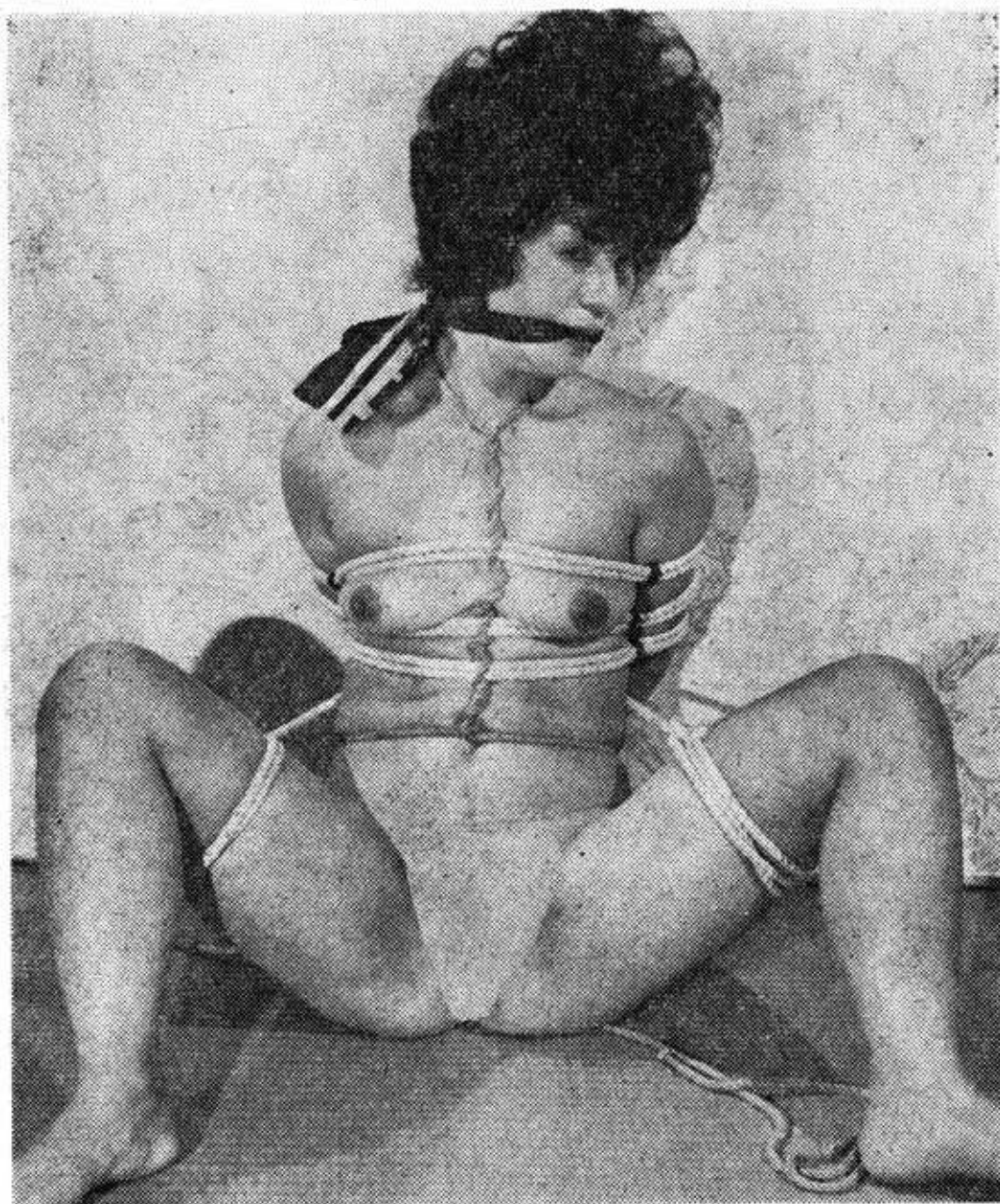
矢島靖子にしても、これからの「責め」がいよいよ、本調子というところなのだ。今までののは、いわば序の段階。この序の段階が、成功のうちにスムーズに通過したなら、次の「責め」は一段と素晴しくなるのだ。

「靖子、さっきの海老縛りはよかったかい」

「ええ、とっても。あんなに、身体が二つに曲げられてしまつて、それに……」

「それに、どうした？」

「いやですわ、そんなこと」



媚を含んだ身のこなし、縛られた裸身をすり寄せてくる。これこそ、文字通りのスキンシップだ。それを迎え入れて抱きしめてやれば、ありきたりの「責め」になってしまうところだが、私は靖子の媚態を、つき放した。まだまだ、することがあったのだ。縦に用いたトゲトゲした麻縄の縄尻を、彼

女の太股のつけ根に、ぐいっと、くびるように一重、二重、三重と巻きつけていった。その縄尻は、臀丘の狭間を通して、背中の縄の結び目に連結された。

股間縛りには違いないが、この太股のつけ根を縛るやり方は、ちょっと変っているだろう。何のために、こんな奇妙な股間縛りを、

と考えられるかも知れない。だが、しかし、経験のある方なら先刻、御存じのことだと思うが女体を縦に真二つに割る股間縛りだと、その後の行動に、いささか不都合のことが起るのだ。だから、私は河本光三の持ってきた切り抜き写真を参考にしながらも、そのところは、少し変化させておいた。

トゲトゲの麻縄——。それが彼女の柔肌に、どのような刺戟を与えたことか。

それを知っているながら、知らない顔をしている私も、残忍な男かも知れない。

鏡に半身を映させて、それを彼女自身に眺めさせる。

「いやよ、いやよ」と言いながら、矢島靖子自身、腰を引いて、鏡に映った自分の緊縛裸身を結構、楽しそうに眺めているのだから女心というものも不思議なものだ。

私も、思い出したようにカメラのグリップを握ってシャッターを切る。慌てて握ったり放したりするので、グリップの皮が左手の甲に擦れて、血がにじんだようになって、とても痛い。この前、八前田真知子を囲むダベリ会プレイ会V（八月号所載）の際、釘で指に怪我したあとが、白い傷痕となって残っている、そのすぐ近くのものだ。

でも、今は、もう、そんなことをかまっておれない。カメラを投げすてると、一刻も彼女を休ませることなく、女体に近づいて、いたぶりを仕掛ける。

いやはや、忙しい仕掛人だ。ムチムチとした臀部のえくぼ——。その責め甲斐のある肉の膨らみに、私はア



なかに、くたくた——と、くずれるように倒れかかってきた。

私は両腕でピチピチした女体を抱える。

それが予定の行動でもあるかのように、彼女は安堵して私に身を委ねた。

私は矢島靖子を、その場に横たえた。

両太股のつけ根を縛った麻縄が、ぎゅっと恐ろしいほど柔肌に喰い込んでいる。

「う、うう、うーむ」

矢島靖子は眉の根を、しかめて痛さをこらえている。目尻から一筋、ツート、涙が糸を引いてこぼれる。よく泣く

女だ。

この前は、こんなことがなかったのに、今日は一体、どうしたのだろう。

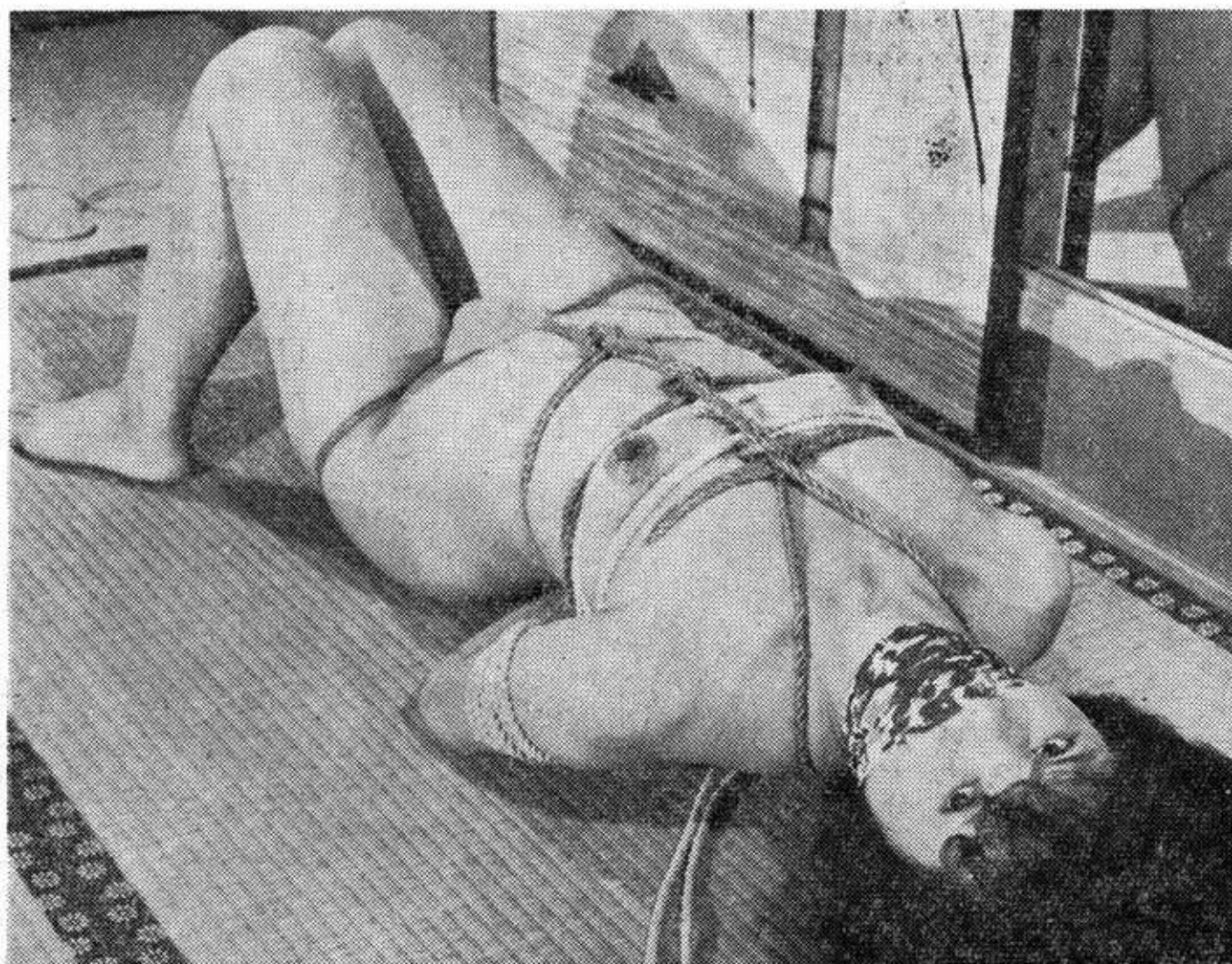
男は女の涙には弱い。

涙をこぼすほど、どこか痛いのかと、不安に思う。やはり私とて、真正サディストに徹することは出来ない。本来は、女を悦ばせた

タックを加える。拇指と人差指で摘んで、プチッと抓るのである。ときには幅狭く摘んで軽く抓り、ときには厚く摘んで、ぽっちんと弾みをつけて抓る。私の好きな「継子^{ままと}抓り」を時折り、つけ加える。

「おお、お許しを……」

彼女は、もう立っておれなくて、私の胸の



掛けているわけだ。

滅法矢鱈に、自分が、そうしたいから、好き放題にやっているわけではない。相手のことを十二分に考えて、迎合するように責めているのだ。靖子の目から涙が流れたので、私は一瞬、当然たじろいだ。

泣いているのに笠にかかって、えたりとばかり責めたてるほど、ワル(悪)には徹しきれなかった。当然のことのように、縛り目の疼痛をやわらげるための手段を講じた。

そこはもう、凄じい乱れようだった。

私は河本光三に声を掛けた。

「おい、早く来ないか。見事な股間縛りが出来上ったぞ。ちょっと、来てみない

河本光三は、いささか意気消沈のようだ。卓の上に手紙のようなものをひろげている。

だから言わないことではない。このような魔物のような女性を責めるときは、一気呵成に、何もかも、出しきってしまったては、後が続かないのは当然だ。

「ねえ、塚本さん。これ、俺に來た手紙なんだけど、少しは、あんたの参考になるかと思つて、一部、持つて來ただけ……」

「ああ、伊丹局の私書箱で受取つたという手紙なんだね。ほう、沢山來たんだね。それは有難いが、あとで、ゆっくり見せて貰うよ。今は、それどころじゃないんだ」

私は完全に矢島靖子を抱えて膝の上に乗せてしまつてゐる格好だ。

「河本さん、見てみなさいよ。この素晴らしい股間縛りを。上半身の縛りだって、一分のスキもないだろう。どうです？ このあたりの縄の喰い込みぐあい。それに、ホラ……」

私は彼に殊更、見せつけて挑発してやる。

でも河本光三は、いささか興味を失つてしまつてゐるようだ。そこで私は、強引に矢島靖子を引き寄せた。

「女を責めるといふのは、こうするんだぜ。私も少しは露出症気味の傾向がある。」

いと思うフェミニストなのだ。痛々しいほど
気を使って、相手の機嫌を損じまいと常に心

か

「うん、今すぐ行くから……」

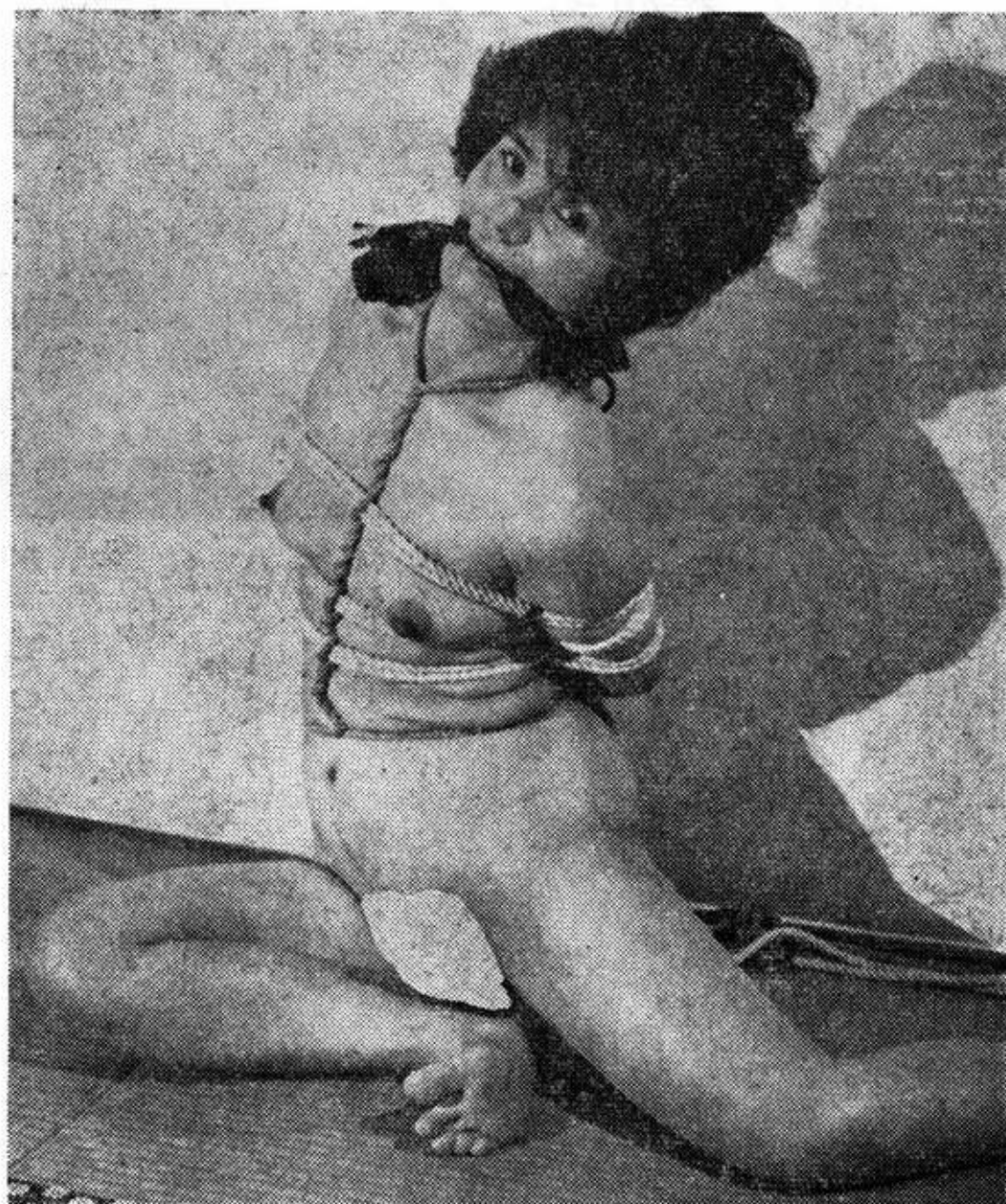
いや、少しじゃなくて大いに露出症的傾向がある。ひよっとしたら相当な重症かもしれぬ。S研勉強会だなんて上品なことを言っておきながら、実際は、そんな自分の露出症的症状を満足させるため、やっているのじゃないのか——という自己嫌悪に陥ってしまう。

その餌食にされる矢島靖子こそ災難だ。

最近流行のケモノスタイルにさせられてしまう。それでも、彼女もまた燃えあがっているという証しを、背後に回って確かめたことで、私は救われた気持ちになる。

それが「責め」か？ と訊かれれば、私は「責め」だ——と答える。でもなんともはや、齒切れの悪い答えしか出来ない。

八女というものはナ、こんな風にして仕込むんだ。そして、これが女の責め方なんだ。そんな口はばったいことは、おこがましくて、とても私には言えない。ただ私は、自分



が十分に満足したのにも拘らず、自分よりも以上に、相手の女性が満足したのではないかという——疑問を、いつものように抱いた。

疲れ果てて、いぎたなく畳の上にのびている矢島靖子を、そのままに、私は河本光三の手に行っている手紙の束を受取った。

「沢山来たもんだね。面白い手紙もあるだろうなあ、これだけあるんだっただけ……」

「それより、塚本さん。彼女、このまま縛っておいても、いいんですかい？　ぐったりとしているようだけれど、かまいませんか？」

「いいさ。余韻を楽しんでいるって、とこだろう。今、なまじ手を出して縄を解いたりしたらそれこそ、手がつけれなくなるよ。それとも、君があとを引き受けてくれるって言うんだったら、それもいいがね。そうじゃないんだったら、私にも一休みさせてくれよ」

私は彼女の背中に、ふんわりとバスタオルを掛けてやる。

「ねえ、河本さん。彼女はね、これからが凄いですよ。ああして、参ったふりをしているけど、次に一休みしてから責めてごらん。それこそ、手がつけれなくなるよ。だから私は、最後の最後、参った」と言うまで、気をそらさないようにしてらんですよ」

「は、ほう。そんなもんですかねえ。それだ

「だったら、向うでビールでも飲んで一つ、英気を養うとしまひようか」

卓で向い合って坐り、冷蔵庫からビールを出してきてコップに注いだ。

「彼女、今日は日帰りで東京へ帰るんかナ。そっちの切り抜きの方の予定は、一体、どうなっているんだい？」

「ええ——と、あとは開股縛りと逆エビ縛りですか。これだけは、やってほしいと思つてますのんや。吊り責めと流腸も考えとりますのんやが、これは無理でつすやろ。あの状態やったら……」

「今までのやり方だったら、あとの二つでも相当、時間がかかりそうだな」

「もしも遅うなるようやったら、彼女、俺の家へ来て泊ってもらたら、どうや。家も広いし、俺一人きりやからな、誰に遠慮気兼ねもいらへん」

「そうだな。彼女の都合で、今日中に帰れないようだったら、そうして貰おうか。だったら、彼女の縄を解いてやってくれないか」

私は彼に縄解きをまかしておいて、残っているビールをコップに注いで飲んだ。

☆

男性は回を重ねる毎に、だんだん淡泊にな

ってゆく。反対に女性は、回を重ねる度に、次第に執拗に、しかも濃厚になってゆく。

私は、思いつき締めつけた縛りをしたのだから、矢島靖子の裸身には、むごたらしい縄目のアトが身体中に残っている。

これじゃ、今からノースリーブで飛行機に乗って東京へ帰れるだろうか。

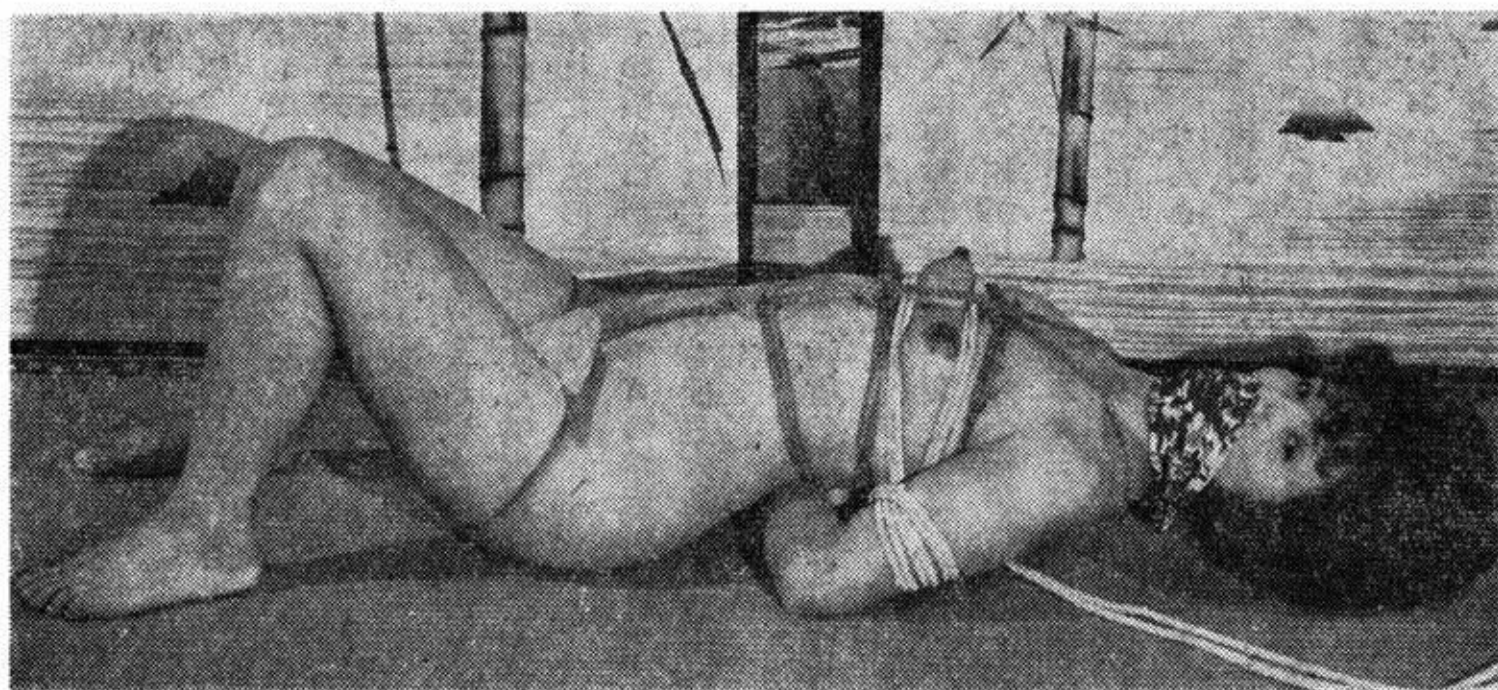
やはり河本光三の言うように、今夜、彼の家へ泊らせて貰って、明日の朝の便で帰った方が、よさそうだ。

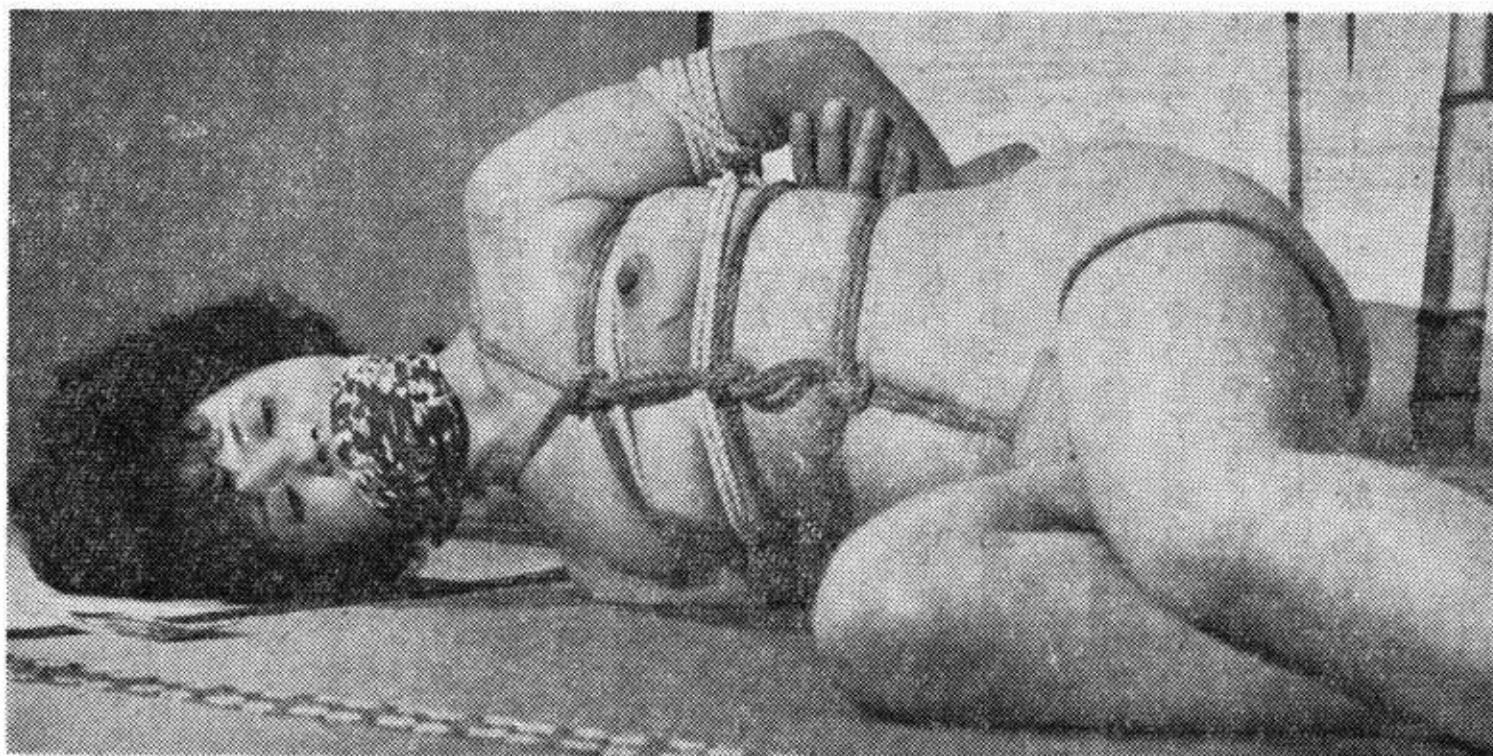
そんなことを考えながら、私は再び、彼女の裸身に縄を掛けていった。今はもう、河本光三も、自分で縛ろうとは言わない。

私は白いロープで高手小手縛りにしておいて、別の縄で首に掛けておいてから、縊るように横縄を縫ってタテに走らせ、お臍の上でコブを作って、背後へ回した。

彼の持ってきた切り抜き写真によってヒントを得た縛り方だけれど、すべて、そのままというわけではない。

三本目の縄。それが、両方の膝頭を縛ってそれを左右に押し拡げようと非情な働きをするのである。当然のことながら、矢島靖子にしたら、そう易々と、こちらの思い通りになつては、たまるものかと抵抗する。





それを、足の裏を擦ったり、太股を抓ったりしながら、無理矢理に、こちらの望むようなポーズにさせるというのが嗜虐的なのだ。

読者の評でも、とかく、こうした、あられなポーズの責め方には人気があるようだ。

彼女が嫌がれば嫌がるほど、羞かしがれば羞かしがるほど、男の感興は倍加するのだ。

消え入りたげに羞かしげでありながら、なんとなく、そうされてみたいといった風情にたまらない魅力がある。これが、どんなことがあっても、絶対に開かないといった喧嘩ごしの抵抗も興ざめだし、自ら、喜んで、おっぴろげるというのも戴けない。

羞らいのなかの軽い抗い。そして、結局は度重なる執拗な強要の前に屈伏して、控え目に洩々、意に従うのである。

矢島靖子の場合も、やはり、そうしたパターンで、私と河本光三の目の前でやむなく、開陳してしまった。縄——という暴力がなかったならば、自らの意に反して、こんなあられもない格好に縛られはすまいものを。

それが、一旦、そうなってしまうと、彼女の全身は、まるでカメレオンのように変色してしまった。赤く紅潮したかと思うと、次には、脱色したように蒼白と化した。

河本光三は、畳の上に腹這いになって覗き込む。初対面の女性なのだから無理はない。

靖子の羞恥心は泥にまみれるが、非情なロープが、がっちりとして、両膝を左右に固定しているの、どうすることも出来ない。

もう、どうすることも出来ない——といういらいらした気持が、彼女の体内に竦って、マグマのように煮えたぎる。女体の中のマグマが外部へ向って噴出する噴火口は、云わずと知れた、あの一点だ。

その噴火口からドロドロの熔岩が溢れてくるといのは、あながち伊豆大島の三原山の火口ばかりではない。

矢島靖子を、羞恥と汚辱の泥沼のなかに呻吟させ、それに依って起る肉体的変化を、私達二人は視覚的に十分、楽しんだ。

あっちへ転がし、こっちへ転がし、宙に高く挙がった足を握って河本光三は、彼女の足の裏を擦った。

ああ、なんという衝撃。彼女の全身は海老のように跳ね、そして縄目の痛さに一瞬、たじろいってから、自分の余りにも、みじめな姿に彼女の目から涙が溢れてきた。

「おいおい、彼女、また泣きだしたぞ。ちょっと、お手柔らかにしてやったら、どうだ」

勝手なものだ。自分が責めているときは、そうも思わないのだが、他人が責めているのを見ると、ひどいことをしているように見えて仕方のないものだ。

そこで、場面は一転。靖子の両股を裂けんばかりに開かせておいて、その間に腰を据えての「責め」だ。こんな、おぞましい責めつて、この世の中にあるだろうか。

考えてもごらん。マゾ傾向の女性だったら、この文章を読んだら、自分も、そうされたくって、早速、便りを寄越すかも知れない。どんなことをやったかって？

それは、秘中の秘。この「責め」だけは、いくら読者の方の求めだからって、軽々しく、お知らせするわけにはいかない。ただ、これだけは言っておこう。

身の毛もよだつような執拗な「責め」で、やがて、小半刻もしないうちに、さ

すがの矢島靖子も、失神したようになってしまったことだ。これじゃ、時間がいくらあっても足りない。それに、写真撮影の方は一向に、はかどらない。

ただ河本光三の方が、今回の開股縛りの責めに依って、相当元気を回復したように見えたことだ。遥々、東京から矢島靖子に来て貰

ったのだから、早々と興味索然となって貰っては、張り合いのないこと夥しい。

私は益々元氣旺盛だった。

疲れないというのが不思議だ。

愈々、ピッチが早くなってきた。

開股縛りを解くや否や、切り抜き写真を参考にして股間縛りに施した。今度は、前と違

って完全な縦縄縛りだ。

矢島靖子の裸身が、縄目だらけになったって、もう構うもんか。とにかく、こうなったら、縛りたいように縛るんだ。責めたいように責めるんだ。そう考えると一段と調子が出てきた。

縄尻を河本光三に渡す。

「本式の股間縛りだ。この三つの部屋から、浴室、玄関まで引き回してきたら、どうだ」

「このトイレは、馬鹿に広いよって、あそこで写真撮ったら、どうやろう？」
「それもいいナ。とにかく歩かせてみな。痛がるかも



知れんぜ。もし歩かなかつたら、このムチでお尻を叩くんだ。しかし、廊下までは出るなよ」

私は、一息ついて、フィルムの入替え、ライトの配置転換をやる。

いい加減、五時間も六時間も、ぶっ続けでやっていると疲れ、倦いてくるものだが、しぶとい根性には我ながら感心する。まだ、変った責めをやるうというのだ。

河本光三は、私に言われたまま、股間縛りの靖子を引き回している。お義理のように、彼女のお尻をムチで叩いているが、そんなことで、彼女を感溺の淵へ臨ませることは出来ない。うつ伏せにさせておいて、そのむっくりと盛りあがった臀部に対して、力いっぱいムチをぶち当てない限り、こたえんだらう。やがて、彼等はトイレへ消えた。

陽は既に暮れている。窓の外が暗くなると急に蛍光灯の光が明るくなったような気がした。河本光三の奴、あれだけ私に熱心に言っておきながら、今日は満足してるんかなあ、と思った。彼は彼なりに、一生懸命にやっているんだらう。私の役目も、なんだか、道化師みたいなもんだ。

そこへ河本光三が戻ってきた。

「トイレで、……流すところ見てきましたんや。縄、濡らしよりましたんやけど、構いまへんやろな。彼女、洗う言うてよりますんやがどないしまひよ」

「なにをやったんだ。股間縛りのままで、やらしたんか？」

「彼女、トイレへ連れていったら、したいって言いやりまして、とうとう、縄、濡らしてしもうて、えらいこっちゃ。でも、ばっちり拝まして貰いましたぜ。目の保養ですがナ」

「まあ、いいよ。洗わなかったって——」

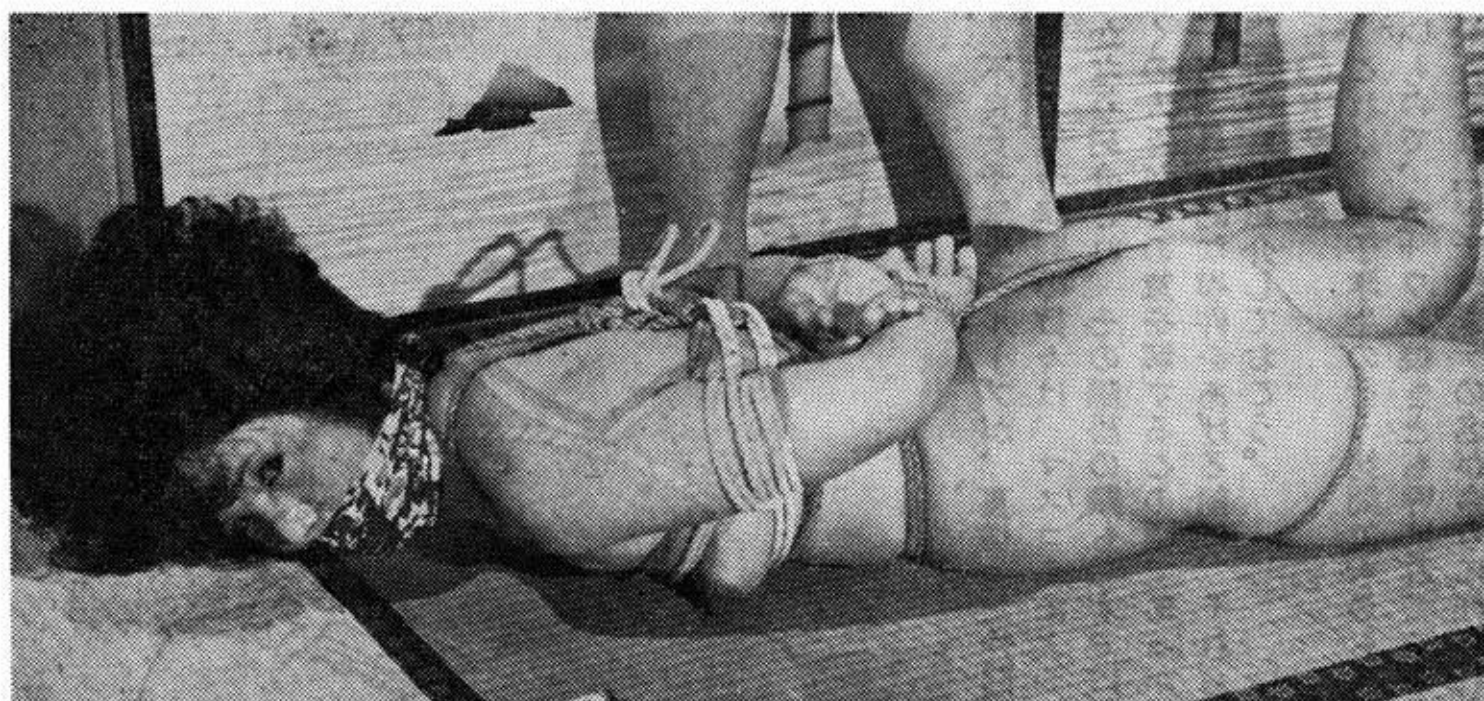
「そうだったか。じゃあ……」

彼はトイレへ飛んで行って、縄を解きかけたままの彼女を連れだしてくる。その縄を解いて、そして、また新しい縛りだ。

縦横についた縄目で肌を彩った矢島靖子。トイレで河本光三に、排尿の場を見られてき



たのだらう。今や、汚辱にまみれて、その裸身は、ずたずたに引き裂れたように見える。私は、ふと憐憫の情にかられた。



縄を持った手が、ともすれば、沈みがちになる。女を縛って、一体、何になるのだ。

そんな声が耳元でする。

河本光三は、次は、どんな縛り方をするのだろう——と、私の手元を見つめている。

△次は逆エビ縛りだ▽

そう心に決めていた。それなのに、私の縄を持った手が、ぴたりと止まってしまった。

そうだ。

この矢島靖子という女性を、これから、思いつき、凌辱して、完膚なきまでに、犯してやりたい——というのが私の本心なのだ。

なんという大それた、おぞましい望みを、持ったものだろうか。私は靖子の裸身に、新しい縄を掛けていった。

縄で縛って、身動きも出来ない女を犯す。

それは、こうして文字で書いてみると、なんと早、嫌なイメージだ。そうされたいと秘かに望む女もいることはいる。最近、私に便りを呉れた山口艶子という若い女性は、その手紙のなかで、はっきりと、「本当の今の私の気持は、暴力で貴男に犯されたいということですよ」と、書いている。

私は今、このルポ記事で、如何に、それが実際のことだからと云って、そんな生ぐさい

ことは書きたくない。やはり、ロマンチックで甘美なムードに包まれたSMプレイであってほしいと思う。

そう、現実には、確かに甘酸っぱくて、ほの悲しいまでに、なごやかなベールに包まれていた。三人三様が、何一つ警戒心も抱かず、文字通り、素裸のままでおれた。

私は今日の会合で、また自分の寿命が何日間か延びたような気がした。初物を喰えば、七十五日、生き伸びるというくらいだから。そして、カメラ・ルポを書くときのために出来るだけ多くの矢島靖子の緊縛写真を撮っておきたいものだ。とピッチをあげた。

今日は、自分はカメラを操作するだけで、第三者の傍観者でいたい——と考えていたのに、いつの間にかやら、私もまた、その渦中で泥まみれになっている自分を発見した。

自ら手を汚して、その責めの張本人になってしまったのだ。汚れきった指でカメラのダイヤルをセット出来るというのか。

でも、自分から素裸になって、その渦中に飛び込まない限り、背広にネクタイでは、迫力のあるSMカメラ・ルポは書けないのじゃないだろうか。いつも、私は、汗と脂にまみれてから、このルポのペンを持っている。



不良女子学生グループが、裏切った仲間に対して行う拷問の数々は、マスコミによってかなり紹介され、その隠語の類も、すでに多くの人々がその意を解するこの頃であるが、一応、具体的な事件をあげる前に、それらの隠語の意を紹介しておこう。

○ドテ焼き

これは、女子学生が行う拷問でも最も激しいもので、チャワン焼きとも呼ばれており、最近では「ドテ焼き」の名が余りに知られた

女子学生拷問事件

織田 無朔

せいか、後者を彼女らは良く用いる。つまり女体のドテと呼ばれる箇所を、タバコの火で焼き、無毛状態にする訳だが、これは主に異性関係の裏切りの際に使われる。これを施された者は、重度の場合、一生涯、性行為を行えなくなるとも言われている。

○ニブル焼き

または、ミルク焼きとも呼ばれるもので、乳房、あるいは乳首に対するタバコの火の熱射である。痕跡が残ると、これもまた、異性関係に支障があるう。

○ハンダ焼き

これは手の甲を前二者同様タバコで焼く。

○カエル焼き

または、デベソ焼き。ヘソに対する責めである。

○コウラ焼き

ウシロ焼き、また、亀焼きとも呼ばれる。前記から意は解せようが、亀焼きと呼ばれる

のは、女体の背に亀の甲羅状の火傷を施すもので、中でも激しい。

○ヤマ焼き

シリ焼き。臀部に対する責め。

○その他

ミミ焼き、モモ焼き、マタ（肢）焼き等々新法が考えられているが、いずれも意味は解せよう。

また、最も強烈なものに、硫酸、硝酸、塩酸などの化学物質、薬品（睡眠薬）を使うものも知られている。

以上が、一応の拷問法の隠語知識であるが具体的に、どのような事件として登場しているだろうか？

○栃木県某女子高生

トルエン遊びの果て

シンナー遊びが一時、大流行し、警察も慌

ててシンナー、セメダインの売買に関して強い規制を施したが、最近、シンナーに代るものが現われた。トルエンである。これはTN（トリニトロトルエン）が正称であるが、シンナーよりも、その毒性は強烈であり、死に到る確率も高い。

このトルエン遊びを巡る「ドテ焼き」発生が、栃木県某女子高事件の発端である。ドテ焼きされた女子高生は、グループの新米で高一のA子十六才である。A子はグループのリーダー格であったB子（高三）十八才の男を寝取ったカドで、この拷問を受けたのであるが、事の真相はB子の男がA子を無理矢理に犯したらしい。A子はリンチ後、グループを離れたが、恨み止まず、恋人の暴力団員に頼んで、B子に復讐を企てたのである。B子は数人の暴力団員によって、白昼堂々公園の茂みで輪姦され、その上A子と同じドテ焼きを施された。それ以来、A子方の暴力団とB子方の暴力団とのいざこざが絶えないというが女の恨みとは、何とも恐ろしいものではある。

（昭和四十八年）

○大阪府某女子高生

ニプル切り落とし事件

この事件の発端はシンナー遊びの不良グループが、新しい仲間を増やそうと、無理矢理

一般女子高生にシンナーをかかせようとして先生に密告されたのが発端である。先生に密告したのはA子（高二）十七才で、某高校のプリンセス的存在であった。彼女は、復讐のことなど毫も考えずに勇気を出して先生に告白したのであるが、悪事が露見して停学処分になった主謀者B子の恨みは激しかった。B子は、詫言を入れるふりをして「ヤサ」（アジトのこと）にA子をおびき寄せ、ミミ焼きコウラ焼き、ヤマ焼きで責めた後、つい興奮の余りニプル（乳首）を、ナイフで切り落としたと言う。A子は、リンチされた後、急速にぐれ出し、化粧を濃くし髪を染め、B子のグループの、副リーダー格となつていくという。そして、A子とB子の奇妙な強い連合はその後、多くの仲間をグループに引きずり込み、今では府下有数のスケバングループになつていくと噂されている。（昭和四十九年）

○東京都某女子高生

売春事件の結末

これは再びドテ焼き事件である。しかし、ドテ焼きの直接の行為者が不良女子高生でなく、一回一円で悦しみに来た都内数万と言われるサディストたちであったことがこの事件の異常さを物語っている。売春グループは五十人余りという大所帯で、四、五校の女子

高生が寄り集っていた。しかし、中には趣味的に売春を考えているものもあったが、大体は上部組織の暴力団恐さの嫌々の悪事であったので、露見、裏切りも早かった。なんと、五十人のうちの四十二名がグループを急に脱けると、ある日、言い出したのである。しかし、女の力は到底、男には及び難い。暴力団員と残る十名ばかりのリーダー格の間に仕打ちが企図された。つまり、それが一回一萬円のドテ焼き遊びだったのだ。この情報は闇から闇、裏から裏へと口伝えに広まった。――。

人気のないヤサに、暴力団員が脱けた女子高生を無理矢理に連れてくる。ヤサの中には残ったリーダー格の女子高生が居て、連れて来られた者を裸にし、押さえつけるか、縄で縛る。そこへ、情報を伝え聞いたサディストが続々と出入りしドテ焼きの悦楽にうつつをぬかすというふうにして営業は行われ、暴力団員は、かなりの小遣いをかせいだという。

この事件は、そのスケールの大きなことと一般人が関与していることで目を見張らせるが、マスコミは単なる「売春事件」としてのみ取り扱っただけであった。

しかし、時代状況が複雑化するとともに、人間の性欲も複雑化、今後とも様々な異常事が入々の耳目を驚かすことであろう。

真^ま昼^{ひる}の太陽の下^{もと}で

丈山 潔

江戸川 笑鬼・画

縫製工場のデザイナーである愛子と、注文主である婦人服メーカーの企画者Aとの出合いは、こうであった。

Aは、出来上った服の見本をチェックしに時々やって来るが、その服を着て見せるのは愛子たち入社早々の、デザイナーたちであった。二月ではあったが見本の段階では最早、夏物で、薄くすけて見えるボイル、ローン、ジョーゼットとかいった生地で、特に今年の流行は衿ぐりの思い切った前後に開いたデザインが多かった。製図の段階で同僚の弓子が「露出度が凄いわあ。着せられたら恥かしいわ」と言った服もあって、愛子は、そっと顔を赤くした。

Aの来たのが五時半過ぎで、弓子達が定退社し、係はチーフと愛子だけしか、いなかった。あたしが、あの服を着てAに見られる……愛子は身ぶるいした。

何着かを着終ってからチーフに私用の来客があつて、愛子はAとだけ、取り残された。こんどは、これを着てごらんとAは、その服を愛子に示した。愛子は固くなった。

更衣室から出て来た愛子は、ブラジャーもガードルも丸で透けて見えた。Aの前に立って、愛子は目を伏せてしまった。Aは黙って見ていた。その間が、長い時間に思われた。「後を見せて」「上体を前に倒して」Aが、そこで黙ってしまったので、そのままの姿勢で、Aのことばを待つ結果になった。長かつ

た。ああ、丸見えだわ。Aは私の恥かしい姿を見ている。ゾクッと戦慄が走った。身体がけいれんした。起きればいいんだ。起きなくちゃあと思う力が、やっと愛子の姿勢を元に戻した。上気した顔の前にAの顔があった。

「あなたは、ひどい恥かしがりやですね」
Aは静かに言った。愛子は目を伏せた。
「しかし、あなたは……あなたは恥かしいのが、うれしいですね」

愛子は、「失礼な」と言える状態でなかった。自分がどれだけ興奮状態にあるか、彼に知られていることがわかっていた。

チェックが終ってAを送り出しチーフと社の前で右左に別れた愛子の傍らにブルーグレイのハードトップが静かに寄せられた。ブ



ラックのレザートップだった。愛子は吸われるように、開けられたドアから入ってしまった。

Aは、黙って前を見ていた。車は国道に出た。二月の六時の道は暗かった。山間の道路の外は白一色の雪であった。大きなカーブの

外側に、山蔭になった空地があった。車はそこで止ってAがドアを開いた。手をとられてそっと引出された愛子は、静かに、しかし次第に激しく口を吸われた。両側に垂らしていた手は、Aの片腕で、がっしり後手に握られた。背は車の窓に押しつけられた。次いで首が吸われた。

「パンストとガードルを脱ぎなさい」

Aは手を離して静かに命じた。

「ショーツも」

黒いミモレのワンピースの下には何もなかった。Aはワンピースのベルトを外し、裾を引き上げて愛子の顔を覆った。冬の外気の冷たさが、愛子の身をふるわせた。いや、冷たさで身をふるわせたので、寒さのためではなかった。冷たさをとおして、しびれてくる心地よさで愛子は、ふるえ続けた。ブラジャーの止めが外された。

「キレイだよ」乳が吸われ、腹が吸われ、腿が吸われた。

「両足をひろげなさい」「あなたの、一番恥

かしいところを、うんと前に出さない、私によく見えるように」

私には、思慮はもうないのかしら。だけど私は一番、私の欲していたことをしている。私の意志でなく、強制されて。いや、強制でなくて私の意志で。

Aの暖かい息が足の根にかかる。ああ、私は処女を失うだろう。通り過ぎる車のライトが、顔を覆う黒いベルベットの中にまで、さして過ぎる。愛子は幼い時の記憶、しかも度々反芻していた記憶を、閉じた目の中に、スライドのように映写していた。

幼稚園に入る前位だったろうか。近所の遊び友達の男の子と、二人だけで家の近くの松林で遊んでいた。松葉で注射ごっこなどしていたのだろう。どんなことばで脱がされたのか脱いだのか、ショーツなしで、しゃがんだ愛子の下腹へ、松葉の鋭い先が、その男の子の純粋な好奇の目が、注がれていた。何度、夢見たシーンだろう。なぜ、その状況を鮮烈に思い出すのか、具体的には考えても見なかった。男の子が誰であったかも記憶にない。ただ、前後のない、そのシーンだけが、何十回となく映写されてきただけだった。愛子はその再現を肉体で欲している自分を知っては

いた。今、そのスライドは一瞬だけ、映写された。

次のスライド……それは、中学生時代の妄想だった。私は、裸で両手両足を大の字に引っ張って固定されている。私の一番、恥かしい所に杭を打ち込まれている。その杭に、八方からロープがかかって、もう動かすことはできない……。

私は、両手をつにまとめて天井からロープで吊るされている。両足は辛うじて爪先が床についているが、うんと広げられている。その下に男の子がしゃがんで、裸の私を見上げています。

耳のそばで、男の声がした。

「今のあなたは、私のなすがままになってしまってください。あとで、あなたを悲しませたくないから、今日はこれで別れましょう。もし、あなたが私に、どのような目に会わされてもよいと思ったなら、（Aはこのことばに少し力を入れて言った）改めて私の所に、いらっしゃい」

助手席に坐るとき、Aはワンピースの後ろを引き上げた。ヒンヤリとしたレザーの感触が、むき出しの尻を冷たく刺戟して、愛子はまた身ぶるいした。

二

Aに車で送られてから一週間たった。「どのような目に会わされてもよいのなら」ということばと、あの時の「どのような目」のシーンだけが思い出された。車に背を押すつけられて、黒いベルベットのワンピースを、たくし上げられた自分の姿。足を開いて胸、腹腿と、口づけされている白い、からだ。これは幼時の思い出や空想ではない。冷たい冬の夜気の肌にふれる感触。ひんやりと滑らかなレザーを直接、肌を感じた感触の記憶。あまり恥かしいので、ふるえが来てしまったのだろうか。愛子にとっては、それは戦慄であった。なのに、「どのような目」を、つい想像している自分。車を背にした時、頭の方が下になって手を後に合わせて、くくられていた……両足の先が、車の屋根の前と後とに広がっていて、大の字に広げられていたら……黒いレザーのルーフトップさえ、懐かしく思い出された。止めどのない空想が広がってゆく。私は、どうかしている。私は未婚の娘。Aは妻子のある年令。結婚の考えられない男に、こんな恥かしい姿を見せようなんて……。あの時は、どうかしていたのだ。無事に帰れたのだから、もうこれっきりでAには会えない。

い。しかし、無事といえるだろうか。それにAは、そのチャンスを与えてくれただけで、実は、私がしたかったことを自ら、したまでではないだろうか。Aでなくて、私が今後、知り会う男性、或は結婚する相手に、このような願いが聞き入れられるかどうか。それにAは確かに、私をわかっていてくれた。

妄想に悶えた一週間。とにかく、Aにもう一度、会って見よう。思慮のありそうなAだから、私の世間的な生活まで、こわしはしない。暴力はまず考えられない。Aの、やさしい、しかし知性的な目を信じることにした。

五時少し前、Aに電話した。取りつがれて出たAに愛子の声は、わからなかった。「あの、先週の金曜日に送って頂いた……」「あなたでしたか」「一度、お目にかかりたいのですが……」「そうですか。では明日、同じころ、電話して下さい」声は、わかる筈はなかった。あの時、愛子は一語も発していなかったから。

翌日、六時、愛子はAのオフィスにいた。Aは突き当たりの窓ぎわのアームチェアで仕事を続けていたようだった。

「恥かしい目にあわせて欲しいですね」
愛子は目を伏せたまま、うなずいた。

Aはドアをロックしに行ってから、愛子に命じた。

「はだかにおなりなさい」

ビルの6階の向いは、大通りをへだてて、まだ明りのついた部屋もあるビルが並んでいた。見る人がいるかも知れない、と思うことが愛子に軽い戦慄を与えた。

脱ぎ終って胸を抱えている愛子にAは椅子をすすめた。

「両方のひじ掛けに両方の足を、掛けて下さい。エ、そうです。こちらを見て下さい」

愛子は目を開けられなかった。いや、目を閉じている方が、より、Aに見て貰えるような気がした。

「いいでしょう。今は私の方を見なくても。だが、もっと腰を前に出して下さい。そう、ぎりぎりまで」

そうすることは、愛子の一番、恥かしい所が、前を向かないで、前上を向くことになりよりAに見られやすくなることだった。

愛子は自分のからだに変化が起きているのがわかった。嬉しかった。声に出して表現しなかった。

「今、あなたの口は、とがって開いている。よほど嬉しいのですね」

この状態の愛子に、このことは、はっきりとは耳に入らなかったけれど、かすんだ意識に、ことばが浸み透って行く感じだった。

椅子が回転して上り始めた。何回転か、したとき、Aがささやいた。

「目をあけてごらん」

愛子は、ビルの外に向いていた。ネオンのきらめきが広く見渡せて、愛子は、かすかにけいれんした。

「目がうるんで、とっても可愛い」

Aは窓側に廻って目をのぞき込んでいた。

「目を閉じないで」

愛子は、Aを見ることは出来なかった。

「さあ、あなたが一番、私に見て欲しいところを開いてお見せなさい」

愛子は、目を閉じてしまった。手は、手はどこにあるのだろう。手は背にあった。いつ

そうしたのか。いつかAに組み合わされたように、愛子の背、腰の上部にあった。私は無意識に、そうしていたのか。

体を左右に交互に傾けて出した手を、愛子は腹の上に置いた。

「自分で開くのです」

愛子は、その近くまでしか、指が伸ばされなかった。Aが、愛子の両方の人差し指を持っ

た。愛子は目を閉じた。

「目を開けなさい」

目を開けた愛子はAの顔を直前に見た。愛らしくて堪まらないといった表情のAの目があった。Aは愛子の目に口づけした。

「私を見るのではありません。あなたを見るのです」

愛子は目を閉じた。

「あなたは見たい筈です。それも、私の目の前で見たい筈です」

そうだ。そんな私を見て欲しいのだ。だけど、これほどまでにひどい目に会わされるとは。どんな目にでもとは、これほどだったのか。愛子は指を離れた。

「いやなら、おやめなさい。あなたの自由です」

愛子は指を元の位置に伸ばした。Aが愛子の頭と背を前に押しつけた。愛子は目を閉じた。それからまた、目を開けて自分を見た。背を元に戻された。愛子は目を閉じて指を離れた。

「あなたは、自分のからだを愛していますね」

そうだ。人から見て醜いところも私は愛している。いや、醜いところほど愛している。

「自分で、自分を愛してごらんなさい。さっ

きのように指を伸ばして」

しばらく待ったAが、愛子の指を、その場所に置いた。

「出来ません」

愛子の目から涙が溢れ落ちた。今日、Aに会って始めての、ことばだった。今まで私は一言の抵抗もせずAの言うなりに恥かしいことをした。だが今、考えもしないで、このことばが出たのだ。愛子に、その経験がないとはなかった。だがそれは、極めて自然に、しかも誰にも知られないで行われたことだった。それを、命令されて、しかも人の目の前で……それは、あまりにも、かけ離れたことだった。だが、それが出来たら、素晴らしい、と愛子は思った。

「そうですね。又、それは、あなたが、それを私に見て欲しい時になさい。今日は、もう終りましょう」

愛子は失望しなかった。今日は本当に、もう充分だった。人生を、そこまで、いつとくに、むさぼることはない。愛子は、惜しんでそれを取り置きたい気持ちだった。

「だが、これから先は、階段を登ってゆくように、一段ずつ、更に恥かしい思いをさせるつもりです。あなたが、それを望むなら。望

まないなら、こないで下さい。私は、あなたの、口をとがらせて開いた、あの顔。あの、うれしさを訴える、うるんだ目。それを見てとても、しあわせでした。私は今、あなたを愛しています。愛する、あなたの、あの顔を見るのが嬉しいのです。だが、あなたには、私の愛を拒む権利があります。又おいでになるかどうかは、よく考えてからになさい」

愛子は、Aが愛子の歓喜の表情を語ったとき、恥かしさで、ぼんやりしてしまっ、あとのことは耳に入らなかった。

三

一週間、愛子は考えなかった。

ただ、待ただけだった。

Aのデスクの上には数輪のバラが、さされてあった。

「脱いで」とAは命令した。愛子はショーツだけになった。Aはしばらく黙っていた。愛子はショーツも下ろして外した。

「この椅子に、反対方向に坐ってごらん」

四本足の、背もたれのある、椅

子。足を開かなければ坐れなかった。Aは愛子の正面に廻った。

「上体を後に倒しなさい」

Aは愛子の開いた両足を押えた。愛子はそれに支えられて反りかえった。Aが肩を床に



つけさせた。

「両手で椅子の足を持ちなさい」

Aは愛子の前に廻って、愛子の両足を高く挙げた。

床に後頭をつけた愛子の目に、自分の両足が高く天井に広がっていた。Aは、その両足を愛子の肩の両側まで降ろした。愛子は少しいれんした。目を閉じた。

「目をあけて。あなたの指で開いて、見るのです」

愛子は、下から見上げた自分のからだを、かわいいと思った。愛子の目は、じっと注がれていた。上からAの目が愛子の目を見ていた。

「苦しくないですか」

愛子は首を微かにゆっくりと横にふった。

「写真をとりますから、そのまま、いて下さい」

前から横から真上からシャッターが切られた。

バラの花が二輪、上から迫ってきて挿し込まれた。シャッターが又、数度、押された。

「あなたは、今の姿勢が特に好きそうですね」

愛子は、うなずいた。これ以上、恥かしい

姿があらうか。その一番、恥かしい姿をAは撮影した。誰に見せるのだろう。人に見せられては堪まらない。いや、人に見られたい。それも私の目の前で。私を知っている人に見せたら大変。でも、私を知っている人に見せたい。

「もういいですよ」

横に転がるしかなかった。しばらく愛子はそのままだった。

「クリスマスには、大小二本のローソクを立てましょう」

愛子は、その光景を想像した。想像しただけで楽しかった。なぜクリスマスまで十カ月もあるのだろう。

「立って下さい、手を後に廻して」

木綿のロープが背に廻した両手首を二巻きした。首には輪がかけられ、胸も二巻きされた。首にはかかっているだけで締まっていなかった。その上からコートが着せられた。

ドアが開けられて、ヒンヤリした廊下を、はだして歩かせられた。階段を二回、上ると屋上だった。塔屋の蔭に立ってコートを取られた。このビル以外からは見えるんだわと愛子は慄然とした。遠所のネオンが現実のものとは思われなかった。後手をつかまれて下の

大通りを見下ろす姿勢にされた。一番、混雑している時刻で、道路に渋滞した車が警笛を鳴らし合っていた。

「膝をつきなさい」

屋上の粗いタイルが裸の膝に快い痛みを与えた。くぐられた両手首をAの片手が握って愛子の首の根まで押しつけた。愛子の頬がタイルに押しつけられた。

「膝を少し開きなさい」

Aの両手が愛子の尻を引きさくかと思われた。愛子は大きく悲鳴をあげた。

四

私がふみにじられるのに、あれ程ふさわしい姿勢が他にあるだろうか。線を引く手は動いていながら、愛子の目は、うつろだった。犬のように扱われて、いや、犬すら頬を地に押しつけられては怒るだろう。しかも、最も恥かしい所を最も高くかかげて見られる。愛子は、今までAに命ぜられた姿勢を、あれこれと思い出していた。それぞれの姿勢が、Aが企図した、その目的のためには、最も適合した姿勢であったように思えた。しかも、その一つ一つが、愛子自身が企図したかのようであり、いずれも繰り返して命ぜられたもののばかりだった。自分一人で、その姿勢を執

ることは勿論、Aの前で自ら、その姿勢をとることも無意味だった。今の段階では、Aが自ら手を下だして愛子を、その姿勢に、ねじ曲げることもできる筈だった。しかし恐らくAは、ことばによってしか、愛子にその姿勢をとらせぬに違いない。ビルの屋上で、後手の両手首を首の根に押しつけた行為を除いては。強制されて、しかも自らの意志で執る姿勢だからこそ、激しい羞恥があることを愛子は知った。そのような心理を、それまでは想像もできなかったが、初めてAに強制された時、まるでAに前以て強制を依頼していたかのように唯々として従った。しかもそれは、愛子が幼少のころから渴仰していたものだったのだ。Aは、その喜びが愛子にとって、どれほど大きく激しいかを知っている。Aにとって愛子の喜びに手をかすことは、愛なのかそれとも悪魔的な喜びなのだろうか。

裸で、後手にくくられ、首に縄をかけられて階段を上って行った、あの時、なぜコートをとってくれなかったろう。愛子は、社会人であるAの配慮を呪った。階段の何段かを、両足をいっぱい、またぎたかった。そうして階段の壁に頬を押し当てて欲しかった。ああ、私は、その姿勢で犯されたかったのだ。

Aに、それを訴えたかった。しかし、Aに会えるのは、まだ五日先だったし、Aに愛子から何を訴えられよう。ただAは、愛子が心で望むことを、皆知ってくれている筈だった。少なくとも過去三回の経験では、Aが愛子に命じたことは、それまで全然、形で希ったことのない未知のことではあったが、結果としては、愛子が心から希っていたことばかりだった。

「その線、違っているわよ。このごろ、いいことあるのね」

弓子が、いたずらっぽく笑いかけていた。

Aに会う時の愛子は、必ずワンピースと決めていた。まだ三月だからコートを、その上に着ていた。Aは、すぐ裸になることを命じてロープを取り出したが、後手には、くくらなかった。首に縄の輪をかけて後に、垂らした。足を広げることが命じてロープを背から腹に引き上げ、顎の下で、つないだ。その時Aは愛子の柔らかい部分をさけるように配慮はしたが、愛子の尻は、初めての体験を鮮烈に受けた。その上からコートを羽織って街に出た。

Aはワンピースを片手に持っていた。行き

つけのバーらしかったが、カウンターには女が一人だった。小さなバーで、テーブルは隅に一つあるだけだった。

「あら、早いね」

一メートル七〇近い、中肉の二十二、三才の女で、薄手の黒いミディのワンピースだった。化粧は殆ど目立たず、バーというより洋装店のマネージャといった感じで、眼尻が少し上がり、あごはとがって、鼻が細く上を向いているのが印象的だった。Aと他人ではないと愛子は直感した。

「しばらく女の子は出勤しないけど、可愛い子ちゃん、ご持参だから、いいわね」といった。愛子はサラダをとり、Aはオンザロックを注文した。女の子が一人来て、着換えに奥に入った。

女がカウンターを出て愛子にささやいた。「お立ちなさい。コートの下は何もないでしょう」

愛子は心臓が止まるかと思った。愛子は顔を伏せて立ち上った。女はコートの前を払げて愛子の胸を見、腹を見た。ついで後をたくし上げて尻を見た。腹を見るときは特に時間がかかったように思え、愛子は客の来ることを恐れたし、同性に見られるのが、これ程、

恥かしいこととは思っていなかったの、かすかに、けいれんした。旅行で友人と浴場で見合すのとは全然、違っていた。裸であるべき場所ではなかったし、初対面の女性に、しかも男性によって不自然な姿、特に身体を縦に割るという、初めて愛子が得た強烈な刺戟的スタイルである。しかも女は、それを見抜いていた。

女は、ふるえている愛子の頬を両手ではさんで、閉じている愛子の、まぶたに唇を当てた。次いで愛子の唇に唇を当てた。

着換えをすませたホステスが出てきてAに話しかけた。女はカウンターに戻り、新しい客が来て、二人は外に出た。女が送って出てAに何か、ささやいた。

「あの子は恵子といいます。私の友人に頼まれて、数日間の臨時マダムをして貰っています。今恵子が、何と言ったかわかりますか」
愛子には色々と想像できるような気はしたが、答えられなかった。

「恵子は私におねだりしたのです。いや、前からの約束でした。叶えてやるつもりです。もっとも、あなたが嫌でなかったらね」

恵子の要求は、Aによって、愛子を提供して行われるものと想像されたので、愛子は

身ぶるいした。それは軽い期待に似たものだった。具体的には、どうなのだろう。接吻されたことから推して、そのような要求かも知れないとも思った。愛子には、女性に肉体を愛された経験はなかった。いや、近い経験は度々あったけれど、今夜のように相手の意志だけによる行為に襲われたことは始めてだった。恵子がAの女である以上、当然、嫉妬すべき相手と考えたが、その感情は湧かなかった。

色々と想像できるような気はしたが、あなたが嫌でなかったらというのは、恵子をさすのか、恵子の要求の中味をさすのか、要求の中味は……愛子は期待で胸が、はずんだ。特に、Aによって、Aの女に自分を提供されること、とても好ましく思われた。やはり私はAを愛している。私はAの女なのだ。Aに所有された女として、Aの女に提供される自分が、あわれだと思った。そして、それが自らを、いとおしんでいることに愛子は気づかなかった。

ビルの地階にAの車があった。愛子を運転席に坐らせてAはダッシュボードを開いた。いくつかの封筒のうちから分厚いのを引出し

たAは、中から写真をとり出して愛子の膝の上に置いた。半ば口を開いて目をうるませた恵子の顔があった。

「恵子が、あなたを見た以上、あなたは恵子を見る権利がありますね」

Aらしくもない言葉だと愛子は思った。恵子こそが見られる特権を行使しているのだ。

愛子の今まで執った姿勢は、全部、恵子が演じていた。いや、その数倍の、愛子の知らない姿勢を恵子は演じているのだ。愛子は激しく嫉妬した。

愛子が一番、嫉妬したのは、先週の自分の姿勢と同じ姿の恵子に対してだった。異なるのは、ひざまずいているのが、屋上でなくて草原であり、顔が愛子でなく、恵子であることだった。腰を高くあげて見せ、膝は地につけてはいるが、足を揃えて伸ばし、カメラは左後ろ上方から恵子の体を、とらえていた。縄は後手に交叉した手首と首とだけにかかって、縄尻は立木につながれていた。愛子は真横に向いて頬をタイルに押付けられていたのにかかわらず、恵子の顔は殆ど真後ろ、つまりカメラのレンズに、いやAの目に正面を向けているのだ。しかも、その目は誇らしげな笑みを、かすかに見せて、口は明らかに誇り

によって軽く引きしめられている。高く突き上げられた白い尻には、二枚の熊笹の葉が載せられていた。当然、葉のない写真がある筈だし、二枚の葉の傾斜した角度も愛子を激しく苦しめた。愛子は、Aへの愛にかかわりなく、恵子を嫉妬している自分を知った。

愛子が運転して、初めてAに裸にされた山蔭に來た時、Aは車を停めることを命じた。愛子はコートを取られて、身体に縦に縄をかけられたまま後手にくぐられた。後頭を地につけ、車に背を当てた。両足を顔の両側に下ろして、Aのオフィスでバラを挿された時と同じ姿勢になった。黒っぽい車体に、さかさに白く張りつけられた自らの、からだを、距離を置いて目に想像し、冷たい車体の感触とともに愛子は楽しんだ。

愛子は、この形で犯されることを望んでいる自分を知った。

五

日曜日から旅をするから今夜はダメだと答えられて愛子は戸惑った。次のことを、どう言ったらよいかわからなかった。さっきまで色々と想像し希んでいたことが音を立てて崩れ落ちた。つい涙ぐんでしまった。と、A

が言った。

「いっしょに、旅に出ませんか。日帰りにします」

午前六時、愛子はバス停で待っていた。ブルージェイのハードトップが静かに寄せて來た。Aは、B市とC市を視察する予定だと言った。

午前六時は、まだ暗かった。七時半頃から遠景に山が見えだし、八時頃、国道を外れて山道に入った。急斜面に段をつけた道で、片側は溪流の音が低い所で鳴っていた。待避所に車を止めて二人は谷川に降りた。道から二十米も下に降りた所に、やや広い岩場があって、小さな渚があった。壺の底から見ように、周囲は切り立った崖に見えた。ここから道の方は見えなかった。大きな闊葉樹が水の上に枝を張っていた。水は、岩の上に浅い渚と砂地を作っていた。愛子は裸になった。三月の朝の清冽に身をひきしめた。渚の上一メートルぐらいの太い枝の上に立った。Aは幹を抱いて両側の枝に広く足を張るように命じた。

足首がタオルで、しばられた。そのタオルに犬の首輪がさし込まれて、木の枝にとりつ

けられた。Aは愛子の裸の背を抱きかかえろと、次第に後に倒した。愛子は足を伸ばしたまま倒れていったが、完全に逆さまになった時、ナチュラルの髪の毛の半ばは水中にあった。Aが流木を岩の間に渡して愛子の後頭を支えた。手が後手にしばられた。

「苦しい？」とAが聞いた。愛子は、かぶりをふった。

前、上、横からシャッターが切られた。紡錘型の木の葉の葉軸が愛子の体に挿されて、又、シャッターが切られた。

「まだしばらく、大丈夫？」とAが又、聞いた。愛子は、うなずいた。

愛子の体に柔らかいブラシで泡が塗りつけられ剃刃の刃が外側から順次、動いてきた。

「苦しくなったら言って下さい」

途中でやめられては、たまらなかった。しかし柔らかい部分にかかると、愛子は堪えられなかった。皮膚を指で掂げられるたびに、いく度か、意識を失いそうになった。

「あなたは、生れたままの状態になった。私は、より清純な、あなたを作ったのです。これから私に会うときは、いつもこの状態で、いて欲しい」

普通の裸の概念より、より一層、むき出し

にされた自分が限りなく、いとおしかったし、Aが愛子の清純さを象徴しようとした意図もわかるような気がした。

愛子はコートだけで助手席に乗った。首に縄が掛けられて体は縦に割られていたが、手は自由だった。

B市で愛子は、三十分程、待った。駐車した所は、寺の境内らしく、子供達が地面にしゃがんで遊んでいた。愛子は幼時の、あの度々、反芻した体験を思いだした。「この駐車は困りますが……」

愛子は慌てて腰を上げた。縦の縄が体を刺戟した。運転席に移るとき、コートの膝が割れた。ストッキングのない腿に僧の目が注がれたに違いない。首の縄も見えたかも知れない。頬を染めて愛子が静かにスタートした時、バックミラーにAが写った。

C市に向う途中で道は高原の麓を走った。高原に登る道に入った時は陽が中天に近く、草原はキラキラと、まぶしかった。



笑鬼

鉄道線路の手前で車から降りた愛子の目に山並みは青くひろがって、自然の他は何も見えなかった。遠くトンネルが小さく見えた。Aは愛子のコートを取って後手に括った。ひざまずくことを命ぜられた愛子は、恵子の写真を思いだした。同じ写真が作られる。愛子は胸を、はずませた。しかし線路からは十メートル位しか離れていない。汽車が通ったらどうするのだろう。コートをかけてくれるだ

ろうか。愛子の体は、わずか、けいれんした。

頬を草のある地面に押しつけられて、足先の方に顔を、ねじ曲げられた。恥かしい姿に顔がなくては無意味だった。しかし、なぜ体を縦に割っている縄を取り去ってくれないのだろう。恵子の写真では縦の縄はなかった。剃刃を使ってもまだ私を裸にして置いて、それなのに衣服に近いものを、まとわせたままにしている。愛子は大いに不満だった。

Aは、あたりを見廻してから、車からカメラを取り出して来た。

愛子は、もどかしかった。目でAに訴えた。Aが笑顔で言った。

「お尻の縄を取って欲しいのですね」

愛子は真っ赤になった。Aには何もわかっていないのだ。私の恥かしい願望を知っている予定の行動なのだ。

「取らない方がいいのですか」

愛子は、Aにはサディスティックな面もあると思った。

「お尻の縄をとって下さい、と言いなさい」

愛子は小さな声で取って下さいと言った。

「全部の縄を取るのですか。手を後にくくっている縄も、首にかかっている縄も」

愛子は首を、かすかに横にふった。

「手の縄だけ取って欲しいのですか」

愛子は首を振った。

「首の縄も手の縄も、あなたは好きなのですね」

愛子は、うなずいた。

「では、あなたの、お尻に喰い込んでいる縄が嫌いなのですね」

愛子は動かなかった。返事の仕様がなかった。私に恥かしい意志表示をさせて楽しみたいのだ。

「お尻の縄は、いやなようですから、今後、絶対に、ここには縄をかけないようにしましょうか？」

愛子は首を振った。

「いやじゃあないのですか」

「好き！」愛子は叫んだ。

「あ、口が利けるのでしたか。では、お尻の縄は、このままにして置くのですね」

愛子は激しく首を振った。

「わからないですね。お尻の縄は好きだ。だけど、取って欲しい。きつく喰い込み過ぎて

いますか」

愛子は又、かぶりを振った。Aは嬉しくて堪まらないといった風に、愛子の顔を見ながら笑っている。太陽は中央に上って、愛子の尻の上からかげろうが立っていた。この会話は、Aにとっては、猫がジャブを繰り返して虫をなぶるような楽しみらしかったが、愛子にとっては、かなりの刺戟だった。人が来はしないかということも、愛子をハラハラさせた。汽車が来るかも知れなかった。それよりも、Aに向って尻と顔を同時に向けたまま会話を続けることが堪えられなかった。かなり間を置いて、Aは四周を見廻していた。

「きつくはないのに、取って欲しいのですね」

愛子は涙を流しながら、うなずいた。

「つらくて泣いているんですか」

愛子は首を横に振った。

「うれしくて泣いているのですね」

愛子は、うなずいた。

「なぜ今お尻の縄を取って欲しいのですか」

「わけを言ってごらん下さい。取ってあげます」

Aは愛子の目を、のぞき込んだ。Aは笑っていないかった。愛子は目を閉じた。

「言わないのですね。では、取りません」

愛子は目を開けた。Aは横を向いていた。

愛子は失望して目を閉じた。

「あなたは我儘ですね。正確に言葉で表現しないと許しません」

今までは何も言わないでも、愛子の欲することをしてくれたのに。判っているのに。愛子はうらめしかった。Aに、愛子の言いたいことを言わねば欲しかった。

「絶対に言わねば貰います」

Aのことが終ると同時に、激しい音と激痛が尻に走った。両方の丸い山に交互に、それは襲いかかった。愛子は堪えた。数度目からは痛さを、さほど覚えなかった。むしろ安らぎがあった。恥かしくて言えないことを言わないで済むこと、それ以外にも何か愛子の心に安らぎを与えた。

Aが打つ手を止めた。目を開けると、Aが皮ベルトを手にして愛子の顔を見ていた。

「あなたは、こんなことをさせて楽しんでいきますね」

愛子は首を振った。

「楽しんでないまでも、平気ですね。安心していきますね。そうはさせません」

ベルトが振り上げられた。愛子は目を閉じ

た。丸い山と丸い山との間に激痛が走った。

愛子は大きな叫び声をあげた。

「まだ縄があるから、いいのです」

「こんなにしても、お尻の縄を取り去って欲しいのですか」

愛子は、うなずいた。

「痛い目に合わせるのは、好きではありません。だが、あなたに宣言しましょう。あなたは今から、私に絶対服従をすることを強制します」

愛子は目を閉じた。

「黙っていますね。いやなのです。では、あなたは、自由です。縄を解いてあげましょう」

愛子は目を開けて首を、はげしく振った。

Aの目に哀願した。

「あなたの、その目が、とても可愛い。だが今から以後、絶対服従でないと、あなたと私とは、これからです」

大粒の涙が愛子の頬を流れ落ちた。

「では服従するのですか」

愛子は、うなずいた。

「さあ、なぜ、この姿勢のまま、お尻の間の縄をとって欲しいのか、言いなさい」

愛子は、Aの目を、細くなった目で凝視し

た。

「言わないのですね」

愛子は口をとがらせて小さく開いた。しかし言葉にはならなかった。

谷間を再び激痛が走った。愛子は大きく絶叫した。

静寂の中に愛子は静かにゆっくりと甦りつつあった。けいれんが断続して愛子の体を過ぎていった。繰り返し繰り返し、過ぎていった。もうろうとした意識の愛子の薄くあけた目に、Aの顔が、かすんで浮んで来た。

「あなたは幸福だと思いますか」

Aが愛子の顔の近くで力強くささやいた。

愛子は大きく、うなずいた。

「もう、醒めましたね。では、さっきの、答は？」

「なぜ今だけ、お尻の間の縄を取り去って欲しいのです。答えなさい」

「もう一度、打ちましょうか」

「よししましょう。だが、言わないでは済ませません。言わないなら、私はもう、あなたを恥かしい目に会わせることを止めます」

愛子は口を開こうとした。が、言葉が出なかった。

「言わないのなら、私は去ってゆきますよ」

「言います」

Aは立上って横を向いてくれた。

「見て欲しいんです、私」

Aが、ふり返って笑顔を見せた。

「何を見て欲しいのです」

「お尻の縄を取って、私を、見て欲しいんです」

Aは首縄に結んだ縦縄を解いた。

「今日は、そこまで言っただけで許してあげましょう。よく見てあげます」

Aは高い所から愛子を見つめた。

愛子は目を閉じた。長い長い歓喜の時があった。けいれんが始まり、叫びたい心の躍動が続いた。

愛子が再び目を開いたとき、Aはカメラを構えていた。

上、横、前からシャッターを押した。次いで広い草の葉が二枚置かれ、葉柄が挿入され三度、シャッターが切られた。

ああ、恵子と同じ写真ができる。愛子は満足でいっぱいになって、うめいた。

真昼の太陽の下で。

(おわり)

連載・M派交友録 (五十六)

ポ

ル

ノ

女

優

加納吟子の巻 (3)

カット・春日田春夫



腐肉の餌

岩見は皿小鉢を洗っていても上の空で、同じ皿を二度、洗ったりしていた。

「痛いよ。アッ、あ、あう……」

吟子の声が寝室から聞えてくる。

——誰だろう。誰なんだ相手は——

岩見が部屋へ入った時は、吟子もその相手も、まだ寝ていた気配だった。物音で吟子が目をさまし、岩見と分かれると皿洗いを命じた。それから吟子の嬌声がおこったのだ。と言

うことは、相手の男の方から仕掛けたのに相違ない。岩見という他人が侵入して来たことを承知で、吟子に挑んだ図々しさは並の神経の持主ではない。

吟子の荒い呼吸と、「ウッ」というような

短い声が洩れてきた。どうやら本番に移行したらしい。

男の声がした。言葉は聞きとれなかったがその声を聞いた瞬間、

——佐戸崎だ！——

昨夜スナックで飲んだあと、また吟子のところへ引き返したのだ。

——何という図々しい奴だ——

ドキドキと動悸がするほど、怒りがこみあげてきた。

昨夜は決闘も辞さぬ強い意気込みで「今日こそ対決してやる」と臨んだのだが、結局は言いくるめられてしまった。

鬼山 絢 策

殊に気になったのは吟子に新しいパトロンがでかかっているということだった。それを佐戸崎が抑えていると言う。「お前のためにだぞ」と恩に着せたが、その一言で勢い込んだ岩見の闘志が萎えたと見るや、いつもの状態に戻って、岩見を舐めきった態度に出たのだ。

——何と言って佐戸崎を面詰すべきか——
「俺ばかりを責めるが、吟子はディレクター

登場人物紹介

加納吟子 28才。アングラの女優からクラブのホステス、そして今は、テレビのカヴァーガールに見出され、週刊誌に「Sの女性」として売り出す。

佐戸崎昂 36才。画家。怠惰でS的な性格。女を食いものにしていくプレーボーイ。吟子を百万円で岩見に売るが、蔭で吟子と関係し、岩見から金を絞り取ることばかり考えている。一方で吟子を売り出して、うまい汁を吸おうとも思っている。

岩見崇 37才。画家。吟子に魅せられて奴隷となる。四百万円ためた貯金も吟子と佐戸崎に取られて、今は無一文。自分のマンションまで吟子に提供してしまつた。佐戸崎を憎むがマゾヒストの立場から、どうしても勝てない。

の北尾や、いろんな男と寝てるんだぜ。それを制する権利は、お前には、ねえだろう」とも言った。「お前の舌だけじゃ満足できねえんだぜ」と言われた時には岩見の反抗心は完全に萎えてしまった。

だが、それでは佐戸崎に百万円も払ったのは何のためだ——

吟子と手を切ると約束したことが、全く無意味になってしまったではないか。今更、金を返せと言っても返す相手ではないし「金なんか要らない」と言ってしまったのも、まづかった。

住戸崎との交渉は、へまにへまに行ってしまった。佐戸崎の思う壺に、はまって行ってしまうのだ。

岩見は吟子のいる前で佐戸崎と争う気はしなかった。と言って佐戸崎の、あのノッペリした顔を見るのも嫌だった。

後片づけも済んだし、このままそと帰ろうと思った。エプロンを脱ぎかけたところに「タカシ」

と吟子の声が、かかった。

「仕事、終わった？ 終わったら、おいで」

それは、あまりにも惨酷な命令だ。

佐戸崎との痴戯を目の前で見せつけようと

いうのか。

「痛い！ ダメよう。もういいだろ」

「フフフフ」

佐戸崎の太々しい笑い声が聞える。

二人の痴戯の室へ呼び寄せることを命じたのは佐戸崎ではないか？ 昨夜の対決で岩見が、ひるんだと見るや、それにつけ込んで、完全に主導権を握み、二度と反抗的な態度などをおこさぬように、ここで自分と岩見の格差を、はっきりつけておこう。そのためには岩見に決定的な凌辱を与えることである。そういう佐戸崎の魂胆なのだ。

「タカシ、おいで。こっちへ、おいで」

吟子の声が、また聞えた。あまい声だが、岩見の耳に突き刺さるように痛くひびいた。しかし、とても二人の抱き合っている姿を見るのは忍びない。

岩見はエプロンを脱ぎ、足音をぬすんで部屋を出て行こうとした。

その時、寝室から吟子が現れた。全裸だった。

慾情をほしいままにした部分を隠そうとせず、岩見の方に露わに見せつけていた。

「どしたのさ。フツッ」

それは見せびらかしているようにも受け取

れた。

帰るに帰れず、岩見は立ちすくんだ。

困惑する岩見を、たのしそうに眺める吟子は、腰に手をあてがって、

「たばこ」

悠然と女王の貫録を見せて命令した。

テーブルの上のポルモールを一本、抜いてわたし、火をつけてやる。

吟子は煙草を吸いながら、ソファへ、だらしない恰好で腰をおろした。

「おいでと言ったのに何故、来ないの」

情痴のあとの疲労も見せず、あたらしい獲物に向って、また別の情慾をもやして、目をギラギラさせていた。

「タオル」

浴室へ行って乾いたタオルをとってきて、

吟子に渡そうとした。

「お拭き」と吟子は言って、両足を上げた。

「女王さまの身体が濡れてちゃ、氣持が悪いだろう」

岩見は吟子の前に座った。豊かな太股から中心に向ってベトベトに濡れていた。

岩見は左手で吟子の、ふくよかな内股にさわった。プンと、はね返ってくる弾力のある皮膚は、不規則な生活が続いているにもかか

わらず、若くみずみずしかった。右手のタオルで濡れた部分を丹念に拭きとった。

「この頃、忙しくて、お前を可愛がってやれなかったわね」

吟子は無難作に片足をあげて、ふくら脛を岩見の肩に乗せた。

「いつも家の中の仕事を、よくやってくれるから御褒美をあげるよ」

肩にかけた足が首にからみつき、グイと手許に引き寄せられた。

鼻先にかぐわしい女の匂いがたちこめた。

昨夜、吟子の帰りを待つ間に、吟子の脱ぎ捨ててあったパンティの匂いを嗅いで吟子をしのんだが、その時よりも、はるかに強烈な匂いだった。

だが、その匂いの中に異臭が、まじわりこんでいた。ツンと鼻にくる栗の花の匂い！

「ホラ、どうしたの？」

見上げると吟子が口をゆがめてサジスチックに、わらっている。

——これはあまりにも惨酷です吟子さん——
岩見は、ためらい、哀願するような悲しい目をした。

「タオルで拭けないところは、お前の舌で掃除するんだよ」

だが匂いは、ますます強烈に鼻をつく。その匂いを嗅いでいると、毒ガスでも吸い込んだように理性もプライドも闘志も、とろかされてしまうのだ。

吟子は岩見の方から、すすんで口を寄せてくるのを待っていたが、泣き出しそうな顔をして、ためらっているのを見ると、クイと膝を手前に寄せた。簡単なそれだけの動作で、岩見の唇は触れてしまうのだった。

密着してしまふと、岩見は観念した。観念というより、もう何も分らなくなって、いつものように口を開いてしまった。

「フフフ、何さ。なんか気に入らないような顔つきだね。あたしが可愛がってやろうってのに何が不満なのさ。え？ 何だよ」

それは吟子自身で、よく承知していることなのだ。ベトベトに濡れたものがグツと口をふさいで、しゃべれなくしている。質問はしていても、答を必要としないことが、それで分かる。

佐戸崎の、いかり狂ったものが、さんざん暴れまわったであろう。

ライオンの喰い散らかしたあとの腐肉、おあまりを頂くハイエナの役が自分なのだ。

佐戸崎は、吟子と同じような完全な征服の

快感にニヤニヤ笑っていることだろう。

口惜しくってもどうすることもできない。

命令は敬慕する吟子の口から出ているのだから、岩見としては涙をのんで服従するより方法がないのだ。

夢を破る男

「ねえ、ちよいと。灰皿とってよ」

岩見を床の上に仰向けに押し倒し、その顔の上にドッシリと尻を据えておさえつけた吟子が、煙草を喫いながら言った。

「チョッ、人使いの荒いやつだな」

ハッとして岩見は上目越しに見た。佐戸崎がワイシャツを着ただけで立っていた。さっきから二人のプレーを見ていたのだ。

カツと頭に血がのぼったが吟子の身体が自由を奪っている。口さえきけぬ状態だった。

羞恥と屈辱と憤怒が、おどろおどろと、わきあがってくる中で岩見は、ふしぎな陶酔を味わった。

それは吟子の身体が著しい反能を見せたからだった。

ピク、ピクッー

けいれんするように舌を締めつけたのだった。

た。そして両腿に凄い力が加わり、岩見の首を締めつけた。

「ウツ……」

苦しいうめきを上げながら、岩見は快感がジーンと脳髓をはしった。

平然と笑っている吟子。こともなげに煙草をくゆらす吟子。だが、その落ちつきは上半身であって、下半身は燃えているのだ。

岩見の口に、あたらしい熱い流れが、もたらされた。

——ああ、吟子さんは感じているのだ。凄く感じているのだ——

それを佐戸崎に見せまいとして、極めて平然としている。

——吟子さんは喜んでいいる。それなら奴隷として満足だ。やり甲斐のある奉仕だ——

消極的だった岩見の舌が、俄然、活潑に動き出した。

吟子はジーンと、こみあげてくる快感を、

佐戸崎にさとらせまいとして唇を歪め、太腿に力を入れて、一層、岩見を苦しめた。岩見を責めることによって、昂まりをサジスチックなものに転嫁しようとしているのだった。

「どうだい岩見君。今朝の味は特別だろう。フフフフ」

完全に自由を奪われた敗者に向かって、征服者は、なおも残酷な言葉で切り刻んでやろうとしているのだ。

「ああ、オシッコが出たくなった」

「ちようど、そこに『便器』があるじゃねえか。飲ましちやえよ」

岩見は勝ち誇った佐戸崎の顔を見まいと目をつぶっていた。

ワイシャツ一枚を着ただけの佐戸崎は、岩見の位置からなら、ワイシャツの下が覗けるであろう。それを誇示したかったのだ。

「おい、目をあけて、こっちを見て見ろよ」

岩見は反射的に、なお堅く目をつぶった。

「アハハハ、御機嫌が、いいらしいじゃねえか、吟子。此奴を可愛がってやるのも悪くねえだろう。おい、吟子。見ろよ、俺の方を」

岩見が見ないので吟子に見せた。

「フン、きりがいいんだからね、あんたときたら——」

佐戸崎の顔に残忍な色のはしり、或行動に出ようとして、二人の傍に歩み寄った。

その時けたたましく電話のベルが鳴った。

チョッ！

舌打ちして佐戸崎は渋々、送話器をとりあげた。

「ハイ、吟子ですか。おりますが。ああ、里見さん。僕ですよ。この間は、どうも。えっ

お昼に。今、何時かな。じゃ時間がないな。どうしても、お昼ですか。わかりました」



イメージギャラリー

『絞め殺してあげようか!』

春日田春夫

佐戸崎の応待は、まるで亭主づらである。吟子と呼びつけにして、誰とも話している。

「おい、出番だぜ。里見監督が、すぐ来いよ。いよいよ、本決まりだぞ」

「あら、そう。うれしい!」

息もできずに窒息寸前の岩見が救われた。

吟子が、まるで用の済んだ便器から立ち上がるみたいにスツと腰をあげたからである。

すぐ鏡台に向って化粧をはじめ。

「もう時間がねえんだよ。すぐ行かなくちゃ早くしろよ」

「だってえ、顔ぐらい、ちゃんとして、行かなくっちゃ——」

佐戸崎はサッサと洋服を着ると吟子を、せつついた。

「ぐずぐずするなよ。俺、先へ行くぜ」

「待ってよう、一緒に連れてってえ」

あまったれた声を出し、ドタバタと忙しく服をつけて、

「家ん中の掃除、ちゃんと、しときなよ」

と捨てぜりふのように言い残して、あわただしく出て行った。

——まるで夫婦気取りだ——

佐戸崎の言うことなら、何でもハイハイときている吟子。自分に対して女王として、

女主人として君臨する吟子。佐戸崎と自分を比較してみた場合、あまりにも、そこに大きな差があるのを、岩見自身、この目で見せつけられたのだった。

吟子とは一度ゆっくり話し合おうと思っていたのだが、このような状態では話をする意欲も失ってしまった。

部屋の主が出て行っても、まだ、ほのかなあまい匂いが、ただよっていた。或は岩見の口辺から匂うのかもしれない。

——ああ、所詮、俺は一生、奴隷として甘んじなければならぬのか——

もとよりそれは自ら望んだことではある。

美しい吟子の奴隷として身のまわりの世話から夜の奉仕まで、あまく悩ましい毎日を送れたら——と、それはマゾヒスト岩見の描いた夢だった。その夢が現実として叶えられているのだ。

それなのに岩見は、この頃、自殺したくなるほど苦悩に打ちひしがれている。その原因は何か。言うまでもなく、佐戸崎という、自分の描いた夢の中には現れなかった人物が出てきて、めちゃくちゃに、ひつかきまわされているからだ。

——佐戸崎さえ、いなければ——

とも考える。そうすれば理想的な夢の通りに実現するか？

そうは行かない。必ず第二の佐戸崎、第三の佐戸崎が現れるだろう。吟子の身边には、そうした男性がウヨウヨしているのだ。

岩見は第二の佐戸崎が現れた場合を想像してみた。それは六十の爺さんかもしれないしテレビのディレクターの北尾とか、いろいろな男を、あてはめてみたが、その男に対する嫉妬とか憎悪は感ぜられないのだ。佐戸崎と比較すると、まるで違うのである。佐戸崎だけは、どうしても許せなかった。

それは何のため——

佐戸崎に、だまし取られた百万円の金が惜しいからか。それも、あるだろう。約束を裏切った背信行為の故もあるだろう。いままで何かにつけて、ひどいめにあってきた、積年の怨みの故もあるだろう。

だが佐戸崎に楯つけば、へたをすると吟子を失うことになるかもしれない。今では、それほど吟子をガッチリと握っている佐戸崎の存在を、認めないわけには行かなかった。

悪女の化粧

S・Mプロというポルノ映画専門のプロダ

クションから吟子を主演とする作品をつくりたいと監督の里見吉郎から佐戸崎を通じて申し込んできた。吟子は一も二もなく、とびついて夢中だった。

だが話が進んで台本を渡してみると、必ずしも主役というのではなく、S・Mプロでは大先輩の大畑ルミ子の方が主役だった。

ギャラの十万円というのが安すぎると佐戸崎が一応はゴネてみたが、映画に初出演なのと、二流のプロのギャラとしては、これでも破格なのだと言われて渋々承知した。

一本、撮ってみて、よければ専属契約するし、そうなればギャラも上がるし、主役の座にもつけると言われて、吟子の方が乗り込んできましたのだ。

「出番は大畑ルミ子より少ないけれど、ほんとの見せ場は、あなたにやってもらうんですからね。一生懸命やって下さいよ」

里見監督から、そう言われて吟子は張りきった。なるほど「悪女のいけにえ」という題名が示す通り、その悪女に扮する吟子が、或面では主役であるかもしれない。

「とに角この作品は、あなたの持っているサジスチックなイメージ、それを強調して、男性のマゾではなく、女性のサジスチンとして

の魅力を狙いとしてるんですからね」
という言葉も吟子をハッスルさせる殺し文句だった。

それに、この映画には若井雅也が出る。

若井雅也と言えば、往年のスターである。

十年前は押しも押されもせぬ二枚目スターとして、佐田啓二とか、川崎敬三などと肩を並べた人気スターだった。その後、映画界から暫く姿を消していたが、三流プロダクションのポルノ映画にまで出るというのは、かなり落ちぶれた存在だが、それにしても往年のスターである。その若井が悪役で、やくざの親分になって、その情婦役の吟子は若井とファックシーンを演ずることになっていた。

岩見は吟子のマンションへ行くのが、楽しさと恐ろしさ、おどろかしさがミックスした複雑な気持ちだった。吟子の顔は見たいが、佐戸崎には会いたくない。この間のような、ひどいめにあうのは、まっ平である。

だが、やはり行かずにはおられないのだった。

その日も仕事を持って行って、吟子のマンションで描いていた。

十二時を過ぎた頃、吟子が帰ってきた。

この頃はクラブメルシーにも、出たり出なかったり、ルーズになっていた。

珍しく一人で、少し酒は入っているようだったが、機嫌はよかった。岩見は二人きりのチャンスが久し振りに得られたのが嬉しく、何くれとなく身の廻りの世話をした。

「これから忙しくなるんだよ、映画の仕事だね」

台本を始終、手離さず持って歩いてると見えは、皺だらけになっていた。

「悪女の役さ。フフ、男を殴ったり蹴ったりするのさ」

岩見は台本を拾い読みした。演技についての委しいことは書いてない。だが、こういう役は岩見としては不賛成だった。役柄もそうだが、S・Mプロなどという三流のポルノ映画に出ること自体が反対だった。折角テレビで売れてきているのを、格下げして身を落すようなものである。

「映画に、どうしてもお出になるんですか」

「そうだよ。どうして？ 反対なの」

「何だか吟子さんの格が、おちるような気がするんですが……」

遠慮がちに言った。

「フフフ、そんなことないよ。相手役は若井

雅也先生だよ。若井さんとファックシーンをやるんだから」

名前は、もちろん知っていたが、若井はすでに、とうの立つた落ち目のスターだ。

「何さ、お前、嫉けるの？」

「いえ、とんでもありません。そういうことは毛頭ありません」

吟子は鏡台の前でメーキャップしていた。

眉の下にセピアのシヤドウを塗り、目尻に墨を入れて、かなりどぎつい顔をつくった。

「どう？ この顔」

「ハ、凄いですね」

吟子は鏡に向って、笑ったり睨んだりしていたが、

「ダメだわ」

顔を洗ってきて、また、やり直す。

「佐戸崎君も出るんですか」

「あれは出やしないよ。役者じゃないもん」
いろいろ工夫したが、どうも気に入らないと見えて、また顔を洗ってきた。

「ああ、じれったい。うまく行かないわ」
鏡を見つめていた吟子は、

「そうだ。ちょっとお前、此処へおいで」
岩見を呼び寄せた。そして、丸い椅子から

立ち上ると、

「この上に頭をのせてごらん、仰向けに」

岩見は言われるままに、椅子にもたれかかるようにして足を投げ出し、仰向けに頭を乗せた。吟子は、いきなり足を上げて顔の上に跨がった。アッという間もなかった。

「フフフ、苦しい」

ピッタリと口をふさいで、

「苦しくても我慢おし」

そのまま鏡に向ってメーカーキャップをはじめた。

「男を虐めながらやれば気分が出て、いい顔がつくれるかもしれないよ」

吟子の体重がモロに顔へ重石となった。わずかに鼻だけは塞がれずにいたので、呼吸はできた。

「ホラ、しっかり奉仕するんだよ、バカ」

ひとゆすりで口が大きく開けられた。

椅子の角から直角に首を曲げているので、次第に首が痛くなってきた。

三分、五分とたつうちに、首の骨が折れるかと思うほど、苦しくなってきた。

「ウ、ウ……」

「何言ってるやがんだい。我慢しろ。ウン、いい調子になってきたわ」

吟子の気に入るメーカーキャップができるなら

あくまでも我慢しようと思った。

痛みが極限に達するとジーンと、しびれてきた。だが吟子が燃えてきているのは、肌で感じとれる。苦しい中にも、あまい蜜を吸って耐えた。

「どう？ ホラ！」

ようやく出来上った顔で吟子は岩見を見下した。今度は、化物みたいな、どぎつさがなく、眉根をちょっと釣りあげ、目尻に墨を入れただけだが、下から見ると目が凄く綺麗だった。

——すばらしいです——

岩見は、まぶしそうに見上げた。

「フフフ」

口を、ちょっと、ゆがめて笑うと、あごにくびれができるのが魅力だった。

「サア、今度は次の稽古だよ」

吟子は鏡台から立ち上った。

「この野郎ッ」

吟子は思いきり足をあげて岩見の肩を蹴とばした。岩見はバタンと、ひっくり返るが、すぐ起きあがる。

「この野郎ッ」

また足が上って頭を蹴とばす。転がってもすぐ起きあがる。

「この野郎ッ！ くたばりやがれッ」

吟子は足を岩見の頭へあてがって蹴倒す。起き上り小法師のように、岩見は蹴られても蹴られても起き上がる。

男を蹴とばすシーンの稽古をしているのだ。

「この間抜け野郎ッ」

吟子の足には次第に力が加わっていった。

「もっと派手に転がりなよ。この野郎」

五回も十回も蹴り続けられた。

「ああ、くたびれた。こっちへおいで、飲ましてやるから」

トイレの便器に顔をのせるように命じた。

「フフ、まさか、こんなところは撮らないだろうけど。でも監督がやれと言え、やってやるよ」

ペタリと跨がって、のしかかされると、忘れていた首節の痛みがジーンと頭へ響いた。

「ボラ、もっと大きく口を、お開き！」

吟子は腰を浮かした。火山が爆発する時のように、山肌がもりあがり、グーッとひらいたかと思うと、叩きつけるような奔流が、殺到した。喉の奥まで突き通すような勢いで流れ込み、忽ち口からあふれ、岩見は咳き込んだ。

「アハハハ、アハハハ」と身体を揺って笑うたびに、尿流は鼻から額のあたりまで乱れとんだ。

スカートを捲くった両手を腰にあてがい、吟子は目を白黒する岩見を見下して、笑い続けた。

狸寝入りの前で

翌日、一日中、首が痛かったが仕事は意外に、はかどった。画想も、アイデアが次々と浮び、自分ながら面白い画が、できたと思っただ。すぐ出版社へ持って行くと思つて好評で表紙と扉のカットを、いくつか頼まれた。

代々木八幡のアパートへ帰ると、すえたような匂いの立ちこもる部屋で、それでも仕事をする意慾が出た。

——早く済ませて、吟子のところへ行こう。と、それが励ましとなった。

仕事の材料を持って吟子のマンションへ行き、仕事をしながら吟子の帰りを待つのが楽しみだった。

だが吟子は、なかなか帰って来ない。一時をすぎて眠くなってトロトロと、まどろんだ時、吟子の話し声で目をさました。

だが、いつも都合のいい時ばかりはない。今夜は佐戸崎が一緒だった。

「若井稚也って野郎は太え野郎だな」

「あら、どうして？」

「お前、舐められてるよ。何だい、ヨボヨボに老けちまって。あれが天下の二枚目かい」

「そう言えば、ずい分おじいちゃんだわね」

「それでいて、でけえ面しやがって。ハリバタなんか、するなって言いやがって、お前、とっくり拝まれちゃったろう」

「いいじゃないの。ハリバタは剥がす時、痛くて、あんなもの、しない方が、いいわよ」

「お前、ほんとに何もなかったのか」

「ううん、一生懸命、努力するんだけどね可哀想に全然、駄目なのよ、あの人」

「何でえ、それで一ぱし、ポルノに出ようってのか。ありや薬の中毒だな。まだ五十にはなつてねえのに、皺だらけじゃねえか」

「だから薬は、やめようよ」

「何かに俺達は、まだ若いから大丈夫だ」

「あたし、ほかの女優さんのシーンを見たいわ。大畑ルミ子さんの見られないかしら」

「そりや無理だろうな。やっぱり羞かしだらうから」

「あたしなら平気よ、誰が見てたって」

「そりや、お前は露出症だからだよ」

「ひどい、コラッ」

「おい、何すんだよッ。こうだぞ」

岩見は眠った振りをして二人の話を聞いていたが、二人がもつれ合う様子に、薄目をあけて見ると、抱き合ってキスしていた。佐戸崎の右手が吟子のスカートの中に突っ込まれている。

「お前、パンティしてねえんだな」

「スタジオでなくしちゃったのよ。明日からはいてかないわ。どうせ要らないんだもん」

二人は抱き合ったまま、ソファの上に倒れこんだ。

佐戸崎がチラと岩見の方に視線をはしらせた。

吟子も岩見を見た。

「あんたが相手なら稽古になんないよ」

吟子のスカートの、たかだかと捲くりあげられ、太く大きな腿と尻が露出した。

「待ってよ、洋服が皺になるから」

吟子は手早く洋服を脱いでブラジャーと靴下だけになった。

「皆、脱げよ」

佐戸崎もズボンと下着を脱ぎ、シャツも脱いで全裸となった。まばゆいばかりの吟子の

ヌードに比べて、佐戸崎の身体は女のように色が白く、痩せて貧弱だった。

吟子がソファへ寝ると、すぐ佐戸崎は挑みかかって行った。

「せっかちなのね」

「岩見の野郎に拜ませてやろう。おい岩見」

佐戸崎が吟子に頬をピッタリ、くつつけな

がら岩見を呼んだ。

「いいわよ、起こさなくなたって。寝かしときなさい」

——ああ、何という、やさしさだろう——

と岩見は吟子に感謝した。だが、すぐ次の言葉で、それも破られた。

「起きなくなたってチャンと見てるわよ。フフ



イメージギャラリー 『か弱き男性よ奮起せよッ!』 春日田春夫

フフ」

岩見は机の上に伏せて、顔を二人の方に向けたまま、眠った振りをしていたが、この姿勢で金縛りにあったように動けなくなってしまうた。

「野郎も、たまには可愛がってやってるか」

「フフ、何言ってるんよう。まじめにやんなよ」

岩見は、見まいとして目をつぶった。だがどうしても見ずにはおられなかった。

吟子は猛烈にハッスルして、佐戸崎を下から抱き締め、身体をくねらせている。

「奴に小便、飲ませたか」

「昨夜、飲ませたよ」

「そうか。今度、糞喰わせてやれ」

佐戸崎は次から次と、野卑な言葉で、岩見を羞かしめた。

岩見は言葉の鞭でピシピシ打たれているように感じ、二人と同様に呼吸が荒くなり、息をはずませていた。

佐戸崎も岩見を罵ることで昂奮し、執物に吟子を攻め立てた。吟子は身体をよじらせ、無遠慮によがってみせた。

佐戸崎は、口にできないような汚い言葉を吐き散らし、岩見の神経を刺戟した。

一時間もかかったかと思われる長く熱い二人の戦いが終わった。実際は二十分ぐらいだったかもしれないが、佐戸崎のしつこさに岩見は呆れた。だが、女というものは、この位しつこいのが好きなのだろう。

「おい、お前。岩見を、ちょっと可愛がってやれよ」

「ウーン、面倒くさいよ」

「いいから掃除させてやれよ」

「フフフ、好きね、あんたも」

「そしたら、もう一ぺん可愛がってやるぜ」

「イヤだよ、そんな恩着せがましい言い方」

「何言ってるやがんだ。畜生、こうだぞ」

佐戸崎は、また吟子を抑えつけて身体を密着させた。

岩見は、さっきから抑えきれないものを感じていた。

「これなら、佐戸崎にも負けないぞ——」

その位の勢いを、もっていた。

だが自分には、とても佐戸崎のような真似はできない。

岩見は佐戸崎が羨ましかった。

まるで牝犬でも扱うように女を自由自在に操り、そして食い物にしている佐戸崎。

貧弱な身体で、何の能力もなく、一応の教

育は受けていながら、その品性は卑しい。

女は、このような劣等動物に魅せられるのかしら？

しかも、吟子のような凄惨な美人が、コロリと参っているのだ。

一体、この差は何だろう。

——それは自分がマゾヒストだからか？ 否そんな簡単な理由だけではない。

自分は幼い頃から青春時代を、あまりに女性を知らなすぎた。女性の前に出ると羞恥心が先に立って、自分の意志を相手に伝えることができなかった。一種の女性恐怖症であった。それは環境によるものだろうか。

いきり立つ、もどかしさの中で反面、冷静に岩見は、そんな風な自己批判をしていた。

いままで佐戸崎を軽べつこそすれ、羨ましいなどと思ったことは一度もなかった。

岩見の内面的にある一つの「自信」が、グラグラと崩れおちるような感じであった。

佐戸崎には今まで、ずいぶんひどいめにあってきたが、それでも憎いと思ったことはなかった。『哀れな性』の男と、許してきてや

っていたのだ。羞かしめられても、大して腹も立たなかった。かつて岩見は佐戸崎に『行』を命ぜられたことがあった。その時でも大

して抵抗は感じなかったし、行なっているうちに一種のM的快感さえ覚えたものだった。

だが、今は違う。佐戸崎が憎かった。

佐戸崎のために吟子が、だんだん墮落して行くように思えた。佐戸崎の低劣な根性に吟子が同化されて行くのが、たまらなかった。

それを想うと、岩見は怒りに身内がブルブルふるえるほどだった。

これ以上、ひどい侮辱的な行為を、佐戸崎が命令を下すなら、もう我慢がならない。佐戸崎に躍りかかって行ったかもしれないのだ。

だが佐戸崎は、また吟子と、いちゃつき、戯れるのに夢中だった。

机の上に伏せて、眠った振りをして閉じている隙から、涙があふれ出た。

長い長い痴戯が、ようやく終ると、珍しく佐戸崎は帰ると言い出した。

「ちょっと、まだ用事があるんだ」

「こんなに遅く？……」

「うん、どうしても今夜中に片づけなきゃならない仕事なんでね」

佐戸崎はサッサと洋服を着ると、

「まあ、あとで其奴をタップリ可愛がってやんな。白酒を飲ましてやれよ。アハハハ」

と捨てぜりふをのこして出て行った。

「あ、ちょっと待ってよ」

裸の吟子が寝室へガウンをとりに行った隙に、岩見はガバと、はね起き、絵の道具もそのままにして部屋から、とび出して行った。

ポルノ撮影

翌日、吟子の部屋で仕事をしていると電話がかかってきた。吟子からで、ラメのワンピースを忘れたから持って来てほしいというのだった。

「それから絵の道具も持ってきてよ。ウン、ちよいとバックに絵を描いてもらいたいんだってさ。佐戸崎さん、どこへ行っちゃったか連絡つかないのよ」

撮影現場は千駄ヶ谷のホテルだった。

佐戸崎が来ていないと知った岩見は、喜んだ。それに仕事もあると言う。道順を聞いていそいそと出かけて行った。

ホテルに行ってS・Mプロの方にと言うと若い男が出て来て、ジロジロ見ながら不愛想に案内してくれた。

「やあ御苦労さま」

肥った丸顔の男が迎えてくれたが、これが

監督の里見だった。

通された部屋は六畳ぐらゐで物置みたいにレフやライトが転がっていて、若い男が二、三人、ラーメンを食べていた。

岩見が入って行くと一様にジロジロ見る。愛想のいいのは里見監督だけで他の若い男達は挨拶もしなかった。

部屋を見廻したが吟子の姿はなかった。

「あの……加納吟子さんは？」

「ああ、いま食事に行ってます。実は、ちょっと描いてもらいたいんですがね」

次の部屋へ通された。

其処は洋間でベッドとテーブル椅子などが置いてあり、ベッドの後の壁に、一面に白い紙が貼られてあった。

「どうも部屋のバックが明るすぎて気に入らないんですがね。この紙に暗い色で、そう何と言うか、幻想的なイメージの、アブストラク的なバックを描いてほしいんですがね」

何か小さなカットでも描くのかと思ったら壁一ぱいの絵を描けと言う。そんなに絵具も筆も持ってきていなかった。

「暗い色にするのだったら、そのような色の壁紙を貼った方が早いでしょう」

「そうですね。ただ無地では面白くないんで

ね。なにか幻想的なイメージの絵を描いてもらいたいんですがね」

監督というものは、なかなか自説を曲げない頑固なところがある。

仕方がないので、岩見が自分で紙を買って来て、若い者に手伝わせて張り替え、それに適当な絵を描いた。

その頃になって吟子と若井稚也が現れた。

なるほど若井という俳優は昔、映画で見たことがあるが、その頃とはガラリと変わって、五十過ぎの爺さんに見えた。里見監督は、

「ウム、まあまあ線ですね。サ、始めようか。ええと窪寺君、いいね。じゃあ若井先生吟子さん。お願いします」

岩見は吟子に持ってきたものを渡して帰ろうとすると、

「いいじゃないの。よかったら見学して行きなさいよ」

「ハア、でも……」

「ねえ、先生。いいでしょ」

「ああ、あなたさえよけりゃ構いませんよ」
持ってきたラメのドレスを着るのかと思ったら、縞の着物姿だった。

ストリーパーは窪寺という青年が吟子の色香に迷って、会社の新しい発明になる機密を洩

らすように迫られる。それだけはと断ると、情夫の若井雅也と二人で窪寺を責めて、言わせようとするシーンだった。

「じゃ昨日の続き。いいね。吟子さんベッドへ寝て」

吟子は着くずれた着物のままベッドへ寝ると、クルリと裾をはだけてムッチリとした太腿を赤い腰巻から露出した。

「ハイ、窪寺君。その腿んところへキスするところから」

窪寺は吟子の腰のところにうずくまり、顔を寄せて太腿へ唇をつけた。

「ハイ、テスト。せりふを、どうぞ」

吟子は青年の頭を撫でながら、

「良夫さん。その設計図を会社の金庫から持ってきてよ。それでないと、あたし殺されるかもしれないのよ。ねえ、いいでしょう」

「それだけは勘弁して下さい。会社を首になつたぐらいでは済まないことですから」

「ハイ、吟子さん少し股をひろげて」

吟子は片膝立てて、かなりきわどいところまで股をひろげる。

「ハイ、もっと奥へ唇を持って行く。舌を出してペロペロ舐める。ハイ」

ライトが強烈に当たっている。岩見は見てい

て異常に昂奮してきた。以前、鬼山にアメリカのポルノ映画でSM専門のフィルムを見せられたが、その時よりも、はるかに昂奮の度合いが違っていた。映画は知らない他人同志がやっているのだが、現在のは吟子が演じているのである。何か自分の姿を鏡に写して見ているような感じだった。

しばらく、せりふのやりとりがあつて、

「ねえ、どうしてもダメなの。あたしが、これほど、お願いしてるのに」

「それだけではできません」

「そう、そんなら、いいわよ。ねえ、ちょっと、もう出て来ても、いいわよ」

カメラが入口の方に向けられる。若井雅也が入ってくる。

「アッ、あなたは？」

「俺は銀子の亭主だ。やい、よくも女房を寝取りやがったな」

「銀子さん、あなたは一人だと伺ってましたが——」

「フフフ、色仕掛けで、ことを穏やかに済ませようと思ったけど、あんたが、どうしても頑張るから、気の毒だけど、これからは、きつくなるからね」

「サア、設計図を渡してしまえ」

「エッ！ では、君達はスパイだったのか」「そんなもんじゃねえ。ただ請負い仕事をしただけだ」

窪寺が頭を持ち上げようとするのを吟子は太腿でギョツと首を締めて

「ジタバタするんじゃないよ」

若井が拳銃の台尻で頭を一撃する。窪寺は気絶する。

ここまでは、大したテストもなしにスラスタと進行した。

次のシーンは窪寺が縛られて、二人から拷問を受けるシーンだった。

若井雅也がポカポカ殴るが、なかなか、うんと言わない。

「そんなことじゃ手ぬるいよ」

と吟子が代わる。

手にした鞭でピシリーと殴る。

「どうだッ、この野郎ッ」

そこへ窪寺の会社の同僚二人が現れて助けようと、乱闘になる。若井は「くたびれるから、ぶっつけ本番でやってくれ」と、すぐ片づいたが、吟子の方は鞭を振って男と、わたり合う。

「痛てえッ。ほんとうに打たないでくれよ。

その鞭、痛いよ」

「だめだよ。鞭の音がヒュッと出なきや迫力がないよ」

里見監督は男には、きびしい。鞭の一撃でひるむ男の肩を足上げてパッと蹴とばす。着物が捲くれ上ったところをバッチリ。岩見はハッとした。テストだからいいようなものの、本番では、まさか、ああはやるまいと思った。

「ハイ、そこまで。じゃ本番、行くぞ」

カメラマンが、

「いまの、ちょっと足が上がりすぎたんじゃありませんか」

「いや、迫力があっていい。カメラの位置をもうちょっと右へ」

なるほど、そこからだと吟子の身体が斜めになるので、上げた足にかくれて見えない。

若井雅也の格闘シーンは事前に、ちょっと打合せただけでテストなしに、すぐ本番に入った。

吟子はテスト、本番の二回の格闘シーンで少し息をはずませながら、休んで若井のシーンを見ていた。若い俳優が声をひそめて「うまいけど、一人芝居だな。監督の思った通りの演出とは違うだろう」

「ふたことめにはスター時代の自慢話や苦勞

話で、テストを二十回も、くり返したとか言ってたな。テストを、くり返しているうちにいい演技が生まれてくるもんだなんて言っておきながら、てめえの出番だけテスト抜きなんて、我がままも、いいとこだ。言行不一致だよ」

と若井雅也を批判していた。吟子は自分の蹴とばした俳優に、

「ごめんなさい、痛かった？」

「いいえ、大丈夫です。迫力が大切ですから思いきってやって下さい」

などと話していた。

また、さっきの格闘の続きである。

吟子が鞭で殴っておいて、頭を抱えてうずくまる男の髪の毛をつかみ、ぐいと頭を持ち上げておいてサッと肩へ跨がり、太腿で男の首を、はさむ。そして鞭の柄で男の頭を一撃する。男が昏倒する。そこまでのテストに入った。

吟子は鞭の使い方のコツも覚えて、うまくなった。最後の男の肩を跨ぐところでは、「もっと腰を密着させて。跨がってから、くっつけたのではダメ。跨がると同時に密着するんじゃないかね。こういう風にやるの」

里見監督が自分で男の肩へ跨がって、やっ

て見せた。ズボンの前が、男の頬にピッタリくっついていた。

吟子がやると着物の前が、はだけ、白い太腿が男の頬に密着した。

「そう、グッと押しつけて。ああ身体を前かがみになっちゃ、まずい。ポーズが悪くなるからね。上体はグッと反らせて。そして腰だけ前へ、せり出して、おっつける。いいね。ハイ、もう一度」

吟子の汗ばんだ内股が男の顔へ、ペッタリおしつく。

「ああ、絵の具が、ついちゃったな。ちょっと何と言ったかな。ああ、岩見さん。タオル持ってきて吟子さんの足についた絵の具を拭いてあげて下さい」

岩見は、ちょっとテレたが、吟子の前に跪く。吟子は両手でクルッと腰巻を捲くり、両股をひらいて立ちはだかった。岩見はポケットからハンカチを出して内股についた赤い絵の具を拭いた。何か、ほんとの血が、まじっているように思えた。

「どう？ 見ていて面白いかい」

吟子は上から岩見を見下して女王の貫録を示して言った。

皆が吟子の太腿の前に、うずくまる岩見を

☆ SM画稿 募集!! ☆

☆ SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかなしい歴史を誇る本誌にふさわしい SM画稿を読者の方々から募ります。

☆ 画材は、女体責め、女体緊縛を初めとして、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも結構ですし、女体切腹の悲愴美は勿論、下着などのフェチシズムに関係したものでも、本誌の内容にマッチするものでしたら、お好みのものを、お寄せ下さい。

見ていた。その視線を背後から刺されるように感じて岩見は、羞恥で赤くなった。

自分が吟子の奴隷であることは、恐ろしく佐戸崎が皆にしゃべっているに相違ない。だから自分が、このホテルに入って、現場に顔を出した時、三人の若い俳優が、ジロジロ見ていたが、あれは「ハハア、この男が吟子さん

の奴隷だな」と思って見ていたのだ、と気がついた。

テストは更に激しく繰り返された。

「そう、それで行こう。じゃ本番」
ライトがパッと照らされる。吟子が大きく股をひろげて男の肩へ跨がると前が、すっかり捲くれてしまった。男の顔へ、ぶつつけるようにして押しつけると、顔が押されて斜め

☆ 必ず自作の未発表の作品を御投稿願います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆を御利用下さい。大きさは御自由ですが本誌の雑誌大位までが適当です。カット的なものは半分大でいいと思います。☆ 掲載作品につきましては、作品の出来に相当した画料をお支払致します。アイデアだけの時は、鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう期待します。

△ 奇譚クラブ編集部 △

に傾いた。

「よし、そのまま!」

カメラがアップを撮った。

岩見のところからは斜め後に位置しているので、密着した部分は見えない。カメラもその角度から撮っていたが、岩見には、どういう状態になっているかは、体験上、肌で感じとるように分った。吟子の体臭さえ匂ってくるように思われた。

—— 凄い映画だ。だが、これで映倫をパスすることができるとかしら——

岩見は見ていて、何か焦ら立たしさを覚えて胸苦しくなってきた。

「よし、上出来。休憩だ」

若井雅也は岩見より左側で見ていた。そこ

からだ、吟子の、やや正面に位置している。密着した部分を一番、はっきり見たはずである。若井はニヤニヤ笑いながら「今日は、あのウルサイのが、いねえから仕事」がスムーズに行くね」

と里見監督に話しかけた。ウルサイのとは佐戸崎のことだろう。

日本のポルノ映画は映倫の検閲があるからほんもののポルノではない。ピンク映画を、もうちょっと濃厚にした程度だと思っていた岩見だったが、こうして撮影の現場を目撃すると、これは完全なポルノだと思った。

吟子は岩見には目もくれず、いま格闘してやつつけた若い俳優を優しく労わっている。吟子の振った鞭の先が頬をかすめて、出血していた。「ごめんなさいね」と吟子はメンドラムを塗ってやっていた。ひと休みすると「サア、これからが、この映画最大のヤマ場だぞ。張りきって行こう!」

と里見がハッパをかけた。

—— これ以上のことをやるのか……

監督の言いなりに動く吟子が、みじめに感ぜられて、このまま見ずに帰ろうかとも思ったが、熱気でムンムンしている、この場から立ち去ることは、できなかった (続く)

夜の見世物小屋

紀 平 竜 夫

私の育ったS市には、大きな神社があつて春の五日間のお祭りには、広い境内にオートバイの曲芸、ロクロ首、曲馬団、その他の見世物小屋が数十軒も軒を並べてかかり、風船飛行機、その他、あらゆる玩具の土産物屋やおでん、電気アメなどの食物屋、果ては、あやしげな物売りまで、所狭しとばかり、立ち並んでいたものである。

同じ境内の中央には、祭り屋台が建てられて手品や茶番、曲芸、芸者の手踊り、神楽なども催されていた。

各町内からは、夫々の自慢の山車が繰り出されて、街々を賑やかに、ねり歩き、全市を挙げての楽しい大祭であつた。

祭りが来ると、私達子供は幼稚園や小学校

までも休みになり、皆、家から小遣い銭を貰つて、朝早くから夜遅くまで胸をワクワクさせながら、友達と連れだって街々をうろつき広い境内を遊び回つたものである。

なつかしい、のどきからくり、女角力、親の因果が子に報い、の蛇娘、その他の因果ものなど、今考えても胸躍る思いがする。

曲馬団の美しい小さな女の子に淡い思慕を寄せたり、おでんの屋台で奮発してタップリソースをかけた、金二銭のフライを食べてみたり、或は写真や絵を別の大きな紙に正確に写し画く不思議な器具だとか、笛やシャボン玉、本当にうまく飛ぶ飛行機。果ては着物でも何でもすけて見えるという、あやしげな透視メガネなど、何処を歩いてみても私達、子

供には夢のような、胸のドキドキする嬉しい事ばかりが、あちこちに転がっていたものである。

当時のなつかしい思い出は一杯あるが、今回は、私が幼児期に受けた最も強烈な印象として今でも、はっきりと覚えていた地獄極楽の見世物の話を書いてみたいと思う。

私達は、その見世物のことを「チャン、ボン」と呼んでいた。

袈裟をつけた見世物小屋の男が、入口で、お経まじりに仏教を説き、因果を語り、地獄の恐ろしさを話しながら、客を小屋へ呼び入れていた。

そして、話の合間々々に、鐘をチャーン、チャーン、ボンと叩いていたので、私達は

その見世物のことを、そう呼んでいたのである。

子供達は皆、この見世物に興味をもっていったが、私は特に異常とっていい程、強く魅せられてしまつて、このチャン、ボンに何回も入つてみた。

小屋の中は、いくつもの小間に別れていて親指大から手首大のたくさん鬼と亡者の人形が、電気仕掛で動いていた。

三途の川から針の山、なんとか地獄では、臼の中の亡者共を鬼がギザギザのある打ち物で叩きつぶし、他の地獄では亡者が鬼に舌をぬかれていた。

線香がたかれ、入口の鐘の音がひびき、小屋の中は、外とは全く別世界の「あの世」の雰囲気となっている。

もっと大きな人形もあって、鬼が亡者に剣を突き刺すたびに、腹から赤い真綿の血が吹き出す。

等身大の人形も、いくつもある。

地獄極楽の見世物といっても、殆どが地獄の場面であり、極楽の場面が付け足しで二つしかない。

蓮の葉の上に坐つた亡者達と、その正面の上に阿弥陀様の等身大の人形、これは金ピカ

で立派ではあったが、地獄とちがつて面白くも何ともない。

やっぱり恐ろしく面白いのは地獄である。

私は繰り返し繰り返し、地獄の一つ一つの場面を何回も飽きずに眺めて回つた。

お祭りの最後の日、夕食を早々に済ませ、

数名の友達と神社の境内へ行つて、あちこちを遊び回つたが、時間も遅くなり、お祭見物の人達も、そろそろ減り始めて、もう帰ろうということになったが、私はなんとなく心残りというか、まだ未練が残つていて、帰宅する友達と別れて、一人でもう一回りと、歩き始めた。

そしてチャン、ボンの前まで来ると、まだ最後の呼び込みをやつていた。

その鐘の音を聞くと、急に又、私は小屋の中の地獄の人形が無性に見たくなり、残り少ない財布の中から五銭を出して中へ入った。

何処の小間には、どんな人形が何をしていて、もう暗記している位なのに、香線の香が漂う薄暗い小屋の中は、私にとっては全く別の世界の、魑魅魍魎が横行し、亡者の悲鳴が聞こえて来るような妖しい魅力を持っていたのである。

例によって丹念に地獄の一つ一つを見て回

っている内に、小屋の中の客達も急に減り始め、最後に残った連中も出入口の方へ急ぎ始めたので、こんな場所で一人だけになってしまつては大変だと、私も出入口の方へ走つて行った。

もう九時を大分まわり、十時に近い時刻である。

客のいなくなった小屋の中は恐いので、振り返らずに最後の客の直ぐ後ろについて、急いで出ようとした時、又ドヤドヤと十人前後の新しい客が入つて来て、私はその客達の間で挟まれてしまった。

客の中には女性も二、三人、まじつていたので、私は急に心強くなって、その客の集団と一緒に、もう一回りすることにした。

袈裟をつけた案内の男は、何時もと違って小間の場面の説明をせずに、足早に小間の間を、どんどん通り過ぎて行く。

もう時間が遅いから、説明しないのかなと思いつながら、私は皆に遅れないように、その集団の真ん中に入つて歩いて行くと、正面の等身大の人形が飾つてある極楽の小間の直ぐ横下の厚い黒幕を捲くり上げて、中の薄暗い中へ客達を招き入れた。

何回もその見世物小屋へ入り、小屋の中を

何度も回ってみた私も、そんな所に別の部屋みたいなものがあることは夢にも知らなかった。

少し気味悪かったが、多勢の客と一緒になので私も割合と気安く皆について中へ入った。

黒幕を捲くって客を通していた案内の男は私が通る時に

「おや、こんな小さい坊ちゃん……良いのかいな」

と小声で独り言をいったが、別に私を咎めて止めるわけでもなかった。

後で考えたことだが、私を、その客達が連れて来た子供と、勘違いしたのである。

中へ入ると、暗い裸電球が天井についていて、案内の男が何処かを操作すると左右に二つずつ並んでいる小間にパッと明るい照明が入り、目にも鮮やかな人形が浮び上った。

今まで他の小間で見たどの人形よりも立派で、派手

な等身大の人形である。

地獄の鬼や亡者ではなく、第一の小間は、着物の盛装で、後手に縛られた娘が草むらに寝かされ、それに覆いかぶさるうとしている頬かぶりの男の人形である。

案内の男が、小間の中へ両手を伸ばして、娘の人形の裾を左右へ、ぐっと大きく捲くり

上げ、男の着物の垂れ下っている裾を上へ捲くり男の人形の尻の上の腰紐に挟み込んだ。

「ほー」と客達から驚嘆の声が上がった。

水商売らしい女達がキヤーキヤーと騒ぎ、男達も大きな声で卑猥な冗談を飛ばした。

案内の男は、

「旦那方、お静かに」

と客を制して、男人形を指差したり、女人形の腰の辺りを指差したりしながら、低い声で説明を始めた。

何を説明しているのか

よく分らなかったが、たとえその話の内容が理解出来たとしても、私には話を聞いている余裕など、全くなかったのである。

頭が芯の底から、カッカッと燃え、顔は真っ赤に火照り、全身がガクガク震え、心臓が今にも破裂しそうに、ドキドキと音をたてて鳴っていた。

娘の人形は、美しい着物の上から無残にも荒縄で後手に縛られていて、半ば曲げた右足は草の上におかれ、左足は立膝となって、真っ赤な腰巻の上に、くっきりと白い股を開かされている。

裾は帯の直ぐ下から大きく左右に裂かれ、浮世絵程ではないが、かなり誇張されて造られており、匂うばかりの生々しさだった。

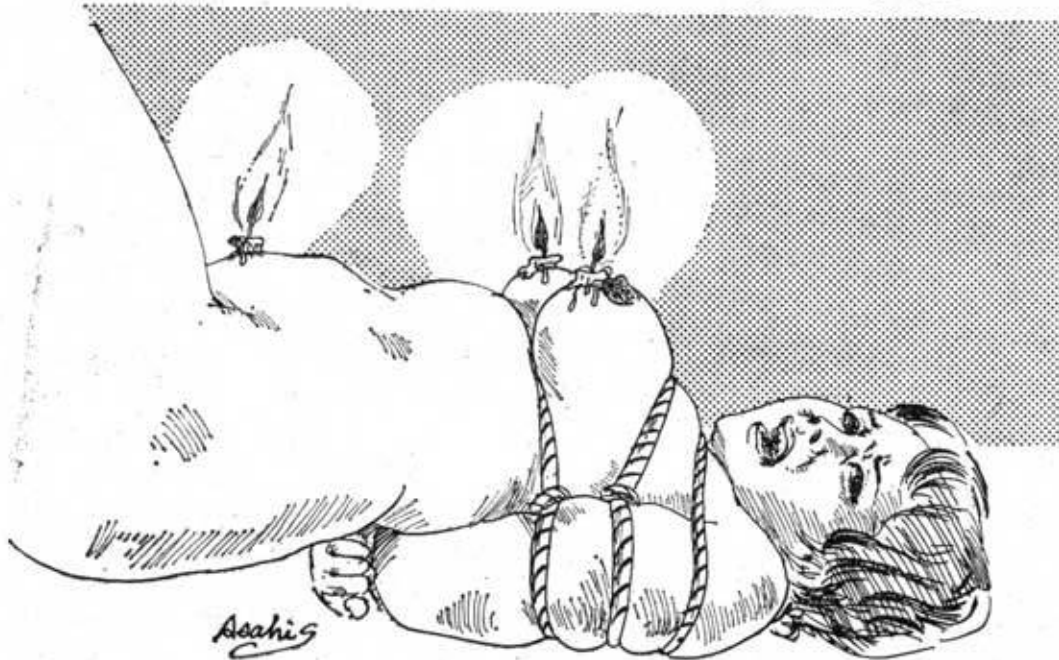
顔は恐怖に歪み、髪の毛が乱れて数本、額に垂れ、目は大きく見開かれていて、下から男をおびえきった目で凝視していた。

男の顔は醜く恐く造っており、目は情慾にキラキラと光っていて、無気味に獲物をねらっているかのようにだった。

娘の人形の横に置かれているピカピカ光った草刈鎌が印象的だった。

男の指図で客達は次の小間へ移動した。

私はガクガクする膝を無理に伸ばすように



しながら、やっと、ついて歩いた。

今度は仰向けに寝かされたセーラー服の女学生の両足の間に、前と同じ男が両膝をつき女学生の両腕を、自分の両手で上から押えつけ、覆いかぶさっている場面である。

案内の男は、又手を伸ばして、男人形の前に垂れている着物の裾を上へ、たくし上げ、尻の上へ挟み、女学生のスカートと真っ白のシュミーズを胸の方まで捲くり上げた。

又、男の客達は笑い声をあげたり、淫らな冗談を言い合ったりして騒いだ。

女達は小声で

「ほら、あんなに血が……」

「まあ、可哀そうに」

などと女学生の腰の辺りを指差しては、ささやいていた。

案内の男の説明の間にも、男達はゲラゲラ笑ったり、女達に何か言ったりして騒いでいる。

無理に乱された紺のスカートの清潔なヒダが、現実味を感じさせ、真っ白なシュミーズに、したたり落ちている真っ赤な血の色が、気味悪かった。

そして、その無残な女学生の姿は、子供の私の目にも凄く痛々しいものに映った。

次の小間は、同じ男の人形が岩の上に腰かけて股を大きく開き、後手に縛られた尼さんが、その間に跪かされている場面である。

男の着物の裾が、尼僧の頭にかぶさっている、顔は見えない。

その裾を案内の男が捲くりとると、客達はアッと声をあげた。

頭を青々と剃り上げた清楚な若い尼僧が口を大きく開けて、男の人形の物を口にふくんでいるのである。

それが何を意味するのかということまでは子供の私には分らない。

意味することはよく分らなくても、それが何か、とても悪いこと、浅ましいことをさせられているのだという程度のことは、よく理解出来たのである。

「まあ、いやらしい」

女達は口々にそんなことを言い合い、男達は陽気に下卑た冗談を言って笑っていた。

始めはキャアキャア騒いでいた女達も、だんだん口数が少なくなり、ささやくような話し方に変っていたことを、今でも奇妙に覚えている。

最後の小間は、盛装の年増の女で、あぐらをかけた男の両膝の上に、男と向き合い、両

足を開いて、またがっていた。

男は両手で女の首を締め、女は既に息が絶えたのか、がっくりと首を後へ垂れている。

女の顔は青白く、派手な着物の色や真っ赤な腰巻との対照が際立っていて、一層、その情景を凄惨なものにしていた。

シンとして誰も一言も話さない。

やがて客達はゾロゾロ出口の方へ向った。勿論、私も一緒である。

出口で客の一人が、

「どうも珍しいものを有難う。久し振りで、いい目の保養をした」

と言いながら、案内の男に金を渡したようだった。

「有難うございます。どうも大枚のものを、すみません。どうぞ、お気をつけなすって」

と男は頭を下げながら言った。

ゾロゾロと小屋の外へ出ると、外には別の男が待っていて、

「おつかれさんでした。今度は角力です。東鳥井の方ですから、どうぞこちらへ。ご案内致します」

と言いながら、客達の先にたって、歩き始めた。

私は、女角力の小屋に、又今のような変な

人形があるんだな、と思い、一緒について行きたかったが、境内には、もう殆ど人影もなく、夕方までは一杯、出ていた土産物屋や食物屋も、もう一軒もいなくなって、見世物小屋の外の灯も消えていた。

もう家へ帰らなければならぬ。

私は一緒にいて行くのを諦めて、その客達の集団から、そっと離れた。

そして異常な興奮にかられながら、各家々に祭礼と書いた提灯が、とぼっている、まだ明るい街の中を走って家に帰ったのである。

後から分ったことだが、あの男女の対人形は、四場面とも、当時、新聞に毎日のようにトップ記事で報道されていた、有名な強盗、

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

強姦、殺人魔事件を人形にしたものだった。あれから何十年にもなる現在まで、あんな見事な、あんな刺戟的なものを、私は二度と見たことがない。

男と女の間が、どういふものか、性の何たるかも、まだわきまえない当時の私にとってその秘密人形から受けた印象は、それ程、強烈なものだったのである。

そして、その強い印象は、長ずるにつれ、おぼろげながらも性を意識して来るにつれて益々強烈に、益々鮮やかな印象に、ふくれ上って、今尚、私の心に大きく、強く焼きつけられているのである。

極め付きのストリップも、どぎついブルーフィルムを見ても、あの時の人形から受けた異常な衝撃に較べたら、物の数ではない。

青年になってから、衛生展や警察展などで同じような等身大の展示人形を何回か、見たことがある。

会場の中の特別室『未成年者の入室を禁止する』の貼紙のある部屋の垂れ幕を捲くって入ると、盛装の花柳界の女の人形が飾ってあり、着物の裾を大きく捲くって、一般の公衆に公開している。

あの時の人形と同じようであるが、局部の

附近には、梅毒だか何だか、無気味な大きなおできが出来ており、すっかり腫れ上って、腐ったような紫色の肉の出ている所には、ねっとりとした膿までが浮いていて、一目見ただけで、気味悪さに震え上るような性病予防人形である。

同じ人形ではあるが、あの時ののは、妖しい夢幻の雰囲気醸し出す魂を持った生人形であり、片方は考えただけでも吐気する不潔な木偶の坊人形。始めから月とスッポンで、所詮は似て非なるものである。

不思議な魅力を持つ、あのような人形を、あの時のチャン、ボンのような雰囲気の中で是非もう一度、ゆっくり見てみたいと思いが、未だにそのチャンスに恵まれない。

先日も見事な菊人形を見ながら、ふと昔のことを思い出し、あの時のような素晴らしい秘密人形を、一体でも良いから、手に入れてみたいものだ、しみじみ思ったことである。

幼ない頃のつまらない思い出話を書き綴ってみた。

チャンスがあれば、次には、少年期になってからの、曲馬団や、夜の女角力などについての思い出話を書いてみたい。――(終り)――



男の貞操帯

七つの海を、殆ど潜航したまま走り廻っている原子力潜水艦ネプチューン号は囚れの美女数百の悲泣を、その水滴型の艦体に固く閉じ込めたまま、ケープタウンの遙か南を、大廻りしながら印度洋に入りつつあった。

定期航路を遠く外すことは、発見されないようにという配慮も勿論あったが、予め配置してある補給地点に立ち寄るためでもある。前にも書いたように、機密保持のため補給船

はネプチューン号を見ることがないようにしてあった。つまり、補給物資は、まとめて洋上、又は水中に投棄され、補給船が去った後浮上したネプチューンに収容される仕組みだった。(第55回参照)

印度洋での補給は、例によって、モーリチアスにある有明のレジヤースセンターを基地としているから、食糧その他の生活必需物資だけでなく、数々の贅沢品を含む所謂「御内帑品」までも運ぶことになる。そして、時としては収容に間に合わなかった捕獲人間まで送りこむ場合も出て来るのであった。

深夜、ソナーを頼りにしてネプチューン号は補給物資が数珠つなぎになっている洋上に浮上した。スペースを節約するため、ドラム缶を一々開いて、内容物だけ艦内に入れるので案外、時間がかかる。作業が終りに近づいた頃には、明けやすい南海の空は、早くも曉天に光が、さしはじめていた。

今回の積荷にも、新規の女囚が六名程、含まれていたので、レセプションが俄に忙しくなった。

「あ、これは男じゃない」
アマゾン女兵が素頓狂な声を出した。

たしかに女のような肉体なのに、あるべきところに立派に、ついていたからである。女人禁制のパレスエリアでは、男といえば有明しかない。そうした雰囲気の中で暮している女たちにとって、何かゾクゾクするような存在であった。レセプションにあたっているアマゾン女兵たちが動揺したのも無理からぬことであろう。

慎重な有明の組織が、男を女と見紛う筈がなかったから、これははじめから有明が承認したことであったらしい。

「男の貞操帯があつて、いいわけよね」

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその材質に応じて、五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。原子力潜水艦ネプチューン号は新しい犠牲者をいっぱい積み込んで、帰途についた。その中に、イギリス王女メリーが含まれていた。彼女は共に囚われたイングリス卿夫人ジャネットと一緒に、航海中の慰みものにされた。

嗤いをこらえたようなエミー司令の声が背後でしたから、アマゾン女兵たちは思わず姿勢をこわばらせるのだった。変な会話や、そぶりを見咎められたら、それこそ、おしまいだった。どんな懲罰が、あとで振りかかってくるか知れないのである。

「サアこれを穿かせてしまいなさい」

エミー司令の声に叱るような調子が含まれていないので、女兵たちはホッとしたようにエミー司令の持ってきたものを受けとった。

それは、ところどころ頑丈な金具のついた革製のフンドシだった。サップーターと同じように一部分が丸く抉ってあつて、それ以外を固く締めつけ、別に金属の蓋をはめて錠で留めるような仕組みだった。

パチンと錠前がかかる音がして、彫刻のある鉄の蓋が閉じられた。

男のそうした状態を知っているもう一人のアマゾン女兵が、ひとごとながら心配した程その蓋は小さかった。そしてそこには、用便のための排水孔が小さく口を開いていた。

アドニスのような美少年は、そのままセルに送られてしまった。男はいつも三等扱いで手枷足枷で嚴重にロックされ、艦底にある檻

に收容される仕来りだったから、これは、きわめて異例のことと言わなければならない。

実はこの美少年、マダカスカルの富裕な貿易商の長男で、四分の二がフランス人（母親がフランス人だった）あと四分の一ずつを父親の血の中にあるイギリス人とインド人を承け継いでいた。その美しさの背景を考えると複雑さが、うなずけるであろう。この美少年には二卵性双生児の妹が一人あつて、これ又評判の美人であつた。たまたま、二人してモリーチアスに遊びに来たのが運の尽きと言ふべきであろう。二人ながら、有明の組織に捕えられ、補給物資と一緒に荷造りされ、ネプチューン号に送りこまれたという次第。

兄をルネといい、妹はマノンと呼ばれて共に二十才になる年のはじめだった。

ネプチューン号が入港する丁度、前の日、この二人の兄妹は有明の慰みものとして曳き出された。

有明は例によって、ウォーターマットを敷きつめた自分の居室で、今日は不可触の百合子だけを呼んで寝そべっていた。

後手にロックされたルネは、共に妹が曳き出されたのを見て愕然となった。

自然の心では、何とかして妹を守ってやりたいと切実に望んでいた。

しかし、その妹マノンとて囚れの身で、羞恥も何も着物と一緒に引き剥がされ、今は赤裸の境涯であった。たとえ、兄妹であったからといって、裸の男が、裸の女に相對するとき、何がしかの性的感情が起らない筈はなかった。

ルネは、はじめて妹の裸身を見た。その裸身は類稀な美しさだった。だとすればたとえ双生児の兄妹だったとしても、性的衝動から免れることは出来まい。

事実がそうだったのである。兄は妹の裸体を心から美しいと思った。そして疑いもなく一種の情感をもって「妹」を愛したのであった。

有明は心憎くも、この兄妹の情感を利用し踏みにじった。

有明は、ルネの体から金属の蓋を取り去った。ルネのものは、極端な屈辱状態にもかかわらず、その蓋をハネ退けるような勢いだった。これは、年頃の少年にとって、きわめて当り前のことであつた。自らの妹であろうとなかろうと、異性を見て反応しないものは健

康だとは言えなからう。

有明は、みるみる勢いを増したルネのそれを見つめながら、更に非情な命令を下したものである。

それは、ただひとこと、

「おまえの妹を犯してみろ！」

ということだけであつた。

しかし、兄も妹も、ともに後手にロックされてゐる囚虜の境涯であつた。自ら能動的に出来ることは何もなかったのである。ルネのものはアマゾン女兵によって半ば強制的に刺戟を加えられた。若い血潮は自制心を押しつけて、それをふくらませた。マノンと同様だった。

とにかく、理性では納得出来ないことであつた。血肉をわけた二人の兄妹が愛し合つたのである。しかし、これは現代の道德に照らして、いささか異常だっただけで、人間の悠久の歴史に鑑みると、そのような可能性が絶対ないとは言いきれないのである。すなわちこれは、近親結婚を殊にしてきたピグミーたちにとって、きわめて平凡なことではしかなかったのだから。

もとより、教養人としての二人が、こともあろうに進んでする筈もないことであつた。

しかし欠漏を埋めあわすのに、兄や妹の別があるうか。抱きあげられたマノンは、激しく燃えながら兄のを、その体にヒシとばかり抱きしめたのである。

「ハハハハハ」

悪魔のような有明の哄笑が一生忘れられない程、二人の脳裏に刻み込まれたのである。

「兄妹して、こんなことをするなんて、いいことじゃないね」

と、有明がいうと、

「はい、その通りです」

というのが、誰でももの答えだった。

そこで有明は飛躍してしまふ。

「こんなものは切りとってしまったほうが、いいんじゃないかね」

「はい、その通りです」

と、口々に言う。そう言わなければならなかったのである。

「よろしい。じゃあ、切りとつてしまえ」

途方もない命令が、平然と有明の口から出る。一旦、出た以上は金言だった。変改は許されない鉄則だった。

麻醉も何もされないでルネのそれは、根元から切りとられた。

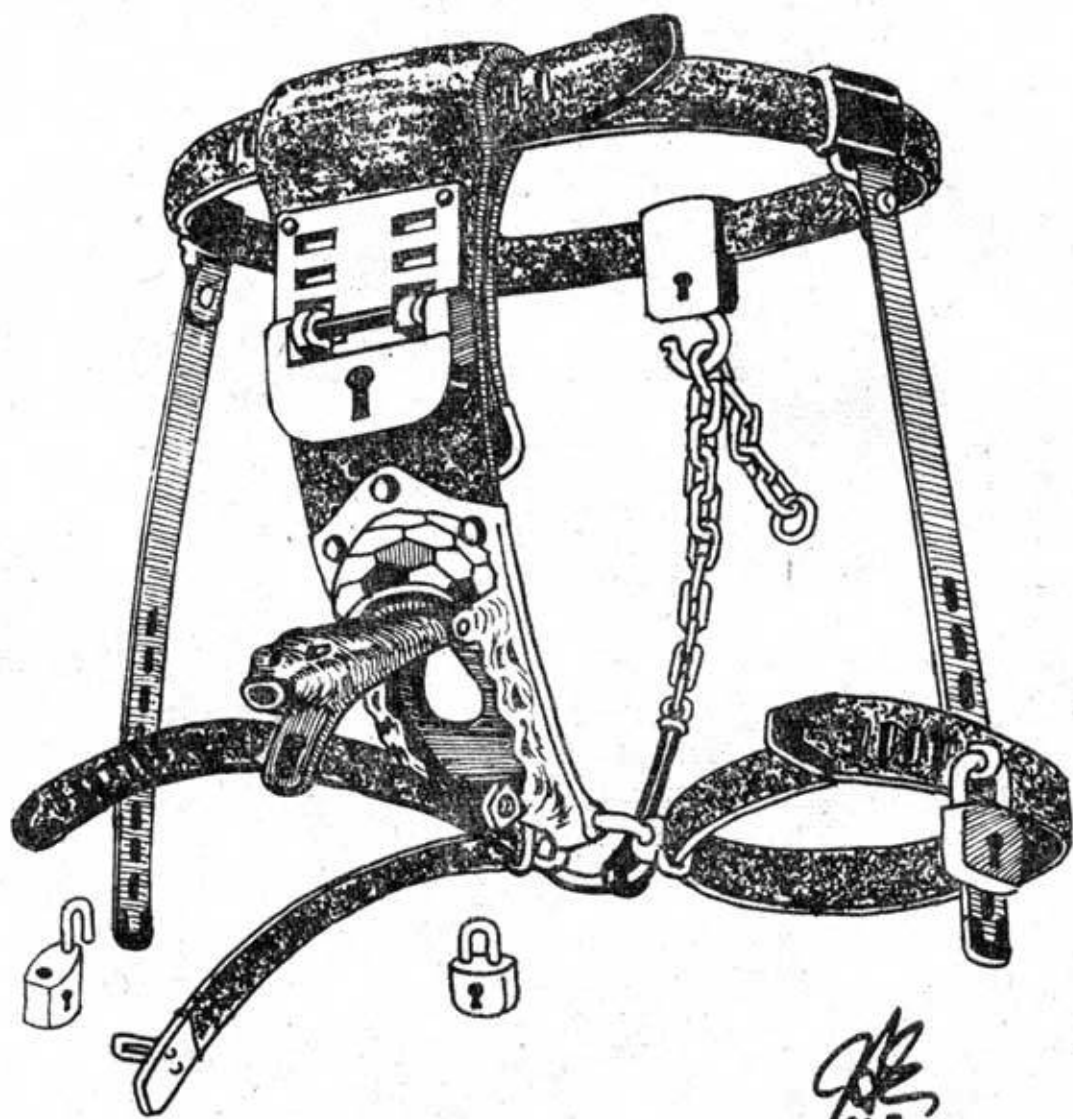
飛び散る鮮血で、裸身を染めながらマノンに氣絶してしまった。

血を見るようなことは、有明の国では決して珍しいことではない。特に男性は、切りとられるのが当たり前だったからである。

ただ、地上のモラルしか知らない新鮮な「新入荷品」を相手に、こんなことをするのは、有明にとって一種の慰みであり、リクリエーションだったにすぎない。それはエピソードの一つというべきであろう。たとえばそれが、ルネとマノンにとって拭い去ることの出来ない辱かしめであったとしても、それが有明の心にシミ一つ着けることがない以上、やはり花瓶から一片の花弁をムシリとった程の出来事ではなかったのである。

メリー王女、イングリス夫人、朝小路久子そしてこのルネとマノンの兄妹。それぞれが言語に絶する凌辱と苦悩に、のたうち廻ったことが、とりもなおさず有明のつれづれを、なぐさめたことになる。

そして、原潜ネプチューン号は無事、海中



の秘密水路をくぐり抜けて、ポートエリアの泊地に横付けになったのである。

直ちに荷役が、はじまる。鉄仮面をかぶった男奴たちが右往左往し、久しぶりに埠頭は騒然となった。

捕獲された女囚たちは、予めジュートバツ

クの中に梱包されていて、つぎつぎとコンベヤーから運び出されていた。これらは全く毎度の光景であった。(第23回参照)

そんな雑踏を尻目にして、有明はエミー司令、高橋侍従など、作戦に参加したアマゾン女兵たちを従え、ウィリー博士のセンターをたずねた。山本百合子も特に許されて同行した。

ウィリー博士は、準備をととのえるため、ひとあし先廻りをして帰っていたウィリー夫人と、つれだって、にこやかに一行を出迎えた。老人とは思えないように逞しいその肉体は、まるでギリシア彫刻のようであった。

「ご無事でお帰りになったことを

お慶び申し上げます」

博士は、まるで十六世紀の宮廷人のような物腰で有明にうやうやしくお祝いを述べた。

「有難う。お蔭で、今度も予想外の収穫だったよ」

「それは楽しみです」

博士はニッコリと笑った。

「私共も大いに張り切って仕事をいたすつもりです」

博士の「仕事」がどんなものか、今はそれを知らされているジャンヌは、それこそ、脊筋に粟の生ずるような気持で、これを聞いていた。

給仕女メリー

すべてがヨーロッパ式だった。

例の落着いた英国風の装飾で統一された洗練した部屋が、立ち並んでいる一面にバーがあった。そこで半時程、好みのカクテルを飲みながら思い思いに談笑することになった。

もちろん有明はオンザロックだった。今回は特にバーボンを注文する。即席のバーテンにはウィリー夫人になった。

グラスを渡す夫人に軽く会釈をして、有明は、さて——という風にウィリー博士の方に向き直った。

「どうですか」

とたずねたのは0号生存刑に服している悲惨な杉本美知子の状態であった。

「大丈夫、生きています。お申し付けの通りの部分だけは手を加えないことに致しまし

たので、もう殆ど、切りとるものがあります。で、これからは内臓切除が始まりますから、あとはパレス・エリアで執行するのが困難になってまいります」

「いいでしょう。何しろ始めての0号生存刑ですから、もういい加減、見せしめになった筈です。だから……」

有明が美味しそうにバーボンを味わっている間、ウィリー博士はジッと、その口元を見つめていた。

「だから、もう一度、要所々々を引き廻した上、完全に、こちらへお渡ししましょう」

「サンキュー、サー」

博士は、うやうやしくグラスを捧げて、

「今度こそ、頭だけで生きている人間をご覧に入れましょう」

数名の男奴が二個の肉体梱包をかついできて、ドサリとそれを投げ出していった。

エミー司令から渡された鍵で、アマゾン女兵たちが、その梱包の一つを、ほどいた。

栗色の長髪がこぼれ出して、つづいて出た顔は薄幸の王女メリーのものであった。恐怖にひき吊った顔、わななく唇。すでに彼女は意思を喪ってしまったかのように、縛めを解

かれても動く気配すらなく、呆然と裸身を衆人の環視の中に曝していた。

「連れて行って、何か着せてやれ。いずれストリップティーズを、ご披露していただくのも座興というものだ」

二人のアマゾン女兵に、ウィリー夫人が、つき添って王女を護送して行った。

次に開封された袋からは、イングリッド卿夫人、ジャネットが豊満な裸体を転がり出してきた。

固い後手縛りもさることながら、依然として腰の張型は外してもらっていない。

有明の前にひき据えられると、もう恥も外聞も、かなぐり棄てた様に

「お助け下さい。どうか、これをおとり下さい。もう、気が狂いそうです」

という意味のことを、早口のロンドン弁でかきくどき哀願するのであった。

「どんなことでも、言いつけられた通り出来るか聞いてみる」

わざと有明は日本語で言う。エミー司令がそれを通訳した。

ジャネット夫人は顔色をかえた。有明のいうことを一々エミー司令が通訳するのだからひどくまだるっこしいのだけれど、それは要

するに、今、一人の貴婦人が来る。その婦人の着物を引き剥ぎ、押し倒して、もう一度、あのネプチューン号でやったことをして見せろというのであった。

激しい苦悩と逡巡の後に、夫人は悲し気にそれを肯じる他はなかったのであった。なぜなら、そうしなければ股間の異物は絶対に取り去って貰えないであろうし、又、いくら逆らってみたところで、有明がさせたければ、強制的にやらされてしまうことは目に見えている。強制される惨めさを考えれば、むしろ進んで挑戦した方が、ましだとさえ思えてくる。

「よしよし、大分、聞き分けが、よくなったな。手をほどいてやれ。そして、早く王女を連れてくるのだ」

有明は楽し気にそういつて、バーボンをゴクリと飲み込むのであった。

「プリンセス・メリー！」

驚愕の声をあげたイングリッド夫人は、自分が裸であることも忘れて思わず駆け寄ると王女の方も

「オオ、ジャネット。ああ……」

と、ひしとばかり抱き合って、二人とも、

さめざめと泣くのであった。

王女は、何とエリザベス王朝のクリノラインのついた傘のようなスカートをつけた古典衣裳を着させられている。髪型まで、ご丁寧な王朝風のアップスタイルでセットされていた。

いつまで経っても、二人が抱擁を解かないのに業を煮やしたエミー司令が、

「さあ、おまえたち。再会を喜び合ってばかりいないで早くショーを見せて頂戴」と叱咤するのだった。

ギクッとして吾に帰ったイングリッド夫人は、自分がした約束を激しく悔む。事もあるに、相手が、娘のように大切に育てて来た王女メリーだったとは……。

有明の前にガバと、ひれ伏して、切れ切れな言葉で約束の解除を乞うのだが、それが容れられる筈もなかった。小川侍従の振る電氣鞭に追われて、悲しげな顔を王女に向けた夫人は、

「プリンセス。どうか、お許しを……」

と叫んで、いきなり王女の襟元に手をかけてピリリと引きさいたものである。

もちろん、王女は、悲鳴をあげて逃げ廻っ

た。味方と思ったイングリッド夫人に責められるとは予想すら、してなかったことである。これだけでも王女を動転させるに充分だったが、それより王女を怖れさせたのは、夫人の体に屹立する例の模型だった。忘れようとしても忘れられない、あの夜の記憶が蘇ってくる。夫人は、王女と知らなかったのだけれども、王女の方は始めから夫人が囚えられていることを知っていたのである。今はじめて相手がメリー王女であることを認めた夫人が、このように王女に襲いかかるのは、余程のことであろうと思うと、ともすれば抵抗する力も鈍りがちになる。

ハッと思ったときには、もう王女の肉体をかくすものとしては、ブラジャーとパンティーしか残っていなかった。そのブラジャーさえ、はげしくもみあううちにプツンと紐が切れて飛んでしまった。よろめきながら、乳房をおさえる王女の肩に赤い線が、ふくれあが。最後の一枚となつては、王女の抵抗も激しくならざるを得ない。

もうその頃には、アマゾン女兵たちが立って、グルリを取り囲んでしまっているから、王女とて逃げる隙はなかった。

若さではメリ王女が有利であつたとしても体力ではイングリス夫人の方が勝っていたのであろうか。息もたえだえに疲れ切つた挙句メリー王女の最後の砦は、ズルズルと脱がされてしまった。その途端、

「オー、ノー！」

たまげるような夫人の絶叫が迸つた。夫人は数日前、自分が黥した女性がプリンセスそのひとであつたことを、王女の白い臀部に明瞭に浮び上っているロイヤル・クラン（王室紋章）を見てわかり、悲痛なショックを受けたのであつた。

「プリンセス、メリー。おお、お気の毒に、あなたとは、あなたとは夢にも思わなかつたのです」

夫人は両手の拳で床を叩きながら、狂つたように哭いた。

「キレイに墨が入っているじゃないか。もと



張

もと、ここにはアザがあつたのよ。それを隠すために、刺青をすることになったんじゃないの。何をそんなに騒ぐの」

エミー司令が冷たく嘲笑した。

「さ、早く約束を果たすんだ」

再び電気鞭が踏つた。

ハッと氣をとり直した夫人は、もう物の怪に憑かれたように、疲れ切つた王女の裸身にのしかかつていった。

「の、喉が……」

よろよろと立ち上つた夫人が、苦しそうにつぶやいた。背徳の限りをつくしたあと、王女は死んだように床に転がっていた。

「のどが乾いたのだろう。スコッチでも、飲ませてやれ」

今度は英語で有明が言った。

「酒はイヤ。み、水をください」

あえぎながら夫人がバーに近づいて来た。

「水はダメ。さあ、これを……」

エミー司令が、スコッチ・ウィスキーを入れたファッシュン・グラスを差し出した。溺れる者は藁でも掴むというのか、現在の夫人の心境だった。両手で、そのグラスをかかえた夫人は、ググッと一息にそれをあおった。「なかなか、いい飲みっぷりだ。いいさ、もう一杯、くれてやれ」

有明の命令で、再びグラスにウィスキーが注がれるのを、呆然と見ていた夫人は痴呆の

ようにそれを又、飲み干してしまった。シェリー酒を小さなグラスでやっても、ふらふらになってしまう夫人にとって、このアルコールは、まさに毒藥そのものだった。

ちょっとしたアトラクションに満足した一同は、食堂に移ることになった。

食堂は正面だけがテーブルになっていて、これに有明とエミー司令、ウィリー博士夫妻の四人だけが座り、あとは全員が床に敷いた円座に、階級に従って円く胡座することになった一同は、ドリンクタイムを、たっぷりとしたことから、すっかりくつろいで、顔を赤く上気させている。事実、今日は慰労の会だったから、無礼講の許しが出ていて、窮屈な礼式や厳しい階級差を或程度、忘れたとしても大目に見られるはずであった。

英国の貴婦人たちをサカナにしたプレイはここでも執念深く続けられる。

先ずメリー王女が連れて来られた。アマゾン女兵たちが座っている円い人垣の中に追い込まれた彼女は、さっきのあとを見せろと強要された。どうして、そんなことが出来るだろうか。

「はずかしい。いや、いや」

裸身を、くくり猿のように丸めた王女は、床をころげ廻って、責め手から逃れようとするのであった。

「そんなに恥かしいか。それならソコを、かくしてやろう。その代り、われわれの食事に お給仕をするんだぞ」

ホッとした思いで王女は有明の言葉を聞いた。

たちまち、細い紐が王女の腰に廻される。それは、何と有明が投げたナプキンだった。股間を廻して、それぞれ前後の紐に挟み込まれる。左手が後に廻されて、腰のナプキンの端に結びつけられた。

やっとのことで、腰帯を外してもらったイングリッド卿夫人が、今度は後手に縛られて曳き出されてきた。飲みつけない酒に酔って、足もとも乱れ勝ちであった。その細首に縄がかけられ、縄尻も短く王女の左手首に結び合わされる。

アマゾン女兵がピシャリと、夫人の前かがみになった腰のあたりを叩いて言った。

「オーケー。ちょっとでもプリンセスの手から離れると、プリンセスのナプキンが、とれてしまうよ。お気をつけて」

と嘲笑した。

王女は左手を後に廻したまま、酔っぱらったイングリッド卿夫人をひきずって歩かなければならない。無理をすれば、軽く挟んだだけのナプキンが抜けてしまう。

泣く泣く王女は右手に銀盆を支えて、高橋侍従の指図通り、あっちこちと酒を運び、料理を届ける難行を開始した。その臀部に顔をつけるように必死に従うイングリッド卿夫人をひっぱって、それはまるで、トレーラーのようにギゴチなかったのである。

有明がウィリー博士に言った。

「新津謙介を呼んでやってくれませんか。ヤッコさん、大分、もてあましている頃でしょう。われわれの前で、この王女を犯させてみたいのです。この王女にしても、さっきみたいなものより、新津の立派なものの方が、貰い甲斐があるというもの。給仕には、チップをやらなくっちゃね、ハハハハ」

有明は、如何にも愉快で愉快で、たまらないといった風に、心の底から高らかに哄笑するのであった。

王女の難行苦行は、依然として、まだ続いていた。

(未完)

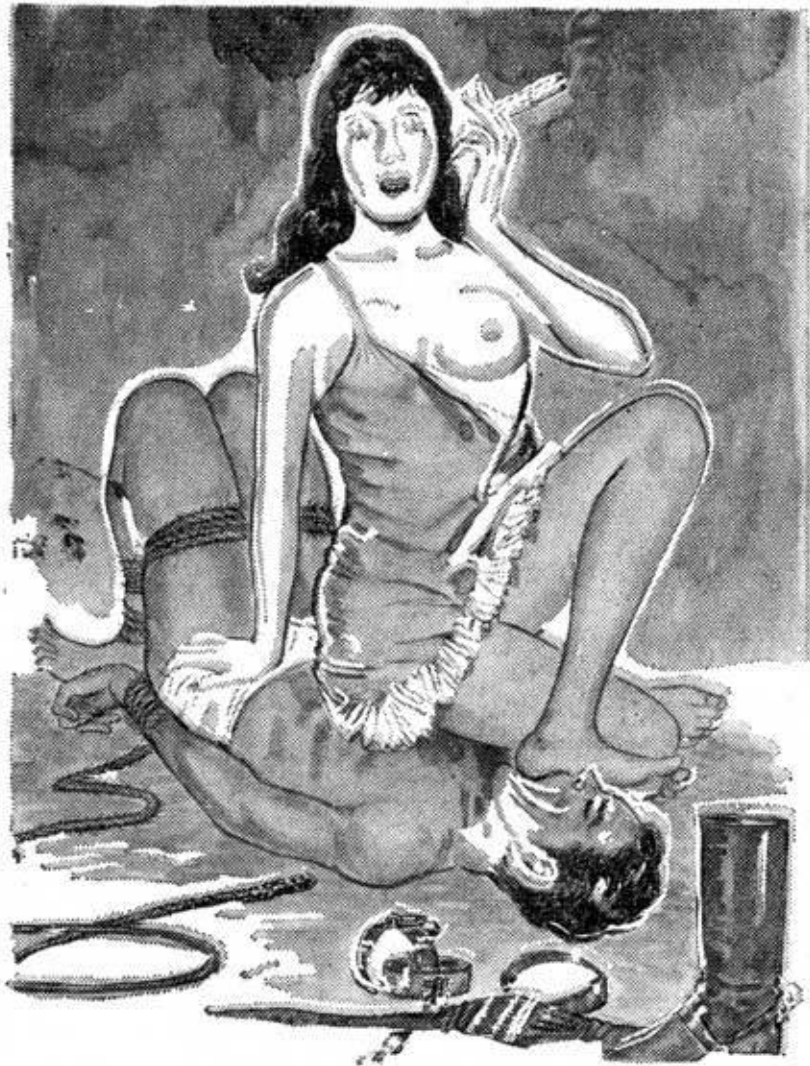
連載……Mグループ【空想創作集団】作品

女の虜囚

(9)

△ある湯治客の話より▽

佐藤 麻 造



隅の壁際に三個、並んでいる懲罰房はコンクリートで固められて、天井の上につけられた換気装置の外には蟻一匹、出入りする小孔

り退る。ねじ向けた顔を床にすりつけ、水戸婦人看守を見上げた被懲罰囚は、後手の腕をもがいて何か哀願した。手錠を外して欲しい

とてなく、小型のトーチカのような鉄扉の前で六十三号は、少しは逆らう身振りを示して何か喚いていたが、やはり本気で抵抗する気はなく尻をこっちの方へ突き出して身を屈め、膝でいざって鉄扉の中へ半身を入れた。暗黒の房内を見て六十三号は怖気づいたか、膝がにじ

と哀訴しているのだろうか、きびしい横顔を弛めない水戸婦人看守の足が拳がって、囚人は鉄扉の中へ蹴り込まれた。一段低くなっている房の床へ転がる囚人の姿が見え、忽ち鉄扉は二重に閉められてしまった。

「あんた、入れられた事、ある？」

女囚十四号が恐ろしげに小声で言った。

「ないの？ 私は二昼夜、入れられたわ。苦しいわよ、まっくらなんでもの」

スカートを払い、襟を直しながら、詰所へ戻る水戸婦人看守と入れ違いに、小娘の婦人看守が、やって来た。

「松原さん、もう手入れは済んだようよ」「そう。さあ、又、絞ってやるかな」

近寄る彼女の靴音を聞いて二人の男女の囚人は身を固くしながら、戒具の手入れに落ち度はないかと肩を、わななかせた。

「綺麗にしたかい？」

「ハイ。性根を入れて磨かせて頂きました」

「ふん。まあ、いいだろ」

松原と呼ばれたこの頬の赤い小娘のような婦人看守は女囚十四号に顎を、しゃくった。十四号も未だ、ほんの娘だが、松原看守はそれよりも更に若いように見える。

「お願い申し上げます」

女囚十四号は自分の首環を押し戴いて婦人看守に差し出し、跪いたまま赤黒い条のついた首を差し伸ばした。女囚の目が口惜しげな色を浮べて伏せられ、床の一点を見つめる。重い鋼鉄の首環が大きな音を立てて嵌められた。女囚は自分で両足首に足錠を嵌め、繋がった鎖を重そうにじゃらつかせて革鞆を持った立ち上がる。同い年位の同性の婦人看守の無慈悲な手で、切なくも苦しい革鞆を締め込まれ、緊め上げられて施錠の音を聞く、みじめさを堪えつつ、女囚は両足を開いたまま、されるままに、じっと立ちつくしていた。

「ありがとうございます」

額を床にすりつける女囚の頭を靴先で小突

いた松原看守は四十五号囚に顎をしゃくろ。

「お前だよ」

女囚十四号に見習って、ひたすらに、この小娘の御機嫌をそこなうまいと思ひながら鎖錠の装着を受ける彼は、自分の身がつくづくと哀れに思えるのだった。

昼食の囚人食を受け取りに行くのは情けなかった。意地の悪い松原看守は、わざと回り道させて、検事局の裏門の近くを通らせるのだ。重い容器を背負って十四号と並んで追いつてられる姿を社会の人々に眺められねばならない。二人の囚人の腰に、それぞれつけた捕縄を握って背後から絶えず叱りつけては、若やいだ声で笑う松原婦人看守が恨めしかった。

「あら、懲役人よ。一人は女囚だわ」

「ほんと。可哀想みたい」

「あら、そんな事、言ったってさ、奴隷だって同じ事よ。鎖つけられて、こき使われてるじゃないの。あんた、奴隷には、とてもきつい癖に、おかしいじゃない？」

「そうね。自業自得なものねえ」

大きな封筒を持ったB Gらしい娘さんが眉をひそめながら、じろじろ眺めた。

「股の所でカチャカチャ揺れてるの何？」

「手錠に決まってるじゃないの」

「あら、自分を縛る道具を、あんなところに、いつも吊らされてる訳ね。ホホホ」

「あのままの所で手錠かけられるのよ。みじめな恰好になるわ」

「あーら、そうお」

「あれ、非破廉恥罪の既決囚達ね」

「あんた、詳しいのね。非、何とかって一体何なんなの？」

娘さん達は話しながら去って行った。

第二種監房の建物の隣のタンクから容器に囚人食がドブドブと満たされた。

「お、お願いです。いつもの道を通らせて下さいまし」

何十名分かの囚人食を、やっとの思いで背負った女囚が、両手を合わせて婦人看守に哀願した。人目につかない通路があつて、いつもは、そこを通るのだ。

「駄目々々。少しは恥かしい思いをおし。いづれその中には社会の方々に散々笑って頂けるようになるんだからね。泣いたって、駄目よ。さっさと、そっちへ曲って」

女囚は背負い革の喰い込んだ肩を震わせてシュクツと嚙り上げ、諦めて足鎖をガチャリと鳴らせた。監房区画では、隅の懲罰房の喚

気孔から洩れる被懲罰囚の喚き声が、遮光装置に弱められて低く低く断続していた。松原婦人看守が二重の鉄扉をガチャガチャと開いた途端、六十三号囚は這い出ようとして一段低い房の床から、にじり昇ろうと身をもだえる。その頭が無慈悲にも蹴り飛ばされ、六十三号は再び房内に倒れ落ち、後ろ手錠の身を揉んで、喚き哀願した。顎をしゃくられて謙二、いや四十五号囚が房内の床に食器を置くや否や、必死の面持ちで振り仰ぐ六十三号の痛そうに、しばたたく眼前で鉄扉が閉じられた。途端に喚き声が微かになる。松原婦人看守が施錠しながら

「四十五号、お前、入った事あったっけ？
そう、ないのね。じゃ、その中に入れてやるわ。そんなに恐ろしいとは、思っていないんだろ？ フッフ、お前なら、そうね、先ず一昼夜でネを上げると思うな」

彼は言い返す言葉もなく、食器を集めて各房を歩き回るのだった。他の囚人の食事の始末を済まさねば、彼と十四号とは餌にありつけないのだ。咽喉がカラカラに乾いて、唾液も乏しく、クーと鳴る空腹を抱えて曳きずる鉄鎖が一しお、重かった。異臭を放つドロドロの囚人食を啜るのが囚人に与えられた唯一

の楽しみなのだ。そのせめても楽しみも、看守の一言で簡単に奪われてしまう。もっとも禁食させると体力が弱まって刑の充分な執行に差し支える事もあるので滅多には行われぬ罰ではあるが、受刑者になったばかりの彼は、その苦しみを教えるためもあったのだろうが、忽ち禁食の罰を喰ってしまった。

「四十五号。お前は昼の餌抜きよ。先刻、食器を落したろ？ 空だったからよかったけど入ってたら夜も抜きだわ」

小娘のような松原婦人看守に事もなげに言い渡されて、彼は悲しくて情けなくて泣きたい思いだ。哀願したとて赦される見込みはないのだ。女囚十四号が自ら股手錠を嵌めて、いそいそと食器に顔を寄せるのを横目で眺めながら、彼は命じられた通り、先刻、自分で満たした食器を両手で前に水平に支えて正座した。隣の女囚が床に身を伏せたまま、食器を舐め動かして床に鳴らす音を聞くと、目が昏みそうだ。女囚の鼻環が舐め取られた食器の底を摺ってカラカラ鳴り、惜しそうに身を起した女囚が、小さな舌で口の周りを舐め回しながらフーツと息をついた。一口でいいから啜りたいと、囚人は眼前の褐色の粘液を切なく眺め、婦人看守を哀願の眼差しで見上げ

るのだったが、御慈悲は得られなかった。前日の鉄砲手錠で痛められた両腕がキリキリ痛んで堪えられない程だ。

「十四号、済んだのね」

「ハイ。有難うございました」

「四十五号。腕が下ってるよ。フッフ、ちゃんと捧げてりや喰わせてやってもいいと思ってたんだけど、駄目ね」

婦人看守は意地悪くからかって嘲笑した。「よし、もう下ろしていいわ。立って手錠をおし。嵌めたかい？ 自分の房の便器へ捨てておいで。何をモタモタしてるの！ 手で持てるだろ。馬鹿ね、ほんとに。こぼしたりしたら今夜も禁食よ」

股手錠の両手で食器を持つのは一苦労だった。両膝を思い切り広げて床につき、手錠の痛さをこらえながら精一杯に伸ばした両手の指先をようやく食器の縁に掛けて立ち上がるうとした途端、よろめいた。一杯に張った足鎖に引かれ、こじてグイと回る足首の鉄環の痛さが骨にこたえる。足鎖と吊鎖が食器に当たって、揺れた粘液が縁を越えて、床にこぼれた。膝を大きく開き両腿の間で円い食器を指先に持った囚人は立ちすくんで絶望の呻きを洩らした。

「フフフ、いきなりこぼしてしまったわね」
松原婦人看守が鞭を手に近寄って来て冷笑した。彼女の意地悪さと自分のみじめさに囚人は全身が熱くなる程に口惜しい。

「早く捨てておいで」

「お、お慈悲でございます。夜の禁食は、お赦し下さいまし。お、お願い！」

「ホホホ。そんなことは後でいいから、早くお行き。愚図々々してると……」

振り上げられた鞭を肌感じて囚人は歩み出した。膝を曲げて開いたまま、腰、背を前に曲げ、自分の下腹部を覗き込むような姿勢で辛うじて一步一步、足を動かすのだ。ただでさえ、こぼれ勝ちなのに、体のぎこちない動きは、そのまま食器に伝わり、吊鎖はともすれば後ろから食器を押し動かす。よちよち歩く囚人の額に脂汗が浮び、俯向いた顔の真下の粘液の表面から囚人の腹、胸に沿って囚人食の臭いが立ち昇って、囚人の唇からは涎れが垂れた。手錠を股革に結合した錠金具が本当に恨めしい。

「いい恰好ね。おかみさんに見せてやりたい位だわ。男っぷりに、惚れ直してくれるよ。ハハハ」

通りすがりにそう言って嘲笑したのは、和

服姿の新入りらしい女囚の腰縄を握って引き立てて来た中年の婦人看守だった。村田というその婦人看守は、大きな口を開けて小肥りの体を制服の下で揺すってガラガラ声で面白そうに笑ったが、曳かれて来た女囚は彼のはじめな姿をチラと見やった目を忽ち伏せて、両手首に光る手錠を見つめたまま、十八号の札をつけられた首を深々とうなだれていた。鞭を手に、ぶらぶらと松原婦人看守は囚人を追い立てつつ罵り嘲笑う。辿り着いた自分の監房の便器に囚人食を流し捨てた囚人は身を切られるような思いで鼻を噉った。

「お慈悲でございます。夜は、お赦し……」

「うるさいわね。夜のことは後で決めてやるわよ。こぼした分は舐めさせてやるかな」

床に点々とこぼれた囚人食を舐めて綺麗にさせられた囚人は股手錠を外され、再び労役だ。看守詰所の入口に鼻環を繋がれて、看守達の鞭を磨く囚人の眼前で、お茶が噉られ、おやつ菓子ポリポリと音を立てて食べられた。

「お腹が少し空いてるようね。もう少し締めといたげるわ」

松原婦人看守は小憎らしくそう言って、何か頬張った口を動かしながら囚人を蹴って立

たせ腰の革枷や股革を更に強く締め上げる。息が詰まる程にきつく締められた革鞆の苦しさに、囚人は喘ぐ思いで再び床に正座して

「ありがとうございます」

「おや、何が有難いの？」

「ハイ。革鞆を締めて頂きまして……お手数を掛けます」

「フフフ。そう、そう。その気持を忘れなきやいのよ」

この婦人看守に、おもね阿って少しでも点数を上げ、夜の禁食を赦して貰おうとする囚人は、思わず知らず全身に卑屈な色を浮べた。そしてそのような我が身を恥じて、みじめな涙が両目に溢れる。

「せめてのお慈悲にさ、見せるだけは見せてやるわね。ほら、これが人間の食べる物よ」

囚人の膝の前の床に香ばしそうな塩せんべいを二、三枚投げ捨てて婦人看守は声高く嘲笑った。押えても押えても、こみ上げて来る口惜しさ無念さに唇を震わせつつ、囚人は黒エナメルハイヒールを膝の上に抱いて、底の土を落し始めるのだった。

四十五号囚は監視台の下に床にうずくまって、護送用の戒具を磨いていた。先日、八名の受刑者の護送に使用されたのが送り返され

て来たのだ。鋼鉄の首環、そして腰革と股革とに分解された革褌。更に股革の結合金具から離された手錠、吊鎖、足錠等、八組。船の錨に使えるような重い連鎖が二条。その各々は五、六米程で両端に頑丈なジョイント用錠金具がついている。更に小さな木箱の底には、六名の男囚達に使用された錠が六個、鈍く光っていた。

「その錠は六個共、四十五号が手入れするんだよ」

村田婦人看守が鞭の先で示しながらガラガラ声を張り上げた。

「ハ、ハイ」

「よく磨くんだよ。性根を入れて、手入れおし。さもないと、お前に二つでも三つでも嵌めてさ、ここを送り出されるまで外してやらないから。ハハハ」

彼女は男のような声で笑った。四十五号囚が、その一個を摘み出して見ると、頑丈で精巧な錠装置に、短いぢれ毛が二、三本、巻き込まれていた。これと同じ物を自分も嵌められていたのだと思うと、その存在が、やる方ない悲哀と共に、下から突き上げて来る。娑婆にいた頃の話では、一週間に一度だったか一カ月に一度だったか、外して貰えると聞

いていたが、そのようなことを婦人看守に訊き確かめる勇氣は、とてもない。嫂の邸にいた男の奴隷が罰を喰って、待ち焦がれた日になっても外して貰えず、世にも悲痛な顔つきをして血走った目で喘ぎ苦しんでいた姿が思い浮べられた。それでなくても冷酷な婦人看守達は、その苦しみを想像すら出来ないため軽い気持で懲罰を加えるに相違ないのだ。執行者にとっては何の手数も要らず、そして男の囚人にとっては骨身にこたえて残酷な懲罰だ。彼は頭を振って妄想を払いのけ、その構造を具さに見詰めながら油布で、こすり始めた。彼が嘗て面白半分に弄んだことのある、奴隷の錠とは段違いに精巧で頑丈なその構造に、囚人は絶望の思いを、ひしひしと味わうのだった。

「あんた、よく磨かなきゃ駄目よ。ほんとに三つ四つ、嵌められてしまうわよ」

足錠の最後の一組を丹念に磨き上げた女囚十四号が、ぶらぶらと立ち去る村田婦人看守の後ろ姿を見送って今度は手錠をカチャカチャと取り上げながら唇を動かさずに言った。「私ね、いつかうちの奴隷にさ、ぎっちりど並べて嵌めてやった事があるのよ。若い男だったわ。私、よく分らないけどさ、よっぽど

苦しいものらしいわねえ。のた打ち回ってさほんとにもう、これ以上はないって言う程の怨めしそうな目で私を見上げてたわ。無理に外そうとしてさ、夢中で引っ張ったりして痛みに飛び上ったりして……。脂汗をタラタラ流して面白かったわ。けど今になって考えると、可哀想な事したわねえ」

女囚十四号は、尻の下の自分の手錠をカチャカチャ鳴らして、その位置を直し、腰枷の僅かな隙間に指先を差し込んで揺さぶって溜息を吐き、そして顔をしかめながら咳いた。「護送用の手錠は随分、頑丈で重いものねえ。鍵があつたって、これ嵌められたら、自分じゃ外せっこないわね」

女囚が磨いている護送用手錠は、今彼等二人が股革に取り付けられているものより二回りも肉厚で、二個の鋼鉄の開閉環の構造は同じだが、ただ一個の頑丈な丸い鋼環で、連結されている。片方の指先で持つ鍵は、如何にもがいても、他方の手首の鍵穴には届かないようになっているのだ。

「鍵を口に、くわえてやったって、先ず駄目なのよ。鍵穴のそばの、ホラこのポッチを強く押したまま、鍵を一回り半、回さなきゃいけないの。私、知ってるのよ」

監視台から降りて来た婦人看守が、女囚の背に鞭を当てた。返す鞭が四十五号の腿の上に鳴る。

「何を話してるの！」

素直に鞭を二つ三つ、肌を受けながら、女囚は上体をよじってヒーツと泣いたが、それでも神妙に鞭の御礼を申し上げると、それき

り黙ってしまった。

「磨いたかい？ お前達にや、一番大切な錠なんだからね。ハハハ」

六個の錠を白手袋の手で入念に検査する村田婦人看守の豊かに張ったスカートの腰の辺りを眺めながら四十五号囚は、わななき震える思いだった。摺れて内側の所々が光る股革



イメージギャラリー

『未練の朝』

岡 かし

の汚れを綺麗にし終えた頃、昼食の時間が迫って、二名の囚人は追い立てられた。二、三日前に入所した十八号の女囚と五十六号の男囚が房内後手錠の懲罰を受けていた。二名共ほんの些細な反則を発見されたのだ。教養ありげな四十才前後の男囚は三日程前から、女囚の方は今朝、起床直後からである。食器を配り歩き終えた四十五号は、彼等の用便の世話をしてやらねばならない。夜も昼も嵌められ放しの後手錠の切なさ、五十六号の男は彫りの深い顔を汗と涙と、そしてこびりついた汚れでクシャクシャにして、憔悴し切った色を浮べて時々喘いでいた。薄汚れてボタンも飛び散ったワイシャツは、ぶざまにはだけて乱れ、しわくちゃのズボンの膝は、すり切れて破れている。薄笑いを浮べた村田婦人看守を恨めしげに見やった五十六号は、よろめいて立ち上り、微かに嗚咽して立ちすくむ。四十五号囚は指先で摘み出してやらねばならない。堪え難い屈辱を忍んだ五十六号は震え声で、

「未だ外しては頂けないのでしょうか？」

「フフフ。あと二日、辛抱おし。もっとも、延長されるかも知れないけどね」

婦人看守は手錠の鍵を五十六号の鼻先でク

ルクル回して見せつけながら嘲った。

「せ、せめて、食事や、いえ、用便の時だけでも……」

「ハハハ。懲罰のうちじゃ一番軽いんだよ。これ位でネを上げてちゃ、これからどうするのさ。うだうだ言っていないで、早く食べたらどうなの？」

村田婦人看守の声はとげとげしく冷たい。

「もう腕がもげてしまいそうで……」

「いくら哀れっぽい声を出したって無駄よ。さ、いつまでも、お前のお相手してられないよ。こら、四十五号。ボタンを全部、掛けとかなきゃ、駄目じゃないか。そうそう。ひがまなくたっていいのよ。この五十六号も近い中に、お前と同じように錠を掛けられるんだから」

鉄格子が音を立てて閉じられ、口惜しげに歪む五十六号の頭上で施錠の音が響いた。紐の類を全て取り上げられている和服の女囚十八号は、身も世もなく身もだえして恥じた。帯は殆んど解けてしまい、はだけた胸許の襟を合わせる術もない女囚は、全身を硬くしてすすり泣く。何の容疑で捕われたのか知らないが、女囚の体つきは恋しい早苗のそれに、よく似ていて、四十五号は目が昏む思いで齒

ざしりした。堪え難い激痛が、突き上げて来る。諦めたのか、嘔り上げながら、しゃがむ女囚の哀れさに、彼の胸は締め上げられる思いだった。背に回した両腕で解けなかった帯を必死に押える女囚の小さな唇はワナワナと震え、白粉気のない両頬に涙が伝わる。ふくよかな手首に固く喰い込む冷たい鋼鉄の手錠は非情に光って、両手首を短く繋ぎ合わせ、指が悲しげに動いた。見も知らぬ男の手で始末を受けた女囚は、悲鳴のような訳の分らぬ声を挙げて床に打ち伏し、両足を縮めて絞るように泣いた。裾を合わせようともがき回る女囚の後手錠は背と床とで押さえつけられて益々固く締まり、痛められている両手首の白い皮膚が、更に痛めつけられて赤い血が滲んだ。

「恥かしがっていられる身分じゃないよ。こを、どこだと思ってるの？」

村田婦人看守は嘲りながら、それでも靴先で女囚の裾を蹴って、合わせるようにしてやった。

「勘忍して下さいまし。私が悪うございました。お願い。もうこの手錠を外して……」

「お前、悪い事して捕まったんだろ。悪い事すりゃ、手を縛られるのは当たり前だよ。ま、

もう二、三日、そうしておいで。もがくのは勝手だけだね、もがけばもがく程、締まって来て痛いよ。ゆるめてやらないからね、そのつもりでおとなしくしといて。自分の分際が腑に落ちたらね、今度はお調べの時に、どう申し上げたら、お手間を取らせないかを、よく考えることね。これ、横になる時間じゃないよ。起きて正座おし」

午後、四十五号と十四号が再び護送用戒具の手入れを始めて間もなく、女囚十八号は房の前に引きずり出されて鞭を受けた。正座を崩して泣き崩れていた彼女は、裾を高々とかち上げて、ひざまずかされ、尻や腿に鞭が鳴った。鞭の味を知っている囚人達が耳を掩いたくなる悲鳴がコンクリートの天井や壁に響き渡る。

「あのひと、初めてらしいわね。あんなところに鞭喰ったら、正座の時に堪まらないわよ。ちゃんとしてりゃいいのに、馬鹿ねえ、あのひと。けど、どうせこんなものをブラ下げるんなら、おそかれ早かれ同じことね」

女囚十四号は自分の鼻環に、ちよっとさわって自嘲するように呟いた。

朝から晩まで鞭と足蹴で、こき使われた挙句、疲れ果てた我が身に自ら股手錠を嵌めさ

せられるのは、みじめな思いだった。静まり返った監房区画の通路に、足鎖をガチャガチャ引きずり背を丸く曲げて、ガニ股のぶざまな歩き方で自分の独房へ追われる気持は、本

当に堪まらなく悲しかった。蹴り込まれて床に倒れて呻く頭上で、先ず鉄格子が、そして重い鉄扉が音を立てて閉じられ、嘲笑うような施錠の音が聞えると、腹の底から囚われの身の悲哀と無念さが吹き上って来た。房内でも外されない股手錠は全く辛い。しかし、これが定められた規程なのだ。如何に苦しくとも辛くとも、どんなに切ない思いでもがいて見た所で、一旦、自分で嵌めた股手錠は、どうしようもないのだった。仰臥して背を床に伸ばして着けようとすれば、両腿を開いて挙げねばならない。足を縮めて横臥すると、両腿に挟まれる手錠の環が知らぬ間に、ともすればジ、ジ、ジ、と締まって来て元にはゆるまず、手首を苛むのだ。就寝時間中は坐る事は勿論、嚴禁だ。全く残酷な箇所に手錠を取りつけるものだ。こんな股手錠なんかより、後手錠の方が余程ましだった。独房の床を、みじめな恰好で、のた打ち回る彼を、巡視の婦人看守達は監視孔から冷然と眺めた。最も気立のやさしい水戸婦人看守ですら、規程で

定められたこの拘束具は外してはくれないのは勿論の事、哀れみの表情さえも滅多に浮べはしない。

「今日の労役も済んだわね。じゃ嵌めて」

二、三步、離れて立った水戸婦人看守は、向き合って立つ囚人四十五号の全身を慣れた目で調べながら、きびしい声でいう。股間の手錠をカチャカチャと前方へ引き出した囚人は、手の甲で目を押し拭いて身を屈めた。うんと下方へ伸ばした両手首に、翌朝までは離れる事のない手錠を自分でガッチリと嵌め、

「お調べ下さいまし」

制帽を脱いで黒髪を撫でつけながら、彼女は囚人が精一杯、前方へ引き出して示す手錠を、ちらと眺め、制帽をピンで留めた。

「お調べ下さいまし」

既に自分で手錠を掛け終えた女囚十四号も彼の隣で口惜しげに言って両膝を開き、手錠をカチャカチャ言わせた。女囚十四号は、夜おそくまで看守詰所のあたりで雑用に使役される事が多いのだが、水戸婦人看守の担当の時には夕食の始末が済み次第、直ちに監房へ入れられるのだった。後ろを歩く水戸婦人看守の靴音を、自分達が鳴らす鎖の音と共に聞いて、彼と並んで歩く女囚は肩で頬をこすつ

ては吐息を洩らした。水戸婦人看守は囚人を房へ蹴り込むような事はしない。四十五号囚が房の床の上に顔をしかめながら正座し、そしてモゾモゾと体を動かすのを眺めながら鉄格子扉を閉める。

「股手錠、少しは慣れた？」

彼女のあわれみの言葉も囚人にとっては嘲りに聞えた。無言で見上げる囚人の目に、制服の胸を豊かに盛り上げた線が灼きついて鉄扉の向うに消え、そして毎日の事ながら悲しい施錠の音が囚人の耳に冷たく響いた。

やがて就寝のベルが鉄扉を透して鳴り、囚人は足を縮めて床に横たわった。受刑者としての取り扱いを受けて、もう一週間も経ったろうか。無性に早苗が恋しい。小憎らしい嫂や薄情な兄にすら、会いたくて堪まらなかった。やり切れなさにもがく囚人が、両手首を足の間から抜こうと両腕に力をこめて引っ張ると、鋼鉄の環が手首にめり込んで喰い入り錠金具がガチャガチャと鳴って股革の後ろ半分が更に喰い込んで痛く、そして分厚い腰革の後ろが微かにずり下って腰骨を、がっしりと押え、それ以上は両腕は動かない。手錠と同じ錠金具に取りついてはいる足鎖の吊鎖を両手で握った囚人は、それを振って床に鳴らしなが

ら、切なさに呻いて背を丸めたまま、床をのた打ち回った。

「何をもがいて騒いでるの？ 静かにしないと嵌口具よ」

水戸婦人看守が監視孔から覗いて、眉をしかめて叱りつけた。

「苦しいかも知れないけど股手錠は戒護規程なのよ。他のひとだったら、そんなに騒いだと窄衣掛けるかも知れないわ。その股手錠の取り付け金具は、まだ後ろの方へ移せる筈よ。今度、騒いだら鞭を当てるからね」

そう言い捨てて彼女は監視孔の蓋をパタンと閉じるのだった。

翌日の担当は若い松原婦人看守だった。

「今日は、お天気もいいし、たっぷり陽に当てさせて上げるわ。二人共、おいで」

朝の雑用を済ませた四十五号囚と十四号囚は、追いつて立てられて拘置所を連れ出され、検事局の裏庭から横手を抜け、裁判所の正面玄関前の広い庭に立ちすくんだ。堂々と長くいかめしい裁判所の建物の前の庭は、敷石の通路に縦横に区切られて、芝生が青々と植えられ、所々に大きな樹がそびえて、枝を張っている。風雨に年月を刻んだ青銅の低い優雅な柵には、あちこちに蔦草がからみ、その柵に

仕切られた向うは広い街路の歩道だ。街路には車が行き来し、その向うにはビルが午前の陽光に窓ガラスを輝かせ、柵のすぐ向うの歩道には多勢の男女が、或は忙しげに、或はゆっくりと連れ立って、笑いさざめきつつ通っている。腰に大きな拳銃の革サックを吊って制服姿もいかめしい守衛達が屯ろしている正門のあたりにも、出入りする人々の姿が見られた。前庭の東端、柵の内側に接して小さな工事現場が土盛りのままで見受けられ、五米四方位のコンクリートの基礎が既に幕板を外されてあった。

「今、通って来た裏門の横手にブロックが沢山、積んであったろ？ あれを、あそこの工事場のそばへ運ぶのよ。雑品倉庫を作るらしいわね」

出入りする人々が二名の囚人をジロジロ眺めて通った。

「分ったね。手錠かけて……」

松原婦人看守は事もなげに命じ、囚人達は驚いて立ちすくみ、顔を見合わせる。

「手錠を嵌めろ、と言ってるのよ。聞えないのかい？」

婦人看守の右手の鞭が動くのを見た囚人達は、背を丸め両膝を開いて両腕を下に垂れて

伸ばし、冷たい手錠に指先を掛けた。

「嵌めたかい？ 鼻面を、お出しよ」

二名の囚人の鼻環にカチカチと金具が鳴って、一米足らずの鉄鎖で繋ぎ合わされた。通りすがりの人々に、眺められて女囚の肩が震え、その頬に涙が流れる。

「守衛さん、お願いしますわ。ブロックを運ばせますから」

松原婦人看守に声を掛けられて、四角な顔の守衛がやって来、鋭い目で囚人達の体を見回した。

「西の端を曲がってから向うは知らないぜ。ここからじゃ、目が届かないものな」

「あの角から向うは裏門の守衛さんに頼みますわ。私も、ちょいちょい来ますけど」

婦人看守は囚人の肌に一鞭宛、くれて

「さ、ずるけると承知しないわよ。それから言っとくけど、敷石の上を歩いちゃいけないよ。そばの砂利の所しか歩いちゃ駄目。芝生を踏んだりしたら足裏に焼爇よ。さ、きりきり運んで！」

「このままですか？ あ、あんまり……」

泣き声で哀訴する女囚は鼻の鎖を掴んで振り回され、更に激しいビンタを喰って悲鳴を挙げた。ヒューと振り上げられる鞭に二名の

囚人は、おののきあわてて後ろへ身を回そうとし、鼻鎖を互いに引っ張り合つてよろけ、呻いて膝を地に落とした。互いに外側へ体を回したのだ。見物していた人々が面白そうに笑った。鉄鎖をジャラジャラ鳴らせながら身を起し、今度は互いに内側へ体を回す囚人達は、鼻の痛みと堪え難い屈辱の思いに流れる涙が、お互いの歪んだ顔に伝わるのを見た。

並んで追われる二名の囚人の肩や胸に鼻の鎖が前後に揺れ当って音を立て、深々と背を曲げ、うなだれた彼等の肩や上膊や、時には腰のあたりが触れ合った。

「それを持つよ。フッフ」

裏門の所に難然と積まれたブロックの山を鞭で示して、婦人看守は事もなげに命じる。両膝を思い切りひろげ、お尻を低く下に持つて行き、手錠の両指を精一杯に伸ばして、囚人は足鎖や吊鎖に悩みながら、辛うじて両腿の間に重いブロックを一個、持ち上げた。自分の事に精一杯の囚人達は、鼻鎖を引っ張り合つて呻く。大きく広げた両膝は、ぶざまなガニ股のまま閉じる事はおろか、絶えず力をこめて開いていなければならない。喘いで並んだ囚人達の膝と膝が、ぶつかり合う。

「じゅうぶん持てるだろ？ 立っていないで

運ばなきゃ駄目じゃないの」

泣きたい思いで建物の角を曲がって前庭に出ると人々の視線が正面から浴びせられ、女囚は立ち止って身もだえして喘ぎ鳴咽した。

「泣くのは勝手だけどね、誰も助けては下さないよ。いいかい、今日中に全部、運ばないとヒィヒィ言わせてやるからね」

囚人達の背後をゆっくりと歩く婦人看守は冷たく言うのだった。前庭の東端の工事場に着き指示された地上にブロックを置いた囚人達は喘ぎながら肩で頬を押し拭いた。脂汗が垂れる額を拭きたいのだが額には届かない。

「三段四列位にキツチリ積み上げるのよ。欠いたり壊したりすると、懲罰よ。官品毀損の罰は重いわ。分ったね？ 何故、返事しないの？ ふてくされてるのかい、二人共……」

「ハ、ハイ。よく分かりました」

二名の囚人は泣くような声を出した。受刑者の身には絶対の服従があるのみなのだ。松原婦人看守は囚人達に鋭く冷たい一べつをくれ、制帽の黒髪を陽にきらめかせて、すんなりした足でスカートの裾を蹴り蹴り、足取りも軽く去って行った。

「く、くやしい」

女囚十四号は伸ばすことの出来ない上体を

もだえ、腿の間に挟み込んだ手錠をガチャガチャいわせて声を震わせて低く喚いた。

「いくら口惜しがったって仕様ないよ。さ、運ばなきゃ」

「だって、こんな恰好で働かされて、あなた何とも思わないの？ 世間の人達が多勢、見て行くのよ。恥かしいわ。いくら懲役囚だからって、こんなにまでしないでも……」

歩き出す彼に鼻鎖を曳かれ女囚も足鎖をガチャつかせながら悲痛な声で言うのだった。地面を見つめたまま、全身の汗を陽に照らされ、齒を喰い縛って労役を続ける二名の囚人のみじめな姿に、人々は或は身を遠ざけ、或は立ち止ってあわれみと、さげすみの入り混じった目でジロジロと眺めた。十回も往復しただろうか、ブロックを地面に置いた女囚が、そのまま膝をついて喘いだ。

「も、もう運べないわ。背骨がミリミリいそうよ。腰や腿が硬く突っ張っちゃって」

男である四十五号囚も疲れ果てて膝がガクガク折れそうだった。重い鎖をぶら下げた鼻がチ切れそうに痛いし、両手首は砕けそうに締めつけられて指先は痺れたようだ。汗が鞭痕に激しく泌みて、喚きたい程に切ない。

「手錠だけでも外して貰えたらなあ」

よろよろと立ち上りながら女囚が彼の呟きを聞いて、
「外してくれなくてもいいのよ。こんな、こんな所にさえ、結びつけてなきや。ちくしょ

う！ なんとか離せないかしら、この金具」
切なくもどかしそうに両腕をもだえ動かす女囚を嘲笑うように、股革の錠金具がガチガチ鳴った。



イメージギャラリ

『毒婦百景』

春日田春夫

「ああ、到底、駄目ね。外せる訳が、ないわね。よく分ってはいるんだけど」

その金具の頑丈さや手錠の構造を思い出した女囚は、手首の痛みに顔をしかめながらブロックの角で額をこすり、諦めて呟いた。

「あの看守の小娘の奴、きつと仕返ししてやらなくちゃ。彼奴、奴隷にでもならないかしらねえ。そうしたら買い取って思い切り……」

女囚は歯がみして口惜しがった。

「さあ、行こうよ」

「そうね、辛いけど仕方ないわね」

いくら口惜しくとも辛くとも、懲罰の恐ろしさを思うと心が凍るのだ。未だ、いくらも運んでいないブロックの山を考えると、囚人達は焦燥に駆られ、疲れ果てた体に鞭打ってお互いに急ぎ立て合うのだった。

美しく塗り立てたバスが、正門を滑り込みすぐ内側の駐車場に停った。

「多勢、降りて来るわ。女の人ばかりよ」

重いブロックを痺れた指先で股間に支え、懸命の努力でヨチヨチ歩く女囚が、角を曲がった所で、上目使いに広い前庭を見て、息をつめるように叫んだ。裁判を傍聴に来た婦人団体だ。

「どうせ同じ事だよ。グズグズしていて、も

し見つかったら、ひどい目に遭うぜ」

四十五号は鼻鎖で女囚を引っ張った。

地面を見つめる目の隅に華やかな色彩がチラチラし忽ち囚人は御婦人方の目に止った。

「あら、囚人が二人、働いてるじゃないの」

「何してるのかしら。妙な恰好してるわね」

「ブロックを運ばされてるのよ。凄い汗！

この涼しいのにさ」

「ブロック運びは分ってるけど、どうしてあんな所で持ってるの？」

何も好きでこんな所で持ってるんじゃないんだ、と囚人の胸は煮えかえる思いだ。

「あら、やはり手錠、嵌められてるのよ。可

哀想にねえ。でも当り前ね」

「そうよ、当然だわ。あの門の向うは人間の社会なんだから。手錠かけとかなないと危険だわ」

「手錠のままでもブロック運び位、出来るものねえ。けど、どうしてあんな風にしてるのかしら？　ともかく滑稽なざまだこと」

「ホホホ、ほんと。けど本人達は、みじめな気持ちよ、きつと」

どうしようもない二名の囚人が、脂汗にまみれた全身を喘ぎ波打たせつつ頭を深く垂れて、鎖錠を鳴らしてヨチヨチと通り過ぎるの

を眺める御婦人方は眉をひそめながらも面白そうに笑い合う。ククと鳴咽して堪えていた女囚が一声ヒーと噁り上げた。

「あれはね、股手錠にされてるんですのよ。

手錠を股革に結びつけられてるんです」

黒いスーツを着た婦人が説明した。幹事役らしいその婦人は、なかなか詳しい。

「あの囚人達は再審訴願中の既決囚だと思えますわ。股手錠を用いているのは、この拘留所と、他に、もう二、三カ所しか、ありませんの。革褌か鎖褌を装着しなきゃなりませんし、外してやるのに体を曲げなきゃいけませんしね」

「そうねえ。けど、あれやられると、こたえるでしょうね」

「苦しいことも苦しいでしょうけど、先ず気がまじめになるわね。それが狙いだけど」

「私のとこの奴隷、生意気な態度したら、あおしてやろうっと。革か鎖の褌させればいい訳ね」

「必要な道具は売ってますわ。けど手錠が汚れ勝ちになるわよ」

「舐めさせりゃいいじゃないの」

御婦人方は笑いさざめきながら、裁判所の中へ入って行った。

疲れ果てた女囚は時々よろめいていたが、

ひる前になって遂にブロックを取り落してしまった。張り切っていた足鎖の上に落ち、重

いブロックに押えられた鎖は、女囚の両足首の足錠の鋼鉄環をこじて女囚は疼痛に呻く。

やっこの思いで再び抱え上げたブロックの縁は、かなり欠けていた。敷石に靴を鳴らして

守衛がやって来て睨みつけた。

「こらっ。とうとう落したな」

女囚は体をビクリと震わせて、おののく。

「お見逃し下さいまし。お慈悲ですから担当様に言わないで……お、お願い」

「ふん。たるんだからだ。ま、ともかく労

役を続ける。馬鹿な奴等だ」

守衛は罵声を浴びせて立ち去った。

「誰も、これっぽちのあわれみもかけてはくれないのね。こんなに辛い思いしてるのに」

痛められた足首に呻きながら、鎖を引きずる女囚は、涙声で言うのだった。

「未だ三分の一も運んでないじゃないの。午後に職人さん達が来るのよ。間に合わないかどうかするのさ」

ようやくありついた昼食を貧ばり噉った二名の囚人は、忽ち追い立てられて再び前庭の砂利の上で喘いだ。股手錠さえ赦して貰えれ

ば訳なく運べるのに、と恨めしく思う囚人達の胸の中を見すかす様に松原婦人看守は

「股手錠がなけりゃ、もっと能率が上がる、と言いたいんだらう？　けど、そんな楽をさせる訳には行かないよ。世間の人様のそばで労役させて頂くんだからね。みじめな思いをしてさ、ぶざまな恰好で脂汗垂らして労役するのが当然よ。これっ、四十五号っ。敷石を踏んでるじゃないの」

あわてて引込める囚人の足の甲に鞭が狙い違わずピシリと鳴った。

これが苦役というものなのだ、と自分の胸に悲しく言い聞かせた囚人達は、みりみり痛む背骨や砕けそうな腰、そして棒のように硬張ってしまった足に鞭打ちつつ、再びみじめな苦役を続けるのだった。伏せた目を時々挙げて、行き来する人々を盗み見る囚人達の顔には、哀れみと救いを乞う色が浮ぶが、人々はおどましげに汚らわしげに身をよけ、さげすみと嘲りの視線を浴びせて通り過ぎて行く。開け放たれた門や低い柵の向うには、明るい陽を受けた自由な世界があった。歩道を軽やかに通る男女の姿が、見まいとしても囚人達の目に映り、人間の社会の営みと生活が鎖錠をまとう囚人達の肌に、ひしひしと感じ

取られた。やっとの思いで運んだブロックをお互いの体同志、もつれるようにして辛うじて積み置いて、ホッとした思いで戻る二名の囚人は、切なく柵の彼方を見やって新たな涙を砂利の上に落すのだった。自由を剝奪された受刑者の身の悲哀と法のきびしさが、今更の様に胸を締め上げた。

「ああ、鼻が千切れそう。こんな重い鎖を鼻につけられたのは、初めてよ。ちょっと待って」

女囚が顔を振って鼻鎖を肩に掛けて支え、腰をよじって股革の工合を直した。歩き出すと忽ち鼻鎖は女囚の肩から滑って落ち、女囚は悲しそうに溜息を洩らした。

両足の間の両手にブロックを支え、呻きながら工事場にやって来た二名の囚人は、地上に腰をおろして一服している数人の男女を見て、思わず立ち止った。松原婦人看守の言った通り、ブロック積み職人達がやって来たのだ。印ばんでんに地下足袋姿の三人の男は一人は年配で二人は若い。日傭労務者らしい二人の女性は芝生にべったりと腰をおろして鼻鎖で繋ぎ合わされた二名の囚人をジロジロと眺めていた。陽に焼かれしわが刻まれた顔の年かさ女と、口紅だけが、やけに赤い、少

し年若の女は、どちらも黒っぽいモンペの足を女だてらにあぐらに組んで、薄笑いを浮かべた顔一杯に露わな優越感を漲らせている。

「人間、あんな風になりたくないよねえ」

年かさの女が愉快げにそう言い、若い方の女が、うなずきながら大口をあけて笑った。

「そうだと。ああなっちゃ、おしまいだよね。あんなところに両手を突込んでさ」

「いくら貧乏しててもさ、この連中よりか、なんぼ、ましかなれないさ」

「あんなさ、まを人目に晒して、さぞ情けなからうじゃないか」

「ずるけりゃ、鞭でぶたれるしさ、鎖から逃げ出す訳には行かないし、生地獄さね」

ままならぬ体をもがき、鎖錠の身のもどかしさに喘ぎ喘ぎ、最後の努力を振り絞ってブロックを積み上げた二名の囚人は、薄汚れた日傭労務者の女達の声を耳に聞き、その視線を全身の肌に感じて、ひとしお激しくこみ上げる屈辱感とみじめさに、全身を赤く染めて恥じ入った。

「グズグズしてないで、さっさと運んどいてよ。鞭でぶたれるよ。懲役人のくせに」

年かさの女は口汚く罵り、もう一人の女が小石を投げつけて声高く笑い合った。

「私、もう死にたい」

砂利を踏んで足鎖を曳きずりながら若い女囚の娘は戻る道じゅう、身も世もないように肩を震わせて啜り泣くのだった。再び戻って来た工事場では彼等は未だ仕事に掛からないで駄弁っていた。若い職人に何か言われた口紅の女が身をくねらせてキアキア笑う。

「ホラ、やっと来たよ。ずい分と長く掛かるんだねえ。もつとも、そのさまじゃ、それで精一杯かも知れないけどさ」

年かさの女が、短い煙草を惜しそうに捨てながら言った。

「此奴等、二人つるんでるけど、夫婦だったのかしら？」

口紅の女が、男の手を振り離して言った。

「そうじゃないさ、何なら訊いて見ろよ」

若い男が、しつこく手を伸ばして言う。

「又！ しつこいよ、あんたは。おかみさんに言いつけるから」

口紅の女は身をくねらせて囚人達を眺め、

「ねえ、あんた達、懲役を喰う前は夫婦だったのかい？ お揃いで懲役勤めとは洒落てるじゃないか」

女囚が口惜しげに唇を噛み、鼻鎖をジャラリと鳴らせて顔を上げ、女の方を睨むように

見やったが、忽ち目を伏せて忍び泣いた。

「何をやらかして、ふん縛られたんだい？」

何年位、ぶち込まれるのさ？ え？」

四十五号囚は、やる方ない憤怒に燃えた。

「なんちゅうつらをしてるんだい。折角、訊ねてやってるのに、返事位したらどう？ ハイとかイイエとか」

囚人達は無念さに目も昏む思いだった。しかし、日傭労務者とはいえ、彼女達も立派な社会人なのだ。その足許にも寄れない程に隔絶された境涯の懲役囚は、許しなしには一言の口すら、利く事は出来ない。

「おい、お前等。そんな奴等をからかってないで、ぼちぼち仕事にかかろうぜ」

「おい来た、親方。けどさ、あの若い女囚、なかなか別嬪ですぜ。可愛い体してら。オッパイのあたりに鞭喰ってさ、可哀想に」

若い男達は腰を上げた。

「何言ってるのさ。可哀想なことなんか、ちつとも、ないじゃないか。自業自得だもの」

「どうせ、好いたの、はれたの、の末に男の一人二人、殺したんだろ。いいさまさね」

女達はモンペの土を払いながら毒づいたが年配の親方は囚人達の背を眺めて

「あんまり苛めるもんじゃないぜ。それでな

くても情けねえもんなんだから」

と、たしなめた。

「親方。そんなこと言っただけで、第一、返事もしないでさ、睨みつけるなんて生意氣じゃなくて？」

「そりゃな、あの連中はこちとらに口を利くことは出来ないんだよ」

「だってくつわ嵌めてないのにさ」

「私達とは、分際が違うって事だわね」

女達は、鎖を鳴らして立ち去る囚人達の曲がった背に優越感をこめた嘲笑を浴びせるのだった。二名の囚人が息も絶え絶えに運ぶブロックは次々と積み上げられて行ったが、工事場のそばに積んだブロックは囚人達が心配する程には減りはしなかった。しかしモンペの女達は喘ぎ喘ぎやって来る囚人達に、そのたびに油を売って手を休めながら、そのぶざまな姿をあざけり笑い、小石を投げつけ、そしてもっと急げと、せき立てるのだった。陽が沈みかけると、職人達は帰り支度を初めた。

親方は皆を引き連れて、がやがやと立ち去って行く。恨めしげに彼等を見送った二名の囚人は、再び足鎖を曳きずり初めた。

(つづく)

〔読者原稿〕

落書にみるサディズム

〈排泄と性の関係を暗示するトイレの落書〉

村中森太郎

九美淳・画

フランス文学者河盛好蔵氏のエッセイの中に、『フランスでは公衆トイレの落書を集めた本が十九世紀に出版されている。さすが文化国家だけのことはある』というような意味の文章があったように記憶している。(手元にその本がないので確認できない)

我が国でも落書(落首)の歴史は古く、奈良時代まで、さかのぼることができる。とくに文化文政、江戸文化の爛熟期から幕末にかけて、その数も多く、内容もユニークでエスプリにとんだものが多い。中でも、ペリー来航時の『日本を茶にしてきたか蒸気船(正喜撰)』たった四はいでよるも寝ささん"という

やつなどは、その代表的なものである。

落書の寿命は短い。長い間、人々に語りつがれるという性質のものではない。それだけに正史には表われない庶民の生の声、うらみつらみ、憤懣、生活がこめられている。作者の情念が、こもっている。それが、たとえ稚拙な絵、乱暴な文章であっても見る者に生々しく迫ってくるのは、そのためであろう。ここにレポートした落書は都内近県の駅、デパート、公園、映画館、ボーリング場、喫茶店などのトイレで収集したものの中から、サディズムに関するものだけを抜き出したものである。

一口に、サディズム傾向の落書といっても色々あり、責められている者のパターンで分けると、だいたい次のようになる。

- 。女学生
- 。OL・女子大生
- 。人妻
- 。幼女
- 。実在タレント及び女優
- 。ということになる。

△女学生マニア▽

落書に登場する女学生は、必ずセーラー服を着ている。この頃の女学生はスーツ形式の制服を着ている率の方が多いと思うのだが、



落書では、セーラー服が圧倒的多数をしめている。

立ったまま縛られている女学生のスカートの下に、頭を突っこんでいる男。猿ぐつわをはめられ、イスに縛られている女学生。オナニーを強要されているもの。四つんばいにされて後方から……ものなど、数えあげたら、キリがないという感じである。

オナニーをしている絵は、絶品で、イスに腰かけた女学生の表情が実にリアルに描かれている。グレーの木製のドアに青いボールペンで、ていねいに描きこまれていた絵はデッサンも正確で素人ばなれした出来ばえだった。千駄ヶ谷のトイレで場所柄、近くにデザイン学校や絵画研究所などがあり、案外、そこへ通っている人が描いたものかもしれない。猥褻感を感じず、上品な印象だった。

文字で書いたもので一番多い

のが絶叫型。

「女学生と……やりたい！」

いたって単純明解、ストレートな告白。おなじ告白調でも、もう少しストーリーがあるやつ。

「俺が小便をしているとS高の女学生が奥のボックスへ入った。ドアに耳をつけると小便をしている音が聞こえる。俺は決心した。ドアが開くと俺はとびこんで女学生の首をしめて、さわぐと殺すぞ！ おどかすと女学生は観念しておとなしくなった。俺は女学生の口にハンカチを押しこんで……」。

この後も、俺と女学生の文字が長々と続くのだが、おそらく、これを書いた人は女学生という三文字を書くたびに興奮していたのではないだろうか。

反対に女学生が告白しているもの、

「今日、朝のギューギュー電車の中で前にいた中年男にエッチなことされた。スカートの下に手をいれてきたので、恥かしくて下向いてたら、調子にのってパンティーに指いれてきた。イヤだから後ろをむいたら手がはずれたのでホッとしたら、スカートの上からお尻に何かをおしつけてきた。あとで見たらノリみたいなものがついていて、ふいてもとれない

い。頭きちゃう。変態、スケベ”

これは小田急線の女子高のある駅の共同トイレで見つけたものなので、被害にあった女高生が書いたものと思われるが、たいてい、この種のもの作者は男である場合が多い。書かれてある場所や筆跡、文体をみると何となく、わかる。

会話型。

「おじさん、許して」

「バカ、おとなしくしろ。ガキのくせに色っぽいパンティー、はいてるじゃねえか」

「お母さん、助けて」

「へへへッ、いいケツしてるなエちゃん」

「あっ、イタイ、イタイ、死んじゃう」

「どうだ、こうされるといいだろう、おい」

労働者風の男が、四つんばいになっている女学生のおさげ髪をつかんで、馬のりになっている絵がついている。

羨望タメ息型。

「日本中にいる女学生の数だけ……がある。それなのに俺には、ひとつも回ってこない。ああ」これなどは、よほど女学生に恋こがれているらしい。

それにしても女学生物が多い。へんないかただが、人気がある。なぜだろう。女学生

というところ、制服の処女というイメージが定着している。女学生は汚れを知らぬ処女のシンボルであり、そのシンボルを汚すという空想は、男が本来、持っている美しいものを汚したい、征服したいという欲求を満足させるのだろうか。

それと忘れてはならないことは女学生イコール、セーラー服ということである。セーラーは文字通り水兵のことであり、セーラー服は男っぽい軍服である。けっして女っぽいものではない。いいかえれば、粹で男っぽい軍服を、まだ女になりきらぬ年頃の少女達が身につけることで、一種いいようなないエロチズムが発散するのではないだろうか。

意識する、しないは別として、多くの女学生願望の男達は、そのことを敏感に感じとっているような気がする。

△OL・女子大生▽

「美人のOLをイスに縛り、ハナをつまんで口をあけさせ、髪を両手でまき上げ………せんずりイクイク」

最後のところで吹きだしそうになった。こんなことができたならなあ———と思ひながら、自家発電したらしい。

同じトイレのデパート・ガールに対するも

の。

「大丸のメンズコーナーにいるK子を、ここへひきずりこんで浣腸してやった。K子は、いつもツンとすました感じのアイビー美人。声をたてられるとうるさいので当て身を入れてやると、腹をおさえて、うずくまった。ミニをまくりパンティーをさげてイチジクをブチコムと、ブリグソをたれた。顔に似ず、クセークソ！ ふいてやると、ヒイヒイ泣いてよろこんだ」

実話形式の創作告白。東京駅の男子用トイレなので、K子さんをひきずりこめるわけがない。作者はK子の同僚が、よくいく客なのかもしれない。ツンとすましている彼女をみながら、頭の中で楽しんでいるのだろう。

嘘か本当かわからない情報提供型の見本。
「N大文学部二年の〇〇悦子はマゾなのだ。縛りっこしよう、とさそえば、どこへでもヒョコヒョコついてくる。縛られて見られるのが大好きなのだ。どんな助平なこととしても、平気だよ。ウソだと思ふなら、さそってごらん。（ヒント）いつも一人で来て窓ぎわに座る、身長一五三センチぐらいのグラマー。レモンティーを飲みながら、角川の文庫本、読んでるから、すぐわかる。声かけてごらん、

本当に”

本当かね。そう思えば、なんとなく本当らしくもあり、ウソだと思えばウソのようでもある、人心を迷わす落書。場所は神田の喫茶店、なかには真にうけて、それらしい女性に声をかけた人もいるのではないだろうか。女性もビックリするだろうな、きつと。あとでトイレへはいり、事情が解って笑い出した人もいるだろう。

この落書にかぎらず、書く方は軽い気持ちで書いているのだろうが、案外、色々な人に、めいわくをかけている場合も多いだろう。とくに清掃係の人にとっては、よけいな手間がふえるだけ、腹立しいものだろう。そのせいか、近頃のトイレは、なかなか落書がしにくいようになっていく。

内側は自然石やタイルを使い、トビラの裏側は黒くぬってある。が、それでも落書はある。黒いトビラにエンピツで、

“パンティー・ストッキングをはくようになってから、女は墮落した。昔は、よかった。スカートの中から、チラチラ見えるパンティーやガードル、クツ下止めの色っぽかったこと。それにしきかえ、パンストは野ボダ。そのせいで、このごろのOLは慎みがなくなっ

た。パンストはいけない、絶対に”

この横に、机の間からパンティーとクツ下止めをつけて腿をMの字に開いている、女性の下半身だけが描かれていた。昔は、こうだったというわけなのだろう。

作者は中年のサラリーマンで多分、役付きで、仕事中に会社の女子社員の体をのぞいていたのかもしれない。地下鉄虎の門駅。

OL物と女学生物とをくらべてみると、OL物は女学生物にある、切実でドロドロした執念のようなものが、あまり感じられないことがあげられる。

△人妻物▽

人妻を含む年上の女性に対するもので、これも意外と多い。内容から判断すると大半の作者は学生や若いサラリーマンなどの独身者と思われる。

“僕は予備校に通っている二浪です。二度、東大を受けて失敗しました。僕の毎日は灰色です。ただひとつのことをのぞいては……”

今年の夏、僕が下へおりてゆくと下宿の若い奥さんが三つになる男の子と昼寝をしていました。ムームーがまくれ、真っ白いパンティが丸見えになり、僕の理性は狂いました。僕が近づいても奥さんは、そのままの姿勢で

寝ています。僕がパンティーを、ずり下げてもまだ、気づきません……”

これは有楽町の映画館でみつけたもの。人妻のかわりに義姉、女教師、隣のおばさん、先輩OLなどが登場し、共通点は、いずれも作者からみて年上の女性であること。これは男が初めてセックスを体験するときは、年上の女性に性のもろもろの知識などを教えてもらいながら、優しくリードしてもらいたいという願望。もしくはマザーコンプレックスのようなものが、かくされているようである。もうひとつ、人妻物。

“おいばれ社長が外国へ出張中、俺は若くて美人の奥さんをものにする。俺がたずねてゆくと応接間へ通される。女中がお茶とケーキをおいて下がると、奥さんがあらわれる。俺と向きあって座ると、奥さんのスカートの中が見える。むっちり白い太股。あやしいパンティー、俺はとびかかって、ソファに押し倒す。声をたてられないように、素早くハンケチをおしこみ、ネクタイで、後手にくく。スカートとパンティーをとり、下だけ裸にむく……”

一種のシナリオ調で書かれている。作者は頭の中で、自分の書いた台本どおりに行動し

ているわけである。そうすることで現実には、社長夫人を犯しているような気になったのだろう。

内容からさっすると、作者は中小企業の若手社員で社長宅へも訪問したことがあるのだろう。夫人とも面識があり、老年の社長が、多分、後妻だろうと思われるが、若く美しい夫人を持っていることに羨望、あるいは嫉妬したか、それとも何か、おもしろくないことを言われたことが原因で、この落書になったのかもしれない。

社長が大事にしているであろう美しい夫人を汚すことで、それが空想であっても、いや空想だからこそ、思うがまま汚せるわけで、ムシャクシャしたものを吐き出した作者は、案外ケロツとした顔でトイレを出ていったかもしれない。

△幼女姦▽

最近、幼稚園児や小学生の女の子にイタズラをする男のことが、新聞、テレビなどで報導されたことは記憶に新しい。

落書の中でも、幼女に対するものは数が少ない。が、それだけに書かれたものをみると作者の暗い情熱のものすごさに暗然とすることがあり、ウソだろうなと信じなくなる。

「博物館の裏のボチで、小学生の女の子がオシッコをしていた。白い小さなお尻が可愛ゆく、ガマンできなかった。墓石のかけへ連れて行ってスカートをはまくり、パンツを下して……」

上野公園のトイレ。近くに立坎パンがあり、「この付近で変質者が、いかがわしい行為をするところがあるので十分注意するように」という警察の注意書きが目をついた。

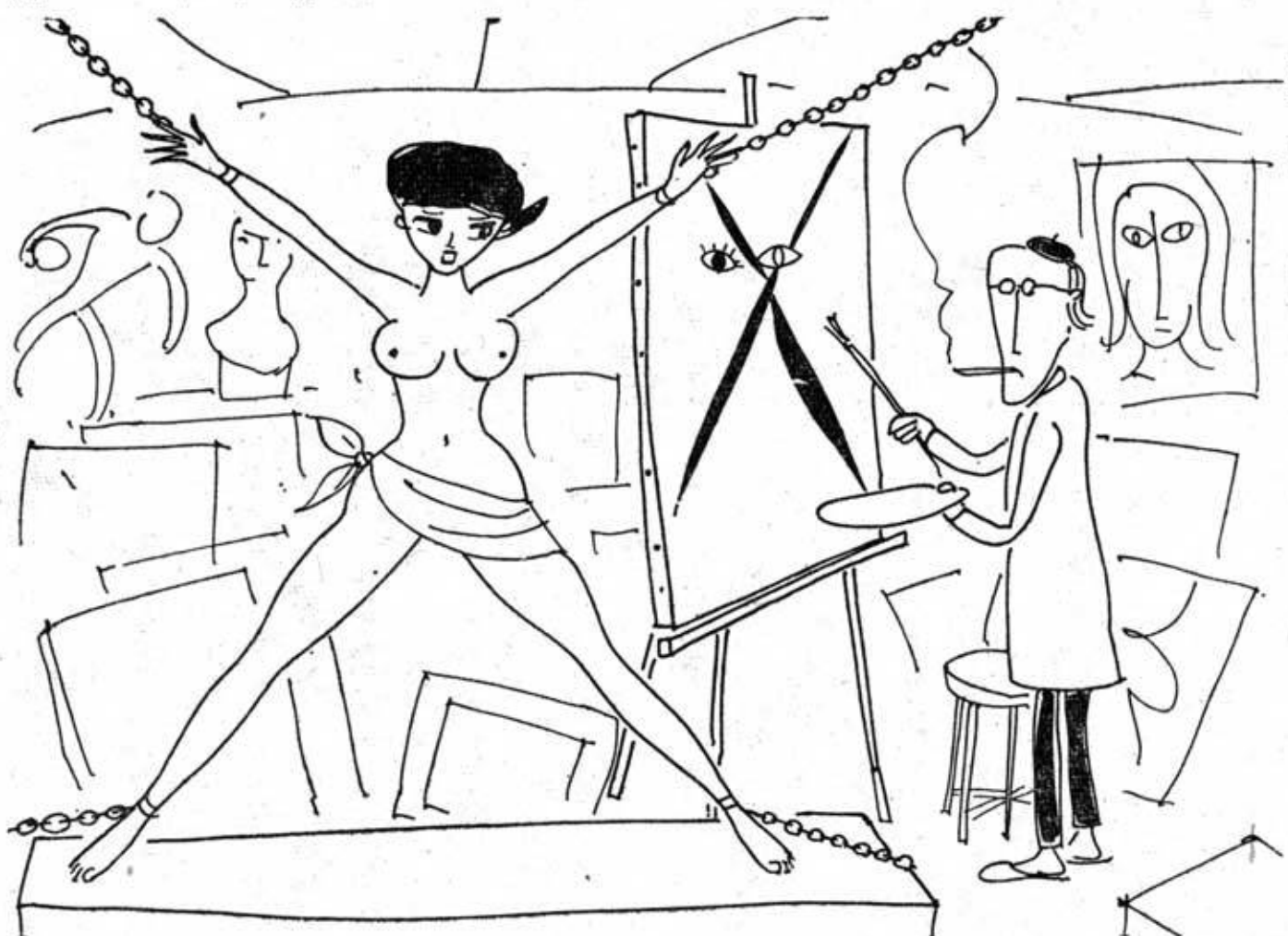
国電の四谷駅。

「貴様は変態だ。小さな子供に何ということをするのだ、許さん。俺が見つけて、ふんづかまえてやる。フザけるな、馬鹿野郎」

とあり、さらに、その隣に、「同感。私も協力する。中央線から、このような痴漢を追放するべきだ。小さな女の子や婦人は専用車に乗るように」

とあった。
イタズラをしているという落

書きが事実であろうと、なかりうと、同じ年頃の娘を持っている男親としては、読み流す



わけにはいかないだろう。腹が立ち、許せないだろう。自分の娘が電車通学をしていたとしたら、その思いは、なおさらであろう。

都内のあちこちで、日曜の校庭開放日に遊びにきていた女の子、十数人をだまして乱暴していた若いサラリーマンがつかまった事件があった。

幼女にイタズラしてみたいという願望を持っている者が、頭の中で、それらのことを空想し、落書をしているぐらいならいい。が、いったん空想を現実におきかえて実行した場合、あるいは、しようと計画した場合、相手は精神的にも肉体的にも未成熟な段階にあり言葉たくみに誘惑することも、暴力で屈服させることも可能であるだけに、この種の落書の作者に一種の危惧を感じる。

願わくば彼等が、落書の中だけの幼女マニアであってほしいと思う。神も知っている。人は誰でも頭の中では姦淫していると……。

△有名人に対するもの▽

普通の生活をしている人間にとって、有名人（歌手・タレント・女優）などとは、テレビ、映画などを通じて一方的に知り合いになるだけであり、舞台の場合も、これと変らない。いわば片思いであり、常に彼女らは高嶺

の花の存在で、手がとどこぬところにいる。

映画やテレビを見ながら「いい女だなあ。可愛い娘だなあ」と思うだけで、実際には話をすることも、手を握ることもできない。思いはつのれど……どうにもできないのである。彼女達と、つき合う方法は、ただ一つ。空想の世界しかない。そこで初めて作者は、お目当ての有名人と対等にあるいはそれ以上に自由に好き勝手なことができるのである。

比較的、多くみかけるのは、歌手では天地真理、浅田美代子、由美かおる、あべ静江。女優では日活ポルノの白川和子、東映の杉本美樹。いまは引退した藤純子など。タレントはレモンちゃんこと、文化放送の落合恵子、龍角散のCMにでてくるセーラー服の中学生美智子さん。イレブンPMの松岡キッコなどが、あげられる。

「天地真理の、あの形のいい口で……してもらいたい。真理ちゃんがテレビでハンドマイクを口に近づけるたびに、僕はしびれています。尺八好太郎」

天地真理が、にこやかに笑っている似顔絵が書かれている。この絵も線画で、なかなかうまいものである。

浅田美代子は可愛いな。歌が下手なところ

ろがいい。見ているとハラハラする。そこがたまらない。泣きベソをかけた美代ちゃんを抱いてなぐさめてやりたいな。平凡でみた美代ちゃんのパジャマ姿、可愛らしかった。ちょうど、あの辺のところがくいこんでいて、ちよっとエッチな感じがよかった。美代ちゃんのおそこ、どんなかな。見たいよ、美代ちゃん

平凡をみていると書いてあるから、中学生か高校生。年がいていても、二十才出たか出ないかぐらいの男の子だろう。

「由美かおるのお尻の形はいい。あれほどいいとは思わなかった。キュッと上をむいてプリプリしている、水蜜桃のような感じ。あのお尻を平手でピシャピシャたたいたり、グニャグニャもんだりしたいね。彼女は処女だ、絶対に」

話題になった千曲川のヌード・ポスターをみたのだろう。つぎは、あべ静江の歌、「水色の手紙」を、もじったもの。

「桃色の手紙。新人賞、おめでとうございます。あなたの理智的な顔、しめりけを含んだ切ない声を聞きたびに、私の思いは、つゆります。私はあなたを、おもいきり恥かしい目にあわせて、イジめてみたいと思っているの

です。あなたを縛り、体の自由を失った、あなたに色々なことを、してみたいのです。あなたはパンタロンが似合いますね。それもパントリーも脱がせてしまいます。あなたは恥かしい姿を私にみられるのです。私は顔をうずめ、においをかぎ、舌や唇で、あなたを攻めまくりまします。静江様、私は約束します。あなたが今まで味わったことのない快感を、あなたにプレゼントできることを。お返事をお待ちします。静江様、一ファンより”

この右上に、

“バカ、返事なんか、くるわけないだろう。

お前もバカだねー。これが返事”

とあった。渋谷の喫茶店。歌手に対するものは意外に内容も、おとなしい。これが女優の方になると、内容も露骨で濃厚になってくる。そして、ほとんどが絵である。いずれも浅草六区の映画館でみつけたものである。

白川和子。映画の中のワンシーンを、そのまま絵にしたような感じで、乳房をあらわにされた彼女がスカートをまくられ、下半身をおし上げられている。これが黒のマジックでトビラ上部いっぱい、力強いタッチで描かれている。中心部は、ごていねいに赤いマジックで彩色されていた。

藤純子。この落書も、ひと頃、よく見かけたが、今はほとんど描く人もなく、あったものも消されてない。藤純子演じるお竜姐さんが、柱に縛られ左右を高くつられて、秘所をあらわにされている絵である。細身のサインペンで、ていねいに描かれていた。

杉本美樹。東映のスケ番シリーズで人気があるからだろう。藤純子のかわりに見かけるようになった。全裸にされて両手を上からつるされている絵。大の字に縛られている絵。手足を縛られてころがされている絵。三点とも、同一人物の筆になるものと思われる。黒のボールペンで、ていねいに描きこまれている。

この種の落書をみると、みなそうとう、書きなれているという感じを受ける。体や顔などの線は簡単に手ぎわよく、まとめられ、作者が一番描きたい部分は入念に描きこまれていることが共通点として、あげられる。こういう落書マニアは、あちこちの映画館で仕事をしているらしい。

タレントに対するものでは落合恵子に人気がある。学生や若者が集まる喫茶店、ボーリング場、駅などで、けっこう見かける。内容は、あまりドギツイものはない。

“レモンちゃん。レモンちゃんのレモン色のオシッコがしみこんだパンティがほしい。僕だけにください。レモンちゃんのパンティの色はレモンイエローかな?”

“落合恵子さん。あなたの『スプーンパイの幸せ』という本よみました。セイヤング聞きたがらセンズリこいています。あなたの声をききながら僕はイクのです”

“落合恵子は早大英文科出のインテリだが、インテリらしくなく可愛い。声がいい。たまらなくいい。顔もいい。たまらなくいい。僕だけが知っている彼女の秘密、君だけにおしえよう。彼女のおそこは少女のように美しい。つまりパイパンでこと”

落書する者、見てきたようなウソをいい。というやつ。多分、彼女はパイパンではないだろう。お次は龍角散のCMパロディー版。

“僕は今日、放課後の教室で美智子さんとキスをした。美智子さんは興奮して僕にしがみついていた。僕は美智子さんを机の上に寝かせ、スカートをまくった。美智子さんはノーパンだった。僕がさわると美智子さんは、くすぐったいとお尻を浮かした。と、日記には書いておこう”

中学生か高校生。もしかしたら、大学生か

奮て御投稿して下さい！

「松岡キツコは馬鹿などではない。彼女は僕と同じ町内に住んでいるから、よく知っている。外車を運転しているのだ。彼女は目が美しい。僕は彼女にアラビアンナイトにでくさるような女の姿をさせてみたい。きっと似合うだろう。腰をクネクネふりながら踊る彼女をながめてみたい。もちろんノーパンだよ」

左記テーマにて募ります

一、女性読者の告白、体験談

編纂最近、讀者通信に投稿されたり、編集部や
 たりする女性讀者の方が多くて、大變意を強
 くしております。しかし、讀者通信なんかで
 お友達を得たりして満足されると、そのまま
 沈黙してしまわれる方が案外に多いのです。
 それには、いろいろと御事情もお有りと思
 います。が、その後は、本誌の讀者の方々の氣持と
 しては、その後の経過も、どうなつたのだろ
 うかと、知りたいものなのです。
 そんなわけですから、お便りだけでも、是
 非、お寄せ願ひたいのです。編集部としまし
 て、直接、お願ひいたします。文章の長短巧拙に拘ら
 ず、女性讀者の方々も、お寄せ下さるよう、お待

とがわかった。こういう人は落書をするためにトイレを利用する。また用たしに入って見た落書に誘発されて、書く人もいるだろう。

政治的な落書がふえてきている。が、やはり主流は性的なものである。トイレ以外の落書には性的なものは少なく、トイレには、それが多いという事実は、排泄と性との何らかの

二、夫婦SMプレイの体験

今迄に、夫婦SMプレイの珠玉の告白が数多く本誌上に発表されて、文獻誌としての本誌の評価を高めて参りましたが、同時に、讀者間に告白された夫婦の方々の人気をも一層高めて参りました。

こうしたSM夫婦プレイ体験者の方々の告白が、今や、真に待望される時代になつてきました。そうした体験者の誌上を通じての交流こそ、焦眉の急と云つても過言ではないでしょう。

読者の方々の中で、夫婦又は恋人、愛人間に於ける広い意味でのSM関係の体験談を、お寄せ下さるよう、お待ち致します。

裏付けにならないような写真があれば尚結構です。住所氏名、其の他、発表に支障のある事

三、特別異色体験談と告白

關係を暗示しているようで、興味深い。

排泄行為をする場であるトイレに、性的な内容の落書が多いということは、一人とざされた密室での行為が、自然と“性”そのものに志向するのであろう。

そのうち、排泄、浣腸、生理といった面から見たトイレの落書についてもレポートしてみたいと考えている。

(おわり)

柄は、一切、秘匿されていいのですが体験の内容に關しては、出来るだけ詳細且つ正確に御報告頂ければ幸いです。

尚、塚本鉄三氏の写真撮影を希望される御夫婦の方は、別に御照会下されば、改めて御返事差し上げます。

三、特別異色体験談と告白

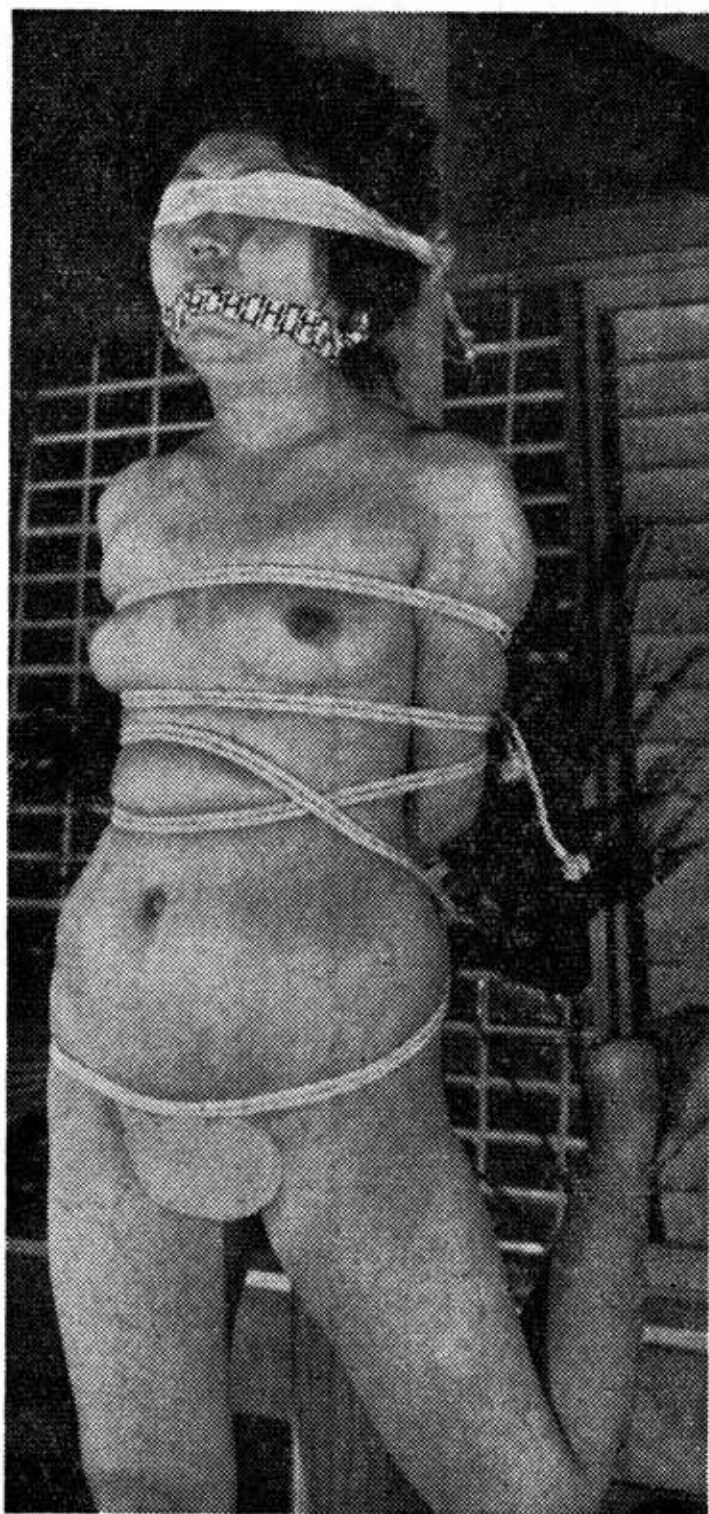
普通の雑誌では、取扱わない異色ある性癖の告白。例えば、マゾ体験、窃視、下着愛好同性愛、節片崇拜（フェチズム）、獸姦体験或は嗜好、近親相姦など、どのようなことでも、長短に拘らず、詳しく記載の上、御投稿下さい。尚、体験に至らずとも、それが異色あるものでしたら、一応歓迎します。

本誌既刊号の読後感につきましても、それが執筆者の特異な性癖に由来するものでした。是非、お寄せ願います。投稿者のプライバシーに關しては、固く秘密を守りますから、その点、御安心下さい。掲載篇につきましては、応分の原稿料或は資料参考謝礼を差し上げます。何卒、奮て御遠慮なく、ドシドシ投稿下さるのを、お待ちしております。

〔告白〕

妻^{つま}の純子^{じゅんこ}と燃^もえた日^ひ

△純子をS研の人たちに貸した後日譚▽

三^み

夏休みが近づいてきますと、私は妻の純子とのプレイのことで胸が波立ちます。

暑さが殊の外、厳しくなっていますと私たち夫婦のプレイへの意欲も当然の事によ

うに減退致します。

SMプレイなんて、そう何時もやっているわけではありませんのに、相当前からマンネリに陥ってしまつて、時たま縄を手にしてみ

浦^{うら}敬^{けい}一^{いち}

ても、変りばえのしない縛り方にポーズ。写真にとつてみて、余りにも変化のなさに、自分から投げだしたくなってしまう。

時に意欲らしいものが湧いた時でさえ、そんな有様ですから、他の時は推して知るべしです。奇ク of 古い号を、何冊も取り出してきて、それを参考にして、一生懸命、純子を縛っても、そんな有様です。もう十何年前からの奇ク of 愛読者でありながら、一向に進歩発展しない自分が情ないくらいです。

奇ク of 編集部へ自分の写したフィルムを送って現像して貰って、告白と一緒にのせて頂いた事もあります、そんな時も、一本のフィルムが皆同じ様な写真ばかりで嫌になつてしまいました。

そんなわけで妻とのプレイも、いつとはなしに遠ざかってしまふのでした。奇ク of 毎月の誌上を拝見していますと、同好のご夫婦の

方の素晴らしいプレイぶりや責めの写真が沢山のっていて、羨ましい気持と共に、自分も又一つ、純子を責めてみたいという思いがするのですが、いざ、妻を裸にして縛ってみますと、自分の満足する様な責めには、どうしてもならないのです。

最初の頃の様な感激が、どうしても湧いてこないのです。これはマンネリズムに陥ったのだと自分で考えました。夫という同じ人間が妻という毎日、顔を合わしている同じ人間を責めるから、どうしても、こういう事になってしまうのだと理由づけました。

一度、このマンネリの泥沼の中へはまり込んでしまいますと、もう、どうあがいてみても、その境地から脱する事が出来ないのだと諦めました。そして、奇クを唯一の心の慰めとし、心の支えとして愛読して来しました。

それが今年の春の事です。春休みの時、はからずも、私達夫婦に一つの転機が訪れたのです。小さい子供が二人居ります為、妻と私と二人で遠くへ出かけるという事は、とても出来ないのです。幼稚園への送り迎えにだけでも毎日、手が離せないのですから。

それが、学校が休みとなれば、近くの両親の家へ預けて、外出する事も出来るのです。

七月号で塚本さんが「S研レポート」で書かれた八三浦純子夫人を借用すVに、ありました様に、春の一日、妻の純子をSMプレイ

のイケニエとして、お貸したのです。

妻の純子が見ず知らずのサジスチックな男達の手によって全裸にされて縛られ、身体の隅々まで眺められるばかりでなく、あくどい責めを加えられて悶え抜くという事を考えますと、私の胸は妖しく波立ちました。

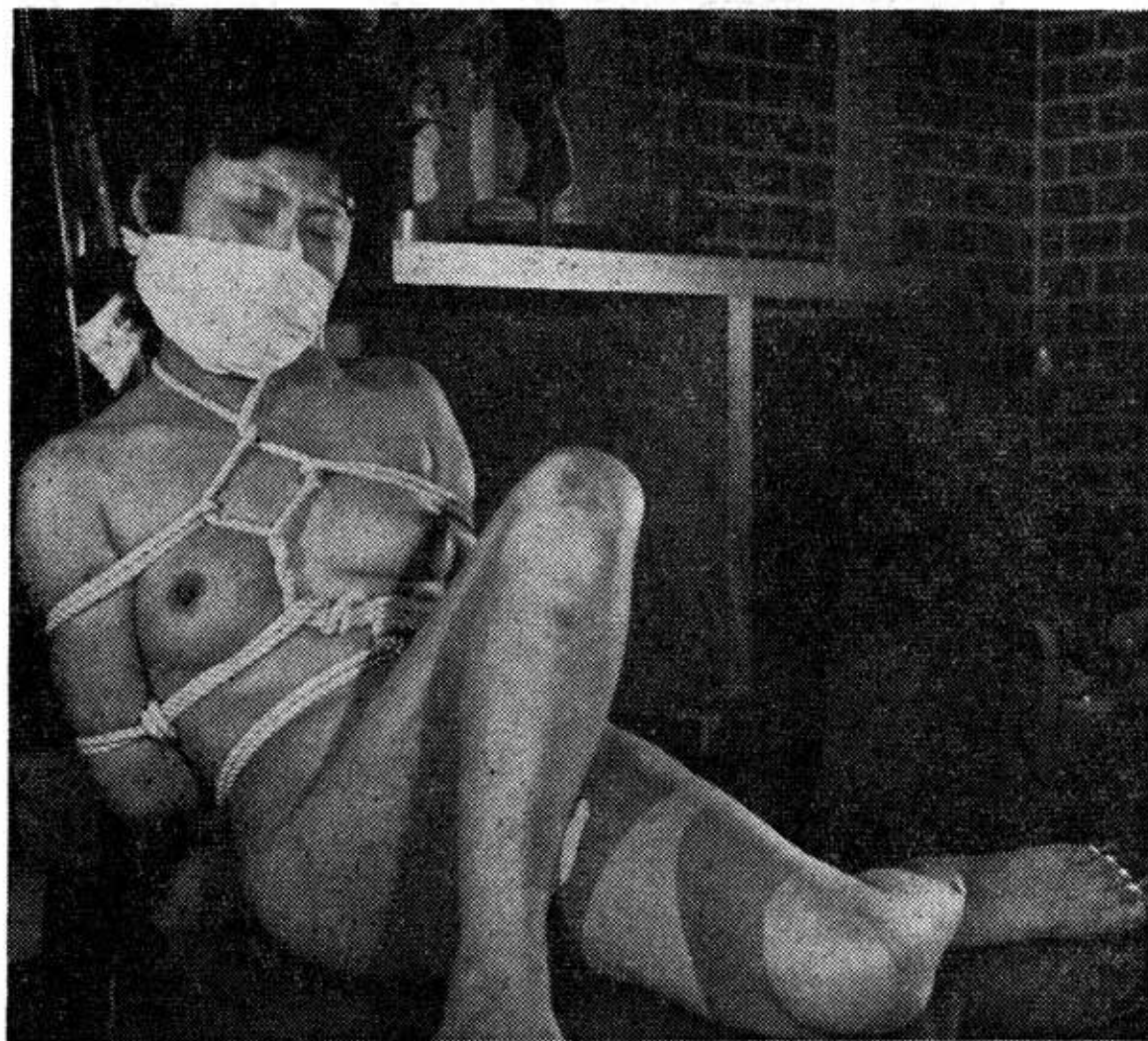
でも、私の此の考えに対して従順な純子も直ぐには「うん」と言いませんでした。自分の思いつきを彼女に納得させる為の努力も、私には、楽しい思い出になりました。そうして居る中私は、どうしても純子を、他人の手で責めて貰わなくてはいけないという様な追いつめられた気持になってしまいました。

やっとの事で彼女が渋々承知しましたが、そうなるのと、そうなたで、私の不安は新しく大きくなってゆくのでした。

信頼する塚本さんが同席されるのだから、安心だという気持の他に、S研会員の中にはどんなヒドイ責めを好む人もいるんじゃない

かと、不安になるのです。

そうした不安が一度、胸の底に兆しますとその黒雲は、どんどんと広がって、純子が、いろんな男の人達から、むごたらしい責めを受けている光景を夢みるのでした。とうとう、其の日が来しました。



私は大きな不安にさいなまれながらも、一旦決めてしまったものは、もう、どうにも仕方がないと覚悟をきめました。

妻に時間や場所を詳しく説明して家を送りだしてから、私は一日中、落着きませんでした。「今頃は、どんなことをされているだろうか」と、ふと思ってしまうと、あらぬ妄想が、次から次へと湧いてくるのでした。

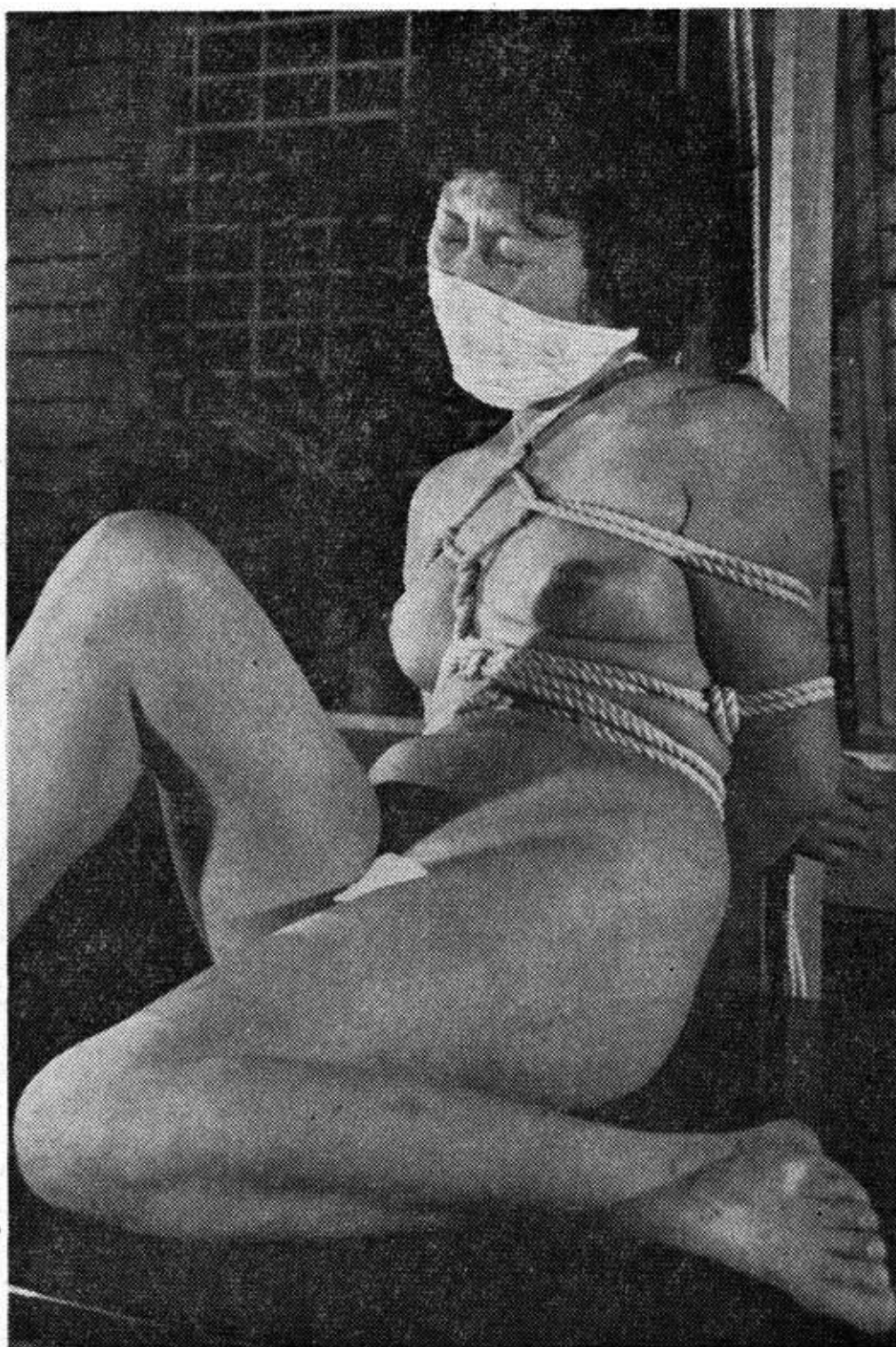
妻の純子と私との絆が、これほどまでに密接なものであったのかと、今更のように、思い知らされるのでした。

たった一人で、何人かのS傾向の男達の元へ縛られ、責められに行った純子が、いじらしくてならなかったのです。

頭の中から、もう、そんな妄想は忘れ去ろうと幾度か思い、気分を変えるために、やりかけていたプラモデルの組立てをやり初めました。でも、そんな事では、この不安が易々と解消されるものではありません。私は部屋の中を行ったり来たり、歩き回っていて、純子が、「只今」と言っていて我が家の敷居を跨ぐまで落着きませんでした。

私は妻の元気な顔を見て初めて安心しました。晴々とした明るい顔で疲れた風もないのが何よりでした。どんな責めをされてきたのだろうか？ と、私は純子の身体を洋服の上舐めまわすように眺めました。

その日を境として、私達の夫婦生活は今迄



のマンネリを一掃して、再び新婚時代以上の活発なものになりました。

その夜は、私は純子を素裸にして、身体の隅から隅まで検身しました。勿論、後手に縛ってです。少しでも縄の痕らしきものが残っていれば、どんな縛られ方をしたのだ、と、私に問い訊きました。

「それは、どんな男だった？ そして、その時のお前の気持は？」私は彼女の返事を待ち

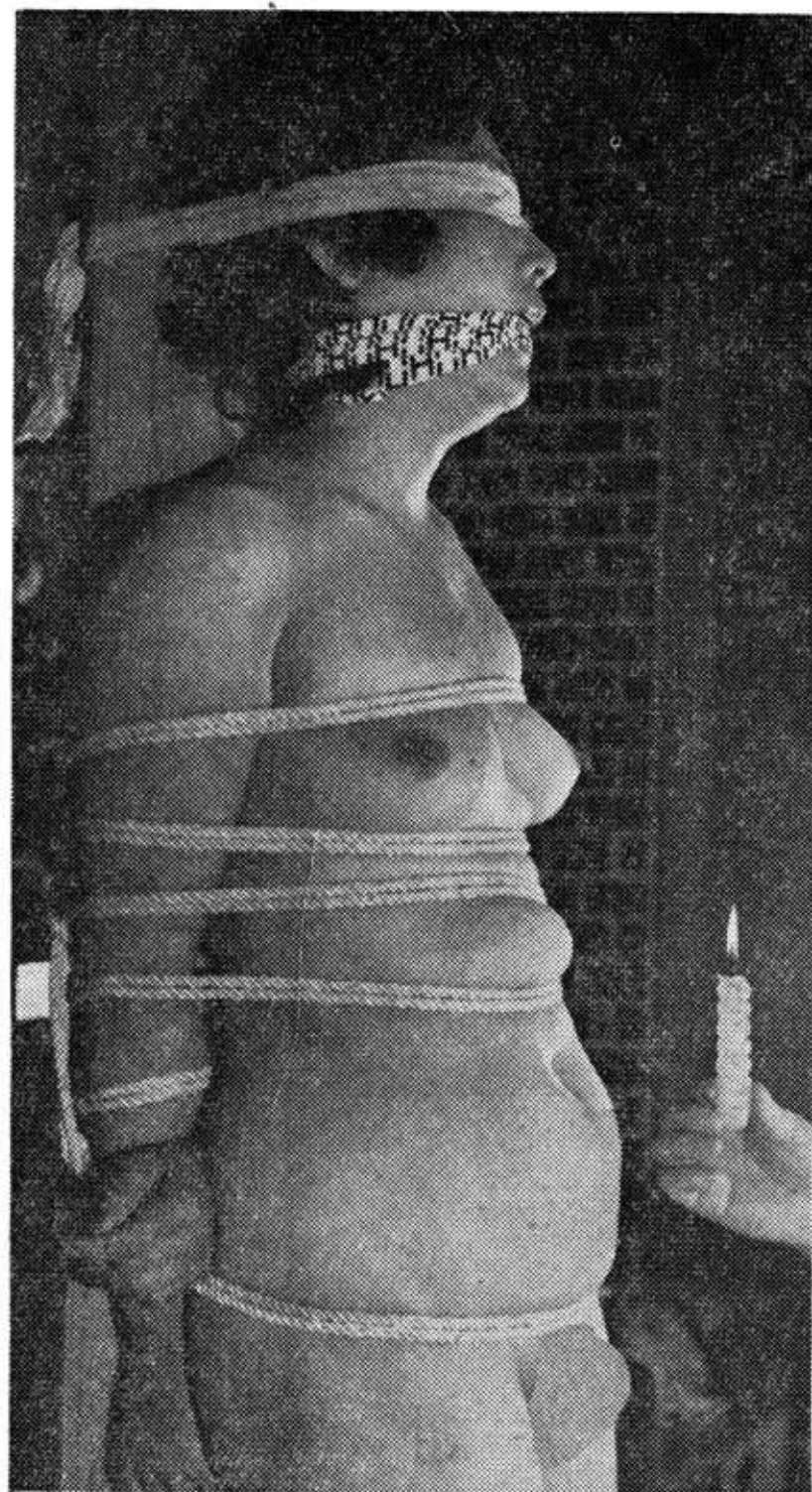
きれずに、次々と問いを放ちました。

「他の男に愛されやがって——」

私は狂ったように純子を責めました。私は最近になって、こんなにリビドを感じた事は嘗てありませんでした。妻の純子もまた

「私が嫌だ、嫌だというのに、貴方が無理に行け、行けって言うからよ」

と囁言のように喘ぎながらも、私の責めに物凄く燃えました。こんなに激しく燃えた純



子って、私は今までに知りません。

それからは毎晩のように、純子を責めたてては、あの日の事を、喋らせました。どんな微細の事でも執拗に問い訊いて彼女の口から告白させました。

そのうち、塚本さんから、あの日に純子の写真を全部、印画紙に焼付けて送って呉れました。その写真を見ていると私は自分の頭の血が、カアアと昇ってくるのを覚えました。

自分で写した純子の写真を見たときは、マッネリの悔いだけが胸の底に苦い淬りのように淀んでいたのに、塚本さんの写された写真

を手にした時は、自分でも、はっきりと分る位、顔が火照ってしまふのです。

純子がみじめな姿で縛られ、責められている写真を眺めながら、私は妻を責めました。

妻の純子は、見ず知らずの男達の前に裸身をさらして、身動き出来ないように縛られ、そして羞恥責めを受けた挙句、喜悦の声を、幾度となく洩らした事でしょう。

皆なの見守る中で、純子は喘ぎ、悶え、そして遂には、……どんな愛撫まで受けたというのでしょうか。そんな事を妄想しますと、私は、もう猛り狂った様に亢奮しました。

夫婦のSM生活って、こんな物なのでしょう。妻も私の凄く元気なのを見て大変エキサイトします。本当に新婚時代が再び、めぐって来た様です。いや、実際は新婚当時より濃厚で、そして長時間、楽しいです。

その中、奇ク七月号が発売になりました。塚本さんのS研レポート／＼三浦純子夫人を借用すVが載っていました。流暢な文章は、当事者の私を完全に魅了してしまいました。

私達夫婦は、この塚本さんの文章を読みながら、幾夜、SMプレイの激しいひとときを楽しんだ事でしょう。

妻の純子が全裸で縛られて奇ク誌上に載っている。そう思っただけで、私のSとMの心は、熱く燃えたぎりまりました。

それは、又、なんとという快さでしょうか。こんな快さは、他の事では絶対に味わう事は出来ません。春休みの折りの一日、それは私達夫婦に、幸運の女神をもたらしました。

私は妻の純子が何人もの男達からマゾとして飼育され、挙句の果てアニマル的奴隷として屈伏して喜悦の声を洩らして悶え抜く有様を空想しています。そして、今、奇ク誌上で流行の「花電車」の訓練や「獣姦」でケモノの餌食にされる彼女を妄想しています。

早坂郁子さまの告白「浣腸責めの味を知った私」を読んで、羨ましく思いました。

(おわり)

愛奴ペロ行状記

謝 伝 三 郎
若 江 正 志 ・ 画

首輪というものは不思議な力を持っているものだ。一度これを巻かれると、全身の力がスーッと、お尻のほうから抜け出していくような無力感に襲われ、自尊心とか、人間としてのプライドなんてものは、どこかへ消しとんでしまうのだ。

幾代は、首をうなだれて、首輪をはめてもらいながら、ボンヤリと、そんなことを考えていた。

「よし！」

パンと背中を叩かれて、幾代は顔をあげ、次の鼻輪をセットされやすいように顔をあげた。

カチッ

鋭い音がして、小さな金属環が、まるっつい鼻に、ぶら下った。

この小さな環のために、これまで幾度となく泣かされたことだろう。首輪には、もう馴れてしまったが、鼻環だけは、なかなか馴れそうにもない。

「何をボンヤリしてんの！」

冷たい、突き刺すような女の声に、あわてて、胸を突き出す。

ペロ

女は、マジックインキで、幾代の豊かな胸に彼女のペット・ネームを黒々と書きこむ。

「体に異常はないネ」

「はい」

「点検姿勢」

幾代は検診台上り、そっと目をとじた。ガラス棒がチラッと見えると幾代は、くっくと眉をしかめた。

私は人間ではない。奴隷なのだ。おもちゃなんだ。変な人間的な感情などは、とうに捨ててしまったはずなのに、なぜいつもの、この検査に馴れられないのだろう。

「おや、少しおかしいね。いつ終わったの」

「昨日です。でも、大丈夫ですわ」

「こっちは、かまわないさ。だけど、ちょっと、かぶれてるよ」

「ア、アッ」

「子どもを産んだことのない女というものは

余り変らないものだね」

足が、さらに高くあげられ、左右に大きく
 拡げられる。ピンと太ももが張る。白い筋が
 五、六本、走っているのが目立っている。

指サックをはめながら、女はいった。

「この前、傷んだところは、治ったかい」

「ハイ、もう痛みは、とれました」

「お前の体質だと、痔にはならないんだよ。

まあ、事後処置さえ完全にしておけばネ」

女は、幾代の足の間に立った。

「体の力を抜いて、口をあけて……ホラまだ

固い。全身の力を抜くのよ」

「痛ッ」

「何だネ、最初じゃあるまいし、そんなに体



に力を入れるバカがあるか。だけど、みたところ、花卉はきれいに揃ってるし、これじゃ、皆さん、ご執心なさるわけさ。さあ、もう一度、こんどは痛くとも、かんべんしないよ」

幾代は足の爪先をふるわせながら、じっと唇を、かみしめた。

ツーと痛みが走る。それをこらえているうちに、お腹の内部がジーンと軽く、しびれてくるような快感が湧いてくる。

「気分出してるよ。ホラ、ぬれてるじゃないさ」

女は、自分で、そうさせたことを棚にあげて、いやらしい動物を見るような目つきで幾代を見下した。

「もういいから、さっさと広間へお行き。皆さんが、お待ちかねだよ」

幾代は、冷たい廊下を渡り、地下室の階段を降り、厚い扉の前に立ってノックをした。覗き窓から二つの目が、じろツと幾代を見て扉をあけた。

☆

薄暗い地下室の真ん中だけが明るく、その中央に二人の女が立っていた。一人は三十になるかならぬかの、やや肥りじしの、和服の

女。もう一人は、薄いガウンをまとった、ひきしまった小柄な体つきの女だ。

それを取り囲むようにして、男たちが群がっている。

「皆さん、本日の入荷品を、ご紹介します。

年令は二十七才。某官庁の係長夫人。身元はこれだけしかいえません。出産経験あり。あらあ、かえって、その方が感度が良くなるってことよ。ホラ、ご覧なさいよ。オッパイだって、こんなに大きい」

女の手が、和服の女の胸を、ぐっと押しひろげて、両の乳房をつかみ出すように、ひき出した。

和服の女は両目を固く閉じたまま、両手をぎゅっと握りあわせて、じっと立っている。

「さうだった。私も、あのときは、死んだ方がましだと思ったものだ。何で、こんなことを承知したのだろう。この場から抜け出そうと思って、足は、まるで鉛のように重く動くことすら、できなかった。可哀そうに、あの女も、きつと同じ想いなのだろう。V

「ちよっと垂れ気味だなア。もったいぶらずに脱がしちやえよ」

「さあ、さあ、声をかけて下さい。この女の仕込費は、かなりかかったから、うんと、は

ずんでくださいよ」

胸元を大きく拡げて、二つの乳房をダラリと露出した美しく着かざった女の姿はエロテシズムとグロテスクの、まじりあった美しさにみている。

「十万」

「十五万」

「二十万」

円陣のあちこちから声がかかった。

せりである。せり落したものが、オーナー権を獲得する仕組みである。

「ダメ、ダメ。みて下さいよ。そんな端金で落せる王じゃないですよ。乳房も豊かだし、お腹だって、柔らかく、ひきしまって、可愛いい、おへそがポクンと凹んでいて……」

「みせてくれなくちゃあ」

「みせますよ。そのかわりに、はずんで下さいよ」

夫人の体から、帯、紐が、はずされ、前がダラリと拡がった。腰巻の赤い色と、白いムツチリ脂の乗った柔いお腹が男たちを刺激する。

夫人は手で顔をおおって立ちすくむ。

女の手が、着物の前を、かきひろげて、おへそを露出した。こみ上げる、はずかしい思

いに女のお腹は激しく波打っていた。ガウンの女の指が、夫人のやわらかい腹をつまんだり離したりしながら、

「もち肌だよ、ほんと。手にすいつくようなこのきめの細いこと、羽ぶたえ肌だよ」

「裸にしちまえよ。手が邪魔だ。おっぱいがかくれるじゃないか」

「このからだは、仕込めば仕込むほど味がでてくること間ちがいなしよ。サアサア、お声をかけて下さいな。二十万という玉じゃないですよ、ほんと。今日は皆さん、どうしたのかしら。いいわ、それじゃあ……」

女の手が夫人の肩にかかり、ぱっと着物をはぎとった。

「あっ」

夫人は、咄嗟のことに、思わず胸を抱くように、その場に、うずくまってしまった。

「なんですか。こんなことで恥かしがってたら、どうするの」

ムンズと髪を、わしづかみされ、たちまちひきずりあげられた。夫人の顔は苦しさで恥かしさにゆがむ。

「手を上へあげて、腋の下の生えぐあいを、お見せするんだよ」

夫人は言われるがままに、手を真っ直に上

へあげた。おからず薄からず、ほど良いかげりが、そこにあった。

「皆さん、この位が、味が良いものよ。余り濃いと、なんとかと言いますわよ。それに、この良い匂い」

ガウンの女は、夫人の腋や胸の凹みに顔をつけて、息を深く吸いこんだ。乳房を軽く押すとプルンと、ゆるやかに乳房がゆれる。甘い夫人の匂いが、男達の方へ流れていく。つかれたように男達はせり上げていった。

☆

あの夫人は一体、幾ら、あの女から借りたのだろう。私の場合、一千万円だったけどいえ、一千万円そっくり借りた、わけではない。五百万円だけだったのに、それが、あっという間に一千万になってしまった。

無たんぽ。あなたの体が、たんぽよ。といった言葉を軽く聞き流したばかりに、こんなことになってしまった。

しかし、それとて、あんな不動産詐欺にさえ、ひっかからなけりゃ、あの土地を売れば返せたはずだった。今考えてみると、皆、ぐるだったんだわ、きっと。土地は手に入らない、借金は残る。女一人、生きていく未亡人には、とうてい返せる金じゃなかったのよ。

返せなければ体で返してもらおう。それも一年間、がまんすればいい。秘密クラブで、男の相手をするだけ。奥さんも楽しくお金を返せて良いじゃないか、という。あの女の甘言に、つい首をタテに振ってしまった。それが、男の相手だなんて、うそばかり。女奴隷よ。セックスの奴隷よ。ここに集まる男どもは皆変態ばかり。それもサディストばかりじゃないの。でも、逃げて警察へ訴える手はあったのに、なぜそうしなかったのかしら。一年だけ我慢すれば、ということもあった。それより、あんな姿の写真が親類や知人にバラまかれるということが、私を思いとどまらせたのだ。約束さえ守ったら、一年たったら借金も、きれいにして、あとは、道で会っても知らぬ顔をしてくれるということを信じる以外私には、どうしようもなかった……。

☆

せりは三十万台で停滞していた。

いら立ったガウンの女は、とうとう最後の腰巻も、はぎとって、必死になって、せりあげようとしていた。

「さあ、もうこれでラストよ。前も後ろも、ご開張して、とっくり、おみせして、良い値をつけていただくんだよ。ホラホラ、四つん

ばいになって後ろを、よおく、おみせしな」夫人は、さすがに、そのポーズをとることを、ためらっていた。

「バカヤロー。お前には大層な借金があるんだよ。返せるか、返せないか、お前のおつとめしだいなんだよ。早く人間並みに暮したいと思ったら、せいぜい、せいをだして、おつとめするんだ」

髪をひきずるように床に押さえられ、夫人は、四つんばいになった。

たれ気味の乳房を、ゆらゆらと、ゆらしながら、夫人は円い輪をはい廻っていく。一巡し終ると

「脚を広げて、おケツを高くつきだすのよ。

ホラ、顔を床につけて」

夫人は、順々に角度を変えて、十分に男たちにお尻を向けて鑑賞させた。

「三十六万」

「三十七万」

「ハイ、三十七万でした、もう一声、もう一声」

☆

私のときは、前の方が先だった。

円いテーブルの上に、あう向けに寝かされて、中華料理のテーブルのように、グルグル

と廻わされた、両手で両脚をかかえるようにして……死ぬほどつらいポーズだった。

あちこちから手が伸び、つままれたり、さすられたり、毛をむしられたり、中には、指でいたずらされたり、男たちは、てんでに勝手なことをいいながら、思うまま、おもちゃにしたものだった。

☆

夫人は私のあの時と同じポーズをとらされていた。ライトと、人いきれと、こうふんで夫人の体は汗ばみ、ひたいや、首、乳房の間に汗が流れていた。激しい息づかいが鼻孔からもれ、赤い舌を、唇のはしから、のぞかせて、あえいでいる姿に、男たちは、またせり出し始めた。

「四十万」

「四十五万」

「五十万」

叩きつけるようなかけ声が、あちこちからかかる。

夫人は百五十万で、とうとう、せり落とされた。落したのは、五十がらみの男だった。

夫人の首には、首輪がかけられ、鎖を握った男は、ニヤニヤ薄ら笑いを浮べて、夫人のお尻をなでながら、ひきずるように、連れて

いった。

☆

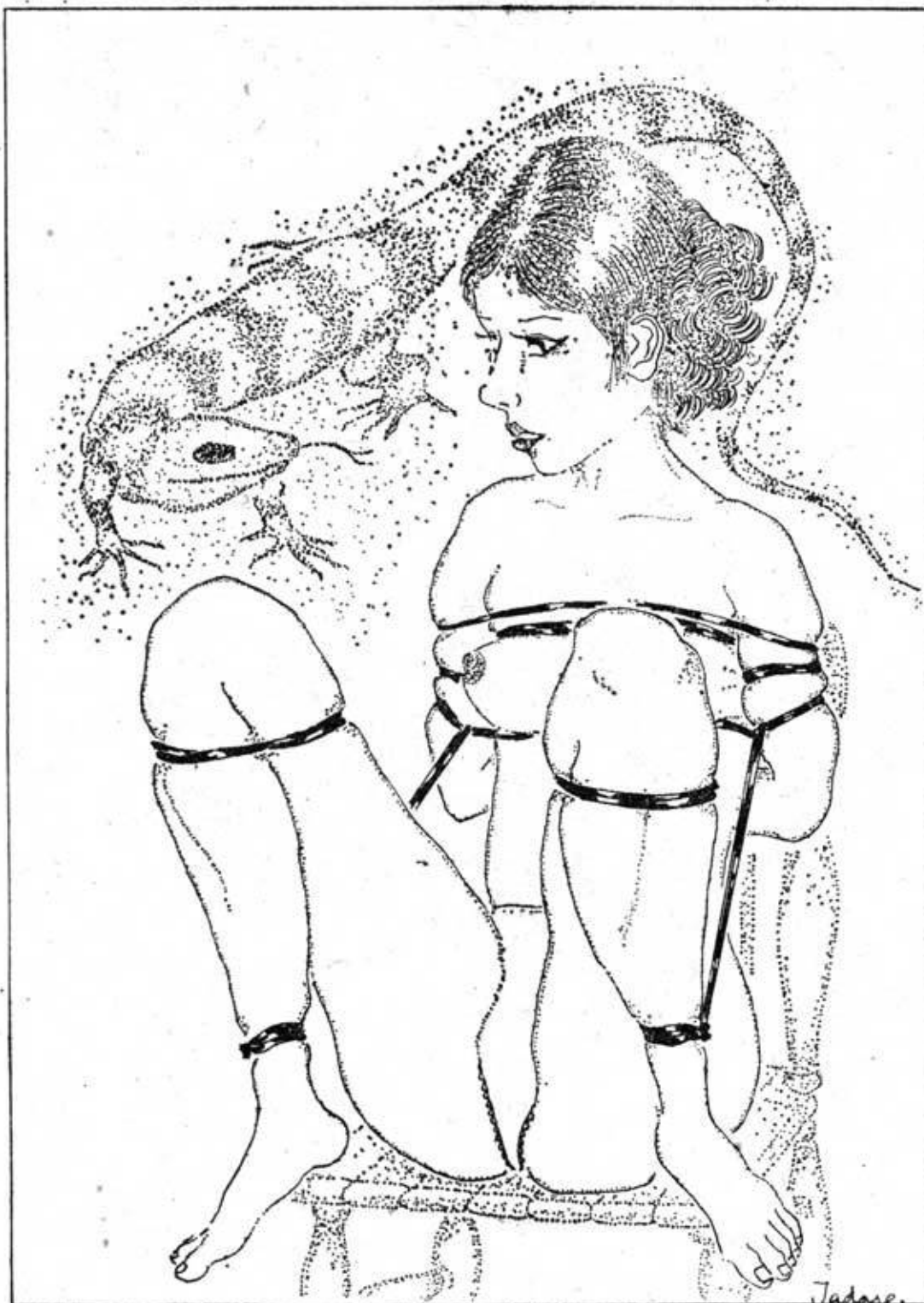
がやがやと人の輪がとけた。幾代は、あわてて、バーに走っていった。

☆

「何だ、ペロ、おそいじゃないか」

バーテンの、つっけんどんな声に、幾代はおどおどと、あやまり、鎖をペロというネームの打っているフックにとめてもらい、床にひざまずいて、待機の姿勢をとった。

男たちは、めいめい勝手に広間へ散っていった。二、三人の女の鎖をもっているもの、



女の背に乗ってお尻を叩いて乗り廻しているもの、女をだきかかえて個室へ引き下っていき者……。

「こら、ペロ、おそいぞ。何を今頃までノソノソしていたんだ」

あ、あの声はオーナーだ。毛むじゃらの五十男。つかれを知らぬ怪物のような男。それでいて、女の弱点を知りつくしている男。憎んでも憎んでもあきたらぬ男。それでいて私をけものようにしてしまふ、にくい男。

☆

男は、若い男と一緒にいた、若い男は、ちよつと、きつい顔をした女を、つれていた。

「これがペロですか」

「ええ、白豚みたいな奴ですがね。まあ、体がやわらかいのが、とりえなやつですよ」

「いや、いや、なかなか良い体ですよ。だけど、ペロというからには、ペロのテクニクは相当なんですよ」

「ええ、まあ、訓練の甲斐があったようですね」

「ちよつと、ためさせて下さいよ」

「いいですとも。こら、ペロ。こちらに、ていねいな、ごあいさつを下さい。ていねいにするんだよ」

幾代は、若い男の前へにじり寄って、両手で、男の体をひらいて、口にふくんだ。

男は、もうぬれていた。さっきのせりで、

こうふんしたのだろう。ぬるぬるした不快な味が口一杯にひろがった。胸元へつきあがるような吐気をこらえながら、幾代は、舌と唇を丹念に動かしてつけた。

両手で軽くもむように、握るようにすると男の体が、こわばっていくのが感じられた。

そつと目をあげると、若い男は、つれの女の唇をむさばるように吸いながら、女の乳房に爪を立ててひきちぎるように責めていた。女は激しくもだえながらも、髪をわしづかみにされているので離れることができない。

幾代は、はき気をこらえた。

「いやあ、よくこれまで、仕込みましたね」

「最初は、いやがってね、往生しましたよ。

今では、全身ペロっても、いやがりませんからね」

「どうです、今日は合同プレイといきませんか」

「いいですね」

合同プレイか。こんなときは、ろくなことがない。あの男のことだ。私を、女に責めさせる気だろう。女の責めは男より、いやだ。

底意地の悪い責め方で、こつちを、くたくたにしてしまふ。

☆

男たちは、何やらお互いに耳打ちしてニヤニヤしたら、目をむいて驚いたような顔をして、よからぬ相談を熱心に行っていた。

幾代と、もう一人の女は、それぞれの男の前に坐って、腰かけている男達を唇と舌で軽くなでるように、慰めていた。

男は幾代を立たせ、顔をカウンターの upper 乗せ、幾代の下唇をつまんだり、離したりした。伸ばされた唇の内側のピンク色の薄いねんまくと、きれいな歯ぐきが光に反射する。

「きれいな歯をしていますね」

「ええ、しらべてやって下さい」

若い男は幾代の髪をつかんで、自分の方へ引きよせ、思いきり、後ろへ引いた。幾代はひざを床について顔を天井へ向けた。

「口を大きくあけて」

幾代は、思いきり、口を開いた。

「ホー、虫歯が一本もないなんて、驚きだな。ペロも、きれいな色だ。胃腸の方も丈夫なんだな。その点、うちのは歯が悪くて入れ歯が五、六本あるんですよ」

「どれ、どれ」

毛むじらの手が、女の口を、無理やりこじあげているのが、ちらっと、幾代の目に映った。彼女も、幾代と同じポーズをとって指で口の中を、かき廻されていた。のどの奥へでも指が入ったのだろう、「グェツ」という声を立てて、女は思わず強く男の指をかんてしまった。

「痛い！」

あわてて、指をひきぬく。女は胸をけられて、どうと床に伏した。

「これは、とんだことを。たつぷりと、おわびをさせますから。こら、ブラ。こちらに、しっかり、罰をしてもらいなさい。どうぞ、思いきり叩きのめして下さい」

ブラというのが彼女のペット・ネームなんだわ。これで、今日は、責められるのが私の方ではなくったようだ。

幾代は、ホット肩をおろした。

「あらっ、今日は一人だけですの」

ガウンの女が、カウンターの端から、こっちへ向って男たちに声をかけた。

「まだ女が余ってますのよ。もう二、三人、呼んで下さいな」

「面白く遊ぶ趣向でも考えてくれれば、呼んでもいいんだが。そうだ、あんな何か、いい

のを考えてくれよ。気に入ったら、まとめて五、六人、呼んでも良いよ」

「そらネエ。アラ、その指は、どうしたの」

「うん、ブラにかまれてネ」

「まあ、とんだことを。私からも、あとで、うんとお仕置をしますわ。ごめんなさい。そうだ、ねえ、こんなのどうかしら。このころ、お茶をひいてるのが五、六人いるのよ。ちよっとタルンでいるので、ハッパをかけてやるんだけど、皆さんも一緒にどう。もうちゃんと、お二人からは特別料金は、いたただくんだけど……」

「ちゃっかりしてんな。だけど、それちょっと面白そうだな」

「よし、きめた」

「じゃあ、皆さん、責めの間にどうぞ。あとから、皆を連れて私も参ります」

☆

ここに来る会員達は、きまって会費のほか毎回女を指名する度に指名料を追加して払うシステムだ。会費は、いわば入場料に当たる。会員は最低一名の所有権をもたなければならぬが、持ちたい会員は五人でも六本でもかまわない。だが、八時までは、一応所有権者の専属タイムだが、それを越えた場合、

女はフリーになる。それまでに指命がなければ、女はほかの会員達が自由に指命できる。

だから、八時を過ぎると、指名のつかない女たちが、どうしても残ってしまう。

幾代は、そうした女が、責めの間でお仕置を受けているのを一度みたことがある。

もちろん、それは、特別会費を払った会員に見せるショーといったものだったが、とても同じ女として見るに耐えないものだった。

だが、指料の中から、山のような借金を返していかなければならない女達にとって、そうした形でも、お金になることだから、いやとは、いえなかった。お茶をひいたのでは一文にも、ならないどころか、利子がふえていくばかりだ。

男たちは、幾代たちに馬乗りになって、尻をピタピタ叩きながら、責めの間へ、入っていった。

しばらくして、ガウンの女が、三人の女をつれて入って来た。

「今日は三人だけだったわ。たりなかったらペロもブラも入れると五人になるから、いいわね」

女たちは、これから始まることを考えてか皆、体をかたくして、棒のように突立って

た。

トンコ、マンベエ、ブチ。三人の胸のペツトネームは、そう書かれていた。

トンコは年は四十を越えていた。もう体の線がくずれ、これではお茶をひくのが多いのは無理がない。体中に赤いみみずばれが、まだ消えやらず残っているところを見ると、この処、毎回のよう責められているのだろう。

マンベエ。年は二十四、五だろうか。全身生殖器みたいな印象だ。すべすべした肌には男心をとろかすような魅力をもっているが、白い肌に不似合のような繁みが黒々と不気味な印象さえ与える。背の低い割に太っていて地腹なのだろうか、五、六カ月ほどのお腹をしている。腕も、ももムチムチと脂肪がつき、余り観賞用とはいえない。

ブチ。年は二十七、八才、オールド・ミスタイプ、長身のほっそりした筋肉質。プロポーションは、なかなか、素晴らしい。手と足がやけに長く、九頭身に近い。色は黒く体中に生毛が濃く生えていて、それでブチという名をつけられたのだろう。

「さあ、ごあいさつ、なさい。お茶をひいたお前達を特にご指命して下さったのだから、よおくお礼をいって、おつとめするんだよ」

三人の女は、床に顔をつけ、尻を高くあげて、男達の方へお尻を向けて両脚をできるだけけだげた。白いムッチリと張り切ったお尻がマンベエ。ややタレ気味のトンコ。大きくはないが、固くブリブリとひきしまっているのがブチだ。

男たちは、手にムチを持って、女達にまたがるようにして、ムチを当てた。

「ピシッ！ ピシッ！」

「アッ、アッ」

予期していたといっても、実際にムチを当てられると、痛さは予想を越えて身体にこたえるものだ。

女達の尻は、たちまち赤い筋が浮び上る。

無理なポーズで、力^{りき}んだためか、マンベエのお尻から異様な臭気と音がした。

「おや、なんてことをしてくれるのよ」

予定のコースといえ、それを口実に、三人の女は流暢させられることになった。幾代とブラが浣腸する役を、いいつけられた。

女達はじっと、そのままの姿勢でおとなしく待っていた。

「いいかい、一番先に降参した者には、うんとひどい罰を与えるからね、分ったね。よしというまでがんばるんだよ」

たっぷり、液をふくんだ筒を手にも、幾代とブラとガウンの女が、それぞれの女の後ろにひざまずいて、指で入りやすいように、思いきり、お尻を開いた。ヒクヒクと、やや黒ずんだ小さな蕾が、おののいていた。

「いいかい、一緒にやるんだよ。ヨーイ、そら！」

会図と共に幾代は、ぐっと筒先をマンベエの谷間へ押しこんだ。

ビクリと女の尻がけいれんをし、やがて、それが全身に伝わっていった。

下腹がもう痛み出したのだろうか、きゅつと、たるんでいた腹がひきしまり、女たちは必死になって、こらえていた。

「ハイ、終わった。これから、ヨシと言うまでこらえるんだよ。いいかい、その前にももらしてもしてごらん、ひどい目に会わなければいけないよ」

三人の女は、尻を高く突き出したままの姿勢で、体をふるわせている。

太い肉われの見えるものをブルブルとふるわせて今にも、もらしそうなのはトンコだ。

「あの姿勢では、こらえろといっても無理だわ。幾代は、そう思った。何しろ出口を開きっぱなしの状態では、こらえようとしても、こ

「ええ、それではない。」

三人の女は、けんめいに黒い蕾をピクピクとひきしめて、内部からのけいれんに、けんめいに耐えていた。

幾代は、おまるを三つ、女達の脚の間に置いた。お尻を左右に、ゆり動し、必死になつてこらえている女達の姿はグロテスクというよりユーモラスな光景だった。

三人の女の蕾は、にじみ出る液のためか、濡れていた。

「こら、誰が顔を上げていいといった」

女達は腕を立てて、顔をのけぞらして、楽なポーズをとろうとしたが、女の声で、又、元の姿勢に返った。

マンベエの太いものにツーと一条の液が流れ始めた。もう限界なのだろう。

「プチ、プチ、プチ」

マンベエのお尻から異様な音がした。

「アッ、もうだめです。ゆるして……」

マンベエは、こらえきれずに、おまるに、しゃがみこむ。

激しい音がした。空気のまじった浣腸のあの音は、するものにとって実に、みじめな気持ちにさせられるものである。

その音につられて、とうとうあとの二人も

一斉に、おまるに、しゃがみこんだ。

目をつむり、力^{りき}んでいる三人の女。立ちのぼる臭気。

「何だい、まだヨシと言っていないよ。ハハ、それじゃ、何かい、皆、あれをしてもらいたいんだね」

「うえっ、くせえくせえ、たまらないねエ。女のお尻は好きでも、こいつだけは色消しだね」

「全く、もっとお色気のあるウンチでもしてくれないものかね」

幾代とブラは三人の女のお尻の仕末をしてやった。

「何をモタモタしてんのサ。あれをしていただきたいんだらう」

「何をするんだネ」

「前の方へ浣腸してやるんですよ。これはひどいんだから、七転八倒してもだえますよ、その上、後のひくことひくこと、見てて面白

いものですよ」

「そんなことして、大丈夫なものかい。あとで使いものにならなくはなりはしないかい」

「いや、一人だけやろうよ。ホラ、あのトンコというやつ、あいつにはふさわしいよ。あいつは、とことん、いじめなくちゃ、払った

金が、もったいない」

「じゃ、トンコだけ、しましうか」

「何ということをするのだろう。あのデリケートなところへ、浣腸するなんて。もしものことがあったら、どうするだろう。いくら奴隷だといって、余りだわ」

幾代は、自分がそうされたらと思うだけで思わず身ぶるいをした。

台の上に、手を左右一杯に広げられてトンコは、あう向けに縛られた。足は、天井からおりている、くさりで上へあげられ、股は、これ以上無理だと思われる位、広げられた。ライトが股間を照らす。もだえるさまを、じっくりと見物しようという仕かけだ。

さすがに、浣腸液といっても、ごく薄い石けん水を使うようだった。奴隷といっても、商品には、かわりはない。こわされたら、お互いに損をする。

ガウンの女は、浣腸器をとりあげると、指で押し広げるようにして、ズルズルと太い浣腸器を埋没させていった。

「アアア——」

長く尾をひくようにトンコは押しこめられた。ような悲鳴をあげた。

(おわり)

〔手記〕

忘れがたきアヌス遍歴

竹 迫 誠 也



私とT子とは既に五年に及ぶ浣腸づきあい
です。この五年間、T子のアヌスは大変な変
りばえです。すなわち、百二十円で市販され

ナーソーセージ大の便が出るものだなあと、
感心させられ、かつ事実、小指を入れただけ
でも「痛いっ、いやっ。そんなこと、いやよ

ているワンカップ大関の酒
のグラスを、彼女のアヌス
は、すっかり、のみ込むの
です。

まさか、あの小さい菊の
蕾を思わせるアヌスが、本
当に大関のグラスをのみ込
めるハズはないという人が
多いと思いますが、これが
五年に及ぶアヌス責めの成
果なのです。

っ」と叫び、なかなか小指さえも入れさせな
い位でした。

しかし、私の彼女のアヌスを、なんとかして
も自由にしたいという気から、次に述べる私
のアヌス探究が始まったのです。

T子とつきあい始めの頃、当然のように私
達二人は千駄谷のあるホテルに入りました。
しかし、その時、私のふところには大人用30
g入りのいちじく浣腸が、しのばしてあった
のは、いうまでもありません。

今日こそはセックスの途中に、彼女に判ら
ないように、このいちじく浣腸をアヌスに注
入してやろうと決意していたのです。

彼女が風呂にはいつている間に、急いで、
いちじく浣腸のキャップを除き、腰のあたり
のベッドの下にかくし、いつでも間髪を入れ
ずに浣腸できるよう用意しました。

もともと、私のセックスは背向位が好きな
事は、彼女もよく知っており、当然のように
こちらに大きなお尻を向けて私達は一緒にな
りました。

なにしろ、彼女のアヌスが目の前に無言の
ほほえみをしているようで、私は……をしな
がら、如何にも自然らしく彼女のアヌスに、
そろりと……ふれ、ツバですべりがよくなる
ようにふるまいました。それでも彼女は、何
時ものように……しきりにうめき、指でアヌ
スを撫でている事まで気がつかなかったよう

です。

時やよしと、ベッドの下にひそませていたいちじく浣腸を、すべりよくなったアヌスへいきなり挿入、一挙に液を注入しました。

それでも彼女は「貴男、何かしたの？」と言った位で、その異常さに、当初は気がつきませんでした。私は念願の浣腸がやっと出来たという異様な興奮で、その後、間もなく果てたことはいまでもありません。

ところが常と違った感じを彼女は気づき、「貴男、何かヘンよ。あれ、お尻にいたずらしたのネ。いやだっ、なにしたの？」

と、もはや徐々に排泄感が始まったようです。私は仕方なく正直に、しゃべりました。

「だまっていてゴメンよ。でも、俺、一回でもいいから君に浣腸したかったのだよう」

「まあ、ひどい。私に浣腸するなんて。いやよ、いやっ。どうして浣腸なんかしたの。アレッ、おなかが痛くなったワ」

押問答しているうち、耐え切れず、トイレへ走り込みました。私は果てた後の心地よさと、始めて浣腸をしたという心のたかまりで「してやったり」と、心の中で叫ばざるを得ませんでした。

彼女との浣腸づきあいの第一歩は、このようにして始まったのです。それから、私の余りのアヌス執心に、彼女も口では「イヤ、イヤ、イヤダワ」と拒みながらも浣腸を許し

てくれました。

しかし、私は始めから硝子浣腸を使うことはしませんでした。たしかに半年位は、いちじくばかりを使い、排泄した後、少しはゆるくなった彼女のアヌスを小指や人差指でもてあそび、アヌスに人差指のつけ根まで入れ、アヌスの中で指を適当に動かしてたわむれるのが好きでした。

ただ私は指を入れる時は、いきなり入れませんでした。必ずオロナイン軟膏をアヌスにぬり、なめらかにして挿入した事は、いうまでもありません。それでも当初はヒクツと、お尻をふるわせたり、時には「痛いっ」といっていましたが、四、五カ月位すれば、アヌス自体、馴れてきたとみえ、案外スムーズに挿入でき、たわむれることができました。

かくして次はウインナーソーセージを使うようになり、いちじく浣腸から、まず30℃C硝子浣腸器を使うようになり、浣腸液も石鹼水やグリセリン、食酢の三種類を自分で楽しみながら適当に調合し、浣腸するようになりました。

勿論、ウインナーソーセージも、オロナイン軟膏のたすけで自由に抽送ができ、しかも抽送するたびに、恰も生き物のように、少し盛り上ったり、或は口をすぼめるような形になったりするアヌスの面白い変化に、益々彼女のアヌスに、執着せざるを得なくなりまし

た。ウインナーソーセージから、当時百二十円のウインナーソーセージの丸味を倍位にした鎌倉ハムに切りかえ、また30℃C浣腸器も、嘴管だけ挿入していたのから、外筒もアヌスに長さの半分位、埋め込めるようになりました。

その頃になると指の二本位は、のみ込めるようになりました。時々「痛い」とはいいますが軟膏をアヌスの中まで塗り、すべりよくさえすれば、案外スムーズに入るのです。

ただ、30℃C浣腸器を外筒も挿入する場合は、なにしろ堅いガラス筒なので挿入角度をうまくしないと、嘴管の先がアヌスの壁にあたりたりして「痛い」といわれます。

だから、上手にアヌスの口から直腸の中へゆっくり挿入してゆけば抵抗なくスルスルとはいり込みます。かくして一年半位たったでしようか今度は50℃C浣腸器に変えました。

たしかに30℃C浣腸器は外筒も細く、浣腸器という感じは大してしませんでした。50℃C浣腸器になると青光りした異様なムードは流石、浣腸器だなあという気がしました。

もう、その頃になりますと、注入液も彼女の今までの感想から、グリセリン、ドナン、食酢へと時に応じて適当に混ぜたり、或はグリセリンだけにしたりで、浣腸のムードをつくりあげる楽しさがあったのです。

更には浣腸器だけではなく、エネマで水だ

けの大量浣腸したり、空気浣腸したり、或は千CCイルリガートルで食塩水だけの、また石鹼水だけの浣腸を楽しみました。

でも、その頃は彼女のアヌスは既に50CC浣腸器の外筒をのみ込める位のゆるやかさになっていたせいか、例えばエネマで空気浣腸をしても、途中でエネマの嘴管とアヌスのすき間から空気が洩れ、小説でよく描かれているような妊婦腹にする事は、仲々むづかしかったです。

これと同じように、エネマによる大量浣腸やイルリによる浣腸も、そこそこには注入できますが、これもアヌスにゆるみがあったか途中で液が洩れたりしました。ですから、或時は鎌倉ハムであわてて栓をし、彼女の腹をおさえたりして、羞恥に苦しめて楽しむようになりました。

また水道のホースを直接アヌス深く挿入し（ホースの柔らかい習性から案外、腸の深く——大体二〇センチ位は入り込む）蛇口をひねって水道による急激な、しかも大量浣腸も仲々面白いものです。勿論、水道浣腸は普通のグリセリン浣腸後、便も出ないだろうという状態でやりますが、なにしろ水道の激しい勢いで腸のかなり深くまで水が送られ、そこから辺の軟便が水と一緒にアヌスから流れ出る事が、しばしばでした。

このように、色々なアヌス遊びでアヌス自

体しめたり、ゆるめたりは、案外自由になり三年位たち、御徒町のアメ屋横丁で売られている二五〇円のこぶし大の太い丸味をもった鎌倉ハムや『アテネ上野店』にて百CC浣腸器から今では二百CC浣腸器を使い更に肛門開口器、15号カテーテルといった具合にアヌス用品を縦横に駆使するようになりました。

なにしろグリセリン浣腸後の彼女のアヌスは、コブシがはいれる位にゆるんでおり、二百CC浣腸器のあのバカ太い外筒も、半分位はアヌスの中にかくれ、カテーテルは約30センチ位は腸の中に入るようになりました。

最近では電気掃除器の先の刷毛の部分をはずし、丸い筒にアヌスを入れ、スイッチを入れると、これがエネマの場合なら、空気を注入するのですが、電気掃除器は逆に腸内の空気を吸入するので、その時はスイッチを入れて、二、三十秒すれば腸が冷たく感じられるそうです。

それでも尚続けますと、下半身が冷たくなって、とっても耐えられない状態になるとのことです。「アヌス責めで一番辛いのは、この電気掃除器によるアヌスの精を吸いとられるような感じ」と彼女は語ります。

このように彼女のアヌスは、五年前は小指を入れるのさえ、「痛いっ」といっていたのが、五年間に及ぶアヌス鍛錬の結果、今や二五〇円の鎌倉ハムは勿論、二百CC浣腸器の

外筒も容易にのみ込めるようになりました。

これも、今日まで何百回となく浣腸をしてアヌスを徐々に色々なものにも馴れるように時間をかけて来た事が大きな要因となっている事は、いうまでもありません。

それと同時に浣腸の度毎に、或はアヌス責めの度毎に「今のは、こんな感じ」「こんな方法は駄目」といった彼女の率直な使用後感が、大いに役に立った事は、いうまでもありません。

そういう私は、今春、遂に結婚し、今、愛妻と幸せな生活をしています。妻は私が一倍のアヌス熱心があるとは全く知らず、連夜のように白いハダを明るく電光の下にさらしていてくれます。しかし、T子がアヌスを十分許してくれているという事は、妻にはない魅力である事は確かです。

またT子を失ったら、彼女のような女性はいくら私の前にあらわれてくるか、どうか、疑問です。アヌスへの秘められた、耐えがたい執心は、T子との離れがたい絆ともなっているのです。

この五年間、ひたすら、私の為にアヌスをさらし、アヌスを捧げてくれたT子の事ですから、いくら最愛の妻がいるからといって、どうしてT子を、T子のアヌスを置き去りに出来るでしょうか。今やT子のアヌスは、私のイノチでもあるのです。

連載・S時代小説

紫

蘭

の

門

(39)

—ア、アッ、アア……
 —イ、イツ、イイ……
 紅唇、開くところ「ア・イ」を謳^{うた}う。
 これ「いろは」のイにして「アイウエオ」
 のアなり。愛、ここに在り。

風 流 極 道 軒

より濃く、よりねばねばした液が滲みでているのが五百匁蠟燭に照り映えて客たちにも見えた。

「どうやら、ほどう、潤ったようでござります。では、一の剃りをこのお方にお願いしとうござりまする」

さすが大勢の人々の前、昭吉は、名を呼ばなかったが、あらかじめ決められている順番表を手にした和吉が、水野出羽守に恭々しく菊一文字の小柄を捧げた。

フッフッフッ。
 低く笑った水野が、円形の舞台に近寄っていく。

ソリゲノギシキの主賓であった。名を呼ばわらなくても、それと知っている客たちが道をあけるなかを、舞台上に上り、
 「姫。おめでとうござる」

と声をかけると中腰になって左手で貴子の右膝を、さらにグイッと開かせ、

「名器を鑑賞するにあたりまして、五感というのがござってのう。目・手・鼻・耳・唇といわゆる人間の五感に訴えて、それぞれ視・触・臭・聴・味と調べてまいりますのじゃ」

「ア、アアア」

五尺余の黒髪が肩から脇腹へかけて、さやさやと揺れた。

「視覚は、まったく申し分がござらぬ。触感



“花”と“鼻”

涎^{よだれ}が糸ひいているのは、唇だけではなかった。象牙の箸の弄ばれている下の唇からも、

も同然。このなめらかさ、この色艶。紅志野の名器も、これには遥かに及びますまい」

紅志野とは、天正の頃、美濃で、やかれた天下の名陶であった。

菊一文字をキラリと閃かせた水野は、左手を貴子の膝から内股へと這わせながら、

「つづいて聴覚でござるが、これも姫の喘ぎといい、心の臓の鼓動といい、男心をときめかしてやまぬもの。そして、その上にじゃ」

四角い顔を「八」の字に開かれている内股におしあてた水野は、

「この香りは白蘭の花園に身を横たえたように、この味は！」

ひととき高い喘ぎが洩れ、「大」の字なりの貴子の裸身が嵐にもてあそばされる大輪の花のように慄えた。と、客のなかから、

「三貌」に照し合わせても絶品の風情。その姿は、まさしく上品中の上品」

前号まで——五夜のロザリオの謎はまだとけず、好敵手・徳夜叉も沓としてその姿を見せない。忙中閑ありと元禄屋は淫器・春嵐筒で雅子やお国を責めたて、さらには老中筆頭・水野出羽を始めとする客を招待して、いよいよ貴子姫の「剃毛の儀式」を始めていく。

肥満した牀に応わしいダミ声は、笠倉屋であった。

「三貌」とは何かの、笠倉屋」

チラッと貴子の股間から顔をあげて水野が尋ねた。

「三貌とは、品、幽、雅——古田織部

正さまが茶器に求められた心でござります」

「フッフッフ。織部正がのう。あやつは、茶器鑑賞には三感三趣がある」と申したのではないかの」

「それは、秘伝でございまして、その上に口伝、奥儀、極意と、茶の道は女の道と同じく奥深いものでござりまして」

舞台にあがりかけた笠倉屋を制するのは今夜、貴子の介添役をつとめている、昭吉のつとめであった。

「順番がございますから——」

と声をかけ、水野に一の剃りの進行を目前で促すのであった。

おうように領いた水野は、

「香りも、舌あたりの佳さも、比類なしじゃぞ、姫。あとあと笠倉屋たちにも三貌と

かで鑑賞してもらうがよからう。が、」
フッフッフ、含み笑った水野出羽は、右手の小柄をサア——と一刷け、左下腹から右

へと一文字に閃かせ、

「みごとなものじゃ。これで、小富士の三合目あたりまでが、ほのぼのと明るうなつたて。はて、笠倉屋のころには、鳥羽玉の暁闇

も夜明けを迎え、どこもかしこも、ありありと光り輝くことになるのではないのかのう」

菊一文字の刃に付着したものを、ひよいと掌にのせた水野は、

「姫、ではまた、のちほど」

会釈して舞台をおりた。

入れちがいになってきたのは、工頭監物。

恭々しく貴子に一礼して見せると、

「御免！」

と一声。ツーツと左手で下腹の一部を摘みあげて貴子をのけぞらせたかとみると、菊一文字の小柄を右へと走らせた。

ジイ……ジャツ……ジイ……

しじまのなかに小気味よい音が伝わった。

つづいて折戸小左衛門が、佐渡刑部が、南町奉行鳥居耀蔵が、探索方の間宮林蔵が……

と、次々に当時、江戸でも高名な男たちが舞台にあがり、貴子の下腹に、それぞれ一刷けずつ、ソリゲノギシキを加えていった。

女は、ソコを隠したがるものである。湯文字をはじめとする各種の下着で包み、それを

剥がれると手で匿し、膝でかくし、躰全体を折りまげてでも隠そうとするし、その手や膝を押しつけられ、「八」の字に双脚を開かされても、なお、黒い小富士で隠蔽^{いんぺい}している。

その女の女を護る最後の砦である小富士をいま一合目、二合目と、すでに八合目あたりまで露出されてしまったのであるから、貴子の心境は羞恥どころのさわぎではなかった。

五臓六腑を逆剥ぎにされてしまうような戦慄が、楚々とした心身をかけめぐり、貴子は一刷けごとに奈落の底へと、いよいよ深く沈淪していくほかはなかった。

「次は、笠倉屋藤十郎さまア！」

もうこの頃になると、最初とは違って昭吉は大勢の客たちの前で堂々と名をよびあげていたし、酒の酔いもあって、呼ばれたほうも別にそれに照れているようすもなかった。

「『三貌』とは、まず『品』——これは、さきほども申しましたとおり、絶品でござる。

次に『雅』でございますが、いくら品がよくても、みやびさ^{みやびさ}がのうては、かないませぬ。ところが、さすがは前右大臣正二位菊亭政房卿の御息女にして従三位中納言押小路高明さまの御令閨。このみやびさも……」

菊一文字の小柄の代りに象牙の箸を昭吉か

ら奪いとった笠倉屋は、それを、すでに刺りあげられてしまった貴子の下腹にあてがってさんざん這い廻らせたあげく、

「『三貌』とは全体から匂いでる雰囲気^{きふき}を直観するものでござりまするが……」

と箸のさきを、わずかに残っている小富士の頂に踏みこませ、

「さて問願は『幽』でござります。いくら雅があり、品佳うできていても男とは異なり、女には、そこはかとなき美しさ、秘めたる美しさのうては、かないますまい。吉原や深川の芸者衆のように、あからさまであつてはまことの女とは云えませぬ。フツ、フツ、内反りか。名器じゃ。たしかに名器。外反りはいけませぬの。やはり……」

箸が、どこに触れているのかは、大蠟燭に照し出されているのだから、よく見えた。

「ア、アッ。お、許しを……」

押しこらされる貴子の訴えに、

「フッフッフ。よい喘ぎですなあ。この分じゃと！」

グイッと語調がたかまるとともに、手にも力が入り、象牙の箸が、何かを挟んだ。

「アッ！ お、お許しを！ ウ、ウウウ」

それでも、まだ必死で絶叫を押える貴子の

女心の美しさが、ひとしく五十人近い客たちの情感を打った。

「けなげなものよ、昭吉。次は拙者の順序であろうが」

立ち上ったのは勘定奉行の肥田若狭。つかつかと舞台に、ちかより、

「笠倉屋。早うせい。そちの『三貌』など、たかが、しれた鑑賞法じゃ。拙者は『四趣』で、まいるぞ、『四趣』で」

昭吉、もはや肥田を、とめようとはしなかった。

「『四趣』とは、何でござりまするか」

ほんの一房、残った何分の一かを刺りあげた笠倉屋は、舞台からおりようとせす質問した。

「まず『暖』じゃ。これは最初は冷たくてもよい。次第次第に暖かくなればよいのじゃ。

姫の場合、もうずいぶんと暖こうなつて」

肥田の指先には何の遠慮もなかった。ゆっくりと右手の指々で確かめて、

「フッフッフ。よかろう。次は『量』と云

つてな。躰全体の『量』、乳房の『量』も、たいせつじゃが、なんといつても、ここの厚み、それに、ふくよかさ具合が肝心……」

貴子の正面にあぐらを組んで、左手まで、

右手に協力させた肥田の姿を、ぐるぐると廻る舞台が、客たちに洩れなく見せつける。もちろん客たちは、肥田の肩ごしで、うごめいている貴子の下半身を、目を皿のように見開いて見守るだけではあったが――。

「で、あとの『二趣』は」

笠倉屋が、かぶりつきの席にもどって、尋ねた。

「『聖』と『力』じゃ」

「『聖』は、わかります。女として貴子姫はこれ以上の、聖らかであります」

「フッフッフ、無論のことじゃわ。この形の香りで、この姫が、たとえ何千人の男に犯されようとも、なおかつ、聖らかさを失わぬ天性の聖女だと断言できるわ。かの……」
鋭く光る刃を内股と内股のあわいにあてがった肥田は、

「『力』とは、この力のことじゃわ。ハッハッハッハッハッ」

さすがの笠倉屋も、ハッとしたように、
「まさしく、いかな天下の名陶といえども伸縮自在にはなりませんから。こいつは一本、やられました。して、いかようにお調べなされますか。やはり手か、指で、それとも象牙の箸でも」

「バカ。ここじゃ、ここ」

ほんの少しを、のこすだけとなった下腹を見やってニコヤカに笑った肥田の鼻は、天狗の鼻とまでは、いらないが、相当のしろものと云えた。

「そこで『力』が、わかりますのか。お息がつまって、しまわれませぬか」

「バカ。つまれば出せばよからうものよ。それに口というものもあるではないか」

「これはどうも、私としましたことが」

どうやら興奮してしまっただけらしい笠倉屋の言動に一同の間からクスクス笑いが起った。

「では、水野さま。試みさせて頂きます」

正面の水野に挨拶をおくると、

「フッフッフ、いそぎんちゃんに自慢の鼻を喰いちぎられぬようにな」

「御安心なされませ。場慣れております」

「さあてのう、うまくいくかの。貴子姫は、

雅子殿にも劣らぬ『力』があるぞや」

水野は、今年の正月、雑司ヶ谷の寮で、貴子を「狎鷔」にかけたときのことを想いうかべて、何か肥田に嫉妬じみたものを感じるのであった。

——佳い女じゃ。元禄屋のものであれば、必ずや余の女にしていようものを。

老中筆頭をして一目おかせるほどの元禄屋重右衛門——この邸の主人で、今夜の主催者でありながら、万事の差配を昭吉たちに命じて、悠然と処女の血のように赤い南蛮の酒をあおりながら、儀式が始まって、もう一刻にもなろうというのに、まだ一言も口をきかなかった。

そのギョロリと光る視線のなかで、肥田が貴子の脇腹に両手をかける。

「五感」「三貌」——いずれも絶佳と評価され、さらに「四趣」のうち、三趣まで文句なく、残るは、「女の力」だけ。

肥田が顔を寄せると、貴子が、おどおどと顔をあげた。と、そのなかば開かれた瞳が元禄屋と、もろに、であったから、

「ア、アッ！ だ、だんなさまア！」

いま始めて、その存在を見知ったかのよう

に叫んだ。

が、即座に指を一本、唇にあてがって「黙って！」という合図をおくられると、頬はもちろん、乳房の谷あいまで真紅にそめて、がつくりと、うなだれてしまった。と、その一瞬！

「ヒ、ヒイイ……」

貴子が、われ知らず遂に絶叫をあげてしま

った。肥田の鼻が、思う存分に、なだれこんだのである。

「ヒ、ヒヤヤアアッ！」

ながく尾を引く叫びのなかで、肥田の後頭部が黒々と、輝いて見えた。

クル、クルと、舞台が廻り、十字型の柱に

「大」の字なりに縛りつけられている貴子の裸身のうち、両腕がキューツと、けいれんして、掌が虚空を、かきむしったが、それもやがて、ゆっくりと花開き、白いあごが二度、大きく左右に振られたかと見ると、

「ア、アアアウ、イ、イイツ、ダ、ダメ、ダメ。もう、もう、ダメ！ ア、アッ！」

鼻は隠れてしまっているが、耳は聞え、口もつかえる肥田は、

「な、なんの、これしき。姫、さあもそっともつと。さあ、拙者と力試しでござるぞ」

鼻がつかえないから、奇妙な口調であったが、たしかに、そう客たちには聞えた。

「イヤ、イヤッ！ ダ、ダメッ！」

足の爪先を開いたり閉じたりして貴子が悶える。脇腹を抱えている肥田の手に力が入ったのは、「力」に締めつけられて苦しいせいであろうか。それとも呼吸が苦しくなったせいであろうか。

固唾をのむというのは、こんな場面をいうのであろうか——と、鳥居耀蔵たちは、始めてみる「鼻」と「花」との愛すべき戦いに我を忘れて見入っていた。それも、やがて——

昭吉が柝の音を入れるとともに、

——フ、フウウッ！

肥田が真っ赤に染まった顔をあげるとともに終りを告げた。

「負けたわ。勘定奉行、肥田若狭。姫のいそぎんちゃくの吸引力には、完全に兜を、ぬぎ申す」

鼻と云わず頬といわず、ぬるぬるとひかっているものが何であるかは、すぐわかるうというもの。

「涎でござるよ。涎で」

掌でペロリと顔を拭いて、てれくさそうに笑ったものの、すぐそれを口にあてて舐めたところを見ると、この肥田若狭、なかなか、すみにはおけない男らしい。その証拠に、

「“四趣”いずれも申し分ありません。拙者を“力”で負かした女は、いまだ、一人、二人……」と指を数えて「貴子姫で五人目にござる。さすがは、日本一の分限者・元禄屋殿の寵姫、おそれ入る」

と結構、如才ないところも見せた。

興奮のあと、ひとしきり酒盃の応酬がつづき、その間に、さらに数人の客たちが一刺りあてを刺りあげていくと、あとは、ほんの一房、いよいよ、元禄屋の出番であった。

名器・あけぼの

あ・お・あ・おと刺りあげられてしまったというのであろうか——。ともかくも、みごとに菊一文字の刃をあてられてしまった貴子の下腹を、ゆっくりと眺めた元禄屋は、

「貴子や、気分は、どうじゃな」

と、手をあてがって撫でてのち、

「満更でもなさそうじゃの」

「な、なにをおおせられまする、旦那さま。

妾は、も、もうダメで、ござりまする」

「いったい何がダメなのじゃ。ほれ、このあたりも、この附近も、みごとなものじゃわ」

最後の一房を刺りおとすにあたって、いっそう貴子を羞恥の極みに追いあげるかのよう

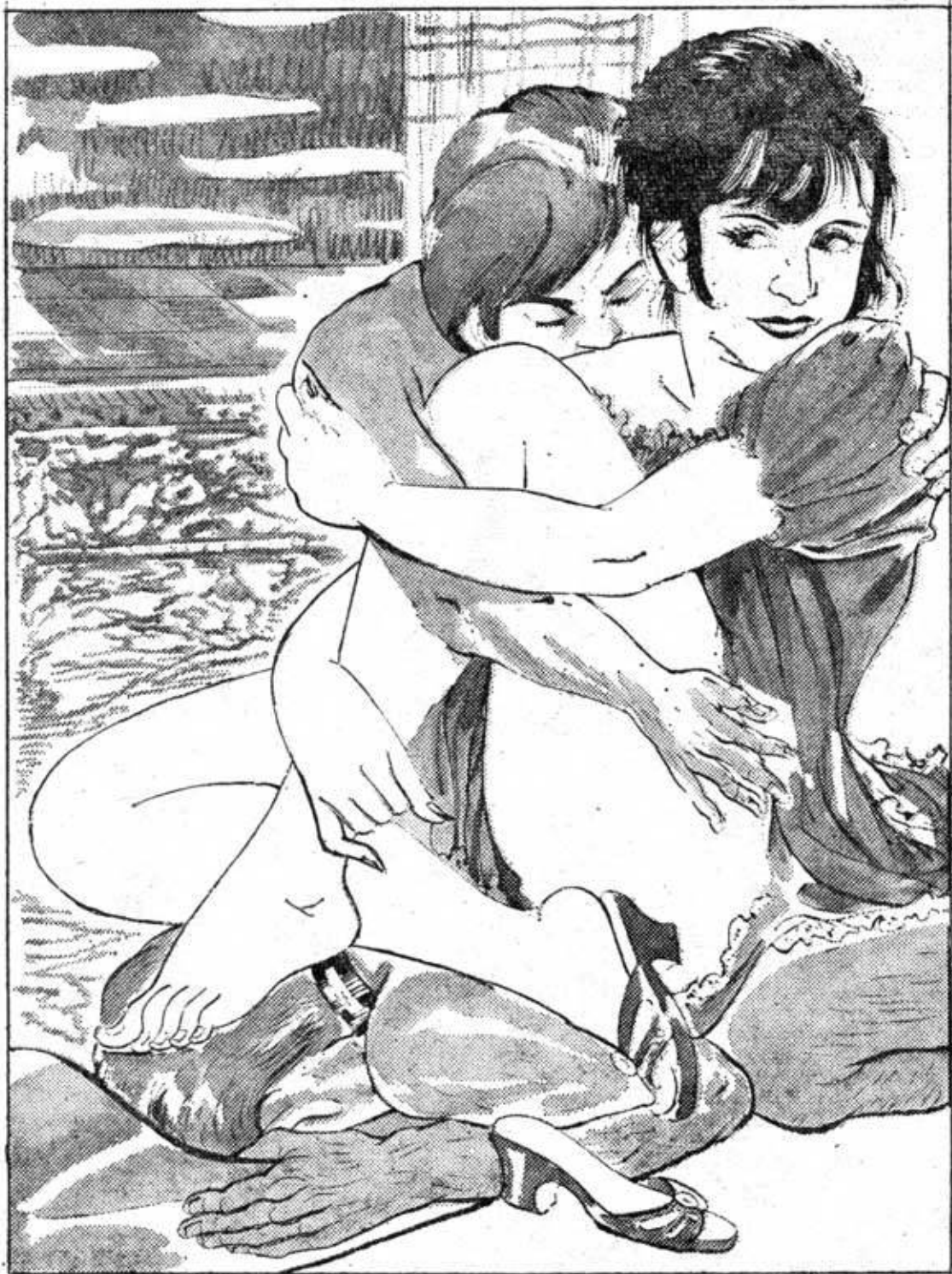
に元禄屋は、さきほど肥田の「鼻責め」にあ

って開いたものの、再び、しっかりと閉じられてしまった小富士のあたりに指をあてがっていたが、

「さきほど水野さまも仰せられておったが、

真暗闇に光がさしそめたようじゃの。フッフッ
フッフ」
麝香の匂いが、まぎれもなく漂い始めたの
を知った元禄屋は、

「ソリゲノシキも、これで終ろう。さあ、突
き出して見なされ。ほれ、ここをじゃ」
——ピシャ——と双臀をたたかれて、
「アッ！ ひどうござりますす！」



イメージギャラリー

『恋人とパトロン』

岡 たかし

「ひどくはない。お前さんのすべてをもっと
よう見て頂くためじゃ。早くせい」
「イヤ、イヤでござりまする」
「フッフッフ……可愛い女じゃわ」

他人に刺られるよりも、他人の見ているま
えで、主人に罵られるほうが羞恥は、より昂
いという。

だから思わず貴子は、「イヤ、イヤ……」
とダダをこねたのだが、そんなことは百も承
知の元禄屋は、昭吉に目配せして、貴子の双
臀を前へ突き出させると、しばらく舞台が廻
廻るにまかせていたが、

「さて、皆さま方。これにて菊亭貴子も、い
よいよ一人前の女として誕れかわったようで
ございます。つきましては」

正面、水野の前まで舞台が廻ったとき、菊
一文字の刃を、下腹にあてがい、

「これまでは名器・いそぎんちゃく——本日
ただいまより、『あけぼの』と命名いたしま
した。暁闇は、すでに東の空から消えさり、
ほれ、かくは、あけぼのが、さしそめてござ
いまする！」

刃が躍ったかとみると、最後の一房が、は
らはらと、舞台に散った。あとは、まさしく
「あけぼの」を思わせる風情であった。

「名器・あけぼの——か。元禄屋、よい名じや、よい名じや。姫に応わしい雅号じや」

水野が四角い顔をほころばせて盃を目八分にあげて、乾してみせた。

どっとばかりにあがった歓声は、とどろきなく儀式が終ったことへの会図であり、これから始まる宴への興奮でもあったろう。

柝が、たからかに鳴りひびいて、

「では、これより名器・あけぼのの初公開にござります。さきほどの順序に従われまして、擦る、触れる、舐める、くわえる、などどうか、しばらくは、ごゆるりと御鑑賞下さいますように！ 東西、東西！」

再びあがった歓声のなかで、元禄屋は、舞台をおりた。

「だ、だんなさま。ひ、ひどう、ひどうござりまする。貴子に、死、死ねと申されますのか。だ、だんなさま」

「さようじゃ、貴子。喜悦のあまり、死ぬがよい。女は、何度でも死ぬもの、失神するものじやろうが、のう、貴子や」

「ア、アッ。ま、まって。だんなさま」

早くも数人の男にかこまれてしまって、

「ダ、ダンナサマッ！ ア、アレッ！ お、お願いでござりまする。お、お許し下さい。」

許して——ア、アレッ！」

「一番は水野さま！ 水野さまが、まずお触りにならないことには、私どもは手が出せませぬによって、お早う願います！」

「水野さま、お早う、早うお願いします」

「水野さまのつぎは工頭さまじや。そのあとは折戸さまに鳥居さま。ああ、これじゃ、私は、いつになることやら」

ひととき高まる喧騒のなかで、昭吉の聲がひびいた。

「御順番をお待ちの皆さま方には、ほれ、このように！」

柝がひびくとともに、襖が開いて、嬌声とともに入ってきたのは、およそ五十人ばかりの女たちであった。

いずれも深川、新橋、新吉原と、江戸の町をあげての芸者たちが、いずれも湯文字一枚の裸身を折って、三指をついた。

「フッフッフ、やるのう、元禄屋。あれは小染と紫野。こちらは小吉に、お仙」

老中筆頭水野出羽守忠成——遊びにかけては幕閣でも名うてのものだけあって、たちまち十名ちかい女の名をあげたが、

「さすがじゃの。これだけの高名な女たちを集めるためには、余のごとき大名では二年三

年の年貢米を全部つきこまざるまいよ」

「なにを仰せられます。たかが、これしきのこと。それよりも水野さま」

「なんじゃの」

「ここは昭吉にまかせまして、あちらで」

「なにか見せると申すのじゃの」

「いかにも」

「ここ、貴子姫をこのままにしておいても大丈夫かの」

「昭吉がおります。それに鞭兵衛一家がついております」

「舐める、触る、擦る……以外は、心配ないと申すのじゃの」

「それに、私、客を信じておりますゆえ、さあ、どうぞ」

水野を先導して元禄屋が、五十畳敷きの大広間から立ちさるのが、貴子に見えた。

が、そのときに貴子は、すでに、笠倉屋を始めとする数人の男たちに第一回目の失神状態に陥らせようとする寸前であった。

——だ、だんなさま！ 貴子を、こ、このようにお客さまのなかへ、ひとりぼっちにされて、どこかへ行ってしまわれるとは！ 妾、もう、存じませぬ！ ア、アッ……妾、もうほんとに笠倉屋さまにでも、間宮さまにでも

抱かれて、悦ばせて、いただきますからね。
し、しらない！だ、だんなさまのいじ悪！
ア、アッ、だ、だんなさまツタラア——

何十人の芸者が入ってこようと、客たちの
のぞみは、貴子一人——それほどの名器の持
主であり、この日本中、探し求めても得られ
ぬほどの女であることが、今夜、立証され
たのであった。

金 魚 責 め

「あのように人数が多くなりましたは水野さ、
まの御清遊に応わしからぬかと存じまして」
広間の喧騒がときおり聞えてくる離れに水
野をいざなった元禄屋は、総てが予定の行動
らしく、

「本日はソリゲノギシキに御参加下さりまし
て元禄屋、心からお礼申し上げます」

と、あらたまった口調で云ったあと、

「では、これよりしばらくの間、ごゆりと」
櫓や檣に、かこまれた離れのそとで、鶯の
鳴声がした。

「うぐいすが、夜、鳴くものかのう」

「フッフッフ、鶯は、夜こそ哭くものでござ
りましたように」

ポンと拍手をうつと、松竹梅を描いた襖が
するすると開いて、女中頭のお松が坐ってい
た。

「さあ、どうぞ」

部屋に入った水野は、中央のギャマンの水
槽をみつめて、

「珍しいのう。これほどのギャマン、なか
か手には入らぬて」

泳いでいるのは、数尾の金魚であった。

なにを、見せようというのだらう。まさか
このギャマンや金魚を……と、思ったとき、

かたわらから一人の女が立ち上った。いや、
立ち上ったのではなく縄尻を持たれて立ち上
らされたのであった。

「小紫のお景と申します。男のほうは」

紹介する元禄屋を、さえぎって、

「存じておる。『莫塵破り』とかの持主で黒
馬と申すものじゃろう」

「いかにも。女が女だけに万一に備えまして
呼びよせておきました」

「これが、お景か……」

水野の眸が、興味をもって、一糸まとわぬ
お景のばい・髷から足の爪先までを這いずりま
わった。

「話はきいておったが、これが、いかなる南

蛮紅毛の拷問にも屈せず怪盗・徳夜叉の隠れ
家を白状しなかった女か？ さもあるう」

「御意に召しましてか」

「気に入るも入らぬも、いつもそちより聞か
されておると、興味もひとしおじゃ。貴子姫
にまさるとも劣らぬ絶品の壺の持主じゃそう
じゃがのう……」

遠慮のない水野の手が、荒縄で縛られてい
るお景の下腹を撫でたが、お景は、かすかに
身じろぎしたままで、あとは颯るにまかせて
いた。

麻布六本木の別邸に捕われてからというも
の、穴沢流、女谷流、さらにはオランダ人・
ヘンドリック・ファン・メルデルフォールト
のエレキテル責めと、数多くの責め苦をうけ
た。が、愛する徳夜叉のため、ひたすら耐え
忍んできたのである。今夜も麻布から、ここ
日本橋へと連れこまれた以上、ひどい拷問に
逢うことは覚悟してのことであった。

「しぶとそうな女じゃ。じゃが、余は、この
ように、やくざっぽい、お俠な女に惹かれる
わ。第一、この菊の花のような香り。うい奴
うい奴」

お景の、ぜい肉ひとつない、引きしまった
軀に見惚れていた水野が、指々を分け入らせ

たが、それでもお景は、かすかに（アッ！）と喘いで、裸身を、いくらか「く」の字にまげただけであった。

「して、元禄屋。いかがいたすのじゃ」

お景の強情さに、女というものは余が手を触れただけで喜悅の声をあげるものじゃとばかり思っている水野が、いささかムツとして尋ねると、

「金魚責めにかけまする」

「なんと！」

「このギヤマンの水槽のなかに入れまする。そして温度をエレキテルであげていきますると、冷水にすむ金魚は、行くさを求めて、当然……」

「フーム。どじょう責め、白魚責め、なまず責めなどは耳にしたが、金魚責めとはのう」

「どじょうや、なまずなどは、名器・春雨にふさいませぬ」

「春雨じゃと」

「いかにも春の雨とかいてハルサメ……」

「ハルサメと申すとコンニャクを糸のようにいたしたものをハルサメとよぶのう」

「だからでござりまする。実は、貴子に『あけぼの』と命名しながら、この女のこととも考えまして、糸コンニャクの味を、ふと思いう

かべまして春雨という言葉がうかびました」

「フッフッフッ、どここの味じゃの、元禄屋。

みみず千匹とは、よくきくが、糸コンニャク千匹とは始めてじゃ」

「ハッハッハッ……まあ、御覧じませ。春の雨で糸コンニャクが、どのように潤って参りまするかを」

元禄屋がとり出した女の体毛でできた筆、極楽筆であった。それをギヤマンの盃に、たっぷりと浸すと、黒馬がムリヤリ開かせたお景の股間へと塗りたくっていった。

「よい味がいたしまするぞ」

「なにがじゃ」

「金魚どもがでございます。とびついて参りましょう」

「はて、のう」

何を塗りつけているのか、わからぬままに水野は、お景の観念しきった顔の表情を見つめていた。

——美しい女子じゃ。徳夜叉の情婦にしておくのは、もったいない。

くりくりとした紅珊瑚のような乳首に手を出して触ってみると、

「アッ」

やっと、お景の唇がひらいた。

つづいて脇腹に沿って掌を這わせていくと右太腿のつけねの小さな黒子が見えた。

「かわいい、ほくろじゃの。どれどれ」

しゃがみこもうとしたが、筆をしきりに動かしている元禄屋とぶつかって、うまくいかない。

どんなに、石の花のように我が身をこわばらせても、極楽筆で、まさぐられては、お景とても、誘いこまれずにはおられなかった。

——徳夜叉さま……

何度か心の中で恋しい人の名を唱える目の前で、ワキンが数尾とリュウキンが三尾、尾鰭、胸鰭をうごかして泳ぎ廻っていた。

その動きが、おちつかないところをみるとどうやら食餌を求めているらしい。

——このなかへ妾を入れて……金魚たちに多分……あ、あっ——

元禄たちの責めは、ほぼ想像がつく。それにしても、どこまで、妾を罵れば気がすむとこののであろうか。穴・焙りや中・高舟に較べれば恐怖は少なかったが、元禄屋たちの責めがはてしなくつづくように、お景の羞恥も、いつになっても消えてはくれなかった。

長い睫毛の下の澄みきった湖のような瞳が次第にうるんだように燃えてくる。

イメージギャラリー 『穴』 岡 たかし



——あの金魚に妾が……溺られる！ 徳夜叉さま、どこにおいでですの。早く、早く救い出してくださいませぬと、妾はダメな女になっ
てしまいまする——

黒馬が、かるがると女体を抱きあげて水槽

のなかにおとした。冷たいとばかり思っていた水は、なまぬるく、かえってそれが、おぞましさを、ます。

と、月の前をワキンがスウィットと通った。もう一尾——こいつは、背中にまわると、

早くも手首のあたりに噛みついてきた。

「ア、アッ！」

胸乳まで、たっぷりと沈められたのは、しかたないとして、水中で、正座しているお景の右足首を掴んだ黒馬が、

「御開帳だよ、開きな」

と云って、グイッと右足を、水槽のへりにもちあげてしまった。

「ア、アッ、何をするんだよう！」

「こうしなくっちゃあ、お金魚さまが困るだらうよ」

と、へりの横木に足首を括りつけると、

「ほれ、こちらも出しななってことよ」

と反対側のへりに左足首も固定されてしまったものだから、腰が崩れて、そのまま、躰が下へと沈んで、あごのあたりまで水につかってしまった。

それは丁度、浴槽の両縁から足を出して、あごから下を湯に浸して、なにかを待っている美女といったところであろうか。

リュウキンが一尾、乳首を餌と思ったのかスウィットと泳いできて、つつき始めた。

「お松や。始めなされ」

「ハイ、旦那さま」

お松が、水槽のよこに取りつけられている

棍棒状のものを上に押した。

「エレキテルとは便利なものでござりまして先日、来日いたしましたヘンドリックの置土産でござりまするが、この棍棒で、これとこれとが接続いたしましたして火花を生じ、冷水がたちまち、湯となりまする」

「南蛮の魔術じゃな。四、五十年ほど前に平賀源内という大山師が同じことをやったそうじゃの」

「いかにも、いかにも、摩擦起電器と申しますそうな。が、あれよりも、よほど強力で精巧なものでござりまするぞ」

と、庭の向うから、どっという喧騒がひびいてきて、二人は互いに顔を見合わせた。

「貴子姫、散々に罵られてるようじゃの」

「フッフッフ、そのようござりまする」

「おぬしも、大変な男よのう。ともかく尋常

一様のものではない」

「おほめのお言葉、辱う存じまする」

たしかに自分の女を、五十人もの客たちの間に全裸で、ほうり出すことなど非凡の男でなくては出来ることではなかった。

「それよりも、水野さま。ほれ、金魚めが、ぼつぼつと……」

エレキテルの効能で、温度がたかまるにつ

れて金魚たちは、冷たい隠れ所を求めて、急速な動きを開始したのであった。

赤と金色の混じったリュウキンが、尾鰭をふりたてて、お景の乳房の谷を泳ぎ廻ると、ワキンの数尾は、脇腹から双臀の方角へと、しきりに胸鰭を振り立てていく。

お景の頭のほうにいる元禄屋に、その裸身がアルファベットの「Y」の字のように見えるのだから、水野から見れば逆「Y」の字、丁度、かわいいいほくろが正面に見え、ひらかれきった股間が、はっきりと見える。

「美しいのう……」

「お気に召されましたか」

ふかく頷きながら水野は、透明な湯の中で悩ましく揺れうごくものを眺めていた。

と、大きなリュウキンが急に逆立った。

「アッ！ ア、アウ！」

お景が激しく腰を振り、水面が波立つ。

お景の眉がひそんだのは、何かを必死で耐えているに違いない。

「フッフッフ。蜂蜜と米ぬかに、やっと気づいたようござりまするな」

「米ぬかじゃと、さては、さきほど股間に塗りこめたのは餌であったか」

「いかに。米ぬかだけでは水にとけこむと

存じ、蜂蜜とまぜ合わせ、奥のほうへと滲みこませてござりまする」

「相変らずじゃのう」

「なんの、なんの。水野さまこそ、金魚にでもなり変りたい、お顔のようで」

「こいつ！」

二人が笑っている間にも、頭をつっこんでくる金魚の数が増えて、七、八尾にも達していた。

金、赤、黄……いろとりどりの模様をもつワキンやリュウキンが、群れ集うありさまは妖しくも美しい光景といえた。

あごから上を獄門首のように水面に出しているお景の顔には、羞恥と疼痛に耐える苦しみ、急激にその影を濃くしていった。

金魚の口は小さい。しかも、噛む力は弱く女体を傷つけることは、まずない。むろん、ただ一緒に泳ぐだけならば、喰いついてくることは、まずないのだが、いま、ギヤマンの水槽のなかの金魚は飢えており、しかも次第に暖かくなった温度から、どうにか逃げようと一尾が胸鰭まで沈めると、もう一尾が内股のほくろにかじりつくというふうに、いらだ

っていた。

「こやつらにも糸コンニャクの味がわかると

見えるのう」

水野が言ったとき、

「ヒ、ヒャアアッ！」

いままでの押しこらした喘ぎと異なった悲鳴が、お景の唇から、ほとばしっていた。

「どうしたのかの、お景さんや」

ひとときわ赤いワキンが、奥へと舞いこんで口からエラのあたりまでが見えなくなっているのを見定めながら、元禄屋は、さも案じ顔でお景の頬をつつくのであった。

「ア、アッ！ ヒ、ヒイイ。アッ！」

さらに一尾、今度は紅白ダンダラ模様のリユウキンが同じように頭を突っこんでいくとさきのワキンといっしょになって、逆立ったまま、しきりに尾鰭を、ふり始め、

「キ、キャアアッ。ア、アッ」

悲鳴は、いっそう高まった。

「お景さんや、楽しいじゃろうが。蟬涙で責めたてられるよりも、こうしてお湯のなかで金魚と遊んでいるほうが、はるかによい気持ちじゃあないのかえ」

五尾の金魚が、下腹の辺りで次々と波状攻撃をかけていくさまを、水野は走馬燈にでも見入るように眺めている。

「ほれ、ほれ。今度は、後に廻ったぞ。どう

やら双臀の凹みが、お好きらしい」

——ピシャ！

水音がしたのは、苦しさのあまり、お景が軀を振り、そのはずみに鼻のあたりまで沈んでしまった、せいであつた。あわてて引きあげると再び、水面が大きく波立つ。

「あれ、あれ、金魚め、よほど気に入ったと見えて、まだ離れようもしない」

股間に塗りこめられた米ぬかの餌にありついたらうえは、どんなことがあっても食べずにおくものかという意気込みの三尾が、なおもしがみついていた。

後の方でも、双臀のあたりの冷たい隠れ所を求めて数匹が、むらがっているらしく、お景が、しきりに腰をくねらせている。それが湯の中であるだけに、いっそう夢幻のように見えて、黒馬もお松も水野のやや後方から、じいっと見守っていた。

「どうだい、お景さん。そろそろ音をあげてもよいところだけどねえ」

金魚のどこかが挟みとったものであろう、数条の繊毛が、ただよっているを見つけた元禄屋が、指にうけ、

「いつ見てもよい艶だねえ。さあ、なんとかお言いよ。水野さまに抱かれたいわとか、黒

馬さんの『莫産破り』を名器・春雨でおうけしたいわとか、どうだね、お景」

指先を鼻さきにつきつけられたお景は、凄艶な瞳を見開いたもののツーンと横を向く。

十分に水気を吸った荒縄で上下を締めつけられている乳房が、ゆらりと揺れた。

と、二尾のワキンが、スウーツと寄ってくと、左右に乳首に同時に吸いつき、それに誘われるように数尾が、水面近くの首頭のまわりで輪をつくった。

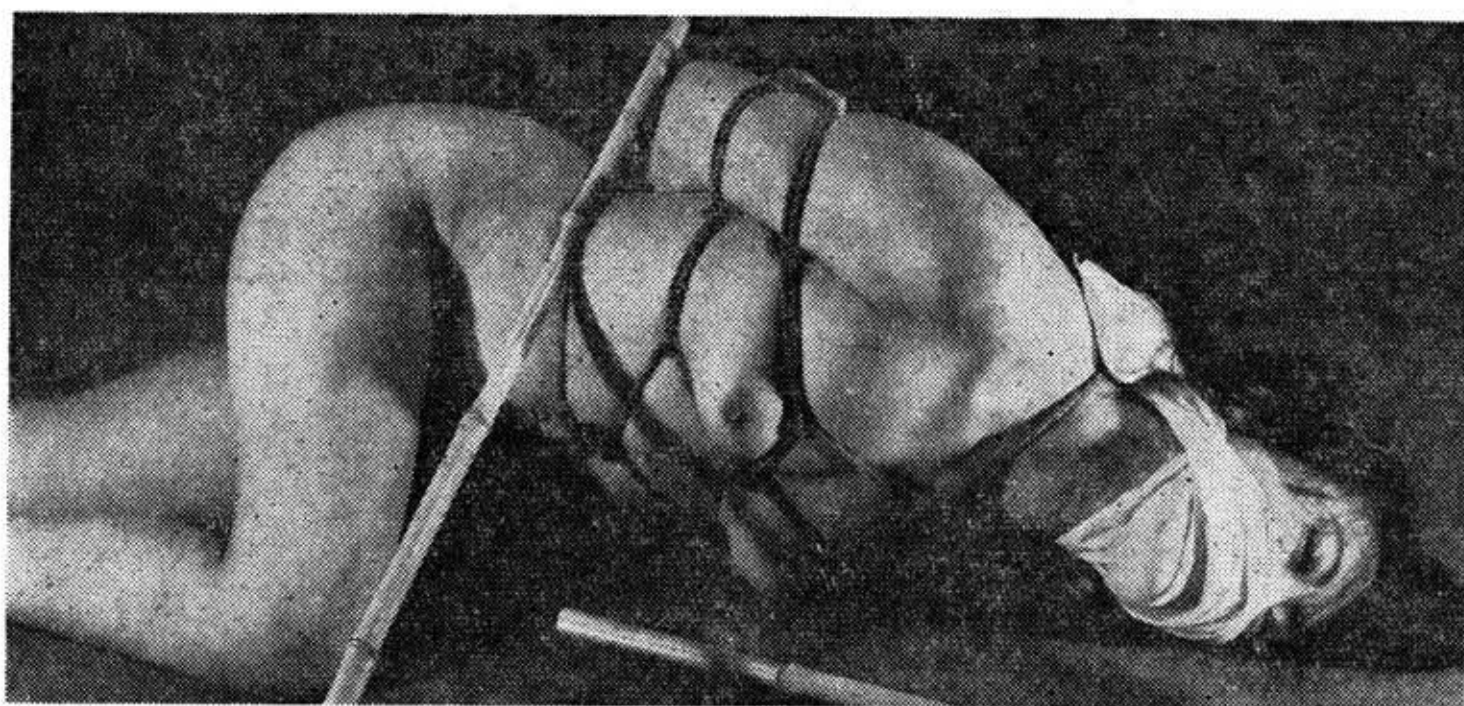
いぜんとして双臀に数尾、そして「八」の字にひらかれた股間のあわいで尾鰭を上にして逆立っている三尾のリユウキン——。

熱い吐息とともにお景が湯のなかで揺れ、

「お、おやめったら！ こ、こんなこと、いくら、したって、妾……」

「屈服しないというんだらうねえ、お景。フツフツ。それは、わかつていさ。お前さんが日本一、強情な女だからいさ、とくに御承知さ。だからこそ、こうして、楽しませてやっているじゃあないか」

湯の温度が、さらに上昇したらしく、あの優美な金魚が——と思われるほど、その動きが荒々しくなった。庭の外では夜鶯が、お景の叫びに応えるように哭き始めていた。



さ る ぐ つ わ

—この美しきものの詩と真実—

—新 川 裕 夫—

その詩について

○

私は不思議でたまらない。無表情な一枚の手拭いが、一たび「猿轡」となって女の口に巻きつく時、どうして、こんなに妖しくも強烈に女の魅力を引き出す道具となるのであるうか。

『奇譚クラブ』でも過去、何度か猿轡に関する好エッセイが掲載されて来た。私は、それらを大いに愛読したものである。

例えば『猿轡雑感』（筆名は失念、たしか千葉とかいったと思うが……）とか、古川裕子や吾妻新の猿轡についての読み物等が、はっきりと印象に残っている。

特に吾妻新氏のはエロチックなアメリカ風の挿絵といい、サジステックな内容といい、実に面白く、又、古川裕子さんののは、猿轡をされる女の側からの描写で迫真力があり、くり返し読んでは随分、性的興奮をさせられたものである。古川さんのエッセイのうち後期のものは、あまり上手すぎて創作ではないか或は、この人は本当は男性ではなからうかと一寸、疑ったが（実は今でも、この疑念は、かすかにある）とにかく面白く楽しかった。

吾妻新氏と古川裕子さんは「猿轡」の分野で、われわれが忘れる事の出来ない先覚者であり、愛好家であった。私はこの二人の猿轡に対する情熱を、しみじみ立派だったと思っている。

今の若い読者は、或は吾妻氏や古川さんを知らぬであろうが、それは当然で、第何期かの『奇ク』の黄金時代以後、二人は筆を絶ち又『奇ク』編集部もそれ以後、あまり事「猿轡」に関しての啓蒙、開発、或は深化等の努力は、なされていまいように見うけられる。

現在のSM雑誌界は殆ど流腸一辺倒である。そして私のひがみからか、猿轡には案外無関心のようなのである。流腸はそれはそれでよい。別に異をさしはさむつもりは毛頭ないが、私個人をして言わしめれば、その心情はわかるが、あんな事は汚くて、やる気がしない。

それにひきかえ、猿轡の何と美しく、可憐でエロティックなことであろうか。古川さんも吾妻氏も、この猿轡の持

つ妖しい情趣を、愛してやまなかったのである。

塚本鉄三氏は、氏のルポルタージュ「昭和48年3月号の『別嬪じゃないけど凄く可愛い娘』の中で猿轡を分析されて、大要、次のように言っておられる。

——（猿轡は）別に発声を封じようと考えたわけではなく、被虐の表情に一抹の色どりを添えるためのもの。

——猿ぐつわによって、（女の）目の表情が、いきいきしてくることは経験者の知る

ところである。

塚本鉄三氏の的確、且つ興味深い猿轡論はなおも続く。

猿ぐつわを噛ませることが、緊縛女体について必須条件だと主張する猿ぐつわファンもある反面、顔の表情をかくすといって嫌がる人もあって、まちまちであるが、猿ぐつわは被虐のムードを高めることだけは確かであろう。またM女のなかには、非常に猿ぐつわの好きな人があって、猿ぐつわをされると忽ちにして燃え上ってしまうという例を知っている。

猿轡の効果は、まさに塚本氏の指摘される通りで、もう一言もつけ加える必要はない。

私は、「猿ぐつわを噛ませることが緊縛女体について必須条件だと主張する」男性と、「猿ぐつわをされると忽ちにして燃え上ってしまう」女性のために、これから書き続けるエッセイを捧げたい。（と、大上段にかまえたが、うまく書け



る自信はない。ただ、猿轡愛好の諸兄姉と、おしゃべりがしたいだけである）
そして、もし一人でも、外の領域から猿轡の魅力につかれて我慢の人となってくれればこんな喜ばしい事はない。

○

さて本題に入る前に、一寸ここで上記の卓越なる猿轡論を展開された塚本鉄三氏の作品から、猿轡の美しさを念のため確認してみよう。既に塚本鉄三論として水準以上の立派なものに前河恵一郎氏のものがあり、私も前河氏の論旨にすべて同感であるが、このエッセイの叙述上、どうしても塚本氏の作品に留意せねばならず、屋上屋を架するようであるが私見を述べたい。皆さんも奇クの旧号を取り出して御覧下さい。

偶然、手にふれた昭和四十七年十二月号から――。

「巻頭緊縛美フォト」

まず（猿轡と縦縄縛り）と（私を責めて下さい）の四葉の写真が目に飛びこむが、抜群の出来栄えは（私を責めて下さい）の下の写真であろう。軽く目を閉じて、きびしく縛られた笠井奈保子のM女特有の、なよなよした柔らかい優しさ女らしさを、いやが上にも強



調しているのは、実に笠井嬢が、はめられている豆絞りの猿轡であることは誰も異存がなからう。それは、縄二筋をかませた同じモデルの上段の写真を見くらべてみれば、一目瞭然である。

実は塚本鉄三氏の作品で、笠井奈保子嬢を使った素晴らしい猿轡の写真は別にあるのだがそれは、いずれ、その時、ふれよう。

（猿轡と縦縄縛り）の高村浩子嬢のは上段の写真がすばらしい。かませた布が、女の哀愁を、ただよわせて充分である。きびしい縛り方もよく、はっきり写った彼女の鼻孔から熱い息が洩れてきそうな作品である。

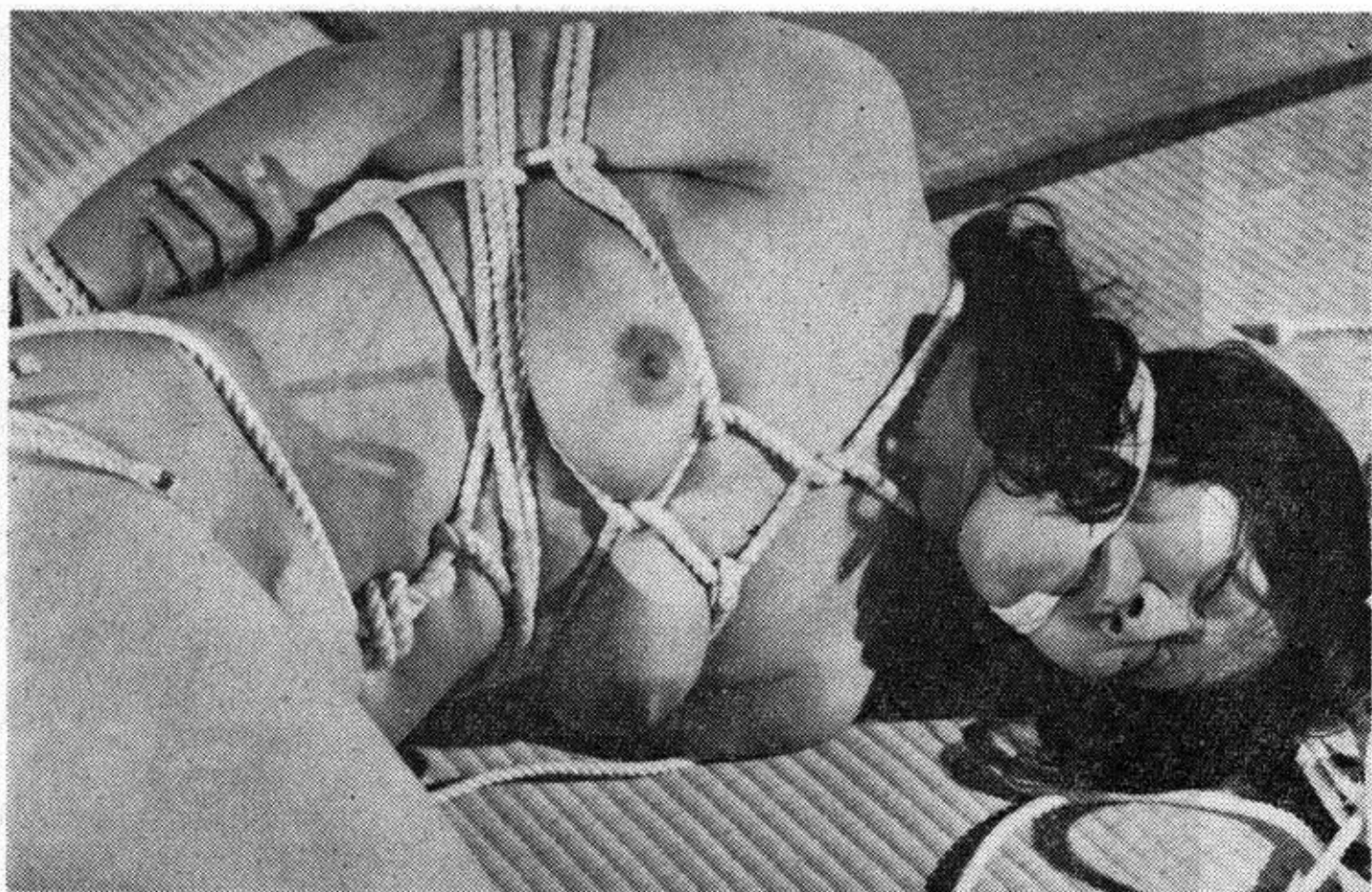
（迫りくる悪魔の恐怖）は、断然、上段の写真が秀れていよう。ガッキとかまされた白布の猿轡。しかも上目づかいに、この写真を見る男の方を凝視しているモデルの表情は、まさに迫りくる悪魔の恐怖におびえている。

（口を封じる責め）は、上述の諸作品にくらべると、猿轡あそびといった感じで、迫力にかけるのは残念である。

昭和四十八年 三月号

「責めと縛りの夢幻境」

（よく挙がる後手縛り）の二頁目の上段、たしかによく挙がる後手で、高々と交さして縛られた西条紀代嬢の、豆絞りの手拭いをかま



された横顔が可憐でよい。

前田真知子嬢のは（二の腕の縄痕）が断然よい。腰ひもを、ぐつとかまされて目を閉じた、あきらめの表情は、マゾ味百パーセントの写真である。これからこのM女は、男にどういじめられるのだろうか。

（長襦袢と赤い腰巻）

古い写真であるが（ずっと以前の奇クで見た記憶がある。何ときれいな女なのだろうと驚いた事をおぼえている）良い写真は少しも時間の経過を感じさせない。モデルの美しさもさることながら、鼻の上から口、頤と、ぐつと掩った豆しぼりの手拭いによる猿轡、何と、すばらしいのだろう。女の鼻孔にあたっている手拭いが、女が息をするたびにスパスパと、かすかに動き、静かにしめっていくのが、よくわかるような写真だ。

昭和四十八年 四月号

私が最近の奇クの中で、一番、猿轡による被虐味あふれる好きな

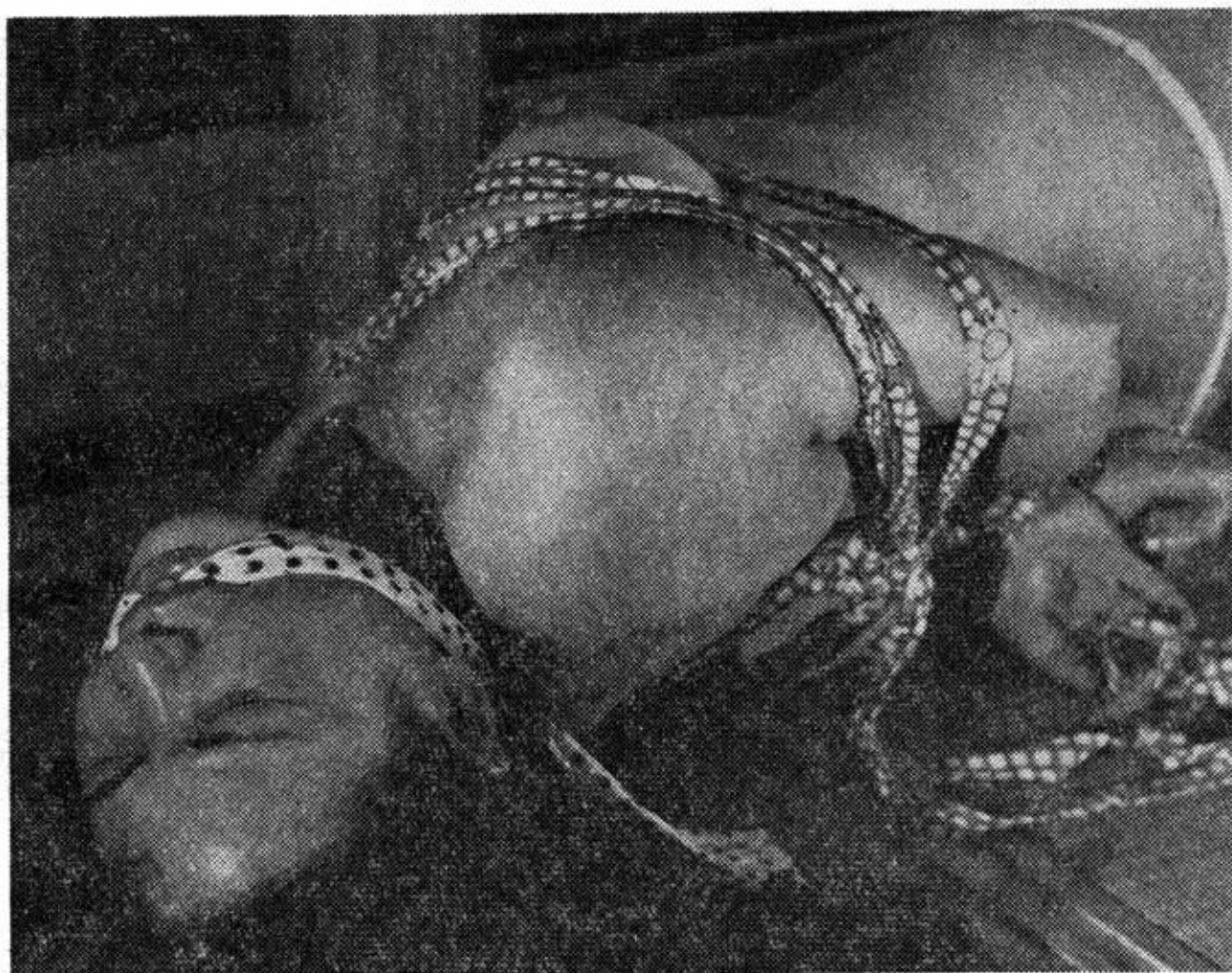
作品であると思っている写真があるのが、この号である。つまり、一寸前の笠井奈保子嬢の猿轡で、すばらしいのがあると述べたのがこれだ。それは「麻縄の交響楽」中の（豊満のコード縛り）である。この一枚によって、外の猿轡の写真、例えば（竹の部屋の憂囚）（柔肌は縄に抵抗する）等は皆、ふきとんでしまった。まさに麻縄の交響楽に、ふさわしい。それも第四楽章プレストといったところか――。

笠井奈保子嬢の豊満な肉付をコードで、ぎりぎり縛る。その縛り方、肉体のくびれ、プクンとつき出た乳房等、いずれもいいが、すばらしいのは彼女の表情だ。乱れた髪。あきらめかマゾの快感か、うつすらと目を閉じ彼女は、がっかりと猿轡を噛まされている。豆絞りの手拭いの猿轡だ。いかにこの猿轡が固いかということは、彼女の頬が、ぐつとくびれていることによって、よくわかる。実に女の被虐的表情を愛する男にとって、たまらぬ写真だ。すばらしい。私はこの写真を見ながら、何度、性的興奮を覚えたことか。

昭和四十八年 五月号

「責めと緊縛の祭典」

この号で一番は（豆絞りと長襦袢）である



う。館典子嬢の顔半分を鼻から口、頤を掩う式の猿轡である。この方式による猿轡によって、塚本鉄三氏の指摘される被虐のための表

が、今しきりに松本嬢の局所を刺激し、女は髪を乱して顔を右に左に、なやましく動かし、いる一こまなのであろう。この場合、女に

情が如何によく出ているか、この号をお持ちの方々は、よく鑑賞していただきたい。この表情の、すばらしさ！女の猿轡って実にいいなあと、つくづく私は思う。

昭和四十八年 七月号
何故かこの号は猿轡が不作であった。

強いていえば「美女緊縛の祭典」中の（悦虐にむせぶ）か。（マゾのサガにむせぶ）よりもM女の表情が出ていると思う。

昭和四十八年 八月号

「責めと縛りに酔う」
秀逸は（バイブ責めに耐える）であろう。

軽く目を閉じ、腰に対して少しねじれた方向に顔を上に向けて、しっかりと白布を、かんでいる。バイブレイター

うめき声しか許さぬ強烈な口にかませた方式の猿轡が、極めて迫力をそえる上に効果的となっている。

この号はグラビアでは猿轡が、どちらかといえば不作であるが、「カメラ」と「ペン」のルポ「同棲時代の甘い優雅なSM生活」では、それを補って余りある程、いい作品が並んでいる。つまり、ほとんど猿轡をされた女の写真ばかりである。それもオーソドックスな型の猿轡あり、口にくわえさせる型あり。私が気に入ったのは、まず二十二ページ。

まさに猿轡美の典型的な作品というべきであろう。シンメトリカルに大きな乳房を強調した縛り方といい、鼻から口に至る顔半部分をきっちり掩った猿轡といい、悦虐にうづく女の熱い息づかいを、鼻孔の上の手拭いに手をあてて確かめてみたい気がするような、たまらなく、いい写真である。

二十六ページのもいい。

猿轡のやり方は、前作と違って口にかませる方式だが、かませ方が、きつく少しも妥協してはいないので、それが男心を妖しくさそう女の流し目の効果を、いやが上にも高めている。さて、どうやって、この女をいじめようか――。

五十、五十一ページの二枚は、二十二ページの方向を変えて撮ったものであろうが、ともに、すばらしい写真である。特に五十ページの方がよい。鼻の上から顔半分を、ぐつとつんだ方式の猿轡が横から見ると如何なる形を呈するかが、よくわかり、じっと見ているとS的男性の血を、いやが上にも燃えたせる。猿轡に使った手拭いの、いく重かのしわが、極めてエロティックである。

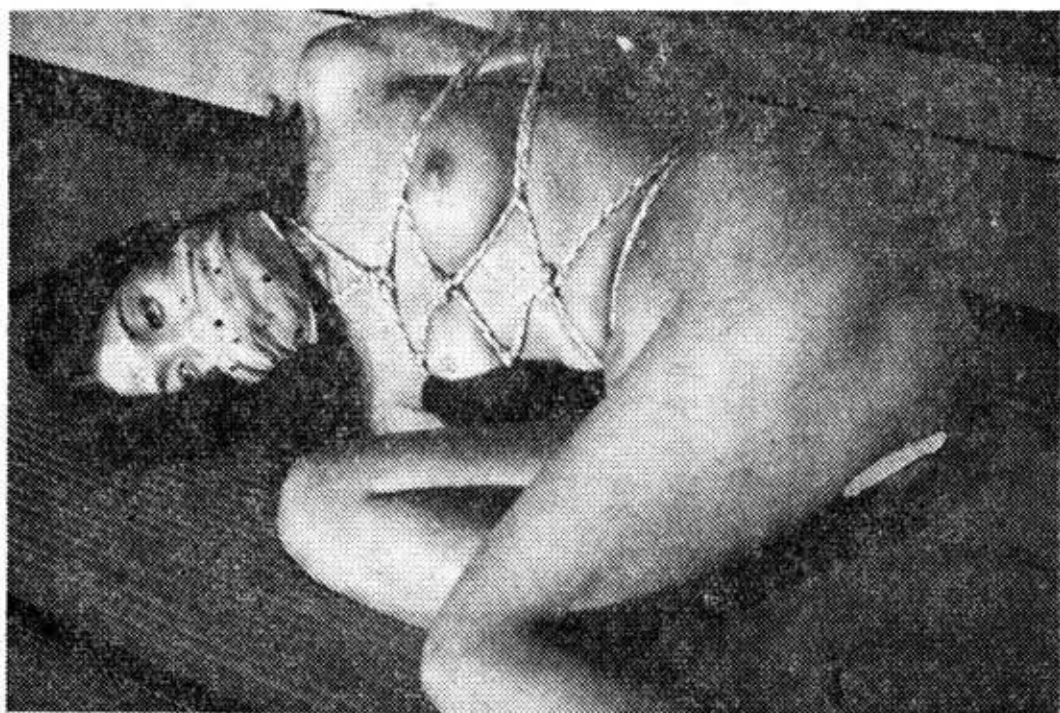
しかし惜むらくは、以上の写真がグラビア印刷でなかったことだ。

昭和四十八年 十月号

この号も塚本氏は、グラビア「M女性の責め図絵」よりもルポ「天神祭に来る女」に強烈な作品を発表されている。

一六四ページのは、好写真だが、この場合大切な女の目が、はつきりせず、それが致命傷となって残念であった。

しかし、それを補って我々の渴をいやしてくれる強烈な猿轡は、一八四、一八五ページの作品である。容赦なく女にかませた布切れの猿轡。ただ哀れな、そして可愛い女に許されるのは、うめき声と熱い息を鼻から吐くだけである。「ざまアみる、マゾ女め！」とふと、つぶやいてしまう写真である。



昭和四十八年 十一月号

「異常美の双曲線」

すばらしい写真がある。最後の（猿ぐつわと瞳）が、それである。

一頁大の鮮明な写真も嬉しければ、白い豆絞りの手拭いによる鼻から口、頤をつつむように掩った方式の猿轡も美しい。

モデルの左近麻里子嬢は涼しげな美しい瞳をパッチリとあけて、前方を静かに見つめている。カメラのピントは正確に猿轡に合わされている。下を見れば乳房を強調した縛り方のため、プクンと突き出た乳首が「さア早くいじめて」と妖しく男を、いざなっている。

どれどれ、うむ、腕も腹部も、よく縛っている。少しもゆるくないな。よしよし。苦しいかい、左近さん。それともいい気持ちかい。ひとつ俺が、その乳首を吸ってあげようか。そしてお前を、うめかせてあげようか。さア返事をしろ！ フン、猿轡で、それも出来ないか。

告白する。実は、この写真は、私が性的興奮を処理する時、必ず、ひろげて眺める一枚なのである。

なお、「異常美双曲線」には革製の猿轡が紹介されている。いづれ後で、ふれるが、今は一つの資料として挙げておこう。

昭和四十八年 十二月号

「巻頭緊縛美競艶譜」

（白豚訓練の成果）は下段の方が、表情が大きく出ているだけ、迫力がある。鼻から口をつつむように掩った豆絞りの猿轡。この白豚が悦虐に眉を寄せているのは、必ずしも、股

をいじめている二筋の縄のためばかりではなからう。息もつけない位しめつけられた猿轡が、この女を燃えたたせているに違いない。

隣のページに猿轡のない笠井奈保子嬢の写真があるが、比較してみると、如何に猿轡というものが、SM写真に欠くべからざるものであるかが、よくわかる。

その好例の一つが（暴かれた検身の末）である。猿轡が白豚と違って、一寸ゆるいのが気になるが、アップに髪を結った女の鼻の上から顔の下半分を掩った猿轡は全く美しい。

次の頁には四枚の猿轡の写真がある。即ち布をくわえさせる（かませると表現してもよい）型式が三枚。鼻の上から顔半分を掩う型式の一枚である。

中でも一番は（豊胸への忍苦）であろう。

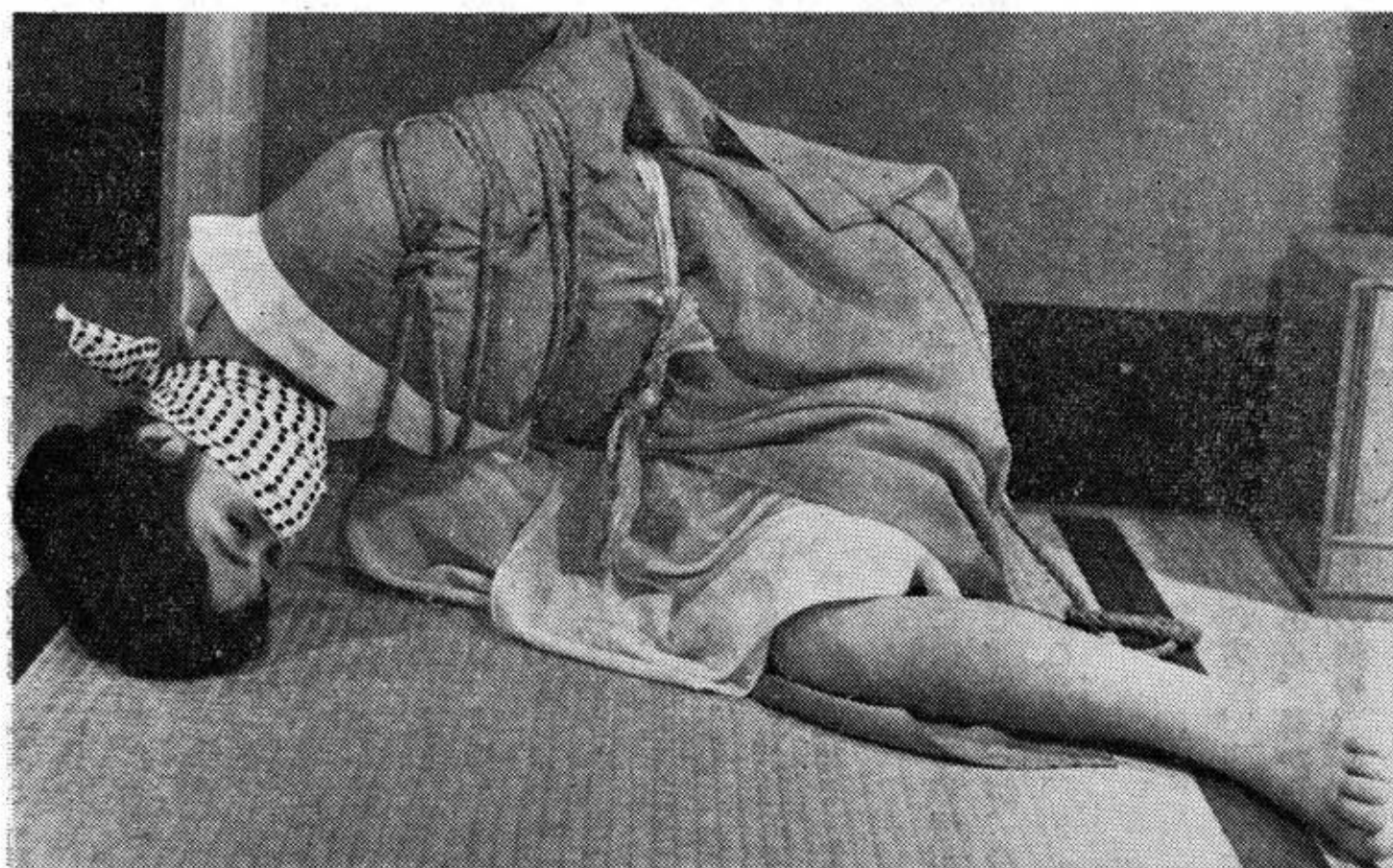
高村浩子嬢の大きな乳房を強調するように、きっちり縛り上げた肉体のくびれから、妖しくたちこめるエロティシズムが何ともたまらなく、そのため（責めに没入するもの）と同型の猿轡であるが、どちらかといえば（責めに没入するもの）の方が、きびしくかませた猿轡であるが、女体の縛り方により（豊胸への忍苦）の方に、いくらかの歩がある。

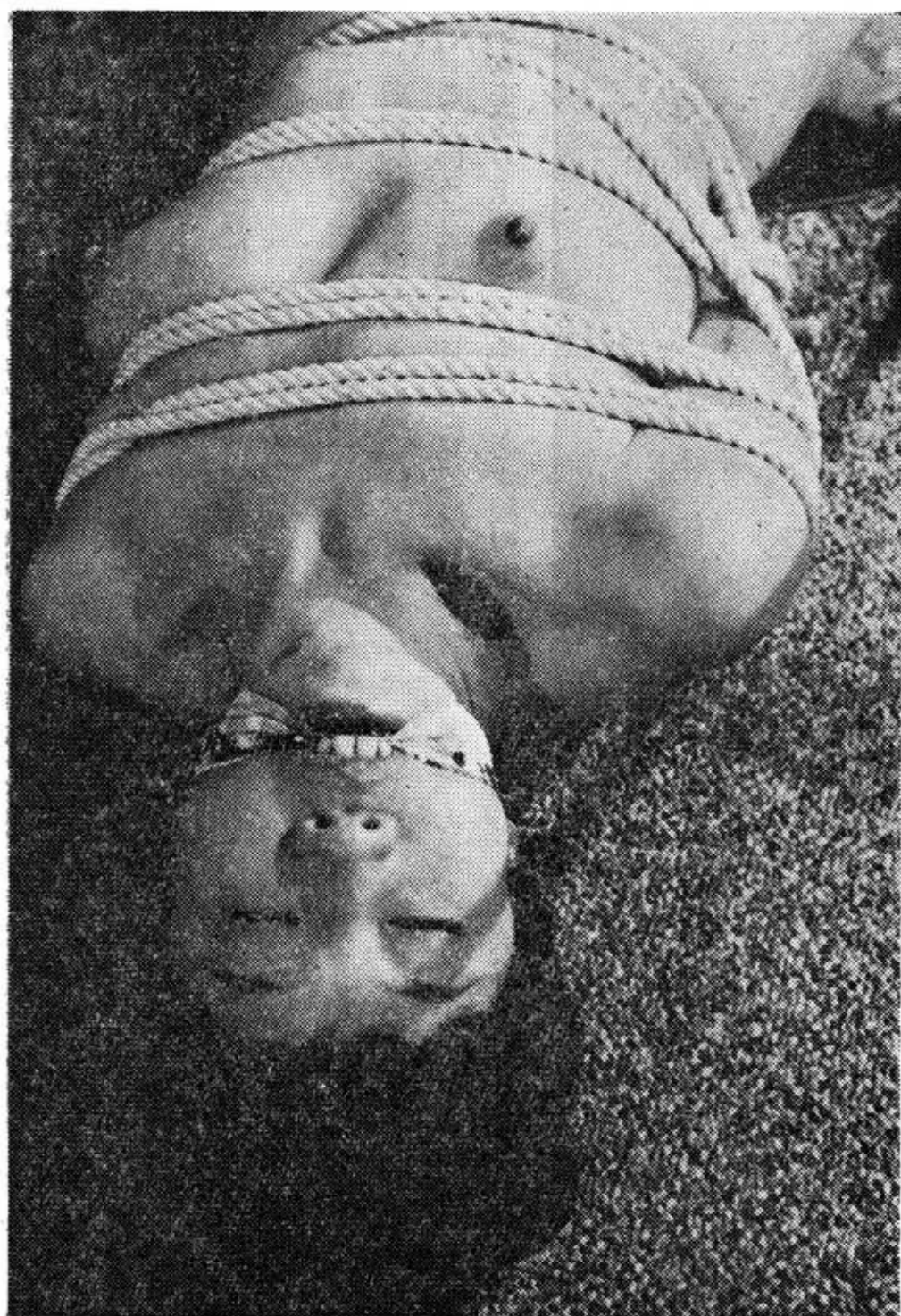
この写真は、高村浩子嬢の頬にかかる乱れ

た髪と、その上から引きしぼってかませた布切れの猿轡が、実によく、男に責められる女の哀愁をにじみ出させて、何時まで見ていても、あきない写真である。

（開脚縛りの白縄）は、折角の豆絞りの猿轡であるが、かませ方が、ゆるいのが難点である。しかし、このコードによる縛り方に私は見覚えがある。これは私の大好きな四十八年四月号（豊満のコード縛り）の笠井嬢を横倒しにしたものではないだろうか。だとしたら、実にすっかり、猿轡がかませたあつた筈だ。カメラアングルによるのか、大部、責めて少し猿轡がゆるんできたのか、いずれにせよ感興をそぐように思う。

（ムチを期待するポーズ）、モデルは御存じ関谷富佐子。モデルが悪かろう筈がない。また、猿轡は鼻の上から口、頤と顔半分を掩う方式の本格的なものである。しかし白布であったため、モデルの顔にアクセントとならず、印象が薄らいでしまったのは残念であった。この場合のよう





に女の顔の白さと猿轡の布の白さが、互いに効果を相殺してしまったのに、その外に（獣になりたい女の調教）などがある。

（哀愁を帯びた受苦）。塚本氏が猿轡に対する並々ならぬ理解者であり、というよりも極めて高度の愛好者である事がわかる傑作である。これは、あきらかにモデルの猿轡をかまされた表情に塚本氏の興味の焦点が、すえら

れている。女の頬をきびしく絞った豆絞りの手拭い。特に下側になった頬を責めている手拭いのしわが、サディステックである。突き出した乳房、胸を縛る縄。実にいい写真だと思う。

その外この「競艶譜」で印象に残るのは、（羞恥責めの序曲）（剃毛の白肌を晒して）である。（羞恥責めの序曲）の方は、梨花悠

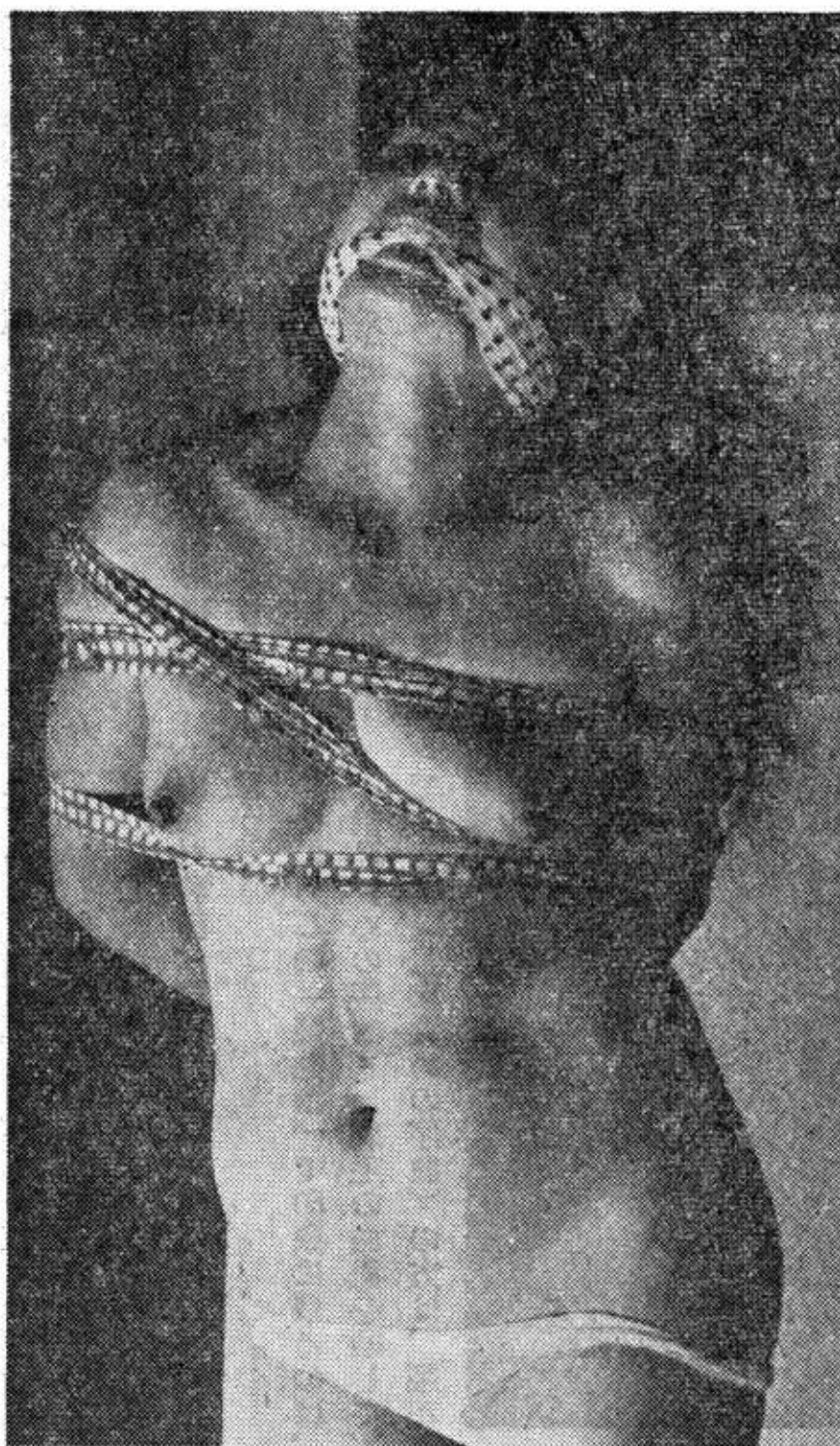
紀子が口を閉じているため、かませた布が口を横に引き裂いたようで、見るからにきびしく、かませたという感じを受け、サディステックだ。少しも妥協しない猿轡である。この事はSM写真にとって非常に重大であることは、今さら私如きが、改めて言うまでもない。折角のセクシーな美人モデル、エロチックでサディステックなポーズをとらせながら、縄や猿轡が一寸ゆるかったために、これまで私は何度、失望したことか。

（剃毛の白肌を晒して）の猿轡は、鼻の上から顔半分を、すっぽり包んだ型式のであり、そのためモデルのあきらめに似た瞳が、たまらなくよい。乱れた髪の上からの猿轡も、きびしく、しかも、かなり長時間、はめられている雰囲気、もう鼻孔の上の布は、かなりしめつけてきているのではなからうか。実に、いい写真である。

この号は猿轡党にとって、まことに有難い一冊である。というのは、塚本鉄三氏は、グラビアの外にルポ「畜化願望の女」で、ふんだんに猿轡、それも顔半分を掩った本格的猿轡を提供されているからである。全四十二枚の中、豆絞りの手拭いによる鼻の上から、口頭を包んだ型式の猿轡は実に三十枚の多きに

達している。中でも、すばらしいのは、二十二、三十七、三十八、三十九、四十、四十一ページ等のものである。（折角の塚本氏の写真であるが、グラビアでなく紙の上への印刷のため、迫真性の上において随分、損をしている）

二十二頁の写真は、まさに一分のすきのない、典型的な猿轡である。美しい、実に美しい。こういう写真を、じっと見ていると、マゾ女を縛り上げたら、やはり必ず猿轡を、そ



れも、きつく、はめるべきだと、しみじみ思う。猿轡をされているため、女の軽く閉じた目の何とセクシーで、哀愁を帯びていることか。

三十七、三十九ページは、猿轡の表情を角度を変えて撮ったものであるが、特に三十七ページは、このマゾ女の「ううう」という、うめきが、聞えて来そうな迫力のある写真である。女が上を向いているため、顔半分を掩う猿轡どころか、縛られた女の肩の上には、

何か豆絞りの手拭いで包んだ肉魂がのっているようにさえ見える。このポーズは、もっとこのマゾ女をいじめてやりたい男の情慾を、そそってやまない。

三十九ページは二十二ページを少し横から見たために猿轡も立体的になっている。女の顔を丸く包んだ——しかし、きびしく——猿轡は刺激的であり、且つ、興奮的である。

総じて、このルポの写真は真に迫真的な猿轡なのである。これも実は当然であって、このマゾ女は塚本氏に猿轡をしてくれと頼みこんでいるのだ。それに対して塚本氏は「自分の靴下をまるめて、彼女の口の中へ押し込むと、その上から豆絞りの手拭いで、しっかりと括った」のである。故に、ただポーズだけの猿轡ではないのである。この女は口の中に塚本氏のネチネチむれて臭い靴下を、つめこまれているのである。女の舌は、苦く塩っぱい、その味を、しきりに味わっているのである。そして、その上から、ぐい！と手拭いが女の口、頤、鼻を掩っているのである。ああ、迫力あるのも、むべなるかな。われわれは何時までも、これらの写真を取り出して鑑賞するだろうが、その度に、塚本氏の、この配慮を感謝するであろう。

昭和四十九年 二月号

「甘美で肉迫的なプレイ展開」

(肥満体の肉を攻める)。上下二枚の中、私が好きなのは下段の写真だ。大きな乳房をはさみこむようにして、きびしく縛った幾筋かの縄。女の腕と胸はプクンプクんとくびれている。そして鼻の上から口、顔を包むようにした本格的な豆絞りの手拭いによる猿轡が、女のひそめた眉とあいまって、SM味を充分たんのうさせてくれる。女がされている猿轡は、女を縛った縄に、少しも劣らず、きびしい。たまため写真だ。この写真を角度を変えて撮ったのが、(白豚の肉づきのよさ)である。ツンと突き出た乳首は男の舌でなぶられるのを待っているかのようだ。SM味満点。又この作品は横から見ると猿轡は、どういう風になっているものかが、よくわかる資料的にみても貴重な写真である。

鼻から口、顔を包み、ぐっと後へ引きしぼって強く後頭部で結んである。上は鼻から下は顔に至るまで、ぴったり手拭いが顔に密着しているが、人間の顔には、いくつかの突起があるため、数条のしわが出来、それらは、いずれもグイと後頭部の一点に集約され、固く結ばれている。極めてSM美的、興奮的な

名写真である。

その外、本号は(狂ったムチ打ちの果て)で鼻から口、顔を包む豆絞りの猿轡(愉悦の表情)で手拭いをかます方式の猿轡がある。(愉悦の表情)の猿轡は、モデルの松本たえ嬢の表情のせいかな何はともあた、まず猿轡をしかし、しっかりと、かませたという感じで迫真力があり、これも忘れ得ぬ写真である。(それにしても、被縛女体の股の白三角形は不自然で、おかしい。非常に感興を、そぐものだ。私は無理に、そっちは見ないことにしている。おかしな法律があるものだ)

塚本氏のルポ「ああ、M女狂えり」にも、苗木陽子の猿轡が八枚あるのは拾い物であった。一番SM美的迫真性において、まさっているのは二十二ページの写真であろう。ゴテつかせず

しかもヒシヒシと女体を縛った縄使いの鮮やかさ。鼻の上から顔下半分を掩った豆絞りの猿轡。苗木陽子は薄すらと目を閉じて横たわ



っている。確かに、こう縛られては、こう猿轡をはめられては、目を閉じて悦虐に、もたえる以外に何も出来ないであろう。

面白い事に、この女は二種（使用布）の猿轡をされている。一つは二十二、二十三、二十四、二十五ページ等にみられる如き豆絞りの手拭いによる猿轡。もう一つは二十六、二十七、二十八ページ等の白布の猿轡である。期せずして、白布と豆絞り（或は柄物手拭いと拡大解釈してもよい）とでは、どっちが、SM美的効果があるかの実験となってしまう。人それぞれで違うだろうが、果たして読者諸兄姉は――。

昭和四十九年 三月号

「縛られた妖姫たち」

抜群は（二十才に掛けた縄）だ。豆絞りの手拭いで、鼻の上から口、頤を包む猿轡である。そのため、塚本氏の指摘される被縛女体の目が、言うに言われぬ表情をたたえて迫ってくるのだ。これがたまらない。まさに猿轡とは、こういうものなのだ。猿轡は、こうはめるべきものなのだと、しみじみ思われる佳品である。実にこのSMムードが、いいではないか。

そのため（耐久）と（薄幸）の口にかませ

た猿轡も、それぞれ、いい雰囲気を出して捨てがたいのだが、（二十才に掛けた縄）の猿轡の前にあってはいささか影がうすい。「（耐久）下体を縦に縛るひもが、大きくゆるんでいるのは感興を殺ぐ」

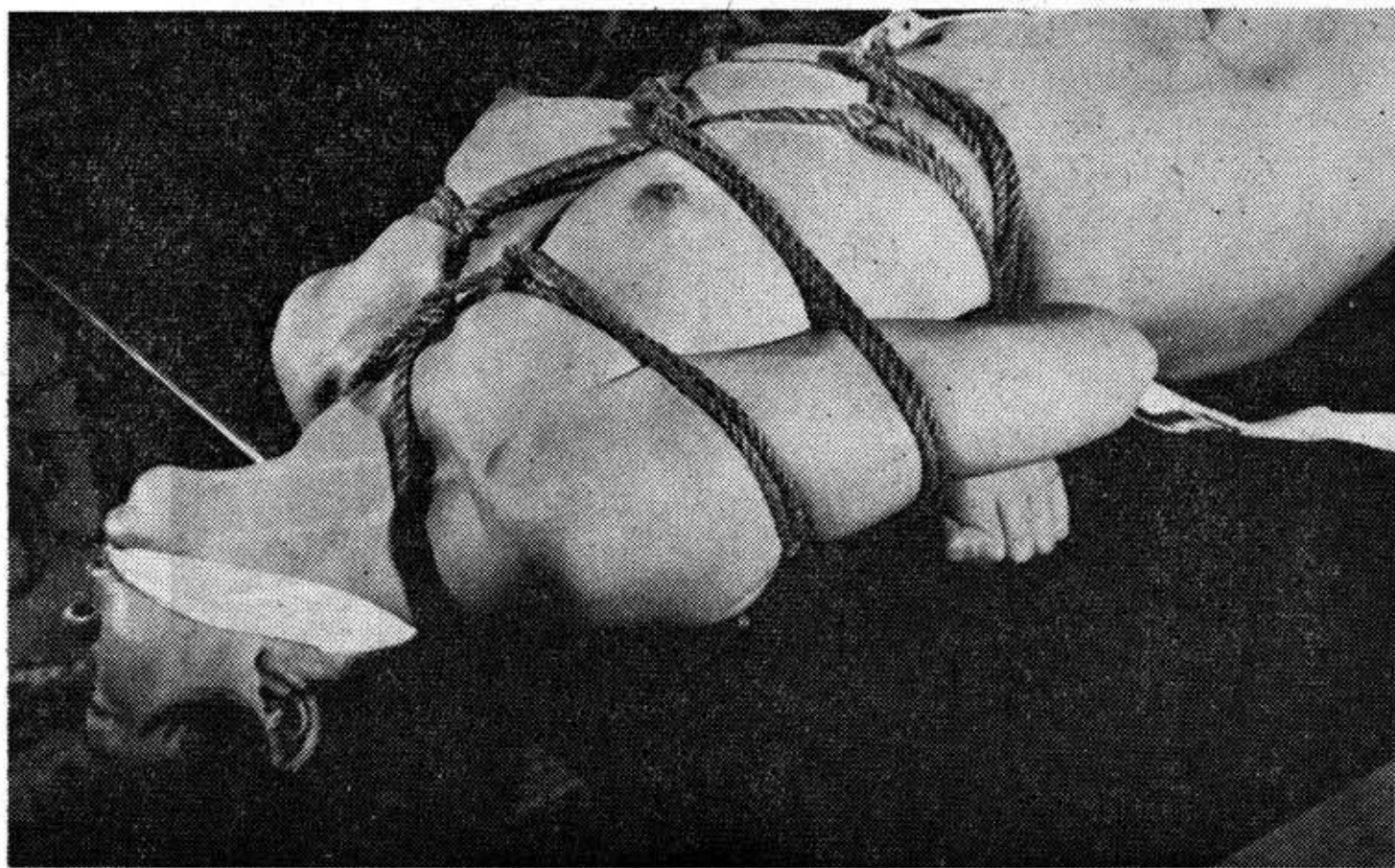
カラーフォト・セクシヨンの中に塚本氏の作品には、珍しい猿轡がある。（無防備の女体）がそれで、これは鼻孔を出し、口の上から頤を包んだ猿轡である。きっちりとはめられた猿轡であることは、ピシッと走る手拭いのしわで、よくわかる。男性のS感情を満足させながらもそのくせ、みるからに可憐で、美しい。まことに、妖しい猿轡である。猿轡のだいご味は、こんなところにあるのだ。

昭和四十九年 五月号

「S研△ダベリ会▽顛末記」

この号も非常に楽しい一冊である冒頭の（初緊縛の表情）。

名作品である。片方の乳房をつぶすように、ギリギリと女体を縛った縄。そして少し横座りの、女のポー





ズ。一ページ大の、この写真は、まさに圧巻というべきであろう。

さて猿轡だが、女の口を割って布切れをかませる方式である。写真が大きいため、ガツキと布をかんでいる女の様子がよくわかり、驚いているのか恥かしいのか、一寸とまどっているような、その目が、つまり「初緊縛の表情」が、何ともいえぬSM美ムードを辺りにただよわせている。これも私の座右の写真の一つで、もし、肩から下をとりさって、猿

轡をかませた顔にしても迫力充分の、いい写真である。

(異常美への挑戦)。あまりいい猿轡の写真のない前田嬢にしては、その汚名を、ばんかいたといえる写真だ。豆絞りをくわえる方式の猿轡で、豆絞りの持つ一種独特の時代的雰囲気の前田嬢の近代的美しさに不思議にマッチして、妖しくSM美を構成している。

(にじみ出るマゾ)

鼻の上から下を包む方式の豆絞りの手拭い

による本格的な猿轡であるが、中河恵子さんには外に、もっといい猿轡姿があった。これは本格的猿轡なのであるが、何故か(異常美——)の方がセクシーに見える。

(S研に捧げた裸身)。私の好きな(初緊縛の表情)の矢島靖子さんを角度を変えて、それと一寸、縛り方も変えて撮ったものである。はつきり写っているため下段の方がいいが、この二枚共、やはり(初緊縛の表情)に押されてしまう。

(諦観)。鼻の上から下をつつむ方式の豆絞りの手拭いによる猿轡である。その型式に悪からう筈はないのだが、猿轡を後頭部で結んだ余りが長いのが残念である。つまり、この余りを、もう一卷きして、きつく猿轡をしたならば、と思わずにいられないのである。

(陶醉の境地)。以前の名写真(豊満のコード縛り)を、角度を変えて撮ったものである。しかし、これも(豊満のコード縛り)があまりにも素晴しかったため、影が薄い気がする。女体、猿轡の型式等、みな同じなのだが。もっともこっちの方が写真が小さいからだろう。

(全身で感溺)

見給え、これが猿轡というものである。鼻

の上から、口、頤を、ぐいっと包んだ豆絞りの手拭いの猿轡。布の上を走るエロティックでサステイックな、しわ。後頭部で結んだ布の垂れ具合、実に見事だ。「むむむ」という女のうめきが、よく聞えてくるような名作品である。ああ、猿轡！

この月は、カラーセクションにも優秀作品が多い。

まず矢島靖子さん。カラーセクション二、三ページのものである。二ページ目のは、縛り方から判断して、あの（初緊縛の表情）を横から、そして矢島さんの顔を上に向けさせて撮ったものである。カラーのため、矢島さんの形のよい唇の朱の色。それに、はさまれた細い白布のコントラストが、たまたま美しく。セクシーであり、SM的だ。猿轡美の一境地をゆく作品である。

三ページは鼻の上から下を包む型式。紺地に白い松葉模様の猿轡が美しい。この猿轡における使用布地の色彩に関する研究は、一つのテーマになると、かねがね思っている。いずれ後で私も、ふれてみるつもりであるが、この三ページの猿轡も捨てがたい味を持っている。（ただし、これでこの美しいモデルが後手にギリギリ縛られていたら文句がないの

であるが……この世の中は、なかなか思うようにはいかないものだという事の好例）

五ページ目のは秋野英子さんであろうか。

私はこの写真を見ながら何度、欲情をもらしたことであろう。鼻の上から、口、頤を句む本格的な猿轡。後ろで短く、結ばれた白布。一分のすきのないSM美あふれる名作品だ。女の軽く閉じた目が、無限の哀愁とマゾの悦楽を、ただよわせている。

もしこれが、秋野さんだとすれば、いい猿轡で一寸、気をひかれたのだが、写真が小さかったので、通り過ぎてしまった「S研・ダベリ会——」中の（ペット調教）も改めて見直さなくてはならない。この猿轡姿は、縛られた女が、しっかりと猿轡をかんんでいるといった感じで、非常にSM美的だ。これといいカラーの写真といい、この女は実は猿轡が大好きなのではなからうか。しようがないからはめられたといった風でなく、自分からも楽しんで猿轡に対して感じる。この月は実に楽しい一冊であった。

昭和四十九年 六月号

このところ、我が党の士にとって楽しい月が続く。六月号も猿轡は豊作であった。

「憂愁と孤独の佳人」特集

（凝視の中で）

いいポーズだが、少しかませた猿轡がゆるんできているのが残念である。責めている途中でも時々猿轡に注意されて、しめ直していただきたい。

その物足らなさを補ったのが（猿ぐつわ哀歓）である。豆絞りの手拭いによる鼻の上から顔半分を包んだ型式の猿轡だ。女の顔を、ほぼ真横から撮ってあるので、猿轡をした時手拭いが、どういう曲線を描くのか、よくわかる。そしてこの場合、大きく猿轡をされているため、SM美とともに「今、この女は何もしゃべれないのだ」というサディステックな興奮を強く感じさせる、好い写真である。

（脚を開くのはイヤッ）、（蜂蜜の甘さにむせる）。これは一ページ大の写真が二ページに並んでおり、（脚を開くのはイヤッ）は豆絞りの手拭いを口にかませる型式、（蜂蜜の甘さにむせる）は同じく豆絞りの手拭いで鼻の上から口、頤を包んだ型式の猿轡である。

一ぺんに二つの異なるタイプの猿轡を鑑賞し且つ比較できるように巧みにレイアウトするなんて編集部も、なかなかニクイ。

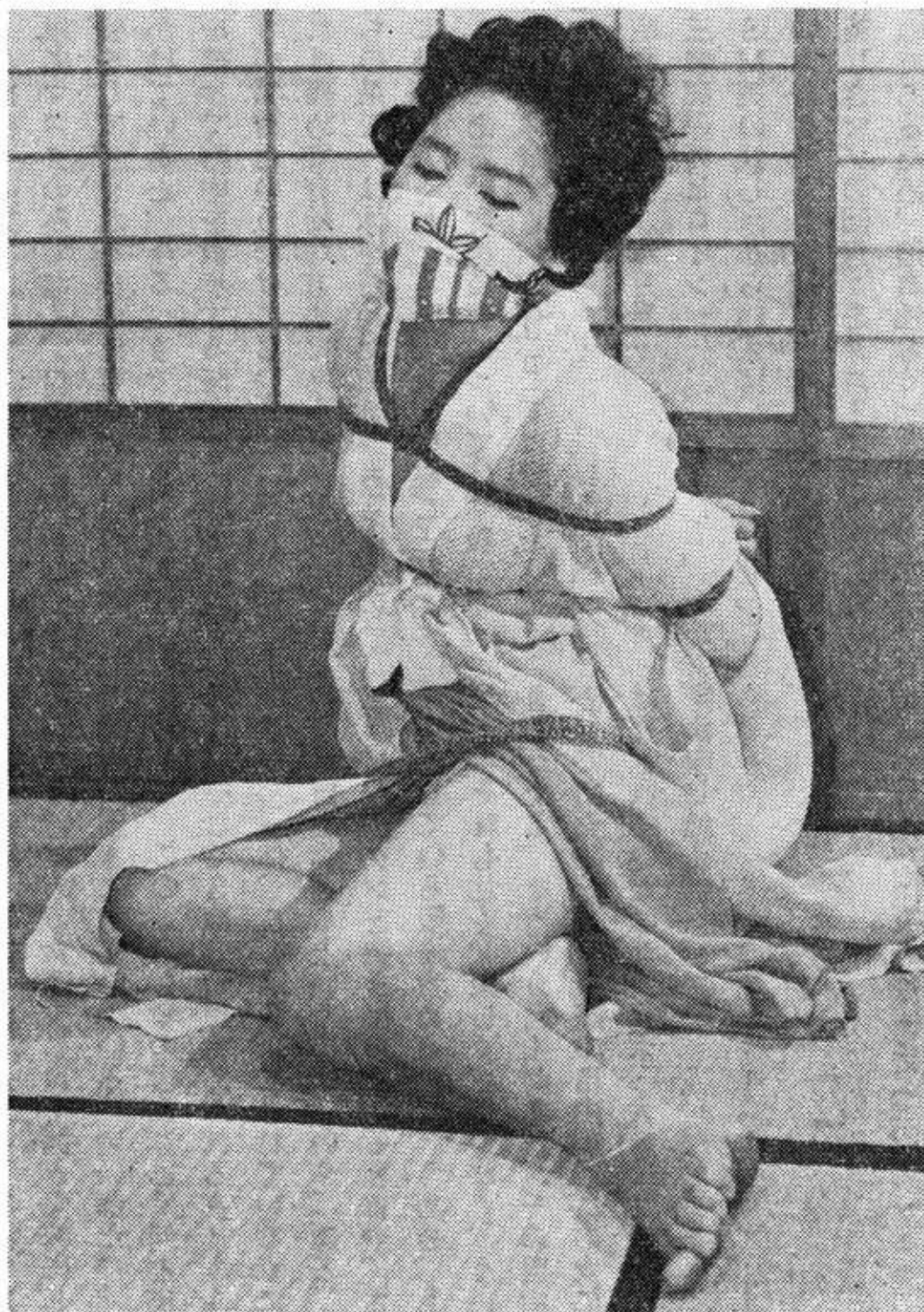
（蜂蜜の甘さにむせる）と先の（猿ぐつわ哀歓）は同じモデル、即ち藤田明子さんである

が、どちらかといえば、（蜂蜜の甘さにむせる）の方が猿轡は固く、そのため特に鼻の下のくぼみが、はっきりと出て、口の辺りを通るしわと共に、極めてSM美的であり、美しくエロティックである。たまたらない一枚だ。

（プレイの宴果てて）。猿轡の型式は本格的なものである。又、使用布が柄模様のもので、単なる白布よりもセクシーで、交った味があり、楽しい。特に上段のは鼻の上から顔下半分を包む猿轡を、きっちりとされながら、藤田さんは気持よさそうに目を閉じている。彼女も猿轡党なのであるうか。

カラーセクションでも、藤田さんの美しい猿轡姿が二枚ある。どちらかといえば、最後の方が、彼女の鼻をつぶさんばかりに、しっかり猿轡をされているといった感じが出ていて、よい。

しかしカラーセクションで、一番、猿轡をされた女の哀愁が出ているのは、矢島さんの両手を上で縛られた写真であろう。何故この写真が、縛り方が、あまり好きでないにもかかわらず、迫力を感じるのか。髪が、かぶさっているため、一つだけ、はっきり、のぞかれた目。しかも、あきらめか、悦虐をかみしめているのか、軽く閉じた目。その下から、



鼻、口、顔を包んだ紺地に白松葉の手拭いによる本格的猿轡。そうこれなのだ。さあ迫力ある妖しいSM美を、ゆっくり味わおう。

ルポ「憂愁と孤独の佳人」。高村浩子嬢の猿轡姿が沢山あるのは楽しい。中で一番気に入っているのは三十八、四十四、四十五ページだ。どれも開いた目が一寸うっとりしたよ

うになっているので、閉じた時とは別の女の哀愁を、はっきりと、ただよわせて非常に効果をあげている。特に四十五ページなどは、つぶらな瞳、可愛い鼻、しっかりかんだ猿轡。そして、全体にアクセントをつけている乱れた黒髪。その一つ一つが互いに協調しあい、一分のすきもない名SM写真を、つくり上げ

ている。

昭和四十九年 七月号

「美しき倒錯の花園」

(孤独の妄想)と(美しきマゾの回想)に一番、感銘を受けた。まず(孤独の妄想)から鑑賞しよう。長く乱れた黒髪、豆絞りの手拭いを口を割ってかませた方式の猿轡。猿轡の結び目の下の肩より乳房に走る縛り縄。女は伏目がちに縄目と猿轡の固さを、かみしめている。この「孤独」の女は何を「妄想」しているのだろうか。少なくとも、お前の縄目と猿轡は男のS的血潮を、わきたたせずにはおかないのだ。何故って、あまりにも、お前の、その姿が美しいからだ。

(美しきマゾの回想)は、鼻孔を出して口、顔を包んだ方式の豆絞りの猿轡である。この中河恵子さんという人も、なかなか猿轡のされ方がいい女だ。額に乱れた髪、閉じた目、鼻孔を出している猿轡などから、さらわれて来て、ここに転がされ、さんざん、いじめられて、いる美しい女という感じが、よく出てくる。さぞ、この女は、今までジワジワしつつこく責められて、セクシーな鼻孔から熱い息を、せつなげに吐いていたのだろう。(孤独の妄想)といい(美しきマゾの回想)といい

いずれも、いい写真だ。なお中河さんを使つたものには(棒責めの悦虐)という名作品がある。鼻の上から、口、顔を包む豆絞りの猿轡であり、猿轡のもつ妖しいSM美が、よく出ている。

この月には変型猿轡として、(S研の人身御供)と(ムチ打ちの果て)がある。(S研の人身御供)の方は白いマスクである。これは単にマスクのみでなく、口の中に何か、つめ物をして、それを出させないためにマスクをかけていると、みるべきであろう。例えば女を縛って町中を散歩する時など、まさか豆絞りの猿轡というわけにもいかず、そんな時これは極めて有効な方法であろう。又(ムチ打ちの果て)は体を縛った縄を、さらに女の口に幾筋か、くわえさせて後ろの柱ごと縛つたものである。変型猿轡については、後で章を改めて考察するが、今ここでは資料として記しておく。

昭和四十九年 八月号

「三者関係のヒロイン」

SM美の妖しさからいえば、一番は、ぜったい(むごたらしき縄目)である。先月号の(美しきマゾの回想)をクローズアップしたものであるため、迫真性もぐっと出て、すば

らしい効果を出している。凝視すればする程性的興奮が昂まる妖しい名写真だ。さて、私だったら、こう縛られて、こう猿轡をはめられた、この女を、どうやって、いじめてやるか……。

それから、いい表情をしているのは(晒し者の自由)だ。細い布をグツと口にかませて後ろの柱に縛ってあるが、少しも手加減を加えていないため、女は少し口を開き気味にして猿轡の固さにあえいでいる。いい顔だ。

しかし、この(晒し者の自由)とは何と皮肉な、そしてSM的幻想味あふれるタイトルだろう。一体、この晒し者にされている女にどんな自由があるというのか。いや、ある。そうだ、プクンと突き出している乳首や、さらけ出している股を責められて、うめき、もだえ、それも甘く、楽しく、せつなく、うめきもだえる、そういう自由がある。その自由そしてM女にとって最高の自由が、この女には残されていたのだ。女よ、大いにこの自由を満喫し給え。

——(つづく)——

次号——『さるぐつわ』

「文学の中での猿轡について」

女相撲ノー ト (1)

雄 松 比 良 彦

興行女相撲史の問題点は

- (一) その発生を延享二年(流言記)以前にさかのぼって確定できるか
- (二) その発祥地は何処か
- (三) 明和より後、嘉永までの間の様子
- (四) 江戸期のものが明治に引きつがれる状況

(五) 「女と女」の相撲、「女と座頭」の相撲のどちらが古いか

などがあり、一方、民俗女相撲のそれには
(一) なぜ東北、九州という遠隔の、本邦北
辺南辺にのみ存在するか

(二) その起源はいつごろ、又どこであるか
(三) 雨乞いと関係しているものが多いのは
なぜか

(四) 興行の方が古いか民俗の方が古いか、
どちらかが影響しているか

などがある。これらは今のところ、明確に

出来ないものが、ほとんどで、今後の問題であるが、現在の時点での、わたくしの知見をのべてみることにする。

一、興行女相撲

女相撲は、かなり人びとの関心をひくので

歴史書、風俗書も、しばしば、これにふれて
いるが、孫引きの度数が重なると、疑問だっ
たものが断定的になったり、想像だったもの
が定説になったりする。「興行女相撲は延享
二年江戸両国で盲人との相撲が行なわれたの
が、はじまりで、これが定説になっている」
などという解説が断定的に流布している。先
般の拙文(「女相撲書誌雑考・拾遺」)にあ
げた資料の実物を年代順に御覧になれば、と
てもそんな断定は出来ないことはあきらか。

(以下資料について、いちいち書誌的に注記

するのは略する。要すれば、上記「雑考・拾遺」を御覧のこと)「流言記」なるものの性
格上、延享二年には、すくなくとも両国で女
の角力があつたことは、たしかであろうが、
それは女と盲人であるとも、女と女であるとも、
も、確定されないもの。「孝行娘袖日記」の
方は、三つの事柄を推測させる。それは「花
の都」に発生したと考えられること。明和七
年(一七七〇)ごろに「近年、女の相撲など
さへ出来ました」とあるのは延享二年(一
七四五)の江戸のものとからべてどうか。第
三に、このかき方は「女と女の」相撲とみら
れること。「女と盲人の」相撲が延享二年の
両国のものだという根拠は誰も示されていな
いが、延享三年の「時津風」の句(男より勝
色ありや女郎花)から推測されているものか
もしれぬ。「時津風」に「座頭角力」もある
が、これは増補版の方で「名物鑑」に入っ
ている(明和八年)ものである。江戸期興行女
角力は、ほとんどが盲人との相撲だった、と
の平井通氏の説も今や定説になりかけている
が、これも根拠は全くないものである。三田
村^{えんぎよ}鳶魚老の書かれたものでは、女と女の相撲
の方が早いようによめる。又、幕末まで女と
盲人の相撲が主流であつたわけでもない。こ
の辺は各解説者が主観をまじえて記述されて
いる諸文が流布し、それが又、引用されて混
乱するのである。「幽遠隨筆」が大坂の例で



あるが、女と女の相撲が先で、のちに盲人を加えた明記しているのは、この点注目される。フィクションの方は西鶴、近松以来、女と女の相撲が多く、盲人と女の相撲を、かいたものと発行年代は「雑考」を御覧ねがいたい。黄表紙「近頃島巡り」(市場通笑作、鳥居清長画、安永九年——一七八〇)にも一言「女すまふあり」と出ているのは(女護島の話のところだから女と女。上田秋成の「きたないものぢやあった」といふ女すまふも前後の様子から女と女の相撲であろう。今日から判断にこまるのは「女すまふ」「女角力」とかかっている場合、それが女力士をさしているか、あるいは女相撲というもの、そのものをさしているか、明確でないものもあることである。「流言記」は、どうも女力士のことのようだが、静軒居士や岡田新川の

文は「女と女の角力」をさしている。つまり明和に大流行したのは、女力士同士の取組であったと考えてよい。これに盲人も加わって行ったであろう。「空音」「女角力濫觴」などが、すでに安永・天明に出ているし、一方「青砥銭」は盲人と女になっている。あいまいなことを、のべて来たが、要するに江戸期興行女相撲は、盲人と女力士の取組にはじまったのではなくて、女力士同士の取組に、はじまる、と考える方が今のところは自然である。

二、女相撲と雨

上記のような興行女相撲と別に、各地の民俗行事としての女相撲があるが、江戸期に発生した興行女相撲と、これら民俗のそれとはどんな関係にあるのか。これは民俗女相撲全般の起源と歴史に関係し、きわめてむづかしい問題である。そして民俗女相撲を立ち入って調べうるためには、民俗学全般の知識と方法のマスター、茫大な調査が必要であり、男子の相撲の民俗ともかわり、たやすくは判らないが、ここではまず興行女相撲と民俗女相撲の関係のありなしに、ふれてみる。後述するが、男の相撲の方でも、同様のことはある。各地の民俗女相撲は雨乞いとして行なわれる(た)ものと、それ以外の催しものとに

分けられる。そこで、なぜ女相撲が雨乞いに
関係するか、それは、いつごろからか——を
とりあげる。これは民俗学者は皆、性急な結
論をさせておられる問題である。専門家でな
い、われわれシロウトは自由に想像してもよ
からう。

まず雨乞いとしての女相撲の記録の、もっ
とも古いのは、いつで、どこか。これが古い
ところで発見されるのを希望するのだが、今
のところは現代、それも昭和七年の雑誌「民
俗学」のものである。もちろん、これは以前
から行なわれていたのを、昭和七年に報告さ
れたという意味。民俗のつねとして、その以
前というのは、いつごろか全く判らない。次
いで昭和九年の東京朝日の仁比山村のもの、
となる。これは「地方雑信」欄で、その年に
あったとは明記してないが、大体そう思っ
ていい。期せずして東北と九州という「遠隔
在」性が出てくるわけだが、仁比山の方も、
もちろん、いつごろからあるのかは、判らな
い。雨乞い女相撲の諸報告は、すべて、その
由来、起源につき、何らの伝説も持っていな
いのが、ひとつの特色で、この点、他の一般
催しものとしての民俗女相撲が、いろいろの
由緒を語り伝えているのと、ちがっている。
実証的には大正、明治——さらに江戸時代、
あるいは、もっと前と、雨乞い女相撲の記録
を求めねばならないが、わたくし残念にも全

く知らない。今日の女相撲史の最大の期待は
江戸期（以前）の地方民俗女相撲の資料の発
見にあるといえる。こういうものが、もしあ
れば、実に、いろいろのことが判るからだ。
しかし、そう古いところには、そういうもの
はない。民俗女相撲は新しい。ともいえる。
これについては後で、のべる。

諸報告において当の地元の人びとは、雨乞
いに女相撲をする理由を、どう言っているか
？（民間の俗信になぜこうするか、などとい
う理由づけのあるものは、すくないが、ない
わけではない）これは東北も九州も一致して
いて、女は不浄のものであり、その女が相撲
をとるなどアラレもないことで、神様が怒っ
て雨を降らすのだ、としている（この「神」
は何かという又むずかしい。要するに民俗
学で普通な「神を怒らせる」雨乞いのパター
ンのひとつである）。東北も九州も、遠隔の
地で全く同じ言い方をしている。しかし、扇
田の報告のように、「昔から女相撲が来ると
雨が降るとされていて……」理由はわからぬ
が、要するに、そういうこと、という場合も
あるらしい。わたくしは、この「不浄な存在
である女が相撲までするとは……」という発
想を分析するほど民俗学にタンノウでないが
シロウトとしては、いくつか疑問がある。そ
れは先ず、なぜ相撲をしなくては、いけない
のか。単なる裸踊りとか、一部の漁村でやっ

ていた（マンナオシなど）ように前をまぐっ
てみせるとか、ではなく、なぜ、相撲をする
か。これは雄略采女相撲についてもいえるこ
とで、あそこに単なる女の裸踊りでなく相撲
があるのは何か。それについては（あまり論
理的にたどるのは民俗ではナンセンスのこと
もあるが）男のやるものである相撲、つまり
相撲は、もっとも男性的なものなのか。ある
いは、あるハイリヒな意味をもたせられてい
たのか。とにかく、そういうコンセンサスが
各地方になくはならないが、更に詳しくは
和歌森太郎氏の申される神占、あるいは奉納
行事としての相撲の民俗的研究に入りこんで
しまふ。とてもシロウトには判らぬ。シコ、
チリチョウズをはじめ、禪の下り、土俵と綱
引きとの関係（十五夜綱引きである）、ある
いは舞踊としての「相舞い」とか（本田安次
氏によると三宅島に男面と女面の相撲舞いが
ある）、例の「一人相撲」など、問題は、ひ
ろがりすぎる。大体、和歌森先生をのぞいて
は、現在までの相撲史は、あまりにも地方常
民の民俗を無視していて、武家↓勸進↓興行
大相撲の歴史に偏しすぎている。もっと「常
民の相撲史」について、書かれることが切望
される（資料がなくて、むづかしいのだろう
が）。

さて、「女は不浄」というのは、いろいろ
微妙であって、ある場合には女でなくてはな

らない。男はダメ。という場面も多く(柳田国男氏以来、くわしく論じられているが)、村の娘たちが、全裸で行なう行事もあるとか(関敬吾氏)。雨乞い女相撲の「女は不浄」というのは、かなり公式的な見方、つまり、「あとから考えられた」理由のようにも思える。極言すれば、採集者、又は調査者の「なぜ」という質問に対して、その場で考えられた場合もあるかもしれない。とすれば、それは採集・調査の時点における地元の人々の、ものの見方である、ともいえる。こういう点は民俗調査のむづかしさである。

そこで今度は江戸期の(興行)女相撲は当時の人びとにとって、どんなものと考えられていたか。平井氏が、その諸文で何度も繰り返されたのは、朝倉・三田村両氏の説かれた見世物としての好色性を徹底的に跡づけようというもので、大体それはそれで正しいと思う。ところで、江戸期に地方民俗女相撲があったか、なかったかの難問は後にまわして、当の江戸や京・大坂の町の人びとは「女相撲と雨」の関係、つまり「女が相撲をとると雨がふる」という発想を生んでいなかったかどうか。もちろん俗信とか、まじめなものではなくて、やや冗談めかしたものでよいが、とにかく都会に住み興行女相撲を見ていた人びとの間に女相撲と雨の関係が何か存在していたのか。これは残念ながら従来の風俗史家は

全くとりあげておらず、われわれがシロウト調べのシロウト考えをやらねばならぬ。わたくしが「雑考」で指摘しておいた黄表紙(鎌倉山)女角力^{おんなすもうのはじまり}「(天明五)の本文の、女角力の催しの前日、ふれ太鼓の男たちが「あした雨がふりそふだから……」と言っているのは、どうしても只のギャグとは思われない。黄表紙は突拍子もないギャグを連発し、又その時代のセンスでないと今からはわからぬシャレも多くあるにちがいないことは、現代のマンガ本やテレビジョンを考えれば当然だが、「雨が降り」そうというのは、注目される。シロウトの独断だが、わたくしは、この一文から天明ごろの都会の人びと、すくなくともこの作者(吉田魯芳)や読者たちの間には、「女角力は雨がふる」という、ある種のコンセンサスが、俗信か冗談かは別



として、存在して、それを自然に用いたのが、この文だとし、考えられぬのである。もちろん、その次の日、つまり女相撲頼朝公上覧の当日は、雨のことなどウンともスンとも書いてないが。

この考えは二つあるわけで、先ず当時、すでに地方民俗女相撲が雨乞いのために(も)行なわれており、その話が町の人びとに伝わっていて、このようにかかれていっているのが、もっとも自然な考え方であろう。しかしそうすると、すくなくとも天明以前に、各地では雨乞いの女相撲があったわけで、又そういう事実の立証を、わたくしは切望している次第だが、そういった、かなり注目すべき習俗が紀行・風俗・諸国談のどこにも全く現われぬものであろうか。江戸期およびそれ以前にも民俗的な記録・紀行文は多くあり、どこかに姿を見せているようなものである。旱天の災害誌などを漁ってみても、全く現れていない(天明の大キキンは冷害である)。シロウトのわたくしの不明のため、識者には周知の資料・記録があるのを知らないのかもしれないが、この点を、とくに専門家の方々に、お教え願いたいと思っている。この考え方なら、古俗としての雨乞い女相撲の由来は不明のまま残る。

とにかく今のところ全く、そういう記録も伝承も判らないとなると、第二の考えをせざるをえない。この辺がシロウト考えの有難い自由さである。つまり、わたくしは雨乞い女相撲の習俗は、そう古い伝承ではないと考えている(一般的な催し物としては問題もあるけれども)。そうして、それは後述する「周圀説」的にか、又は不連続な伝播かは別として、雨乞いとは比較的、関係ない江戸、京、大坂のような町々から、もたらされた考え方ではないか、と想像する。女相撲と雨の関係は地方から都会に入ったのではなく、町びとの冗談? として作られたものの見方が地方に伝わったのではないか。どのような伝播にせよ、東北、九州へと伝わるときは、ニュアンスとして都会人的なギャグでなくなり、「女が相撲をとると雨がふる」ということも、まじめな迷信的色彩をおびたり、あるいは、むしろそういう託宣的な、いい方で、ものを教える各種の文化搬送者としての旅人も、いたかもしれない。農家の人びとにとって強い関心事である、雨乞いにおいて、これがまじめに取り上げられたり、あるいは、やや冗談と判っても、万策つくれば「やって見ては」ということになるかもしれない。しかし、われわれには、こうした「起源」はいいとして、あまり実効もないと思われる雨乞い方法が、長く「伝承・持続」されるメカニズムは、よくわからない(その信頼性への執着の根拠が)。他の民俗的俗信でも、そういう点、次第にか

わってゆくものも多いから、この点は、むづかしい。

さて、上のように「女角力は雨」の発想が都会で作られたものとする、それはどういうわけで出来たものか。これも当時の、いろいろの俗信や人びとの物の感じ方、風俗習慣など、デリケートな面まで実感として判っていないと、むづかしいのだが、単なる想像として、今のところ次のように考えておく(あれこれと調べてみて、この辺に落着いたのである)。男子の相撲は当時、全国的に「晴天……日」というのが、きまり文句になっており、相撲開催の各種の願い状などにも、これが常套的に用いられている。勸進相撲の初期から、そのようであり、人びとにとって相撲と「晴天……日」とは、きわめて密接な、連想であったと思う(川柳にも例があったと思う)。後には興行ものや見世物の数もふえて「晴天……日」は相撲のみではなく、したがって相撲と関連していることは他の比ではない。そこへ出現した女の相撲に対して、男女の陰陽等に事よせた冗談として「女相撲は雨」となったと考えるのである。

江戸期において上記「濫觴」以外に「雨」に関連した一般的な俗信、八大竜王とか、水神とか、いろいろ調べてみる必要はあるが、今のところは、よく判っていない。大体こんなところにして、将来又、考えるべきであろう。

(以下次号)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

私のSM実験

ネラトンカテーテルによる鼻責め

佐藤 真津男

鼻責めについて

女性の鼻に魅力を感じ、その鼻を責めるということについては私自身も、かなり興味を持っていますが、奇ク誌上でも多くの記事が見られています。最近号の誌面を見ても、今年の六月号には佐藤光保氏が女性の鼻孔の写真の収集について述べており、四十八年九月号には久保房夫氏が女の鼻に憑かれた男の手記と題して述べ、また杉谷潤三氏は今年の五月号と六月号に女優やタレントの魅力ある鼻について例をあげて論じ、さらに鼻孔を強制的に変形する装置を考えて、新妻にそれを施

した状態について述べています。もっとも徹底したものとして、斉藤香根氏は四十八年八月号に「女の鼻に関する八章」という題で女性の鼻をつまむ体験を記し、とくに、行きずりの見ず知らずの女性の鼻をつまむという、うらやましいほどの勇敢な行動について述べておられます。

このほか、フォトや四馬孝氏の画などで鼻責めの状景が、しばしば見られています。多くは鼻をつまんだり、ペンチや棒などで、こじあげるといふ、主として形態的な変形をねらった責め方が中心で、鼻孔の中に物を挿

入するという責め方は、せいぜい、たばこを挿入するという程度の方です。どうせ責めるなら、その美しい鼻に長い管をズルズルと奥深く挿入したら、ということ想像してみました。

鼻から食道や胃に管を通すということは考えただけでも、おぞましい感じになりますが実際には医家で、しばしば行われていることで、治療や検査という名で、そのいやらしいことが、うむをいわさず強制的に行われています。SMの責めでは、浣腸や導尿など医家で行うことが、よく用いられているので、このカテーテルによる鼻責めも有効な方法と、いえそうです。ただ、危険もなく容易に行えるかどうか問題ですので、まず体験してみようために自分自身で、この鼻責めを試してみました。

ネラトンカテーテルを使って

挿入する管はネラトンカテーテルを使いました。これは本来、尿道や肛門などに挿入するために作られたもののようで、先端の穴が横にあいたゴムの管で、写真のように、さまざまな太さのものが有ります。このうち、十号や十二号は浣腸用として使っていました。その上下の号のものを新たに買い足し、全部

使って試してみました。



一番、最初に九号のカテーテルを左の鼻に入れてみました。私の場合、鼻中隔が少し曲っているためか、非常に抵抗があり、無理に入れようとすると、かなり痛み、目から涙が出るほどでした。この抵抗は二箇所ありましたが、とにかく鼻を通り、のどに出て食道に入りしました。この食道を通る時、ゲェーッと

なりそんな気持ちになり、苦しみが又、増しましたが、何とか我慢して長さ三〇cm強の管、全部を入れてみました。しかし、どうにも鼻が痛く、間もなく抜いてしまいました。

その次に今度は右の鼻に入れてみました。この方は鼻の中は何なく、するすると通りましたが、食道を通る時の、いやな気持は変わりありません。そのまま入れ放しにしておきますと、習慣的にグビグビと飲み干したい気持ちになります。もちろん、いくらそうしてものどの違和感は消えないどころか、むしろ一層、抵抗感は強く、のどの奥の骨の所が痛くなってきます。又、強いゴム臭が鼻一杯に感じられ、それが、おぞましさを、より強めます。

こうして、いろいろと太さの違うカテーテルを入れてみましたが、当然、細いものはスムーズに入り、入れたあとも比較的、楽なのに対し、太くなるほど飛躍的に苦しさが増します。十二号などは鼻を通る時、クシャミが連発し、のどを通る時はゲェーッと一、二回は失敗して入れられませんでした。しかし、そのうち、食道の所で、あまりモタモタせず、一気に入れたほうが楽なことがわかり、十二号でも、うまく入るようになります。

した。さらに、その後、十四号から十五号まで挑戦しましたが、太さは外径で、それぞれ八mmと九mmもあり、ほとんど鼻の穴一杯になるほどですから、かなり苦勞しました。このくらいの太さですと、ギシギシきしんで入り難く、また鼻孔内の狭い部分を通す時に激しい痛みを伴い、さらに食道に達すると、何回もゲェゲェいう状態となり、涙もポロポロと出て耐えられず、途中で引き抜くことが何回もありました。しかし、これも訓練するうちに耐えられるようになり、最後には、どちらも征服することができました。

参考までにカテーテル挿入時の写真を撮ってみましたので、ご覧いただきたいと思います。カテーテルは十号を使用し、先端から五cmおきに印をつけて挿入状態に応じて、どの位入ったか、わかるようにしました。

(1)は挿入前の状態で、先端はまだ鼻孔内に入っていない。自分自身で挿入する場合、管はこの位置で持ってかまえ、小巾に入れられるようにします。

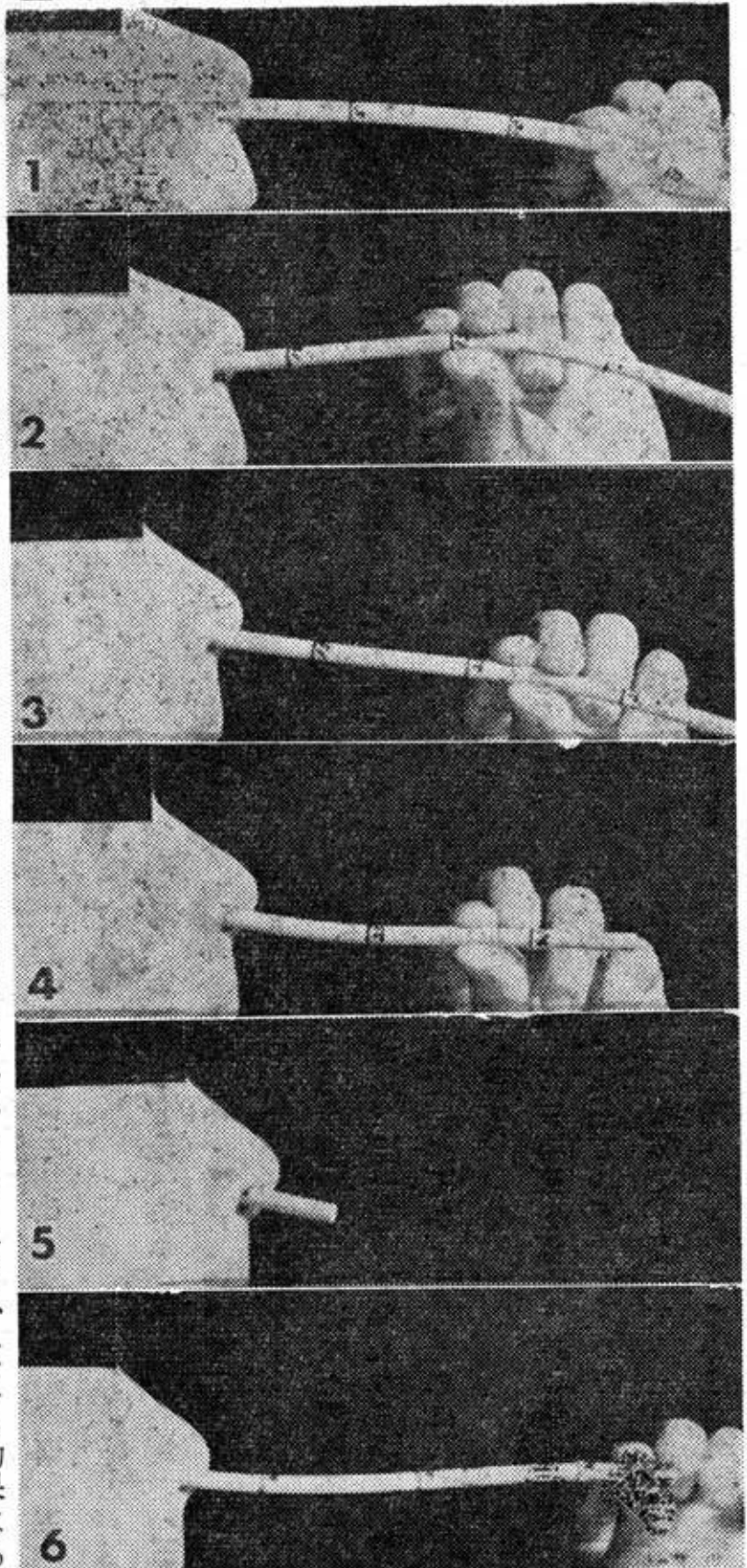
(2)は鼻孔内の狭隘部を管の先端が通り抜ける所で、まだ八cmでいどしか入っていませんがこれが第一の難関で、管が太いと、これまで述べたように痛みが強く、なかなか入りませ

ん。あまり無理に押しこもうとせず、静かに管を押していると、すっと通って奥に入ります。

(3)は、鼻孔から食道への出口にかかった所です。管の位置は変化がないようですが、すでに十二cmは、入っています。ここも一寸、抵抗感はありませんが鼻孔内の場合より比較的、楽に通ります。このあと、しばらくはスルスルと入り、鼻の中を管が通る、おどましい感覚だけで、苦痛は減ります。

(4)は食道に管の先端が入った所で、丁度二〇cm入っています。管の半ば以上は入ったことになりましたが、これから七、八cm、入れる所が最大の難関になります。細い管でも、ゲェツとなりそうな嘔吐感が強く、ちょっと太くなると、前述のように本当にゲェゲェいうことになります。

(5)は、こうして管全部が入った所です。これまでになると、もう嘔吐感はなくなります。喉の違和感が激しく、のみ下そうとゲクゲクになります。外見上は管の端が鼻から出ているだけですが、その管の先端は喉の中ほどまで達しているのですから、その苦しみは大変なものです。



最後の(6)は管を引き抜いた所です。指先で端をつまみ、スルスルと引き抜きます。十cm程度も引き出すと、喉の違和感は消え、楽になります。

カテーテルを長時間入れて

病人によっては食物の補給などのためにカテーテルを入れ放しにすることもあるそうですので、八号のカテーテルを一時間ほど入れ放しにしてみました。管を入れて少し時間がたつと、鼻汁がたまってきた、入れた方の鼻はもちろん、別な鼻もつまってしまいました。このため、無意識に鼻をすすりあげたい気持ち

になりますが、そうしても、なにも効果はありません。むしろ面白いことに管を入れて鼻をすすりあげると、その拍子に空気が管から胃に入ってくるのです。この入った空気は胃の中で気持の悪い圧迫感をもたらし、しばらくすると管からポコポコいって出たり、ゲップとゲップが出てきます。大体、管を入れますと、それだけでもゲップの出たい気持ちになります。この胃の圧迫感、しまいには吐き気に似た気持ちになり、のどの違和感とともに、いてもたってもいられない苦しさとなります。いっぽう、鼻汁はそのままおくと、

遂にはタラタラと鼻から、したたり落ちるようになり、何とも、なさけない状態になります。このようにカテーテルを長時間、入れ放しておくことは、結構な責め苦を、もたらしことがわかりました。

なお一本の管を入れてから、別な鼻の穴にもう一本、管を挿入してみました。鏡で見ると鼻からカテーテルの端が左右に開いて出ている状態は、たばこを鼻に入れた様子に似ていますが、しかし、その先が食道の奥まで二本、入っていることを考えますと、おぞましさが一層、増します。口をあけて、のどの奥を見ると、懸よう垂（のどちんこ）の奥に黄色い二本の管が真っ直、下におりているのが見えます。この二本の通り方は時によって違いましたが、大体は鼻から二本で出て、一箇所にとまって、のどにおりていました。この場合の苦しさは当然、一本だけより、かなり強くなります。

なお、カテーテルを入れ放しにしますと、細い号のものは、のみ下す力で鼻の中に端が入ってしまうことがあります。そこで、あわてて、のどに手や、はしを入れて引き出すような経験を二、三回、しました。もし、そのままおいておけば、のみ下す力で、管全部が

胃に落ち込むことになるでしょう。そうなるとは大変なので、管が中に入らぬよう、少し長い時間、入れておく時は、端にばんそうこうを巻き、鼻のふちにはって固定することにしました。こうすれば、入ることもなければ出ることもなく、管は完全に固定されることになります。

鼻腔を洗滌して

このカテーテルの実験の際は、たいてい、管を熱湯で消毒して使いましたが、鼻の中は複雑に粘膜が入りこんでいますから、カテーテルの一連の挿入が終わったあとで、鼻腔の中を水で洗滌してみました。注入する道具はエネマシリンジの端口を鼻腔用に取り替え（この口は箱の中についてきます）、微温湯に塩を、わずかにからいと思える程度に加えて洗滌液を作りました。この水も冷水、真水では鼻の中がツーンとなって非常に痛みますのでこのように調節する必要があります。

注入は浣腸の時と同様、吸水口を水につけ片方の吐水口は一方の鼻の穴に、しっかり、はめこみ、ゴム球をにぎって水を送り込みます。この際、もう片方の鼻から水が出るので指でふさぎます。そうしますと、一押しごと

のどの方から水が洩れ出します。この際、上を向いていると、気管に水が入るので下向きとなり、口をあけて、だらだらと水の出るにまかせます。こういう鼻腔の洗滌は以前には蓄膿症の治療などに用られたようですが、その気で考えますと、やはりマゾ的な気持が、そそられます。強引におさえつけられ、無理やりに鼻に水を通されるとしたら、これもSMの材料になるでしょう。

なお洗滌したあとは、よく鼻をかめば水は全部、出てしまいますが、鼻にしみるような苦痛の残ることがあり、また何回かカテーテルの挿入をして、とくに異常がないので、管の熱湯消毒を、よく行って鼻の洗滌は、あまり行わないようになりました。

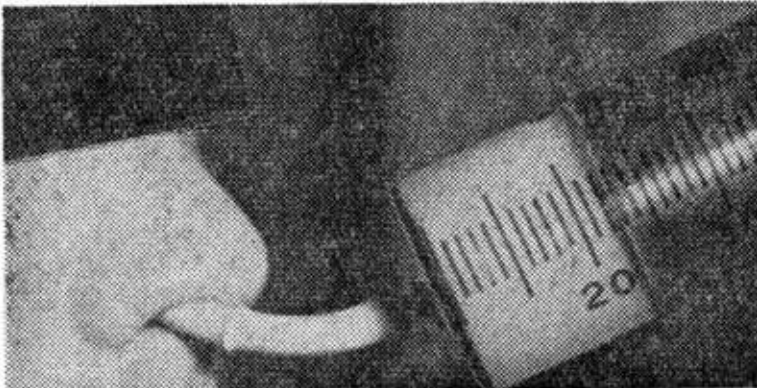
カテーテルから水や空気を入れて

カテーテルから胃に液を入れてみようとして、カルピスの液を作り、一〇〇cc注射筒に吸上げ、カテーテルの端に接続して注入しました。液が、のどの部分を通る時は冷たく感じられますが、口から飲む時のような、あのさわやかさは、もちろん感じられません。胃の部分がかくむ感じがするだけで、しばらくして出るゲップのにおいで、やっとわかる程度です。なお、管の先端は胃の部分まで入

っていないので、注入後、注射器を抜いても液が逆流して出るようなことはありませんでした。こうして毎回の食事が管からだけで入れられたら、どんなに、せつないだろうと考えます。実際に口から物がとれない患者に、管で栄養物を補給することも病院では、しばしば行っているようですが、これが強制的に行われたら、管の挿入の苦しさや相まって、そのおぞましさ、味けなさは大変なものでしょう。

また、管の端にエネマシリンジの浣腸用の

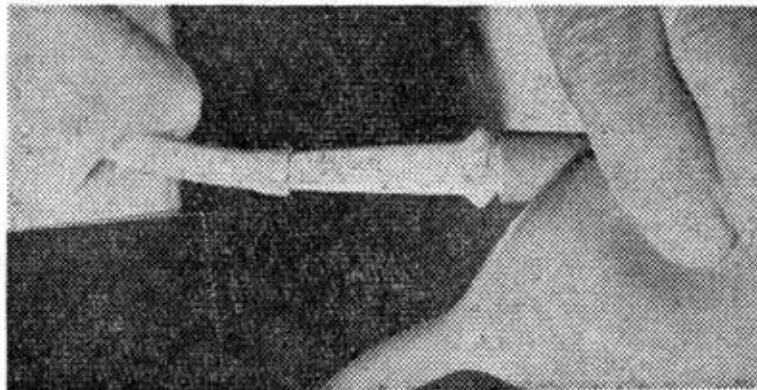
口口をはめて、空気を入れてみました。口口には十号以上のカテーテルなら、押し込めば簡単に、はまります。プッコ、プッコとゴム球を押すたびに胃が、ぐいぐい、ふくらむのがわかります。空気は食道から上にあがってきそうになるので、それをおさえて胃一杯になるまで空気を入れてみました。空気を肛門から直腸内に入れた場合はポコポコと腸の深部に空気が浸入して、お腹全体が、ふくらむ感じになりますが、胃の場合は、ほかに行き所がないので、胃の部分が強く張



った感じになり、わずかな量でも非常に苦しくなります。この入れられた空気は液の場合と違い、まず管から口口をはずすと、若干の空気がスウスウと出てきます。しかし全部、出るのではなく、その後、かなりの時間の間にゲップで出たり、管から出たりし、何回かゲフゲフやって、やっと放出されます。この点は、肛門から空気を入れた場合、長時間にわたって、おならの状態で放出されるのと似ています。

思いきった大量の水を入れるため、イルリ

ーテルに直結して鼻から入れました。スピードは、ゆるやかですが確実に水は入り、五〇〇ccまでは苦痛もなく、ただ胃がふくらむ感じだけでした。しかし、その先は、だんだん苦しくなり、イルリ一杯の一二〇〇ccを入れた所でカテーテルを抜きましたが、胃が一杯につまって、いてもたってもいられないような苦しさ



です。まさに、腹ふくるる思いというわけですが。水を吐き出そうとして二、三回、試みましたが、出すことはできず、一時間ほど苦しんで、その後は、だんだん楽になりました。

サイダーを管から入れてみようと思い、十一号のカテーテルを鼻に通し、エネマシリンジの口口を接続して、びんから直接、入れてみました。注入につれて胃が急速にふくらみ苦しくなります。管から入れれば、出てくるガスがゲップになって口から出るのではないかと予想しましたが、すぐに出ず、グイグイ胃がふくらむだけです。当然のことながら口から飲む時のような、さわやかさはなく、苦しさだけが強く感じられます。半分ほど入れてから、残りをコップに注ぎ、口から飲みました。管は入れたままなので、飲みこむたびに、喉の違和感が気になります。これも飲んでいく途中では

です。これも飲んでいく途中ではガスは出ず、全部、飲み終って、しばらくしてから、管からサイダーは入った当座は苦しくても、すぐに楽になるので、水よりは

分、違います。プレイ用としてはサイダーの方が、よいでしょう。

また、ひまし油を十五ccほど三十ccの流腸器に入れて、十号のカテーターにつないで管から胃に入れてみました。その前に口から一口飲みこみ、その感じと比較しましたが、口から飲む時の、あの何ともいえない、むかつくような臭いは、管から入れると全く感じられません。あとから出るゲップなどで少し臭いが感じられる程度です。しかし、ひまし油の効果は確実に現われ、十五分もすると腹が、ぶつぶつ言い出し、三十分を過ぎたころより下腹が、しくしく痛み出して、間もなく便意を生じ、注入後、一時間まで、こらえて便所に、とび込みました。ひまし油による下剤プレイを行う場合、臭いがいやなら、この方法で管から入れるのも、よいでしょう。

カテーターによる鼻責めの魅力

女性の鼻に関する記事は、前述のように奇ク誌上でも、よく見られますが、たしかに鼻は顔の中央にあって顔の美しさを構成する重要な要素の一つですから、強く関心を持たれるのも当然でしょう。私もこのカテーター実験を始めてから、これまで以上に女性の鼻をよく観察するようになりましたが、鼻だけに

注目してみると、意外に魅力のある鼻を持っている女性が多いようです。適度な張りがあり、桜色に透き通るような感じで、美しく輝く若い女性の小鼻などには、非常に魅力を感じます。この様な美しい女性の鼻にカテーターを奥深く挿入することは、SMマニアにとって想像するだけでも魅力のあることではないでしょうか。

女性の鼻を責める場合、これまでに多く見られる、主として形態的な変化を強制的に行う責めは、美しく、気高く形作られた女性の鼻を醜く変形し、思うさまに凌辱するというS的な感覚が主体になると思われれます。これは緊縛写真の場合でも、女性の顔や肢体が美しければ美しいほど、厳しく縛られ、あられない様にされた姿に、より強い魅力を感じることと同様な感覚でしょう。これに対し、美しい鼻はそのままの形でゴム管をズルズルと奥深く挿入することは、その挿入が、おぞましく、苦しいものだけに被虐、加虐の両面から、別な意味で効果的なものといえます。加虐的に見た場合、美しい鼻がそのまま、管が挿入されるに従い、クシャミや嘔吐感に襲われ、涙を流し顔をしかめて苦しむ様は、単なる変形責めより視覚的に、より魅力ある

もののように考えられます。また被虐的に見ても、いまわしい管の挿入が強制的になされ鞭などで打たれるより軽いとはいえ、おぞましく、じわじわと苦しみが迫るのは、M的に価値が高いことになるでしょう。さらに、この苦しみは多分に本人だけが感じる内面的なものですので、一人だけで行う、自虐的なプレイとして味わうのにも、手頃なものといえます。

なお挿入の際は、かなり苦しいものですが管を抜いてしまえば、その苦痛はなくなり、あとに残らず、もちろん外見的にも何も残りません。また挿入時に感じる強いゴム臭はゴムマニアにとって、一つの魅力でしょう。

また鼻責めは流腸のようにパンティをずり下す必要もなく、非常に手軽にできますし、またババッチさもありません。しかし反面、アヌス責めのような肉感的、性的な感覚につながる面は少ないので、一長一短といえます。この辺は好みによるということになります。このカテーター責めは、ただ管を入れるというだけでは単純にすぎますので、空気や水などの注入責めが併用されるべきです。この点も、お尻から注入するのとは違った感覚、苦しみが味わえます。とくに下剤を注入

した場合、浣腸の場合は、ただ下腹部にたった便を排出させるだけです。下剤の場合は腸の中の、あらかじめのものを押し下げ強烈に排出させるのですから、より徹底し、より激しいものとなります。なおカテーテルで注入する場合、匂いが、ほとんど感じられないので、悪臭のあるものを飲み込むために、むしろ実用的にも利用されうるでしょう。下剤責めの場合も、ひまし油など、その匂いを全く感じないで下剤としての効果だけを楽しむことができます。

鼻に管を通すということは経験のない場合大変な困難を伴うこと、危険なことのように思われますが、実際に行ってみると、意外と簡単なもので、危険性は少しも考えられません。その意味で、この鼻のカテーテル責めがSMのプレイとして、もっと利用されるべきだと思いますし、小説の中の理不尽な責め、懲罰、拷問などの手段としても応用されてよいように考えます。

カテーテルプレイに当って

それではプレイとしてカテーテルによる鼻責めを行う際の要領なり注意する点を私の体験から述べてみましょう。

まず挿入するカテーテルの太さは何回か行

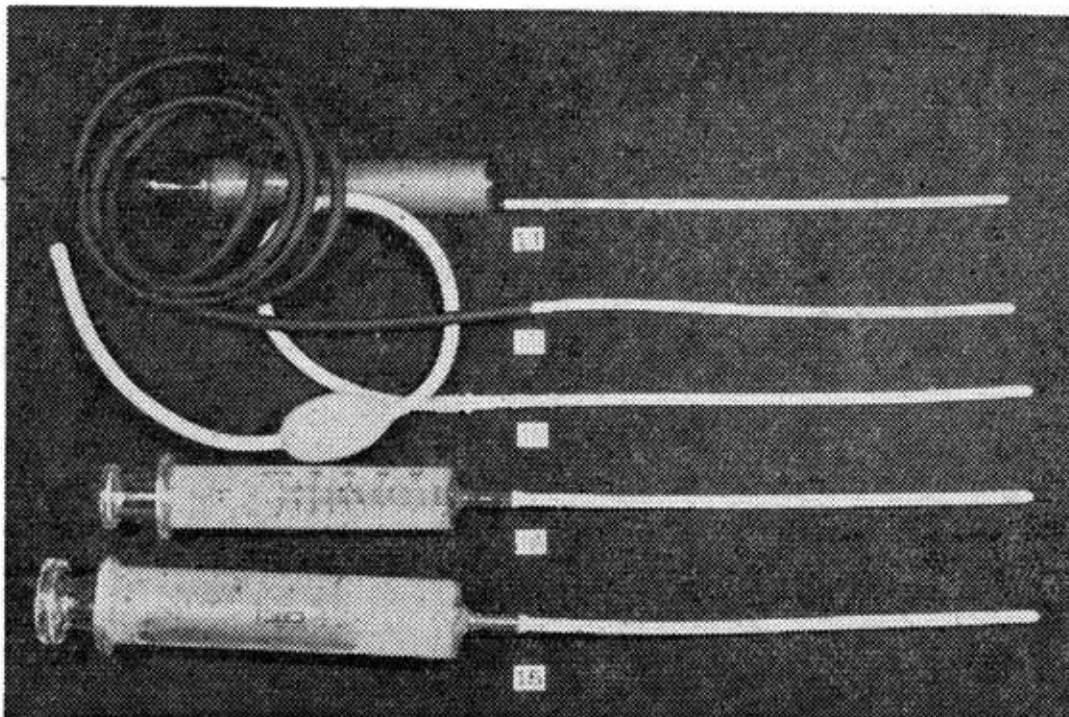
えば、かなり太いものでも、その苦しさになれてしましますが、なれないうちは、くしゃみが出たり、管の先が食道を通る時にゲエゲエいって非常に苦しみますから、細いものから始めたほうがよいでしょう。といっても五号以下の細いものですと管が折れて入り難かったり、鼻腔の別な所に入りこんだりしますから、六号くらいから行うのが手ごろです。

なお太くなって、とくに十号から上になると急速に苦痛が増しますから、ほどほどで、とめるべきです。とくに管を入れて長時間おく場合、太いものは、のどの奥が痛いようになり、とても苦しくなります。ただし、管にゴム管やエネマシリンジ、浣腸器などを接続して注入をする場合は、十号から上でないと細すぎて、うまく、はまりません。なお強い苦痛に耐えられる人なら、十四―十五号でいどの太い管を使って、鼻の中を、きしむような感じで通ったり、のどの奥が管で一杯に押しひろげられる感覚を、たのしむのもよいでしょう。このネラトンカテーテルは、少し大きな薬局なら、たいていの所にあり、値段も二百円から三百円でいどで安いものです。しかし十三号以上は比較的、少ないようです。

管は、よく洗ってあれば、そのまま使用し

ても大丈夫とは思いますが、肛門から挿入するのと違い、鼻の粘膜の中を通すので、一応熱湯消毒をした方が、よいと思います。また熱湯につけるとゴムの臭いは一層、強くなるのでゴムマニアにとっては強い魅力となります。

挿入に当っては鼻に近い管を持ち、小幅に



少しずつ入れます。とくに鼻腔の中は複雑なので慎重に入れ、抵抗を感じたら、いろいろ方向を変えて入れてみます。大きい抵抗は前述のように鼻腔の中と、のどの方の出口との二回あり、それを過ぎれば管の先は、のどに入ります。鼻を通す際に非常に痛みを感じる場合がありますので、右の鼻が無理なら左でというように、入りやすい方を探します。しかし鼻炎などで痛みが甚だしかったり、出血するようなら中止すべきです。

つぎにのどから食道に通す時は、あまり、もたもたせず、どんどん入れたほうが結果的には楽です。しかし、その間、鼻の中を通る時以上に苦しみは強くなりますので、あまりひどければ、いったん抜いて少し休んでから入れたほうが、よいでしょう。管は全部、入れきってしまうと食道の違和感は続きますがゲエツとなる感じはなくなります。またのどを通す時や、入れたままの場合も、首を後にそらすと、苦しさは一層、強くなりますからむしろ、うつむき加減にすると楽です。

管一杯に入れて、そのまま放置する場合は必ず、ばんそうこうで鼻のわきに、固定します。鏡で見ると誠にあわれな図ですが、これをやらないと、前述のように管が中に入っ

てしまいます。このおさえは、鼻汁が出るのでセロテープでは、ききません。

挿入後、そのままおくと、しばらくは鼻で呼吸ができますが、そのうち、鼻汁が出て、入れた鼻も別な鼻も一杯になり、口で呼吸しなくてはなりません。この意味で、猿ぐつわをして口をふさいだまま長時間、管を入れておくのは無理です。この鼻汁は、ほっておくとダラダラと口の方へ流れてきますがちり紙でかんでも、よくとれませんし、もちろん、鼻をすすりあげても空気が胃に入るだけです。せいでい出た鼻汁を、ふき取るだけです。なお同様に管を入れて、のどをゴクゴクやりますと余計、違和感は強まりますので、長時間おく場合は、なるべくそのままにしておく方が楽です。しかし、これがなかなか大変なので、そこにカテーテル責めの妙味があります。

管を引き抜く時は、スルスルとスムーズに抜きます。のどの奥は一きよに楽になり、自然のままの体の良さが、しみじみ、わかります。管には大量の鼻汁がついているので、ちり紙などを用意して、その上におくか、皿やパットの中におきます。鼻汁は鼻からも大量に出るので、今度はよく鼻をかみます。彼女

にプレイとして施した場合などは、鼻汁でツヤツヤと輝き、まだ温みの残るカテーテルの状態は魅力でしょう。

つぎに管から水や空気を注入する場合、注入する器具に合ったカテーテルを使う必要があります。注射筒なら先が一定なので、十号から十二号で十分、はまりますが、浣腸器では大きいものは、かなり太いものが、必要です。その点、エネマシリンジは、はめやすくて十二号なら容易で、十一号でも、はめられます。またイルリの場合は管の太さに合ったゴム管を選べば、そのまま直結してよく、十一号で十分です。それ以下の細いカテーテルでガタのある場合は、ゴム管のはしを反転すると、しまります。写真は各サイズのカテーテルに色々な器具を接続してみたもので、上から十一号に一〇〇cc注射筒を、十二号にイルリガートル用のゴム管を、十三号にエネマシリンジを、十四号に一〇〇cc浣腸器、十五号に二〇〇cc浣腸器を、はめたものです。注入するものは液状のもの、気体のものなら何でも入れられます。責めとして用いる場合は次項で述べますが、軽いプレイ用としては、前述したようにサイダーや空気などが無難でしょう。

責めとしてのカテーテル利用

カテーテルの利用について、もう少しハードな責めの面から考えてみましょう。これはソフトなプレイに、あき足らず、さらに激しい責めのプレイを行う場合にも応用できるでしょうが、まあ小説の中の責め場を想像しながら、お読みいただきたいと思います。

この場合はカテーテルの挿入や、液の注入を強制的に行うことになるため、手足を縛って動けなくするほかに、頭もいやがってふらないよう、しっかり固定してしまふ必要があります。そのための最も簡単な方法は、柱を背にして座らせるか、真直、立たせて、柱に体を縛りつけるとともに、口を割って細いひもなどで頭を柱に固定してしまうのです。この場合、手拭いでは息ができなくなる恐れがあるのですが、ひも状のものがよく、とくにゴムひも、ゴム管などは、よくしまるので、好都合です。固定の方法として、そのほかに、背中に板材か棒をあてて体に固定し、さらに、その板や棒に頭をしばりつけるという、やり方も考えられますし、いすの背もたれに棒を固定し、体ごと、いすに全部、縛りつけるのもよいでしょう。

責めの手始めとして挿入責めを考えてみま

しょう。まずバットなどに大小様々のカテーテルを並べて目の前におき、挿入時の苦しさおどましさを刻明に話し、十分、暗示をかけます。それから挿入にかかりますが、入れ方は、たっぷり、いたぶるために、ゆっくりと入れ、少し引き出しては、また、ぐっと入れるというようにして、苦しさを十分、味わってもらいます。だんだん太い管に変え、また一本、入れたら、別な鼻の穴に、もう一本入れ、これを交互に、くり返します。二本を入れて、しばらくおいたら、全部、抜き、一時ほっとさせてから、今度は両方の鼻に太いカテーテルを同時に挿入します。はてしなく続く挿入責めの苦しさに、涙と鼻汁を流し、美しい顔をゆがめて苦しむ彼女は、この辺でギブアップとなるでしょう。

今度は胃袋責めを考えてみましょう。よく小説には、漏斗で強制的に水を口から入れる場面が出ていますが、私の考えでは、極めて前時代的だと思います。前に述べましたように、鼻に入れた管にゴム管をはめ、イルリガートルか漏斗に接続して水を注入すれば、一滴もこぼすことなく確実に胃に入れることができます。前述のように一二〇〇ccから一五〇〇ccも入れれば、胃袋はパンパンにふくれ、

どうにもならない苦しさに襲われます。しかし三十分もすると、だんだん楽になるので、十分か二十分ごとに一〇〇ccから二〇〇ccほど順次、追加注入を行えば、胃の苦しさは永久に変らずに続くことになり、これでは大の男でも音をあげるでしょう。なお、この責めには、尿意責めが付録につきます。囲りからみんなで眺めながら、女性に排尿を強いるのも一方法ですが、尿道に適当な太さのネラトンカテーテルを挿入し、導尿を行ってチョロチョロ出てくる尿を容器にとれば、そのままの姿勢で尿が出せます。これも私の実験結果ですが、四号カテーテルを尿道に挿入し、二十cm入れた所で尿が出ました。女性の場合はさらに、太いカテーテルで、短く入れただけで尿が出るようです。なお、こうして採集された尿を、再び管から胃に注入することもできるわけです。

さて、そのほかの、いろいろな注入責めについて考えてみましょう。といっても人体に有害な毒物や劇物は、あまり考えたくありませんから、少なくとも毒にはならないもので考えましょう。この場合、注入そのものは味も臭いも、ほとんどない状態で入れられますから、どちらかというと心理的な責めが主体

となります。

まず、飲みたくもないお酒を無理に飲まず場合を考えてみましょう。酔ったら裸にして云々というように恐怖感をそるような色々な話をしてから、お酒なり、水割りウイスキーを少しずつ、注射器に吸い上げ、管から入れます。酔うまい、酔うまいと思いながら、つぎつぎに注入されるアルコール分のために顔はほてり、息は苦しくなり、だんだん、もうろうとなつて行く頭の中で、酔った果てのまじめな姿を想像する時、彼女の恐怖感は最高となるでしょう。

鼻もちならない、いやらしい臭いのするものを強制的に胃に注ぎこまれたら、どうでしょう。好例ではないかもしれませんが、お正月の時に作る水もちが、そのままにしておく鼻もちならない悪臭を発するようになります。それを鍋にお湯とともに入れ、ドロドロになるまで煮て、食品用の染料で茶色く色をつけ、演出効果を出すため、おまるに入れてものが何かは話さず、まず顔の前に近よせ、たっぷり、その悪臭をかいでもらいます。つぎに、その粘液を大型浣腸器で吸いあげ、例の通り、鼻から一気に注入します。ぐぐっと胃がひろがり、そのいやらしいものが強制的

に入れた時のおぞましき、くやしきは心理的に彼女を責めるのに十分でしょう。なお、このもちは全く無害ですが、大量に入れますとそれこそ胃にもたれて、これまた、一つの苦しみになります。

ぞっとする思いを味わせるのも、一方法です。目の前で、にわとりなどを、しめ殺し、逆さにして血を器に、しぼり取り、まだ、なま温い真つ赤な血をイルリガートルに注ぎ、それを目の前にぶらさげて鼻の管に直結します。ピンチコックをはずし、勢いよく、その生血が胃に注ぎこまれる時、気の弱い女性なら、失神してしまうでしょう。

最後に、ひまし油ぜめを考えましょう。前述の実験記録のように、ひまし油を管から胃に入れますと、あのムカムカする味は全く感じられず、単に下剤としての効果だけとなります。下剤投与によって強制下痢を起させるという責めもよいのですが、もう少し凝った責めを考えましょう。まず十分、下剤効果のあると思われる二十cc程度の、ひまし油を鼻の管から入れます。そうしてから、さらに注射器か浣腸器に、ひまし油を吸い上げ、別のカテーテルを接続して先端を、のどの奥に入れて、少しずつ注入して行くのです。ドロ

ドロした油が強制的に入れられ、ムカムカするような何ともいえない臭いが口中から、のど一杯に拡がります。鼻から通した管を、そのままにしておきますと、ひまし油の臭いといっしょになって、激しい嘔吐感が襲い、どうにもならない苦しさとなります。これも自分自身で実際に行つて体験してみました。

所で先に注入された、ひまし油は、確実にその本来の効果を發揮して、間もなくお腹が無気味にゴロゴロなり出し、やがて気持の悪い腹痛とともに下腹が張ってきて、抑えようもない激しい便意が襲ってきます。

管責め、臭い責め、便意責め、これらが複合された恐ろしい責め苦は、まさにカテーテル責めの極致といえましょう。懲罰のためにこのような、おぞましい責めを受け、美しい顔をゆがめ、涙を流しながら必死になつて許しを乞うあわれな女性の姿を、想像してみませんか。

とまあ、大分想像が飛躍しましたが、カテーテルによる鼻責めの体験から、責め場のいくつかを考えてみました。誠に幼稚なことかもしれませんが、ご参考になれば幸いです。